昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可
裏窓第4巻第7号・昭和34年7月1日発行(毎月1回)

裏窓



恐怖異色感覚・特集

7月号

裏窓

恐怖異色感覚特集号

7

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第4巻第7号・昭和34年7月1日発行(毎月1回)

定価~~120円~~
IBM 1807

あまとりあ社の特撰単行本

異色官能サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！ ¥.250 〒.40

どれを読んでも素敵な面白さ

続・隠密覚書 **忍び夜秘帖** 島本春雄・著 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀隠密鳴子善四郎！ ¥.260 〒.40

これこそ読者の満足する本

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著 喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！ ¥.250 〒.40

御送金は書留か現金為替で

エロチック ミステリイ **あやかしの夜** 岡田鯱彦・著 笠井 一・装幀

ねっとりとよどんだ夜の底にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作 ¥.260 〒.40

最寄の有名書店にあります

耽奇サスペンス **妖しい花粉** 狩久・著 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリイ!! ¥.230 〒.40

ハガキ下さい図書目録送呈

エロチック サイエンス **甘美な謎** 矢野徹・著 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？ ¥.250 〒.40

東京都中野区江古田1の2302 (振替口座・東京10756 久保書店宛) 株式会社 あまとりあ社

マンハント 6月号絶賛発売中！

定価 150円 〒12円
東京中野 久保書店

マンハント 薫風6月号 目次

イヴの裸体画 B・フィッシャー
あたしは死体じゃない H・B・シェーファー
ハジキが欲しいな H・エルスン
夜を追われて R・マースティン
ぼくだけの女 F・セティン
情婦ごろし C・メイヤーズ
きわどい道草 J・R・スター
ずぶろく D・アレグザンダー
灼ける接吻を H・コリンズ
人情噺・恨みの空き缶 B・トラヴン
費いきれない紙幣 R・P・ウィルモット

R・チャンドラー 異色作2篇
待っている
ブロンズの扉

マンハント・スクエア 淀川長治 原早智子
ジョーク・ボックス 志摩夕起夫
現代無用語辞典 騎士九郎 川崎はじめ 三田達夫
ポケットの中の本棚
あちら版・浮世風呂
わが拳銃コレクション キノ・トール
ヒネクレ族のシネ手帖 蘭太郎・舜浩・一子
カラー・ヌード L・ウィリンジャー
しょっきんぐ・しょっぴんぐ
テレ・てれ・ぼうず

翻訳スタッフ
〈50音順〉

稲葉由紀
井上一夫
荻昌弘
川口冬生
久慈波之介
小寺元雄
今官一
杉本駿
田中小実昌
中田耕治
野田開作
日疋祐三
山下諭一



異色感覚縛り
首の寝台

強靱な縄が死の床を作っていた！
探り合う肉親の眼の中に秘密が！

黒羽新・訳　ホンキイ・トンク・作

★本文一五〇頁を御覧下さい★

★あまとりあ社の特撰単行本を御覧下さい!!★

（ハガキを下されば目録スグ送ります
東京都中野区江古田一 あまとりあ社）

耽奇サスペンス
夜光裸身

暗黒の中に輝く美女の裸体!!覗きみる男の眼前に切なく身をもがく

葉田光・著　250円　〒40円

秘められたレスボス物語
雌花のいたずら

奇妙な女同志の同性愛に身も心もとろけてしまった女の行きつく果

京極美岐・著　200円　〒40円

封建刑罰悲史
江戸暗黒秘録

封建の江戸に行われたおぞましい公刑私刑の種々相を描いた興味篇

鈴木和夫・著　220円　〒40円





裏窓・七月号・目次 ……
◎表紙……堂昌一　◎トビラカット……古正英男
◎目次裏口絵……藤原隆　◎目次カット……石塚芳幸
巻頭絵物語 地獄屏風 文と画 中嶋喜美 (11)
グラビア ヌード傑作選……藤沢修 (19)
奥様お手をどうぞ……鳴滝三郎 (54)
悲愴美の世界 女腹切の史実と小説 中康弘通 (66)
あぶちっくさすぺんす 縛り首の寝台……黒羽新 (150)
刊余者の手記 灰色の壁の中で……新谷芳美 (120)
時代巷談 いれずみ卐……円城寺達 (282)
色頁 奇妙な博物館……峠浩介 (163)
黒髪執念 髪ぐるま……志摩不二 (171)
連載絵物語 婦人諜報部員……文・依田精二 画・秋吉巒 (104)
暗黒秘録 妖異怪奇譚……鈴木和夫 (206)

恐怖異色感覚・特集

色頁 未整理棚の中から…偏執子 (27)
首吊り屋敷（小日向一夢画）矢桐重八 (36)
★一夜明ければいわれもなく首吊り死人になる離家の怪！次の犠牲者を名乗り出た者は？
足のしもべ（美濃村晃画）牧戸信雄 (76)
★むっちりとあぶらののった肉づきのよい女の足に踏まれて歓喜する足に憑かれた男！
顔の二つある侍（山田彬弘画）島本春雄 (88)
★昨夜立ち出でた新婚の屋敷へ戻ってみればだれ一人彼を覚えていなかった！花嫁さえも！
七（あいくち）首（江淵晃夫画）中林節三 (134)
★女はいつか匕首を持たされていた。殺さなければ私が殺される！女は目をつぶって…
平家部落の怪（秋吉巒画）藤見郁 (182)
★女ばかりの落人部落にまぎれ込んだ旅の男！みやびな美女郡にさいなまれた挙句は？
呪われた老人（美濃村晃画）長谷川勇 (196)
★昼間は何くわぬ顔の老人が、毎夜十二時になると脚玉を求めて私の寝室を訪いに来る！
貴婦人と犬（芦屋純画）とやま・かづひこ (220)
★飼われた男は愛玩され弄ばれ、貴婦人のブランデーにむせびながら快く陶酔するのだ！
死者の贈り物（山田彬弘画）岬洋之助 (250)
★不吉な予感におびえる妻をおいて彼は足どり軽く出て行った。何かが彼を招き寄せる！
殺意の人形（宮下寿紀画）坂田治 (270)
★自分の生んだ赤ん坊におびやかされる若い母親の恐怖は日々に募る。何かが狂っている！
映画紹介 まぼろし侍 破魔暦 凝脂地獄……黒木忍 (234)
双頭の殺人鬼……ユナイテッド・アーチス配給 ショウ・ブレイクストン・プロ作品 (231)

次号予告

呪法幻術特集号!!

次号八月号は呪法と幻術の特集号です！発売日は六月二十三日。妖しい夢幻の中に知らぬまに読者を引きずりこむ大特集号を御期待下さい！



★この一篇があなたの性生活に革命を起す！　当代の権威陣が解明する男女肉体の秘密と

★夫婦愛欲の実態！あまとりあ社が大胆にも放つ〝性のバイブル〟実用セックス講座！

実用セックス講座……①

結婚生活のレイアウト

絶対に二度とないチャンス！　ご覧になればわかりますが、結婚の秘められた性の問題をこれほどまで赤裸々に書かれたのは他に類例がありません

定価　270円
送料　40円

厚生省人口問題研究所技官　青木尚雄

実用セックス講座……②

性医学ノート

誰でも知つてるようで、案外知らないのが性の技巧！　男女悲劇の要因もここに潜んでいる。この書はその秘密の正体を縦横の角度から平明に解く

定価　250円
送料　40円

医学博士　飯田初男

実用セックス講座……③

女体のメカニズム

恋人として、妻としてあなたが選ぶ女性の肉体と心理の凡てに鋭いメスをあて、女の不可解な謎を大胆に解明し尽した快著。女の方もゼヒ一読を！

鋭意進行中!!
定価　未定

日大教授
医学博士　押鐘篤

絵物語 地獄屏風



絵と文 中嶋梓美

① 湯殿の中

「あっ」

手桶を投げ出すと手代の長吉は、思わず声をあげて立ちすくんでしまった。胸がどきどきして、全身がほてってきた。予期していなかったのだ。

女中のお末が苦しそうにしていたので、何気なく湯殿に運ぶ手桶をひったくるようにして……。

湯殿の戸を開けた瞬間、たちこめる湯気の中に一人娘のお絹が、全裸のまま立っていた。

「早くうめてちょうだい」

お絹は女中のお末とばかり思って、振りかえった。

「あっ、長吉……」

ぴしやッと戸を締めると長吉は後も見ずに逃げ出した。



② お絹の裸身

長吉は翌朝、お絹の眼をさけるように店の用事を幸いに外出してしまった。（大変なことをしでかした）

長吉にとってお絹は、主人の娘というばかりでなく、心の中にそっと秘めておきたい偶像のような存在だった。

それがこともあろうに全裸でいるところを見てしまったのだ。美しい夢が、一夜にして生々しい現実の女、妖しい絖肌の裸身が、今は長吉を悩ましはじめた。

今売り出しの役者、中山富三郎におもざしが似ていると、近所のはすっぱ娘や浮気女房に騒がれながら堅物で通しているだけに、悩みが大きかった。

「いけない、熱がありそうだ」

と気がついて店に帰ってきた時は大戸も降された八ツ過ぎごろだ。

自分の室へ入って床の上に倒れるようにして……

高熱を発して前後もわからなくなった。



③ お絹の室

それから何刻たったのか、ふっと眼をさました長吉は、夢遊病者のように立上ると、そのまま母屋の方へ忍びよった。

二階にあてられたお絹の室へ——音もたてずに梯子段を上ると、お絹の室の障子を静かにあけてすべりこんだ。

床の間に置かれた美しい京人形、違い棚の上の可愛い博多人形、文机の前の派手な友禅の坐布団、鏡かけの麻の葉模様、衣紋掛けにかかった外出着の美しさ——。

④ 姐妃

「……」

息をのんで屏風の前に釘づけにされた。この室に似つかない屏風の絵がらに……。

唐風の服装をした美女が口元に微笑を浮べて立っている。その足元に髪を乱した裸体の娘が、両手両足を縛られて倒れているのだ、荒くれ男が大上段に刀を振りあげて今まさに振りおろそうとしている。また片方の面には裸女が逆吊りになって、その胸元に槍を突きあげている男——よく見ると縛られたまま殺されている女、鉄の檻に投げ込まれている男達、それを外から突いている男達の姿——長吉は魅せられたように、その絵を眺めていた。金毛九尾の狐が化けたという姐妃の絵だ。

見ているうちに、いつしか姐妃の顔がお絹の顔に見えてくる。いや画面に描かれている娘達の顔の一つ、一つがお絹の表情だった。

長吉の手には、いつのまにかお絹のしごきがしっかりと握られていた。

隣室でお絹の寝直りする音が聞える——。



初めて見るお絹の室、甘い、華やかな大家の娘らしい室の雰囲気に、長吉は呆然としてその一つ、一つを物珍らしげに眺めていた。

長吉ははっとして近よっていった。

⑤ お前は長吉

日本橋界隈で小町娘といわれるお絹の寝顔は、長吉が固唾をのんで見惚れるほど美しかった。

何を夢みていたか、両手で友禅の布団をはねのけると仰向きになった。

寝巻きがわりに着ていた緋縮緬の長襦袢の胸がはだけて、形のよい乳房に、鳳仙花の花びらをおいたような乳首が、細骨の絹行燈の灯にてらしだされている。

ふっとお絹は眼をさました。

眼の前に黒い影が……男の姿が……

「お前は……だれ……」

長吉は眼をさましたお絹の顔に……隣室の屏風に描かれた姐妃の顔を感じた。

「あっ……おまえは長吉……」

お絹は驚いてはね起きた。

南無三大きな声をたてられてはと、長吉はお絹に飛びつくようにして、持っていたしごきで猿轡をかませてしまった。

⑥ いい覚悟だ

猿轡をさせられたお絹の眼は　恐怖を越えて、むしろ長吉を軽蔑したような眼つきに変

って下から見上げている。
長吉はその眼つきを見ると激しい抵抗を感じた。
（あの屏風の女のようにしてやる）
長吉が近づくと本能的に逃げようとするお絹の肩をつかむと、狂ったように荒々しく繻絆を剝ぎとってしまった。
腰のもの一枚にされたお絹は、友禅の布団の上に真っ白な裸身を横たえ、観念したかのように眼をとじた。
「いい覚悟だ」
長吉はお絹の両手を後ろに廻すと、しっかりと縛りあげ、これからこの娘をどう責めつけようかと考えた。



⑦ のたうつお絹

お絹の体は布団からずるずると畳の上に引きずり落ちた。後手に縛ったしごきのあまりを握った長吉は、十畳間を引きずりはじめた。
苦しさにのたうち廻るお絹は、腰のものが次第にずり落ちるのをふせぎきれなかった。



⑧ 野獣

欄間にしごきを通して長吉は、お絹の体を宙吊りにした。

鴨居から吊り下ったお絹の体は、磨きあげられた白磁のような妖しい美しさがあった。胸に食い入った真赤なしごきがお絹の肌をより白く見せている。猿轡がはずれて苦痛に喘ぐ口元に、おくれ毛をかみしめているお絹の凄艶な顔は屏風に描かれた娘そっくりだ。この怪しい魅力にとりつかれた長吉は、五体がうずいた。隣室から物差しを見つけだすと……。

びしっ、とお絹の体に一撃を加えた。

「ひーツ」

お絹の曲線が大きくゆれて蠢めく。乳房がはずみ、腰がふるえる。

今は全く野獣のようになった長吉は物差しをお絹の体に容赦なく加えた。



⑨ 逆吊り

お絹の体から脂汗がふき出して、絖肌が一層かがやかしい光をおびてきた。猛りたった長吉の物差しは、ますます強くその絖肌へ浴せる。

ぷっつりとしごきが切れた。お絹の体が横転して、どっと布団の上に落ちると大きくはね上って、ぐったりとしてしまった。

⑩ お絹の死

お絹の体の重量にたえかねた長吉の手から、ずるずるとしごきがすべって、どさっという音と一緒にお絹はあらわな姿で畳の上へほうりだされた。

「あっ」

ことときれたその体は氷のように冷たくなっていた。

「お嬢さん……」

われにかえった長吉はお絹を抱きあげると、悪魔のようなおのれの所業に気も転倒して、声をあげて泣きくずれた。



（こんどは逆吊りだ……）

後手に縛ったしごきを解くと両足を縛って再び吊りあげた。仰向けにされたお絹の下腹の曲線、くねらせながらじりじりと吊りあげられる豊かな腰、太腿……乳房が大きく息づいてゆれている。

両足がだんだん鴨居の方へ引き上げられて、長吉の眼の前に豊かな軀が静かに回転している。

だらりと下った両手はもうなんの抵抗もしなかった。

⑫ 恋を知った娘

「長吉……早くよくなって……」
お絹は長吉の耳元でこうささやいた。
「すみません。御心配かけて……」
（なんていう悪夢を見たのだろう）
長吉はお絹の顔を正視できないほどすまなさでいっぱいだった。だが長吉を見るお絹の眼は、濡れた黒躍石のように美しかった。
それは恋を知った娘の美しい眼だ。



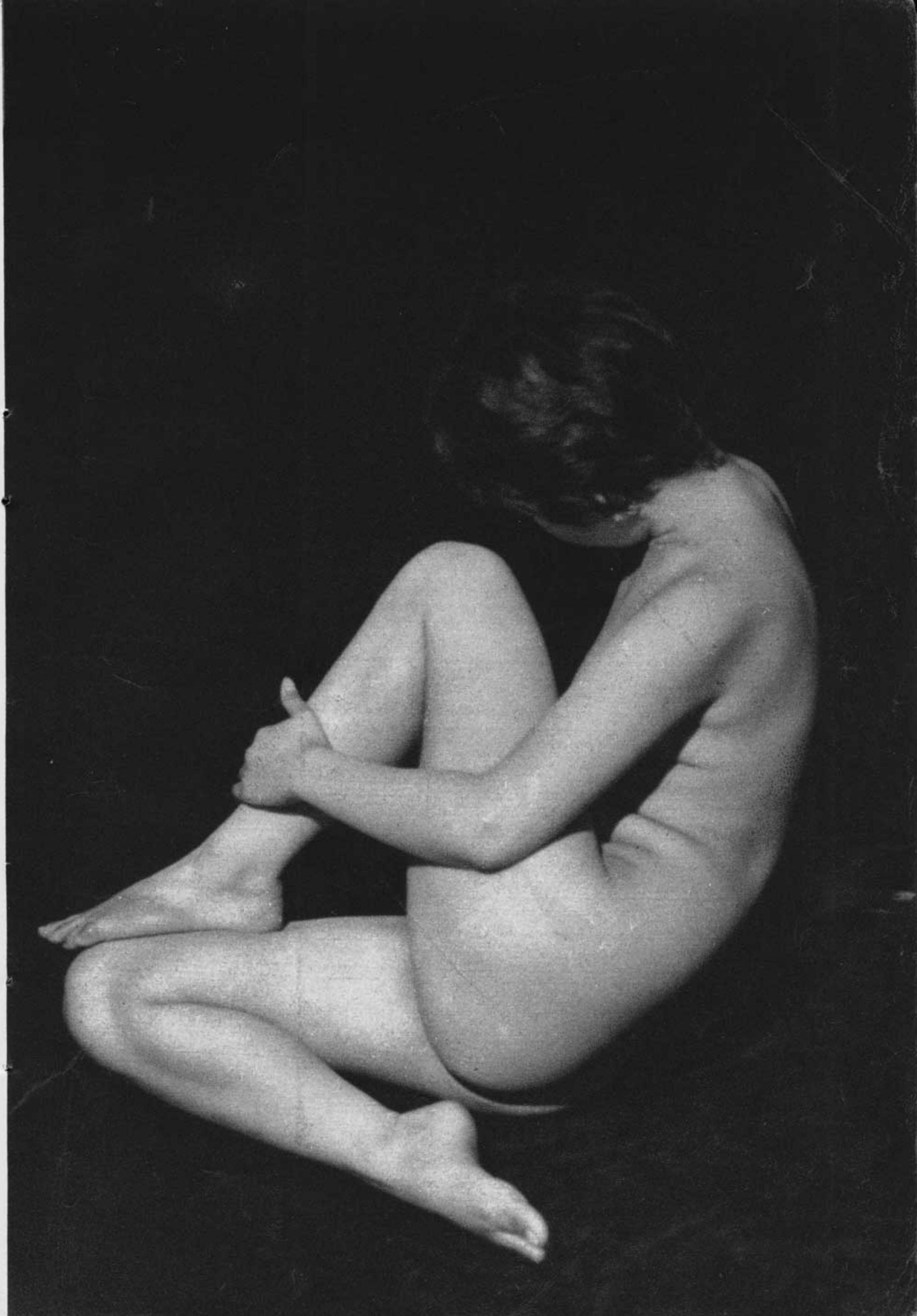
⑪ 悪夢

「長吉……長吉……」
遠いところからおのれの名前を呼ぶ声が近づいてくる。長吉は夢中で逃げようとしたが、五体が痺れて自由にならない。ぽっかりと長吉は眼をあけた。まじかにお絹の美しい顔が、心配そうに見守っていた。
「あっ、お嬢さん、生きて……」
昨夜帰宅した長吉は高熱のため倒れてしまったのだ。明け方までお絹が奉公人の手を借りずに介抱しつづけだったことを知った。
夢だったのか……



ヌード傑作選

カメラ　藤澤　修











未整理棚の中から

編集雑記帖（2）



偏執子

芸者悲歌

新潟の佐治増造氏の投稿に「芸者悲歌」というのがある。

ある地方の小都会の花街に身を沈めた、若い芸者の身の上話を、くどくどと書いたもので、花街に遊びにくる、脂ぎった男たちの、それぞれに違った淫らな性格や、奇妙な癖を何の感興もないような見方で、書いてあるものだが、その芸者（秀勇という名であるが）は、多分に自虐的な性格を持っているらしくて、それがまた、遊びにくる脂ぎった男たちの遊びの対象としては好ましいのである。だから、それほどの芸もない秀勇なのだが、そのシマでは一、二を競うほどの売れっ妓になってしまうのだった。

そのうちに、土地の顔役といわれている興行師の親分と、織物問屋の若主人との中で、秀勇のうばいあいが始まって、とどのつまりは、若旦那が親分を刺し殺し、警察にひかれてゆくところで終っているのだが、



そのストーリーはともかくとしても
はじめに、筋に関係のない、いろいろの男が登場して、若い芸者を種々の角度から虐げたり、喜ばせたりする場面が、とほうもなくいやらしいのである。

芸者は酒席にはべるもので、ここに書かれているように、いきなり夜具の敷いてある部屋ばかりに出没するはずもないのだが、そんなことには全然おかまいもなく、娼婦と変るところがないのは、どうしたものだろうか。

佐治増造氏というペンネームからも、読者は先刻御存じのように、内容は多分にサヂスチックなもので、それを書くために、この舞台を設定したことは、始めからうなずける。

遠慮会釈もない書きぶりで、それがまず活字にできない最大原因なのだが、他の原稿に往々にして見られるような、いきなり、どうのこうのという、ムードのない描きぶりとは違って、「くどくどくど」という表現に近い刻明さが、非常な魅力だと、私は思った。

興行師のボスが、嫉妬の炎を燃やして、秀勇を虐げるところも、普通の小説にありがちな、拳を振り廻しての大立廻り、といったものではなく、じわじわと、インにこもって、いやらしく、それがまた意地の悪い効果をもって、秀勇をしめあげることになっている。

おまけに、最後のあたりは、ボスが、織物問屋の若主人を罠にかけて脅したあげく、身動きできないようにして、その前に秀勇をひきすえ、一糸もまとわぬ真っ裸に引っ剝いだ上で、じわりじわりといたぶるのだ。

或る描写

「秀勇……。見ろ、お前の好きな福島屋の若旦那が、ほら、あんな姿であそこにいなさるぜ……どうだ」

そういわれて、床の間の方を見た秀勇は、アッと声を出すところだった。

床柱に、パンツ一枚に剝がれた邦太郎が、後手に縛りつけられているではないか。

今までそれがわからなかったのは、その床の間のあたりが暗かったのと人気のない程静かだったからだった。

それも道理、邦太郎は、声を出すこともできぬように、猿ぐつわをはめられ、おまけに両足まで、あぐらを組んだ恰好に縛られているのだった。

「あッ！」

立ち上って、邦太郎の傍に寄ろうとする秀勇の、乱れたお座敷着の裾を鬼丸はグッとふみつけて止めた。

「そっちに行くのは早すぎるぜ。お前を招んだのはこの儂だ。おとなしく、酒の酌でもするがいい！」

「……」

だまされたと、秀勇は思った。

文字の家に秀勇を招んだのは、邦太郎だとばかり思っていたのだが、それが罠だったと感じたとき、三日前の夜に鬼丸から受けたあのたまらない責め苦が、まざまざと思い出さ



れてきた。

あまりのたまらなさに、邦太郎と別れるからということで、その鬼丸の手からとき放たれたのだったが、それは、秀勇の本心ではなかった。

鬼丸の金の力に身は縛られていても、そうされればされるほど、秀勇の気持は、邦太郎に近づいてゆくのを、どうすることもできないのである。

文字の家から電話があったと聞いて、とび立つ思いになったのは、それが邦太郎の、いつも招んでくれる家だったからなのだが……。

「ひ、ひひゝゝゝ」

と、鬼丸は笑った。

「逃げることはできないぜ。ここのおかみも承知の上のことだ。ちゃんとわたりはつけてある」

そうだったのか！　文字の家のおかみまでが、鬼丸の力に屈してしまっていたのだ。

秀勇は目の前がまっ暗になってしまったように感じた。

この土地を、邦太郎と手に手をとって逃げ出して、たった二人で楽しい世界を造ろうと約束し、もう目前にまで、その実行が近づいていたのだ。それが、大きな音を立てて崩れ落ちてゆくような、そんな気持がするのである。

へたへたと、その場に坐ってしまった秀勇を、鬼丸組のボスは冷やかに手でかくすように抑えている。

軀にまとっているのは、赤い腰のもの一枚。

まっ白いすき透るような膚が、鬼の眼前に羞恥にふるえて、必死にすがりつくような眼は、鬼丸にではなく、邦太郎の方に向けられているのだった。

「荒縄の方がいいかい」

「……」

「それとも、お前の、いま解いた腰紐の方が、痛くなくていいかな」

「……」

鬼丸は邦太郎の前に近づくと、片手に持った匕首で邦太郎の太腿のあたりをチクリと突き刺した。

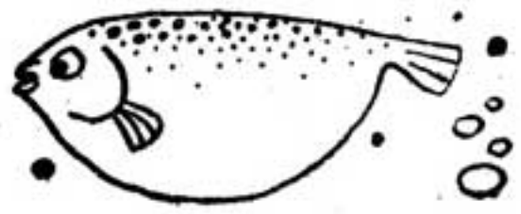
「あッ！　うッ！」

邦太郎が身を悶えて苦しむと、小気味よげに鬼丸は、秀勇の方を見かえって、

「そら、お前が、儂のいう通りのことをしないというなら、若旦那がひどい目にあうばかりだぜ！」

――中略――

秀勇は身を突伏すように二つにまげて、その丸いふくよかな乳房を両



恋しい女が眼前で、脂ぎった鬼丸組の親分に、おぞましい裸の踊りを強要されているのを、邦太郎は助けてやることもできずに、じっと歯をかんで見ていなければならないのだった。

秀勇はもっとたまらなかった。

三日前のように、鬼丸と二人っきりの場合なら、責め苦のいやらしさは別としても、結局のところは、客に対する芸者のつとめと思ってしまえるかも知れなかったが、今夜は、そんなものとは違うのだ。

嫉妬に狂った鬼丸が、邦太郎の眼前で秀勇をどんな羞しい目にあわせるか。

秀勇はその鬼丸のやり方を、よく知っていた。知っているだけに、自分があられもない姿でもがき、悲鳴をあげて、鬼丸の膝下に転げまわるのを、邦太郎に見られたくないのである。

だが、しかし、もし声をあげて助けを呼んだとしても、文字の家の奥まった座敷には、助けの来ようもないはずである。

この家のお女将が、金縛りにあっているというのでは、逃げ出すこともできないのだ。

きっと、見張りの二人や三人は、鬼丸の手で手配されているかも知れないし、連の男たちは、きっとにやりとして顔を見合わせて、

「親分も相当なモンだよチェッ！」

なぞと肩をすくめるだけなのだ。

どうかすると、秀勇が、助けを呼ぶ声を上げればあげるほど、その男たちやお女将の懐に転がりこむ、祝儀の額がふえるかもしれない。

「秀勇！　ふふ。両手が自由なうちに酒を一杯ついでおけよ」

鬼丸はそういって、空になった杯を、裸の秀勇の前に差し出した。

いたばさみ

まあ、このあたりが、書き抜くとしても無難なところで、要所要所はのである。

邦太郎といわれる織物問屋の若主人の前で、芸者秀勇は、読者の想像通りの目にあわされるのだが、これが、前に述べた通りに、インにこもって刻明であるのだ。

三人三様の思いが、それぞれの立場から表現されていて、中でも、心理的にも肉体的にも、秀勇が一番辛いのだ。

ひとり悦に入っているのは、興行師だけである。

こいつは、いろいろのことを秀勇に強要し、そして、それをさせる。

こう書くと、読者の方からはまた「どうして、そんな面白いところを発表しないのか？」

とお叱りを受けることになるが、そこのところがちょっと辛い立場でこの「未整理棚の中から」を前号からはじめたトタンに、机の上に各地から手紙が山積し、突っついたはずのない籔から蛇を出してしまい、その辛い立場を、ますます辛くしてしまう結果になった。

なぜ、その面白いところを発表できないのか？　それは読者の方が先刻御承知で、今さらいうまでもないところなのだが、編集部の方でも、できるだけのところまでは御期待にそいたいと思い、増刊号などの企画もしている訳なので……。

そこのところを、よろしくお含みくださって御辛抱くださると、まことにありがたいことである。

前々号に四頁にわたって、未発表原稿の題名と作者名を並べたので、これが籤をつついた原因かとも思われるのだが、今までにないほどの多数の読者の方からの通信をいただき、この題名のものとこれとは、非常に面白そうだが、どうして活字にしないのか、とか、これとこれと、この作品とをぜひ読みたいから、もし発表しないのなら、原稿だけでも読ませてほしい、などと、熱心なお手紙をいただいて面くらってしまい、あわててお返事を書いたりする仕事がふえてしまった。

おそらくどなたでもそうであるように、自分の趣味に都合よく合ったイメージを、あの中の題名から感じとられたのが、この熱狂的な手紙の山積になった原因だと思うのだが、しかし、案外、題名だけで内容の判断はできないもので、「痴盲」のような不思議なものは別だけれども、全部が全部、活字にして、読むに耐えるかどうかは疑問であるし、だから、福岡の一読者の方から送ってこられた手紙のように、あの頁を切りとって、そのなかの、これと思う作品の上に赤丸が付けてあり、この赤丸で印をした作品は、来月号には絶対に発表しろ、未整理などとはけしからん、ときついおこごとをいただいても、どうも処理のしようがないのので弱ってしまう。

いわゆる、板ばさみの辛さ、ともいうべきものか。

毛虫を飼う女

人見秀夫（香川）氏の投稿に「毛虫を飼う女」というのがある。例の編集雑記帳には、〝軀中がムズムズする〟とか〝掌がかゆくなるような〟小説だ〟などと書いてあって、私がこれを読んで見たところ、やはり、背中や腹がムズムズとかゆくなるような感じを受けたのは内容の異様さはともかくとして、刻明な文章の旨さのせいであろう。

主人公はむし子という女性だが、彼女はあの気味の悪い毛虫を、自分の部屋の籠の中に、無数に飼っているのだ。

そして、その毛虫たちには、それぞれ、むし子が好んでつけた名前があるのである。

緑色のや、茶まだらなのや、グレイの縞のあるのや、真赤な斑点があるやつ、とかいても、どうも姫だとか、縞大臣とか、そんな名前がついているのだ。

むし子（この名前も、少々おかしいのだが）は、寝室で裸になり、この大きな毛虫をば、彼女のシカシカした肌の上において、勝手に散歩させる。世の常の女性なら、毛虫の姿を見ただけで、もう、キャ



ーッと悲鳴をあげるはずなのに、むし子は、この、モゾモゾと肌の上を這い廻る毛虫の感触が、たまらなく快いのだった。

なかでも、膝頭のあたりにおいた毛虫が、徐々に太腿の上を腹の方に向って這い上ってくるときなぞ、夢うつつのように眼をとじて、思わず口の中で「ウー、ウーッ」と呻いたりするほどである。読むものの軀中が、かゆくなり、ムズムズしてくることがある。

のは、これからなのだが、そのあたりがどうもきわどいのだ。これと同じような（妖異伝奇もの。構成がよい。）というテーマで「なめくじ屋敷」という宇治川龍先生の作品を、来月号に掲載する予定。

妖説縄人形

字が綺麗なので目についた原稿で、石垣進一郎（大阪）氏の「妖説縄人形」がある。編集ノートを見ると、女文字で「昨日、彼に誘われて呑みすぎた、警戒警戒……」と書かれてある横に、この原稿の読後感がある。

（――字がていねい。好感が持てるので一気に読んだ。非常に達者である。ただし、その文体は、島本春雄先生そっくりで、読み進むうちに錯覚をおぼえたほどなり）

と、第一の読後感は、赤インクであり、成程、二三枚ぺらぺらめくって見ると、島本先生独特の、一句一句行がえした、一瞬……二瞬……というのや、闇。無音――などの直意的な表現が眼にとまった。

内容については、別の筆跡で、第一の読後感の横に、これは黒インクの、嗜虐的な描写が、微に入り細をうがち、あまりにも、克明に書かれているためである。

題名に暗示されている通り、本篇は、至るところに縄が出てくる。縄のオンパレードといってもよい。書きだしの第一句からして、縄である。（縄。眼の前に縄があった。蛇のようにとぐろを巻いた縄……古く、手垢や埃にまみれた縄……この縄には、おぞましい過去が

（――字がていねい。好感が持てるので一気に読んだ。非常に達者である。ただし、その文体は、島本春雄先生そっくりで、読み進むうちに錯覚をおぼえたほどなり）

と、第一の読後感は、赤インクであり、成程、二三枚ぺらぺらめくって見ると、島本先生独特の、一句一句行がえした、一瞬……二瞬……というのや、闇。無音――などの直意的な表現が眼にとまった。

内容については、別の筆跡で、第一の読後感の横に、これは黒インクの、嗜虐的な描写が、微に入り細をうがち、あまりにも、克明に書かれているためである。

題名に暗示されている通り、本篇は、至るところに縄が出てくる。縄のオンパレードといってもよい。書きだしの第一句からして、縄である。（縄。眼の前に縄があった。蛇のようにとぐろを巻いた縄……古く、手垢や埃にまみれた縄……この縄には、おぞましい過去があった。脂の乗りきった年増、清純な未通女、まだ蒼の女体、いったい幾人の女を苦しめ、呻かせ、悶えさ

（――字がていねい。好感が持てるので一気に読んだ。非常に達者である。ただし、その文体は、島本春雄先生そっくりで、読み進むうちに錯覚をおぼえたほどなり）

と、第一の読後感は、赤インクであり、成程、二三枚ぺらぺらめくって見ると、島本先生独特の、一句一句行がえした、一瞬……二瞬……というのや、闇。無音――などの直意的な表現が眼にとまった。

内容については、別の筆跡で、第一の読後感の横に、これは黒インクの、嗜虐的な描写が、微に入り細をうがち、あまりにも、克明に書かれているためである。

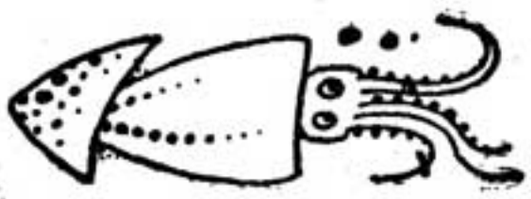
題名に暗示されている通り、本篇は、至るところに縄が出てくる。縄のオンパレードといってもよい。書きだしの第一句からして、縄である。（縄。眼の前に縄があった。蛇のようにとぐろを巻いた縄……古く、手垢や埃にまみれた縄……この縄には、おぞましい過去があった。脂の乗りきった年増、清純な未通女、まだ蒼の女体、いったい幾人の女を苦しめ、呻かせ、悶えさ

（――字がていねい。好感が持てるので一気に読んだ。非常に達者である。ただし、その文体は、島本春雄先生そっくりで、読み進むうちに錯覚をおぼえたほどなり）

と、第一の読後感は、赤インクであり、成程、二三枚ぺらぺらめくって見ると、島本先生独特の、一句一句行がえした、一瞬……二瞬……というのや、闇。無音――などの直意的な表現が眼にとまった。

内容については、別の筆跡で、第一の読後感の横に、これは黒インクの、嗜虐的な描写が、微に入り細をうがち、あまりにも、克明に書かれているためである。

題名に暗示されている通り、本篇は、至るところに縄が出てくる。縄のオンパレードといってもよい。書きだしの第一句からして、縄である。（縄。眼の前に縄があった。蛇のようにとぐろを巻いた縄……古く、手垢や埃にまみれた縄……この縄には、おぞましい過去があった。脂の乗りきった年増、清純な未通女、まだ蒼の女体、いったい幾人の女を苦しめ、呻かせ、悶えさ



せたことであろうか？ ——むっちりと盛り上った乳房、妖しい線を見せる腰、胴、あし、女体のあらゆる部分に纏いつき、しめあげ、はいずり廻って、その絖肌の一つ一つに、消し難い刻印を残した縄である。美女の怨念と呪詛が、血と、あぶら汗の一滴になり、しみついて離れないのである。

（……）

第一章の書きだしは、こんな調子である。人形師や不気味な術者や美女や泥棒が作中人物として現われるが、本当の意味の主人公はこの作品では、——縄——であると極言しても決して間違ってはいないだろう。

また、作中人物の、ほんの端役はそのほとんどが、縄に関係を持っている。主人公の名が、神保縄太郎であり、妖しい縄術を使う女主人公の美保は、縄老人と呼ばれた隠居与力の娘で、幕政の腐敗にあいそもと岡っ引で、十手を返上して義賊となった男……これも縄使いはうまい。

縄太郎の朱縄、黒縄小僧の黒縄、美保の与力縄、人形師縄阿弥の人形縄、復讐鬼縄村新八郎の地獄縄……これらが、まんじともえと入り乱れ、歴史がある。いくたびか女体の柔肌を知った縄は、持主の意志に反して、柔肌を求める。それは生あるもののように、妖しい力で持主を誘い、引っ張り、くねくねと女体に忍び寄る。そして、やがては持主の性格まで変えてしまうのであろう。本篇の男たち、女たちも所詮は、縄にあやつられ、縄に魅せられ、縄に踊らされた哀れな人形ではなかったろうか。……）

さしさわりのある個所を削ったとしても、一篇の伝奇小説にはなるだろう。しかし、そうしてしまっては残念ながら裏窓小説ではなくなってしまう。編集子のなやみは、ここにある。この稿が、未整理棚の中に依然としてあるわけである。

しかし、縄と女体の交錯する妖しい独特の味、登場人物の一人一人が持つ奇妙な個性は、ともにすて難くと、これが作者の用意した末尾の文章である。

いろいろ書いたが、これだけでは作品については、常に貪慾な編集子のほんの片鱗しか伝えていないし、読者もご不満かと思うので、作中人物について、作者石垣氏が本篇の中に述べているところの一部を抜いて見よう。

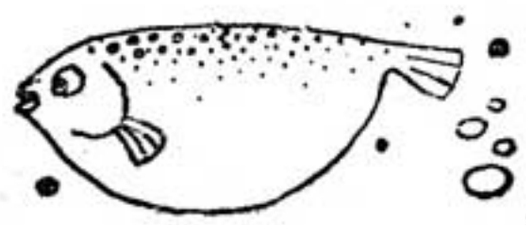
（——神保縄太郎もまた、縄に憑かれた人に違いないし、結びの言葉が端的にそれを物語っている。

（——縄、縄、縄……人間が考え、人間がこしらえた縄……しかし、縄にも生命があり、歴史がある。いくたびか女体の柔肌を知った縄は、持主の意志に反して、柔肌を求める。それは生あるもののように、妖しい力で持主を誘い、引っ張り、くねくねと女体に忍び寄る。そして、やがては持主の性格まで変えてしまうのであろう。本篇の男たち、女たちも所詮は、縄にあやつられ、縄に魅せられ、縄に踊らされた哀れな人形ではなかったろうか。……）

と、これが作者の用意した末尾の文章である。

いろいろ書いたが、これだけでは妖説縄人形のほんの片鱗しか伝えていないし、読者もご不満かと思うので、作中人物について、作者石垣氏が本篇の中に述べているところの一部を抜いて見よう。

（——神保縄太郎もまた、縄に憑か



れた一人であった。この男から、縄を奪えば、いったい何が残るであろう。縄と共に生き、縄と共に歩いて来た男……腰にさした刀は、切れ味のよい備前物であり、しかし、一度も抜いた事がなかった。また、その必要もなかったろう。縄が、神保流の朱縄が、必要とあれば敵を襲ってその骨を砕き肉を斬り、そして、すでにもう幾人かの血を吸っている。縄は生きていた。血を、なまぐさい血を求めた。縄太郎の夜歩きは、血を求める朱縄のせいともいってよかった。今宵もどこかで、猫が……犬が……死ぬだろう。否。今宵死ぬのは人間かもしれなかった。月も星もない闇。どろりとよどんだような、不気味な墨汁の闇……逢魔の闇である。縄太郎の足が、音もなくピタリと止った。（――いる。柳の下……。飛龍よ、今宵は、たっぷりと人間の血を吸わせてくれるぞ。地獄侍の、どす黒い毒血をな……）

これは、縄太郎が、血を求めて泣く妖縄――飛龍（縄太郎の持つ朱縄の名、作者は縄にも一つ一つ名を与えている）――に誘われて、出没する辻斬侍を襲うべく出掛けたおりの状景である。

（黒縄小僧の縄が、まるで生あるもののように、するするとのびた。それは、獲物を狙う黒蛇――といってもよかった。その濃艶な肉体の、妖しい魅力で、次々と男どもを地獄の渕へ追いやったお妻の、むっちりとした乳房へ、黒い縄は吸いつくように纏いついたのである。そうだ。神保龍心斎の手によってつくられた二本の縄……その一つである朱縄の飛龍は神保縄太郎の手にあって血を求め、黒縄小僧の手にある黒縄の臥龍は、女の柔肌を求めるのだ。

「あっ！」と、お妻が叫んだとき、臥龍はすでに、ぴったりと乳肌に吸いついていた。異妖な触感……「う、う……」呻き声の高まりが、乳肌に喰いこむ縄目の深さを物語っていた。一巻き……二巻き……三巻……やがてお妻の豊かな乳房を……）

と、あるように、作中の黒縄小僧が持つ縄は、女の肌を求めてやまないのである。

隠居与力、山崎鉄斎、別名縄老人と呼ばれる鬼与力の娘美保が持つ縄は、美女の肌のように白く、これは夕顔の縄――と名づけられている。中に女の黒髪が巻き込まれているこれは、獲物を狙う黒蛇には、しばしばなやまとになっていて、強靱でねばりがあり、一度、人間の手首にまつわると容易に離れない。縄太郎も、この美保の夕顔の縄にして、縄太郎の飛龍がされるのである。

裸形の美女を巻き込んだ、妖しい縄人形を前にして、縄太郎の飛龍が美保の着物を裂き、おのれは美保の夕顔の縄で、進退の自由を失う場面は、場所が暗い地下室でもあり、一種いうにいえぬ趣きがある。

縄……縄……縄……編集子も縄に憑かれて長々と書いてしまった。さて、この作品、どうしたものかと、これからまた長々と悩まねばならないのであろう。

裏窓

七　月　号

異色恐怖感覚特集



第四巻・第七号

怨霊首吊り屋敷



首吊り内儀

「ひえええッ！」

女中のお勝は、恐怖に顔をひきつらせ、両手に捧げ持った朝食の膳をひっくり返した。味噌汁の碗を、胸もとからザブリと浴びる。

「どうしたんだい。お勝さん」

その、ただならぬ物音におどろいて、番頭の松助が、渡り廊下をとんできた。

「お、お、おかみさんが！……」

お勝は、歯の根があわない。戸口の前にペタリと腰をぬかしたまま、ふるえる指で部屋のなかをさした。

「おかみさんが？……」

不審に思った松助が、敷居を踏んで、足を二、三歩部屋のなかにいれた。

まだ、雨戸をしめきったままなので、まっ



矢樹重八
十日向一夢 絵

くらである。
と——。
ヒヤリ、とつめたいものが、松助の鼻さき
にふれた。両手でソロソロとそれをさぐって
みる。
つめたいものは、人間の手だった。
「ひゃあッ！」
こんどは、番頭が悲鳴をあげた。
腰がぬけて、思わず、それへすがりつく。
「げえッ！」
つめたく



なった人間の身体にしがみついた。鴨居から、ぶらりとぶらさがった、女の首吊り死体であった。

松助がつかんだために、その死体は戸口の方に、ゆらりとむきなおった。屋根の廂越しに、朝の陽がまぎれもない、この家のおかみさん、お玉である。両眼はうらめしげに灰色に濁った半びらき。歯のあいだからは、白ちゃけた舌が、ダラリと垂れている。縊死なので、鼻の穴からは、青黄色い鼻汁がベットリとながれ、不気味な形相であった。

「わあッ！　お、お、おかみさんが、たいへんだァ！」

松助は、さけびながら、ころがるようにして、廊下を渡り、母家のなかへ馳けこんだ。

「ま、待って、番頭さん！」

腰のぬけた女中のお勝が、足をガクガクさせながら、這うようにして松助のあとを追った……。

向島土堤つづきの白鬚、隅田川っぷちにある、武州屋徳兵衛の別宅での出来事であった。

美しい娘

武州屋の本宅は、向柳原にあるかなり手広く店をかまえる材木問屋であった。

そこで、武州屋内儀の変死を知って、馳けつけてきたのは、和泉町の伝八という岡ッ引である。

しかし、現場を調べたところ、どうやら他殺ではないらしい。

お玉は鴨居に腰紐をかけ、踏み台の上にのると、みずから首を縊って死んだのである。

「――おかみさんは、いつもこの離れで、一人きりでおやすみになるんですかい？」

その点をちょっと不審に思い、伝八はあるじの武州屋徳兵衛にきいた。女房の自殺を、まだ信じきれないという表情で、徳兵衛は茫然と畳の上に坐りこんでいた。

「はい。――お玉は、三年ばかり前から、神経を病んで、寝たり起きたりの毎日をつづけておりました。この別宅も、お玉の養生のために買ったようなもので……」

徳兵衛は、目がしらを指でおさえた。

「なるほど。この離れは、病室にあてていたというわけか……」

伝八は、改めて部屋の内外を見渡した。

商人の別宅にしては、妙に頑丈なつくりである。

宏壮、というほどでもないが、この屋敷の建物は、広い庭に囲まれていて、浅草の繁華街からは川一つへだてているだけなのに、別世界のような静寂が支配していた。

左右にのびた母家の端から、鍵の手になって一棟の離れが、庭のなかへつきでている。これが問題の、自殺の部屋であった。十畳間の部屋が、母家から渡り廊下でつながっているのである。庭にはかなり広い池がある。

外まわりの黒塀は、異様なほどに高く、塀の上に矢来まで組んであるので、外から庭へ侵入することは不可能であった。

（ふうむ……。おかみをしめ殺して鴨居にぶらさげ、自殺をよそおわせたのかとカンぐってみたが、この様子じゃ、とても外から他人の入りこむ隙はねえ……）

と、伝八は思った。
この離れの庭に面した二方には縁側が張りだしているが、夜の戸締りは厳重である。
母家とつながる廊下口には、さらにもう一枚、しっかりした板戸がついていた。渡り廊下のとっつきの部屋には、あるじの徳兵衛と娘のお八重が寝ている。
「たちいったことをきくようだが、おかみさんが自殺するような原因が、おありなさるんで……」
自殺と決めて、伝八はきいた。
「はい。それが、どうしても、わからないのでございます。あれが、なんのために首など縊りましたのやら……」
悲しみにうちひしがれた徳兵衛は、まんざら隠しごとをしているとも思えない。
「神経を病んでいたというから、なんのわけもなく、急に頭へ血がのぼって、ふらふらとやってしまったのかも知れませんね」
しかし伝八は念のために、娘のお八重をこっそりと襖のかげに呼んで質問した。
「おっかさんの病気は、そんなにいけなかったのかい？」
「いいえ。一年ほど前までは、かなりひどかったんですけれど、近頃ではすっかりよくなって、普通の人とちっとも変りありませんでした……」
お八重も、眼に涙をうかべてこたえる。年は十八。大店の娘らしく磨きあげられた美しい器量であった。
「さっき、チラと小耳にはさんだんだが、あのお玉さんは、お嬢さんの本当のおっかさんじゃ、ねえんですってね？」
「……」
お八重は、だまって眼を伏せた。
「なにも、かくすことはねえよ。そのことはいま、あの色っぽい女中からききだしたばかりなのさ……」
色っぽい女中？……ああ、お勝のことだ。あのおしゃべり女め……
お八重は胸がムカムカしてきた。
「でも、それが、おっかさんの自害と、どんな関係があるの？」
「いや、ちょっときいてみただけだ。なんでもねえ。気にしねえでくれよ」
伝八は、あわてて手を横にふる。
よけいなことをききたがる岡ッ引の無礼さがカンにさわって、お八重は眉を吊りあげ、ぷんとふくれた。どうやらこのお八重、こわいもの知らずの勝ち気な娘らしい。
もう、おれの出る幕じゃねえとばかり、伝八は武州屋をひきさがった。

妖異の部屋

一夜明ければ首吊り人形がまた一体、いわれもなく死神に誘われる離室の怪異！

「およしなさいよ、幸どん。よりによって、あんな部屋に寝なくとも……」

しきりにとめているのは、女中のお勝である。

「なに、平気だよ。いつまでも使わないで、しめきりにしておくからやれ幽霊がでるとか、女のすすり泣きがきこえるとか、いやな噂をたてられるんだ。今夜はあたしが寝て、なんでもないということを、みせてやるよ」

手代の幸七、身体の大きな、気丈な男だった。日頃から力自慢、度胸自慢で相撲の好きな男だ。

そこを主人に見込まれて、向柳原の店から夜になると、この別宅へ用心棒として寝泊りにきている。娘のお八重の護衛役である。

父親の徳兵衛は、商売が忙しいと本宅に泊りきりになるからだ。

その幸七が、今夜はどうしても、お玉が首を縊ったれいの部屋で寝るといいだした。

女中のお勝が、いくらとめても無駄であった。美しいお嬢さんに、自分の度胸のあるところを、見せてやりたい助平根性なのだ。

「幸七は強いんだから大丈夫よ。お勝、離れに布団を敷いておあげ」

お八重もおもしろがって、幸七をけしかける。すると幸七は、高くもない鼻を、よけいにうごめかして、

「へい、お嬢さま。かしこまりました。なァに、あんな立派なお部屋に寝られるんですから、たとえ幽霊に頬っぺたをなめられたって本望というものですよ」

「頼んだよ、幸七。あたしは幽霊なんか信じやしない。あんなの、みんな人間のつくりごとよ。——お勝、今夜は幸七に、お酒をつけておあげ」

「はい、でもお嬢さま……」

「いいのよ。幸七って勇気があるのね。たのもしいわ」

お八重は、ますます興にのって、幸七をそそのかすのだ。

「お勝さん、ついでにお酌もおねがいしたいね。お前は、女中にしておくのはもったいないような、いい女だよ。へへへ……」

図にのった幸七が、お勝の耳もとに口を寄せ、いやらしい声でささやく。

ところが、その翌朝である——。

いつまでたっても、幸七が起きてこないのだ。

「——幸どん。これ、いつまで寝ているんですよ、もう六ッを過ぎたよ。早く起きないとお店にいく時刻が……」

女中のお勝が、母家から廊下を渡って境の板戸をあけ、離れの障子に手をかけた。

と——そのお勝の眼の前一寸のところに、ぶらりとぶらさがった幸七の顔が、にゅうッと現われたのだ。

半眼をうらめしげにお勝へむけ、両手をダラリと前に垂れた、不気味な首吊り死体である。

「わあッ！」

お勝は悲鳴をあげてのけぞり、廊下から庭へ転落した。水色ちりめんの湯巻が大きくまくれて、女ざかりの肉づきのいい白い脛が、朝日の光りにさらされる。

幸七もやはり、自分で縊死をとげたのである。自殺である。

外部から何者かが部屋のなかに侵入した形跡はなかったし、幸七が抵抗した様子もないのだ。

自分の手で鴨居に帯をかけ、首を吊ったと察するより仕方のない死

にかたである。

だが、なんのために？……

幸七にも、自殺の原因はなにもなかった。前夜の言語振舞をみても自殺の気配などまったくなかったのである。

この離れは、泊るものに自殺を誘いかける妖異の部屋なのであろうか。

女祈禱師

「――なむ、ごくうはんにゃはらそねだ、めいなむおんだぶつ……」

怪しげな祈禱文をよみあげているのは、神雲斉妙玄女と称する、白衣の女行者である。

武州屋別宅の離れの一室――れいの自殺部屋であった。

不思議な首縊りが二人もつづいてでたので、主人の徳兵衛がおそろしがって、この女祈禱師をまねいたのである。

「――徳兵衛どの」

女行者が、ふと祈禱をやめて、徳兵衛をふりかえった。

「はい……」

「この部屋には、たたりがある」

ずばりといって、女行者は眼をとじた。

「たたり！……あの、たたりと申しますと、なにか？」

ぎくりとして、徳兵衛は顔をあげた。うしろに居並ぶ娘のお八重も番頭の松助も、女中のお勝も、いっせいに妙玄女の口もとをみつめる。

「この屋敷は、そなたが建てられたのでは、ございませぬな？」

「は、はい……」

「すると、もとの持ち主は？」

「はい。――実はこの屋敷は、もと並木軍十郎の御別宅だったのでございます……」

その並木軍十郎は、いまから三年ほど前に公金費消の罪で捕えられ牢内で病死した。徳兵衛が奉行所へ手をまわし、払い下げを願って買いとったのである……。

「わかりました。その、並木軍十郎と申す、お侍の死霊がいまだこの部屋に、こもっているのです……」

妙玄女は、わが意をえたりという、満足げな表情でいった。

「並木さまの死霊が？」

「さよう。まさしく死霊じゃ……」

「そ、そんな馬鹿な、前の住人の死霊が、なんのために、うちのお内儀さんや、幸どんに祟るんです！　二人にはなんのかかわりあいも、ないじゃありませんか！」

番頭の松助が、あわてて膝をのりだしていった。

その松助の顔を、ジロリとながめ、

「察するところ、ここは、その並木軍十郎どのの寝部屋であった。寝部屋というものは、不慮の死を遂げたる者の怨霊が、もっともしみついて残るところ……」

おごそかな声音で、妙玄女がこたえる。

「ま、まさか！」

「わしの言葉を疑われるのか。ならば、そなたが今夜、この部屋にやすむがよい。並木軍十郎の怨念が、地獄からそなたの足をひっぱりにこようぞ。ひひひひひ……」



その不気味な笑い声に、松助ちぢみあがった。

「さようなれば、どのようにすれば、並木さまの怨霊がとれますので……」

徳兵衛も、ぞっとするような寒気におそわれ、肩をふるわせてきく。

「三七、二十一日のあいだ、わしがこの部屋で御祈禱いたしましょう。さすれば、怨霊は雲霧のごとく消えて、退散するであろう」

「お願いいたします……」

徳兵衛をはじめ、一同の者、平伏して頭をさげるのだった。

こうして、女行者の祈禱がはじまった。もちろん、夜もこの自殺部屋で寝泊りしながら祈禱をつづけるわけである。

ところが——三日目の朝であった。

この朝は、このところ別宅に泊りつづけている徳兵衛が、いちばん早く眼をさました。隣りの布団には、娘の八重が、まだ愛らしい寝顔で眠っている。

徳兵衛は、ふと妙玄女のことが頭にうかんだ。祈禱をはじめてまだ三日目だが、どうも気になるのだ。

渡り廊下を伝い、離れの板戸をあけ、さらに部屋の障子をあけた。

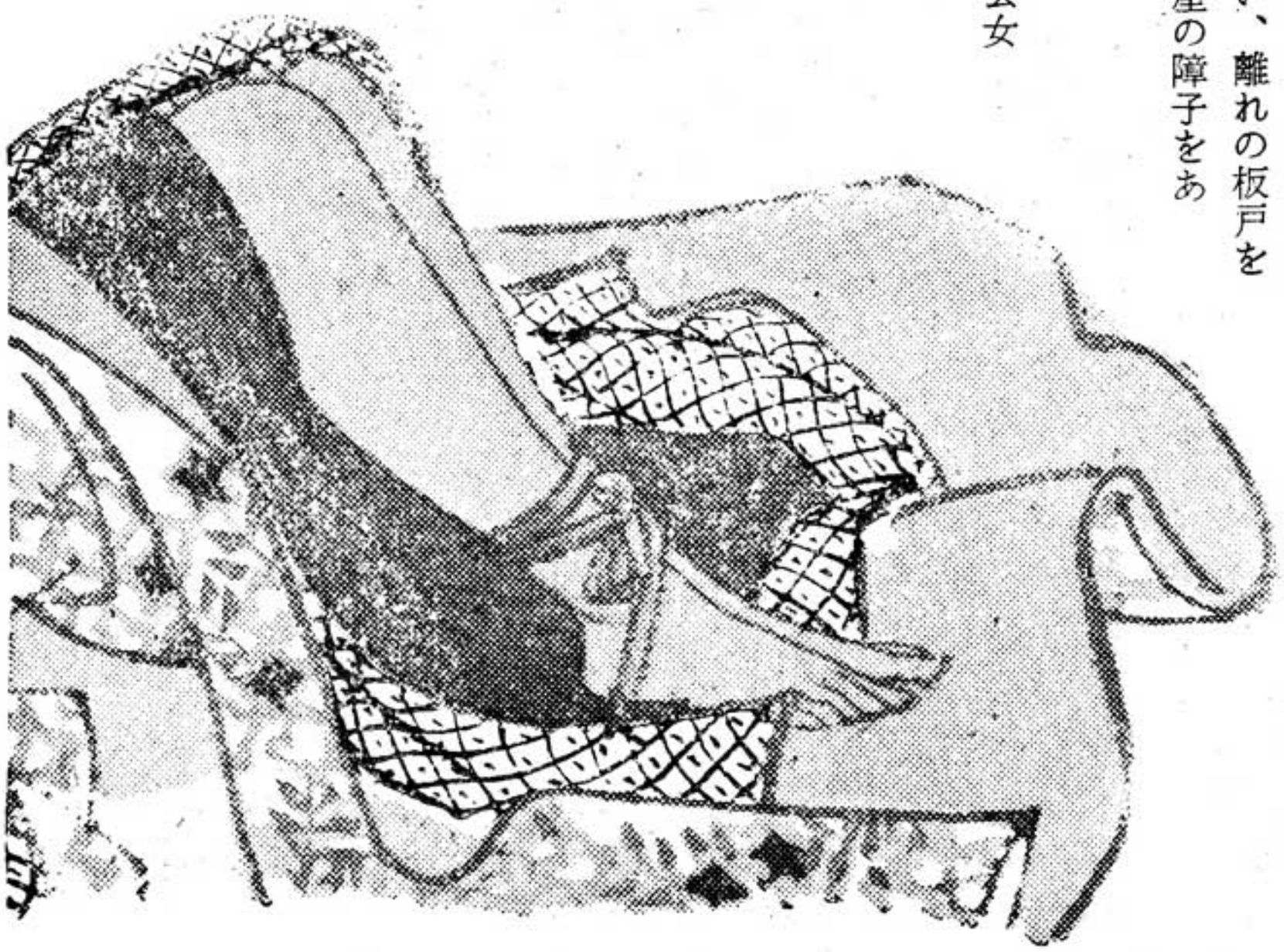
と——。

そこには、妙玄女の蒼白な死顔が

徳兵衛のはいってくるのを待っているように、

吊りさがっていた。徳兵衛をみて、垂れた両手がゆらりとゆれた。

みだれた総髪が、障子にふれてサラサラと鳴り、ゆがんだ唇のあ



いだからは、血の気のない白っがとはみだしている。
「ううッ！」
徳兵衛は、息をのんだ。恐怖のあまり、咽喉がつまって声がでなかった。
妙玄女もまた、鴨居から腰紐をさげ、その輪のなかに、自分から首をつっこんで死んでいたのである……。

床下の石畳

「――なるほど。そいつはちっぱいでござんすねえ……」
浅草花川戸の岡ッ引、伊三郎は、徳兵衛の前でこくびをかしげ、ふかぶかと腕をくむ。伊三郎のうしろには、下ッ引の梅次が、かしこまって膝をそろえている。
徳兵衛の依頼によって、白髪の渡し船にのり、この武州屋別宅にやってきた伊三郎であった。
その自殺部屋の内外を、念入りに調べまわったが、



和泉町の伝八が、自殺と断定したのも無理ではなかった。

いくら侍の建てた屋敷とはいえ、この不気味な建物の構造は、妙に厳重で、外から曲者の忍びこむ隙は、まったくなかった。

「――親分、三人はなぜ自分で首を吊って死んだのでしょう？　わたしにはそのわけが、さっぱりわかりません。ほんとうに並木さまの死霊が、この屋敷にとりついているのでしょうか。ああ、こんな怖ろしい屋敷だとわかっていたら、わざわざ奉行所に手をまわして買い求めるのではなかった……」

徳兵衛は、まだ恐怖からぬけきれずに、げっそりとしておののいている。

「まさか、死霊なんてものが、ほんとにあるとは思えねえが。よし、もう一度、調べてみましょう」

伊三郎は、ついと立って離れへいった。下ッ引の梅次も、あとからつづく。

「梅。ひとつ、床下へもぐってみるか」

畳を一枚あげて、その下の床板をベリベリとひきはがした。身軽な物腰で、伊三郎は床下へもぐりこむ。

「こいつはおどろいた。下はぽっかりと穴があいて、一面の石畳だぜ」

しかも、四方の壁には、これも大きな石がぐるりとはりめぐらしてあるのだ。

「並木軍十郎という人は、なんのためにこんな床下をつくったんだろう……」

と、伊三郎は一人でつぶやいた。

（床下だけじゃねえ。この屋敷は、なぜこんなに謎めいたつくりになっているんだ？　この秘密さえわかれば……）

ふかい疑問をいだきながら、伊三郎はなおも床下の石壁を叩いたり押したりして、犬のように這いまわった。

「親分、なにか手掛りでも？……」

徳兵衛が不安げな顔で上からのぞきこむ。

「へえ……」

それにはこたえず、伊三郎は石壁に頬を寄せながら、何やら考えこむのだった。

四番目の変事

「おや、親分、あの女は？」

梅次が、眼を外にむけて伊三郎にいった。

「うむ？」

伊三郎、縄のれん越しに外をみた。

武州屋別宅からの戻り道、向島土堤下の一ぱい飲み屋で、軽い腹ごしらえをしている二人である。

と――飲み屋の前を、女が一人、いそぎ足で通りすぎたのだ。

「あれは、いまの武州屋でみかけた女中じゃござんせんかい？」

「うむ。おかしな足どりだな。キョロキョロあたりをうかがいながら歩いてる……」

「ただの使い、という足どりじゃありませんね、親分――」

梅次が、伊三郎の眼の色を敏捷にうかがった。

「そうだな。つけてみるか」

「がってん――」

返事と同時に、梅次の肩は縄のれんをわけていた。
その日の夕刻、花川戸の伊三郎の家へ、汗びっしょり、埃だらけになって、梅次が戻ってきた。
「親分、ただいま。——やっぱり怪しいや、あの女中……」
梅次は、眼を光らせている。
「うむ。きかせてくれ」
下ッ引にあとをつけられているとは知らないで、女中のお勝は足を隅田川の川ぞいに、木母寺の方角にむけた。
やがてお勝は、川ぞいにある、小さな古寺の門をくぐった。さびしい場所である。
梅次は、なおも尾行をつづける。お勝は、庭から裏手へまわり、くずれかけた土蔵のなかへ忍びこんだ。不思議な挙動である。
土蔵の裏側は、すぐ隅田川だった。
と——その破れ土蔵のなかから、男の声がボソボソときこえてきたのだ。
お勝となにか話しあっているらしい。逢びきにしては、不粋な場所だ。梅次は破れ壁にピタリと身を寄せた。
「ふうむ。——で、その話の中身は？」
「へえ、それが、押し殺したように低い声なもんですから、どうしてもききとれねえ」
梅次は、くやしそうな顔をした。
少したつと、お勝は土蔵のなかからでてきて、何事もなかったように、武州屋へ戻っていった……というのである。
「まあ、いい。それだけわかりゃ上等だよ。ご苦労だったな」
伊三郎は、急に上機嫌になっていった。
ところが、その翌朝——。
武州屋の首吊り屋敷では、四番目のたいへんな騒ぎがもちあがっていた。
といっても、こんどは首縊りではなく、娘のお八重が、忽然として消えてしまったのである。
その前夜、主人の徳兵衛は仕事の都合で、本宅の方へ泊っていた。
お八重はいつもの寝室で、一人床についたのであるが、両隣りの部屋には、番頭の松助と女中のお勝が、護衛するように、娘をはさんで寝についたのである。
この二人が、お八重の消えたことに全然気がつかなかったというのは、どういうわけであろうか。
もとより、この屋敷の出入り口には、すべて内側から厳重な錠がかけられている。その錠は、すべて異状がなかった。さらわれたにしろ自分から失踪したにしろ、羽でも生えないかぎり、この屋敷のなかから、お八重の出ていく戸口はないのだ。
お八重もまた、並木軍十郎の怨霊に招き寄せられ、煙りのようにこの世から消え失せたのか。
急の知らせで店から馳けつけてきた徳兵衛は、もう半狂乱だった。
「お八重は、お八重はどこへいった！　どこへ消えたんだ！　さがせ、さがせ、草の根をわけてもさがしてくれ！」
平身低頭して詫びる番頭と女中の胸ぐらをつかみ、小突きまわしながら、護衛の不行届を叱責、痛罵するのだった。

干潮の水門

「だからいわねえこっちゃねえ。花川戸の伊三郎なんかに頼むから、こんな事件がもちあがるんだ」

和泉町の伝八、自分の縄張りを伊三郎に荒されたような気がして、おもしろくない。プリプリしながら、捜査をすすめている。

しかし、こんどのは、かんたんに自殺と片づけるわけにはいかない。お八重の身体が、そっくりなくなっているのだ。

(こいつは、神隠しかな?)

と思ったが、まさか目明しがまじめな顔で神隠しなんていう言葉を口にだせるものではない。

必死になってあちこち這いまわるうちに、伝八はついに、れいの怨霊部屋の床の間の隅に、お八重の櫛が落ちているのをみつけた。

やはり、お八重の失踪も、この部屋と関係があるのだ。それから先は、だがわからない。

「よし。武州屋の旦那。今夜は、おれがこの部屋に泊ってやろう!」

「へえ。そりゃ、そうです」

伊三郎の指さしたところに、石垣づくりの水門口がみえる。川の水半分、ヤケになり、半分は目明しの面目にかけて、伝八はいった。

「えッ。あの、親分さんが?……」

がその水門をくぐって、屋敷のなかの庭の池にそそぎこむようにできているのだ。

「並木軍十郎の怨霊が、おれにまでとりついたら、こいつは一番、おなぐさみよ。早くからここに気がつきゃよかったな。ははは」

「これは、おれのあて推量だが、すっかり干潮すると、あの水門口の石垣の横ッ腹に、ひと一人がくぐれるほどの穴があくにちげえねえ……」

伝八、身体をそらせて、大きく笑った。だが、笑ったそのあとからすぐに、うす気味悪いものが、黒雲のように胸底から湧いてくるのだ。

「へえ?」

「死ぬ理由がひとつもねえのに、同じ部屋で三人もつづけて人間が首を縊るわけはあるめえよ」

(相手は生きている人間じゃねえ。怨霊なんていう、えたいの知れないシロモノだ。こいつは、もしかすると、おれまで首ッ吊りになるかな……)

伝八は、襟すじのあたりに寒気をおぼえ、ゾクゾクと首をすくめた。

一方、花川戸の伊三郎は、これも武州屋からの急報をうけて、すっとんできたが、彼は梅次とともにこの屋敷の裏手、つまり、川っぷちのあたりを、しきりに調べていた。

この川べりに面した裏側にも、不必要と思われるほどの高い黒板塀が、厳然とめぐらしてある。だが、伊三郎の眼は、ずっと下の石垣にひた寄せる水の流れを見つめているようだ。しかし——

「——みろよ、梅。この前ここを調べたときには、満潮だったんでうっかり見のがしてしまったが、いまは水がひきはじめている。だからもう少したって、もっと水がひけば、あの水門口が、ぽっかりと大きくあくにちげえねえ。」

「へえ。そりゃ、そうです」

「死ぬ理由がひとつもねえのに、同じ部屋で三人もつづけて人間が首を縊るわけはあるめえよ」

「すると、あれは、殺しで?——と、下手人は、どこからあの部屋に?」

「だからさ、あの水門の脇に、横穴がなくちゃならねえわけなのだ」

「なァるほど……」

伊三郎は、なおも川べりにへばりついて、らんらんと眼を光らせるのである。

毒婦に蛇侍

武州屋の首吊り屋敷から、隅田川ぞいに五丁ほども上にのぼった川っぷちにある、古寺の土蔵のなか——。

ここにいま、美しい娘が一人、羽をもがれた蝶のようにおしこめられている。

破れ壁に背をもたせかけるようにして、ぐったりと坐っているのだ。

両手をうしろにねじまわされ、紅いしごきで乳房もくびれるほど、かたく縛りあげられている。くの字なりに投げだされている、その雪のように白い足首にも、腰紐が喰いこんでいるほどに強くからみついていた。

この娘は、首吊り屋敷から消えた娘のお八重であった。

このお八重のそばに、立膝姿で凄んでいるのは、女中のお勝である。水色ちりめんの湯巻のかげから、青筋のういた白い脛をチラチラみせながら、お八重の身体の上にのしかかるように顎をつきだしている。

女中としてつかえているときとは、うって変った嬌慢な態度、顔つきであった。

「ふふふ……。こうなっちゃ、武州屋のお嬢さんもとんだ片なしだね。でも、あんたは運がいいよ。殺されるところを、その美しい器量のおかげで助かったんだ……」

お勝の口には、おさえきれない嫉妬のひびきがある。

「お勝、お前という女は！……」

あまりの意外さと無念さで、じっとお勝をにらみつけるお八重であった。

「くそ！　その眼だよ。怒っても泣いても可愛らしい眼、あどけない口もと。そこにあいつが心をひかれやがったんだ！」

お勝は憎々しげに、持っていた煙管で、お八重の肩を小突く。

はずみに壁をすべった娘の上体が、仰向けざまに埃だらけの床に倒れる。起きあがろうともがく裾が、しどけなくはだけて、肌にまとった紅いもののあいだから、まっ白な膝、太腿のあたりが、チラリとのぞくのだ。

だが、両手を背中にかたく縛りあげられている身では、それをつくろう自由はない。

「ちえッ。まァなんていい、ふっくらとした肌をみせつけるんだろう。やっぱり若いんだねえ。このみずみずしい肌に、あいつはポウッとなりやがったんだ。ちくしょう！」

ついとのびたお勝の煙管が、お八重のくずれた襟のあいだから、むっちりとふくらんだ胸乳のあたりへ、もぐりこむ。いや、むりやりにこじいれたのだ。その煙管の先を、ぐりッぐりッとねじるようにして処女の柔肌にめりこませるのである。

「あッ、ああッ！」

お八重の口から、臓腑をつかみだすような悲鳴が洩れる。はじかれたように身体をのけぞらせ、また海老のようにちぢめるのは、煙管責めの苦痛からのがれようとするあがきであった。

胸を避ければ、煙管は腋の下へいく。胴をねじれば腰骨から腿のあ

いだを、ぐいぐいとこじりまわすのだ。いかにも女らしい陰険な苛責である。肌をえぐられるたびに、お八重は身体をけいれんさせ、

「ひいッ、ひいッ！」

と、せつなげにあえぐ。その可憐な顔は、みるみるうちに蒼白に変じて、べっとりした油汗におおわれていくのだ。

と——そのとき。

夢中になって責める女、責められる女の背後から、一人の浪人風の男が、のそりと姿をみせた。

「——お勝。嫉妬の責めは、そのへんでやめておけ。見苦しい……」

浪人者は、低い声で半狂乱のお勝をたしなめるのだ。

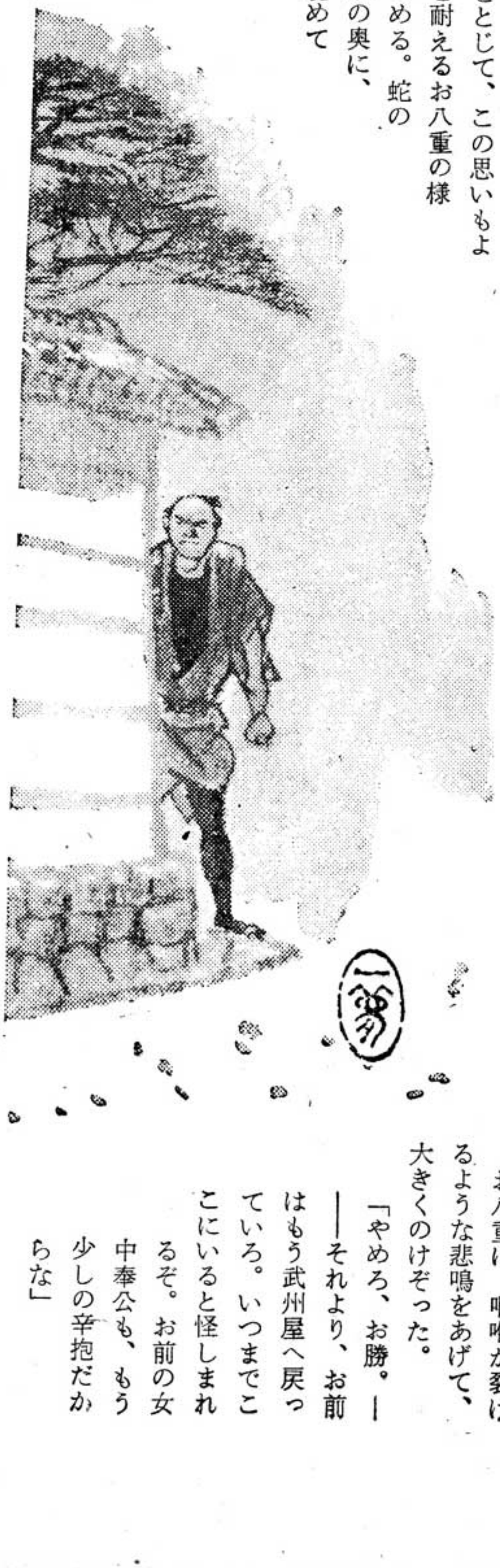
「おや、左門さん。いつ戻ってきたのさ？」

お勝は、乱れた髪をかきあげて、男をふりかえる。

その浪人者——結城左門は、そのお勝の言葉にはこたえず、だまってお八重の前に腰をおろした。

しっかりと眼をとじて、この思いもよらぬ苦痛と屈辱を耐えるお八重の様子を、じっとみつめる。蛇のようなつめたい眼の奥に、不気味な喜色を秘めているのだ。

「美しい。まったく、いい娘だ。ふふふ。殺してなるものか……」



結城左門は、しみじみと感嘆の声をあげ、のような男——蛇侍だ。ねらうは、くずれ乱れたお八重の姿態。痛めつけられた娘の身体に、また格別の美しさを感じたのだ。

がっくりと髷の根がくずれ、むざんにはだけた乳房。そのまるい肉の上にかかった紐。うしろ手にくくられた手首が、せつなげに助けをいのる。

「まったく、男ごころをそそる眺めだよ。ふふふ……」

左門は、またペロリと唇をなめる。

はげしい恐怖に、お八重はいま失神寸前である。

「くやしい！　こんなしょんべんくさい娘がそんなにいいのかい！」

嫉妬に眼を吊りあげたお勝が、ついと手をのばし、はだけたお八重の太腿に爪をたてると、キューッとつねりあげた。

「ひいーッ！」

お八重は、咽喉が裂けるような悲鳴をあげて、大きくのけぞった。

「やめろ、お勝。——それより、お前はもう武州屋へ戻っていろ。いつまでここにいると怪しまれるぞ。お前の女中奉公も、もう少しの辛抱だからな」



結城左門、もてあまし気味に、にがい顔でお勝にいった。

床の間の仕掛

（――おや、こいつはヘンだ。妙に頭が重くなってきやがったぞ……）

岡ッ引の伝八、床の間を背にして、どっかりと坐りこんだのはいいが、瞼の裏がなぜか急に重くなってきた。

今夜はこの怨霊部屋で、寝ずの番をするつもりの伝八である。

それが、ついいましがた、女中のお勝の酌で、たった一合ばかり飲んだだけなのに、ひどく頭のなかがクラクラしてきたのだ。

（いけねえ！　並木の怨霊がとりつきやがったかな……）

伝八、自分の頬っぺたをキュッとつねりあげて、このねむ気からのがれようとした。

だが、駄目である。襲いかかった睡魔は、まるで両足をつかんで沼の底にひきずりこむように、伝八を強引な眠りに誘いこむのだ。

（くそ！　むむむ……）

やがて、伝八は、うつ伏せになって畳の上に倒れてしまった。

夜はずんずんとふけて、しばらくの静寂。と――。

この部屋の床の間が、音もなく、じりじりと移動をはじめた。

奇ッ怪にも、花も置き物も一緒にのせたまま、静かに上へせりあがっていくのだ。

そして、三尺ほどもあいた床の間下の黒い隙間から、

「ふふふ……」

ふくみ笑いを洩らして、一人の黒覆面の男が這いだしてきた。

男は、ぐったりと眠りこけた伝八のそばへ寄り、その身体を抱きおこした。

馴れた手つきで、伝八の帯をときはじめるのである。そして、その帯を鴨居にむすびつける。輪をつくる。

首縊りの準備である。

すでに死んだようになっている伝八の身体を、よいしょと肩にかつぎあげると、帯の輪のなかに、その首をひっかけようとした。

そのとき――。

「御用だ！」

押入れの戸がスルリとあいて、十手をかまえてとびだしてきたのは花川戸の伊三郎とその子分、梅次である。

黒覆面、ギクリとしてふりかえった。

「押入れの隙間から、みんな見ちゃったぜ。観念して神妙にしろ！」

「うぬッ、はかったな！」

伝八をそこへ放りだし、懐中から匕首をつかみだした黒覆面、ギラリと抜きはなった。

「ぬかるな、梅！」

「がってん！」

すばやく背後にまわった梅次が、羽がいじめにおさえて、黒覆面をむしりとる。

結城左門である――。白鬼のようなすさまじい形相で、梅次をふりとばす。

「くそ！」

一瞬の隙をみてとびこんだ伊三郎の十手、左門の匕首を、ぴしりッと叩き落す。

同時に、捕縄がするすると左門の手首にからみつく。手練の縄さばきだ。

「梅、こっちはもういい。お前はお勝のほうだ！」

「へい！」

伊三郎の命令一下、梅次は渡り廊下をすっとんで、母家へ移った。

「お勝、御用だ、神妙にしろい！」

女中の枕を蹴ッとばす。しどけない寝巻姿のお勝が、ハッとさとって、いきなりその木枕を梅次に投げつける。

首をすくめて、あやうく避け、

「待て！」

障子をあけて庭へのがれようとするお勝の足を、うしろからひっつかむ。

「あれッ！」

足をとられたお勝は、どうとばかりに縁先へ転倒する。

寝巻がはだけ、内腿のあたりまでめくれても、なおも抵抗して逃げようとするお勝だ。

「神妙にしろといったら、わからねえか」

やっととりおさえた梅次は、お勝の手首をつかみ、腕も折れよとばかりに背中へねじあげて縄をかける。

「こんちくしょう！　しぶとい女だ！」

「あ、あたしが、なにを悪いことしたっていうんだよ！」

「馬鹿野郎！　なにもしねえ奴が、どうしてそんなに泡くって逃げたがるんだ！　結城左門はもう捕まったぜ！」

手に縄がからんでも、じたばたしていたお勝の身体が、急に弱まった。

「わかったか！　毒婦め！」

怒りをこめて、ギリギリ、ギリギリ、力まかせに縛りあげる梅次である。

涼風隅田川

隅田川は、もうすっかり夏景色——。

こころよい川風に吹かれながら、伊三郎と梅次は、向島の土堤を歩いていた。

一件落着して、お八重も無事に古寺の土蔵から救いだされ、ホッとした気分である。

「——ですが、親分。あの結城左門という浪人は、何者です？　なんのためにあの部屋に寝る者を縊り殺しやがったんで？……」

と、梅次がきく。

「結城左門は、御勘定方の並木軍十郎の側用人だった男なんだ。軍十郎は公金を費消した罪で牢死したんだが、実は、ごまかした金は全部こっそりと自分の屋敷のなかへ隠しておいた。その金の額は、およそ五千両……」

「へえ……また、ずいぶん、くすねやがったもんですねえ……」

「用人の結城左門は、主人のその秘密を知っていた。金の隠し場所も大体の見当はついていたんだ。つまり、あの怨霊部屋の床下、石畳の下か、石壁のなかだ。軍十郎が牢死したあとで、一人でこっそり運びだそうとしたが、そのとき、武州屋があの屋敷を買いとってしまった……」

「なるほど。それで、あの部屋に寝る人間が邪魔になったんですね

恐怖異色感覚・特集

「あの部屋に寝る者ばかりじゃない。あの屋敷に住む、ぜんぶの者を追いださなけりゃ、五千両もの金は運びだせねえ。そこで、あの屋敷の、秘密の仕掛を知っている左門は、干潮時になると、自分の隠れ家のあの古寺の土蔵の裏から、こっそりと船を漕ぎだした」

「川伝いなら、人目につかねえ……」

「そうだ。そして屋敷の裏手に船をつなぎ、あの水門口から、れいの部屋に忍びこんだんだよ……」

「あの床の間の、せりあがりの仕掛にはちょっとおどろきましたぜ」

「用心ぶかい軍十郎のつくった抜け穴だったのよ。あの穴を利用して部屋に眠っている者をつぎつぎにしめ殺し、首吊り自殺にみせかけたんだ。怨霊屋敷と噂がひろまり、徳兵衛が怖気づいて、あの屋敷を手放せば、あとはもう借り手も買いてもねえ。左門の思う壺だ……」

「女中のお勝は？」

「左門の情婦さ。左門のいいつけで武州屋に住み込み、こんどの悪事にゃ一役も二役も買っているよ。女中という役目を利用して、茶や酒のなかに、眠り薬をいれておき、あとで左門の仕事をやりやすいようにしておいたんだ……」

「なるほどね。お内儀や女行者はともかく、力自慢の幸七を、声もたてさせずにくびり殺すのは、いくら悪浪人でも、ちょっとむずかしいでしょうからね」

「伝八親分も、眠り薬のはいった酒を飲まされ、あぶないところだったな」

「へへへ……。いつも威張りくさっていやがるから、いい気味でさァ」

「お八重の命が助かったのは、不幸中のさいわいだったな」

「あれは、どういうわけで？」

「三人をうまく縊り殺し、図にのった左門のやつ、怨霊部屋から足をのばし、お八重の命までも狙いやがった。ところが、いざ殺す間際に、助平心がおきて、娘の寝顔があんまりきれいなもんだから、助平心がおきて、土蔵のなかへおしこのあの古寺の土蔵の裏から、こっそりと船を漕ぎだした。おれが本「川伝いなら、人目につかねえ……」

「そうだ。そして屋敷の裏手に船をつなぎ、あの水門口から、れいの部屋に忍びこんだんだよ……」

「あの床の間の、せりあがりの仕掛にはちょっとおどろきましたぜ」

「用心ぶかい軍十郎のつくった抜け穴だったのよ。あの穴を利用して部屋に眠っている者をつぎつぎにしめ殺し、首吊り自殺にみせかけたんだ。怨霊屋敷と噂がひろまり、徳兵衛が怖気づいて、あの屋敷を手放せば、あとはもう借り手も買いてもねえ。左門の思う壺だ……」

「女中のお勝は？」

「左門の情婦さ。左門のいいつけで武州屋に住み込み、こんどの悪事にゃ一役も二役も買っているよ。女中という役目を利用して、茶や酒のなかに、眠り薬をいれておき、あとで左門の仕事をやりやすいようにしておいたんだ……」

「なるほどね。お内儀や女行者はともかく、力自慢の幸七を、声もたてさせずにくびり殺すのは、いくら悪浪人でも、ちょっとむずかしいでしょうからね」

「伝八親分も、眠り薬のはいった酒を飲まされ、あぶないところだったな」

「へへへ……。いつも威張りくさっていやがるから、いい気味でさァ」

「お八重の命が助かったのは、不幸中のさいわいだったな」

「あれは、どういうわけで？」

「三人をうまく縊り殺し、図にのった左門のやつ、怨霊部屋から足をのばし、お八重の命までも狙いやがった。ところが、いざ殺す間際に、助平心がおきて、娘の寝顔があんまりきれいなもんだから、助平心がおきて、土蔵のなかへおしこのあの古寺の土蔵の裏から、こっそりと船を漕ぎだした。おれが本

次号よりの連載読切

泣き兵衛巷囃子

女の悲鳴が虚空に流れて
また一つ巷に異変が……

飯田豊吉

髪の毛をつかまれ、床の上にぐいぐいと顔をねじ伏せられながら、風美の心はますます固くなって抵抗した。

鳴海条吉、ネをあげて罵った。

「しぶといガキだ！」

この小娘の息の根をとめてやることのできないのが腹立しい。

ソファに、どしりと腰をおろす。

そのはずみに、白豚のような春子の身体が上下に震動した。ソファの上に転がされたままだ。縛られた手足も、もうもがく力はなく死んだ魚のようにぐったりしている。口の猿ぐつわは、ちっともゆるくならない。

眼だけをあけて、責められている風美をみていた。

（――あたしと風美は、なんでこんなひどい目にあわされているんだろう……）

にぶい春子には、さっぱりわからない。とんだ災難だと思っている。

鳴海は、また煙草をだした。煙草好きの男である。日に七、八十本は軽い。火をつけて紫煙をふかく吸いこみながら、床の上に、ピクピクとうごく風美の白い咽喉を眺めた。胸にかけた縄が女の呼吸を強く圧迫している。

（――くそッ、どうしてやろうか……）

と、鳴海は考える。こんな小娘にホンロウされている形の自分に、イライラするのだ。額にふとい青筋が浮かび、憎悪にくねる。

――トランクを見つけだしたら……あれさえ手に入れたら、その時こそ、この女を殺してやろう。手の指を一本一本切り落し、

本誌に連載して反響を呼んだ白熱のサスペンス！　あまとりあ社発行・定価二五〇〒四〇

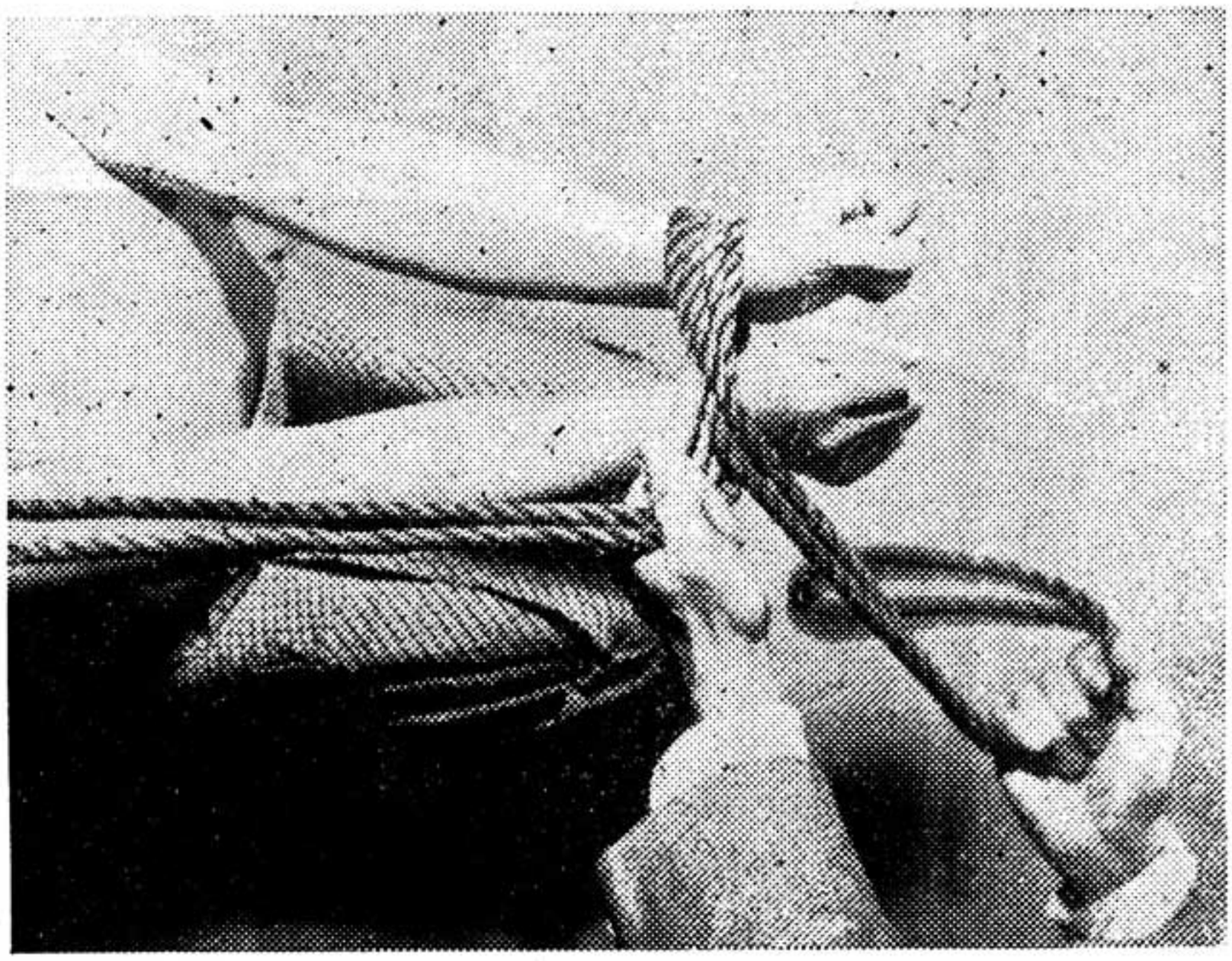


異色官能サスペンス

地獄の乳房

飯田豊吉

奥様お手をどうぞ



鳴滝三郎

万引き夫人

気象関係のニュースは、そろそろ梅雨予報を始めていたが、東京の空は申し分のない快晴が続いて、梅雨のことなど現実感が稀薄であった。

その空の下の東京——銀座のデパートを高塔由美子は今日も歩いていた。

何という名のデパートでもよい。由美子にとっては、デパートでありさえすればどこでも同じであった。

エレベーターに向って歩く由美子の額に、うっすらと汗がにじんでいるのは、夏が近いせいばかりではない。

由美子はその汗を拭かない。汗を拭く季節には、まだ少し早いように思える。不自然と見られる動作は避けなければならない。

演技をする者のように、自然を装いながらも、心身は緊張していた。この緊張した感覚を得るため

に、由美子はデパートへ来るのだ。
「もしもし……」
背後で男の声がした。
「ちょっとお待ち下さい……奥さん、あなたですよ……」
明らかに自分が呼ばれているのを、由美子は感じた。だが、振り返ってはならない。立ち止ってもいけない。走り出すこともできない。
乳房の奥を締めつけられるような緊迫感にさいなまれながら、しかし、由美子は自然に歩いた。
さいわい、下降するエレベーターの扉が開いた。
もう走り出してもよい——と考えた時、足音が背後に迫って、右手を掴まれた。
(ああ！　とうとう……)
瞼を閉じた。だが、諦めるのはまだ早い。
「失礼な！　何をなさるの！」
烈しく振り返って、精一杯に相手を睨んだ。
若い男である。美男子だが、眼が鋭い。
「だいぶお急ぎのようですね…」
「……」
「いけませんな。ほら、これを落したんですよ……」
男はようやく手を離し、左手でハンカチーフを示した。確かに由美子のものだった。
「……違いますわ」
由美子は首を振った。
「そんなはずはない。僕は見たんです。全部……」
「…どういう意味でしょうか？」
「まあいいですよ。近頃はハンカチーフも贅沢なのが出てますね。これ、高いんでしょう？」
「わたくしのではございませんから……」
思わずうなだれてしまい、足が重くなった。
「どうしたんです？　素直にしないと……」
低声だが、語尾に威圧があった。
「手錠を……お持ちなの？」
「その方がよければ……」
「どうか、お許しになって！　お願い！」
残されたただ一つの手段として、弱々しげな哀願を試みると、男の眼が、不意に笑った。
「思い出した。どこかで見た顔だと思ったが、君は映画に出ていた人じゃないか。そうだ、黒田由美子だ。実業家と結婚した、と聞いていたが、デパート荒しとはねえ、黒田由美子も落ちたもんだな…」
黒田由美子——それは二年前までの由美子の芸名だった。主演に近い役で出たことも何度かある。男がそれを知っていることは幸運となるかもしれない。
「お願いです！　出来心なんです。

黒覆面の男の前に由美子は深々とうなだれ、涙は乳房を濡らした。スリルを求めた女は屈辱の罠に陥ちた！

見逃がして下さい！」

「出来心か。元時代劇女優だけあって、古風なことをいうねえ。転落の映画女優、万引きで捕わる……か。新聞社は飛びついてくるだろうな」

「許して下さい。新聞に出されるなんて、いやです。それに、わたくし、転落などしておりません。家庭に入って不自由なく暮らしているんです。弁償でも、何でもいたしますから……どうか！」

「ほう。じゃあ、やはり社長夫人なんですな。何でも…というと、僕のいうことには何でも、ですか？」

由美子はせつなそうに頷いてみせた。巧演である。

「そうですか。それでは……」

男は上衣のポケットへ手を入れた。

「奥様、お手をどうぞ……」

皮肉な口調でいう。

顔色の蒼ざめるのが、自分でもよくわかった。

（駄目……もう、終りだわ……）

絶望的に——それでもなぜか両手を揃えようとした瞬間、由美子急激な目まいに襲われた。

手錠

「……それから、女店員の隙をうかがって品物を自分の袂に入れた……間違いないね？」

「はい……」

由美子は力無く答えた——。

デパートで昏倒したのは憶えている。どのくらい経ったのか？意識を取り戻した場所が、この部屋である。

そして、両手首は冷い手錠で繋ぎ合わされていた。

「しぶとい女だ。一体、いつまで芝居を続ける気だ！」

「何だと？　笑わせやがる……白いきなり頬を叩かれて、眼を開くと、例の男が見下ろしていた。

「あッ、乱暴な……」

「ふざけるな！　気絶の真似なんかしやがって、ずうずうしい女だ！」

「真似……真似なんかいたしません」

「いいから俺の訊くことに答えろ」

男は机に向って和文タイプを打ち始めたのだった。

調書——というのだろうか？

だが、妙である。一体、ここは何処なのか？　刑事部屋、という感じとは違うように思える。デパートの事務所と思えば、それらしくもあった。

「弁護士を呼びます」

「後で呼んでやる。さあ、白状しろ。和服を着て行くのは万引きをはたしてあるのだろうか？　タイプライターで調書を取るのは、アメリカ映画で見る警察のようだ、と思った。

何にしても、無抵抗の者に手錠をかけたり、撲ったりすることが、だ。そうだな？」

「ち、違います！」

「そうだといえ！」

パシッ、パシッ！　と撲られて意識がかすみそうになる。身をもがくと、手錠が手首にだんだん喰い込んでくる。冷たい鉄の輪が肉を噛んで締まり、再び元へ戻ることはない。

その感覚は、以前、経験したこ

とがあるものだった。まだニューフェイスだった頃、東京の撮影所でギャング映画に端役で出たことがある。チンピラやくざの情婦役で、逮捕される場面があり、本物の手錠をかけられたのだ

「はい、カット」と、本番OKが出た後、チーフの助監督が「由美ちゃんなかなかよかったぜ。感じが出ていたよ」と褒めてくれた。

「驚いたわ。これ、本物の手錠なんですか？」

「そうさ。どこの撮影所だって本物を使ってるぜ」

「手を動かすと、だんだんキックなってくるのね。巧くできてるわ」

「そこがいいところなんだな。抵抗できないんだ」

「早くはずして下さい。あんまりいつまでも銜められていると、何だか本当に悪いことをしたみたいな気持になってくるわ……」

突然、助監督の手がのびて由美子のウェストの辺りをくすぐった。

「あ！　いや！　いやよ！　カンニンして！」

その時の、興奮のようなものを伴なった羞恥感は、以来、いつまでも生き物のように由美子の身心に巣喰っていたのである——。

贋刑事

「……以上の通り、相違ございません。本当に申しわけのないことを致しました……と、さあ、これででき上りだ。ここへ名前を書いて、拇印をおすんだ」

男は数枚の紙をホッチキスでとじた後、最後の頁を開いて由美子に突きつけた。

由美子はグッタリとうなだれ、手錠の先の朱肉に汚れた拇指を見つめた。既に取り返しのつかないあやまちを犯かした、それは白い罪の手であり、美しい罪の指であった——。

「……お客さんてのは、この女かい？」

「なかなかイカスじゃねえかよ」

「万引き女だって？」

「ああ、常習のな。何の因果か、万引きを働かねえと夜もロクロク



由美子の笑いを含んだ悲鳴は、スタッフ一同の好奇の視線を集めた。

すかさず天井のライトマンが、その場へ強烈なライトを当てる。

セットの一隅で煌々と照らし出された由美子は、身も世もない羞かしさに、みるみる頬を紅潮させ

「素直にした方が身のためだぞ。さあ書け。書いたら釈放してやる」

「本当ですか？」

「本当だ。もっとも、これで終りじゃないぞ。何度か来て貰うことには

眠れねえという、大金持の奥様だ」
「そいつはいいカモだねえ」
「やっぱり、兄貴は腕がいいや」
いつの間に入って来たのか、二人の男が由美子の前に現われ、やくざっぽい調子の会話を交わし始めた。
由美子は顔を上げた。そして、ようやく気づいたのである。
自分を捕えたのが司直の手ではなく、街の狼どもであったことを——。
「あ、あなた達は……」
「いまわかったらしいぜ。鈍感な女じゃねえか」
「贋刑事だったのね！」
「ビクビクするなってことよ。命までも取るわけじゃねえさ。タップリ可愛がってやろうってんだ。ありがたく思いな……」

邪悪な独立プロ

「お金なら要求通りあげますから、私を家へ帰らせて下さい！お願い！」
必死に、何度目かの哀願をこころみた。
同じ建物の地下室である——。
黒い布で目かくしをされた由美子が、後手錠の姿で身もだえている。
「まあ落着けよ。お前さんの主演で一本撮らせて貰う。クランク・アップになるまではイヤでも御滞在願うほかはねえんだからな」
由美子を捕えた兄貴株の男が近寄って、目かくしをはずした。
カメラがある。ライトがある。テープレコーダーも用意されていた。他に、縄、鎖、鞭、足枷、等の恐ろしい責道具の数々が並べてあった。
「一体、何を……」
「見た通りだ。俄かづくりの独立プロってとこだな。何とかスコープって訳にもいかねえがこれでも十六ミリだぜ。精々熱演して貰おう」
「そんな……イヤです！」
「イヤの方がいいんだ。記録映画だからな。イヤがるのも勝手だ。演出は俺が引受ける。申し遅れたが、俺、お不動様の五郎ってんだ。よろしく頼むぜ。右手に降魔の利剣を持ち、左手に捕縄を持っている不動明王ってのがあるだろう。あの不動だよ。もっとも、縄だけでなく手錠も使うがね」
五郎は皮肉に笑った。
続いて、もう一人が名乗った。
「おらあなあ、受け売りの建ってモンだ。カメラと照明をやるんだが、できるだけ美人に撮ってやるぜ。安心しな」
「……さて、その次に控えしは、といいてえところだが、気取るほどのこともねえや。キスグレのサブって男だ。酒が好きなんだ。音の方をやっつけるからよう、いい声を聞かしてくんな」
ヘラヘラと笑った。
彼等の目的は由美子にもわかっている。羞かしい姿をフィルムに収めようというのだろう。
悲しい呻き声をテープにとろうとするのだろう。そして、例の「調書」と共にユスリの材料とされるのだ。
由美子はチラリと良人の顔を思い浮かべた。
（あなた……あなたが悪いんだわたくしをこんな破目に追い込んだのは、あなたなのよ！　なぜ、もっと強くわたくしを掴まえていて下さらなかったの！）
良人の高塔俊作は四十五才。二十七才の由美子を人形のように愛する男であった。
若く美しい妻を大切に扱うことに満足していた。女の幸福を不足なく与えていると思っている。確かに、金で買える種類の幸福はすべて由美子のものとなった。人妻としての束縛は少しも受けず、自由でもあった。
「芸界を引退する必要はないよ。惜しいじゃないか。出演料などどうでもいいから、好きな仕事があったら出てみるといい」

といっていた。

「芸界って、あなたが考えていらっしゃるような清潔な所ではございませんのよ。考えようによっては恐ろしい世界なんです。誘惑だって多いし……」

「何だ、そんなことをいってるのか。私は君を信じてるよ。遠慮はいらないから……」

と、寛大であった。

俊作は奇術を趣味とし、マジッククラブの会員である。熱中することといえば奇術の研究と仕事だけであった。童心を残したままで大人となったような、頼りなさ、いらだたしさがあった。

由美子を叱ったことなど一度もない。嫉妬もまったくしない。空気の中にいるようで刺戟というものが少しもなかった。

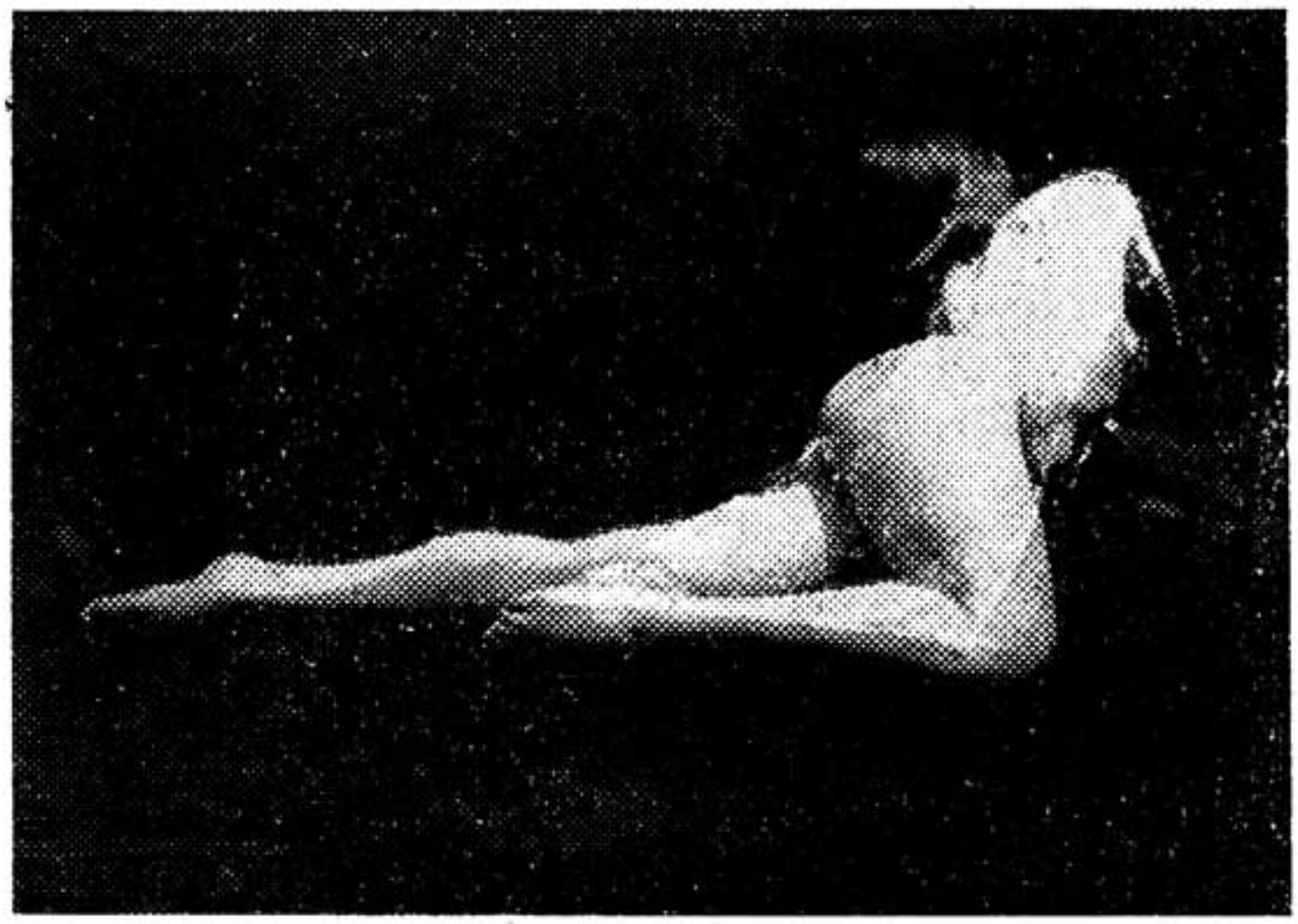
そういう愛され方は、愛されていないことよりも空虚さを覚えさせるものだった。

少女の頃、両親の厳しい折檻によって矯正された由美子の盗癖が、デパート荒しという形で再び芽ばえたのはスリル感という刺戟が身心の空虚を埋めるからにほかならなかった。大勢の人間がいる場所で物を盗むということは、由美子の場合、妖しい魅力となり、抗しかねるものとなった。

発見されるまではやめられず、そしてまた、発見される時を心の一部で待ち望んでいる奇怪な心理があったことも事実であった。

(あなた。わたくしは悪いことをして、捕まってしまったのよ。そして、これから罰を受けるんだわ。その罰はわたくしだけが受けるのではなくて、あなたにも降りかかるのよ)

由美子は瞼を閉じ、再び良人の顔を脳裡に描いた。決して怒った



ことのない笑顔を——。

不動明王の縄

「さあ、女。準備完了だ。始めるぜ」

五郎が手錠をはずした。

「脚本はいらねえが、題名だけは教えといてやる。奥様、お手をどうぞ……ってんだ。どうだ、洒落てるだろう?」

五郎は黒い頭巾をスッポリとかぶり、眼の部分だけを現わしていた。自分も映画に出るつもりなのだろう。頭巾はもとより人相を隠すためだ。

「兄貴、もう始めていいかい?」

受け売りの建が訊いた。

「おう、いいとも。ぶっつけ本番でスタートだ」

由美子は自由になった手で顔を隠そうとしたが、その手は五郎に烈しく払われた。

「おい、万引き女。まず、裸になって貰おうじゃねえか」

「イヤです!」

「お前の亭主が見る映画だ。何も羞かしがることはあねえやな」

「許して!」

「俺に捕まったのは運がいいんだ。さ、脱げ!」

由美子は壁際まで退って、首を振る。

「そうかい。仕方がねえ。口でいってもわからねえ奴は、どうするんだっけな？　建、おめえ、教えてやんな」

建がカメラを回しながら答えた。

「そういう場合は、言語道断、っていってね。言語でわからせる道が断たれたから、あとは実力行使しかねえ。昔の人は巧えことをいったもんだ」

「ありがとうよ。やい、女。覚悟はいいだろうな」

五郎は皮の鞭を拾い上げた。

「てめえの体からよくねえ癖を叩き出してやるぜ。……そらよ！」

宙を裂いて鞭が由美子の太腿の辺りへ飛んだ。

「ああッ！」

「少しは感じるか！」

ピシッ、ピシリッ！——

次々と鞭が高鳴り、由美子の体が躍動する。

「なるべく早く降参した方が、被害が少くて済むんだがな。……どうだ！」

ピシリ！——

「ひッ！」

由美子は床へ倒れ伏し、背を丸めた。

その背中へ、情容赦もない苛責が加えられる。一撃、また、一撃——。

「ああ！　ゆ、ゆるして！」

「脱ぐか！」

「はい……」

由美子は震える指で自分の帯を解き始めた。

「早くしろ。フィルムの浪費にならあ」

冬の和装とは違う。白い肌が現われ始めるまでには、そう大して時間はかからなかった。

「なぜ、手を止める？　その辺でやめちゃあ中途半端だぜ」

「もう、カンニンして下さい……」

「まあいいや。あとは俺が手伝ってやる」

五郎は白い細引を拾って近寄った。由美子は身を縮めて、うずくまる。

「奥さん。手を後ろへ廻しな」

「何を、なさるんです……」

「知れたことだ。お前さんを縛るんだよ」

「逃げたりはしませんから、そんなひどいことはしないで下さい」

「逃がさねえために縛るわけじゃねえから、その理屈は通らねえよ。不動明王になり代って、お前さんを痛え目にあわせるのさ」

「あなたみたいな人が、そんなことをいうなんて、僭越です」

「僭越と来たか。こいつは笑わせやがる。何でもいいから、早えとこ手を廻しな」

五郎は鞭をしごいてみせた。

由美子は顔をそ向け、力無く膝の上で両手を揃えた。

「前じゃねえ、後ろへ廻すんだ。映画でやったことがあるはずだ。神妙にしろ！　ってのをな」

由美子は冷い唇をかみ、口惜しそうに両手を後ろへ廻した。縄を打たれる場面を演じたことはあ

る。だが本当に縛られたわけではない。

しかし、今は違う。

五郎は強い力で縄を掛けた。両手首を捻じ上げられ、厳重にくくり合わされる。縄が首へ廻され、ギリギリと締め上げられた。

あさましい姿だと思う。

「君は、どんな仕草をしても美しい。どういうかっこうをしても綺麗だ……」

と俊作がいったことがあった。

（あなた。わたくし、こんなかっこうにされているのよ。これでもわたくしは美しいの？）

五郎はナイフを手にして、刃を開いた。

「さあ、残った皮をはいでやるぜ……」

自業自得

由美子は、生まれたままの姿に近い形で縛られたまま、冷い床に

正坐をしている。

肌着類は五郎のナイフに切り裂かれて、その周囲に散っていた。

五郎は由美子の正面に椅子を据え、鞭を手にして腰かけており、カメラは横から二人を捉えている。

黒覆面の五郎の威丈高な態度と、ひしがれた裸女の痛々しい肢体は、異様な対照をみせ、中世の魔女の審判を思わせる構図であった。

「これから俺の訊くことに、お前はできるだけ正確に答えるのだ。いいな」

「……」

屈辱に耐えられず、由美子は深深とうなだれて——肩の辺りが小刻みに震えている。

「返事をしろ！」

鞭が飛んで、肩越しに背中の肉を叩いた。

「あ、いいます……おいいつけに従いますから、これ以上、虐めないで下さい」

「よし。では、前歴と名前をいえ。亭主の名前もいうんだ」

「……わたくしは……高塔俊作という者の妻で、由美子と申します。以前は、黒田由美子という名で、映画に出ていたこともあります……」

「何と呼ばれる犯罪だ？」

「……万引き……」

「よく聞こえない！　もう一度いえ」

「万引きです……ああ、もう、許して！」



「いいます。……抵抗できない姿にされています」

「もっと具体的にいえ！」

「裸に……されて、手を、後ろにくくられています。正坐を命じられて、自分勝手に動くと、鞭で叩かれます……」

思わず、語尾が震えた。口惜しさが溢れて涙となり、一筋、頬を伝わって乳房へ落ちた。

「なぜ、そんな目に遇わされている？」

「罰を……受けているのです」

「なぜ？」

「悪いことを、したからです。デパートで、物を盗んで……捕まりました……」

「その行為は　何という？」

「それは……犯罪行為です」

「何と呼ばれる犯罪だ？」

「……万引き……」

「よく聞こえない！　もう一度いえ」

「万引きです……ああ、もう、許して！」

「余計なことはいうな！　何を万引きするつもりだったのか？」

「特に、きまっていません。何でも……」

「なるほど。行き当りバッタリに手当り次第盗むから万引きというわけだな」

覆面の下で、五郎はかすかに苦笑したようだった。

「つまり、お前のは純粋の万引きだ。正統派の、本格な万引きというヤツだ。それに違いないか？　頷くだけじゃわからん。自分でいい直してみろ」

「わたくしのは……純粋で……正統派、本格の……万引きです……」

羞恥で、背中へ廻わされた十本の指がせつなく悶えた。

「お前はその行為を恥じているか？」

由美子は初めて自分の言葉を声にした。

「恥じております。十分に後悔しています。貴方がたの罠へ落ちたのも、自業自得なのです。許され

たら、もう二度と再びあんなことはいたしません……本当です」

「俺達に感謝でもするか？」

「それに近いものを、いまに感じるのでしょう……」

「現在はどうだ？」

「つらい……という気持がすべてです。こんなにしなくても、弱点を握られているし、要求はききいれたでしょう」

「生意気をいうな」

「何も、手を縛らなくても……」

「捕虜のくせに贅沢をいうな。恥を体に覚えさせるためだ。そのグラマラスな体にな。そうだ、いいことを教えてやろう。ダホという言葉を知っているか？」

「だほ？……」

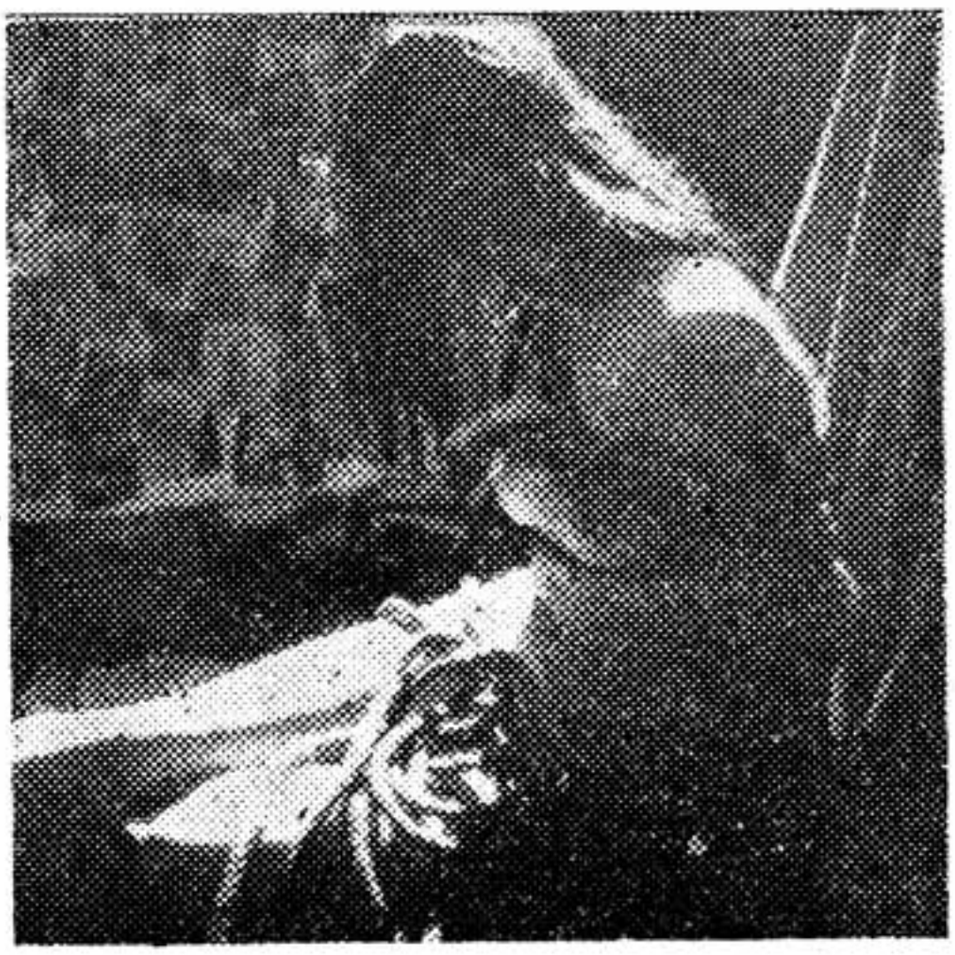
「漁船がダホされる……という、あれだ」

「ダホ……よく存じません」

「建、お前、この奥さんに教えてやれ。ダホのダという字をな」

受け売りの建という男、妙な奴で、すぐにこんなことを答えた。

「ダというのは合わせるという字の下に手と書くんだ。拿と書いてとらえるとも読まあ」



「聞いた通りだ。つまり、手を合わせるというのは縛ることだよ。捕まった奴が縛られるのは当り前なんだ」

五郎は、また、笑ったようだった。

眼かくしをされた由美子が自宅へ送り届けられたのは、翌日のことだった。

女友達の家へ泊ったことにして、疲れ果てた身をベッドへ埋めた後、由美子は独りでいつまでも嗚咽し続けた。

幸い、肌身は汚されなかったが、由美子の下手な口実に疑いも持たず、奇術の雑誌に読み耽る俊作が、恨めしかった。

それからは、不安におののく日が続いた。脅迫者からの連絡が、いつかはある。多分、フィルムの現像が終ったらすぐにあるのだろう。それは由美子の破滅の日である。それと共に、罪もない良人が傷つく日でもある。

一週間ほど経った——。ある日の夕刻。

俊作が車に何か荷物を積んで帰宅した。

由美子は書斎へよばれた。

夕化粧を済ませた由美子は、蒼ざめた顔色にやつれが漂っていたが、それでも美しさは消えず、優婉の趣きがあった。

「今日、会社へ親切な人が訪ねて来てね。面白い手品を見せてくれた……」

静かな口調だが、俊作の表情には沈痛の色があった。

「これに見憶えがあるかね？」

俊作が机から取り出した物は手錠であった。

由美子は、絨緞の上に膝まづき、両手をついて頭を下げた。

「……そうか。やはり、強制されただけではなく、破廉恥な弱身が、確かにあったのだな」

正坐した由美子の膝の前へ、手錠が投げられた。

「自分の手へ、それを嵌めなさい……」

「……わたくしが、悪うございました。どうか、お許し下さい。お暇を……」

「うるさい！　いわれた通りにす

ればよい」

由美子は自分の手を自分で拘束し、頬を染めて深々とうなだれた。

初めて加えられる良人の折檻を、甘んじて受けようと思う。

十六ミリの映写機が用意され、壁へ白い布が張られる——。

やがて、写し出されるおぞましい映像を、由美子は直視するよう、命ぜられた。

奥様お手をどうぞ——

皮肉な題名に続いて、哀れなヒロインの姿が現われる。

口に箪を咥えて、床の上の白紙に懺悔の文章を書いている由美子。

受け売りの建はこの場面を「日高川何とか——」という歌舞伎にある責め場に似ている、と説明したのだった。

続いて、粗雑な編集で次々と現われる異様な屈辱の姿態の数々——。

遂に耐え切れず、由美子は悲鳴を上げて倒れ伏した。

「もう、おやめになって！　わたくしは、悪い女です。どうか、お気の済むようになさって下さいまし……」

「それはもう済んでいる。私の代りに他人がそれを果たしてくれた。いわば荒療治が行われたようなものだ。この上は、由美子を責めることもなかろう。あとは自分の心の問題だ」

俊作は冷静を取戻し、映写機をとめた。

由美子の離縁は行われなかった。

さらに旬日を経たある日——。

由美子は都心で映画をみての帰りに、喫茶店の内から、偶然、良人の車を見た。信号燈が赤となり車道に停車したところをハッキリ見たのである。

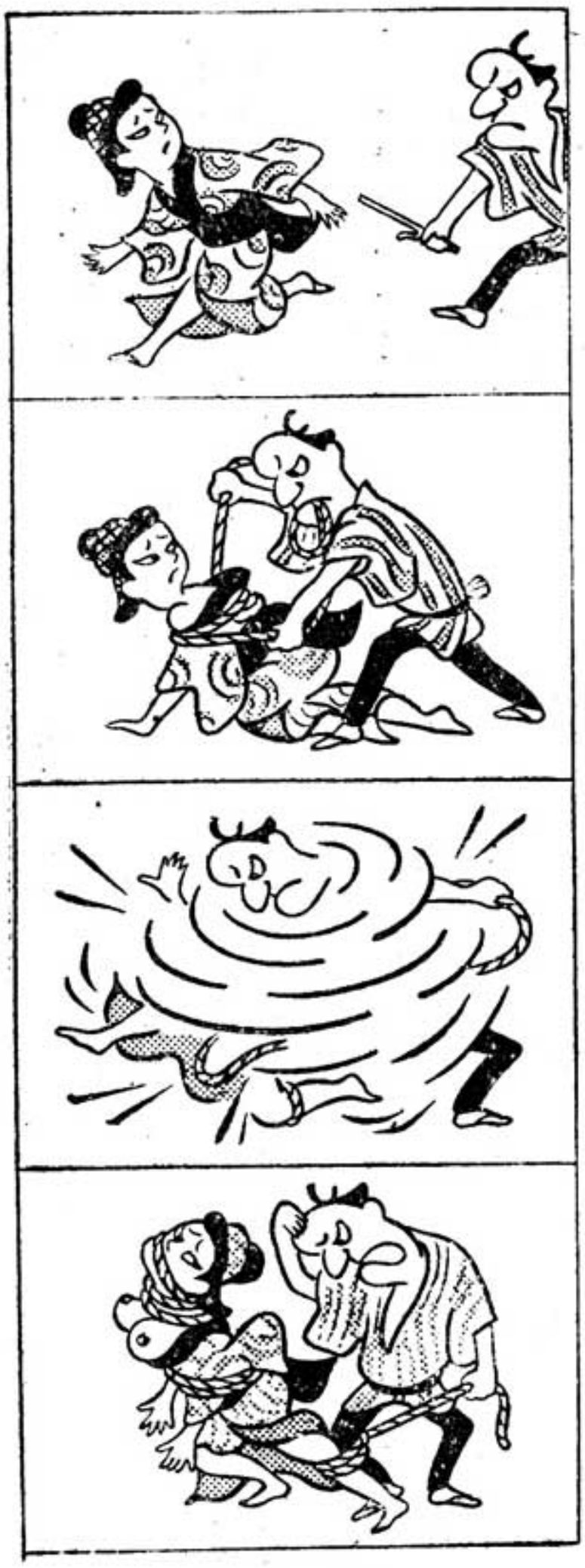
車内には、良人のほか、三人の男が乗っていた。五郎、建、サブ、の三人に間違いなかった。見誤まるはずはない。脳裡に焼きついている三つの顔である。その三人が良人と談笑しているのだ。

その有様は、和やかで、朗らかで、どう見ても脅迫者とその相手、とは思えぬものだった。そして、三人の男達の服装や表情は、決して無頼漢のそれではなかった。

直感をいえば、芸術家肌の青年達なのである。

由美子は白昼夢をみる思いで、茫然と、走り去る車を見送った。

うら八捕物帳　女賊御用！



左次朗・画

裏窓八月特大号は

呪法幻術・特集です！

★森閑と静まり返る深夜の祠に妖しい呪いをこめる人影！　鬼気迫る秘法幻術の大特集!!

妖奇女護ケ島　小田桐爽

なめくじ屋敷　宇治川竜

恋（こいふみ）文　久富浩司

江戸暗黒秘録　鈴木和夫

絵物語・婦人諜報部員（二）

文・依田精二　画・秋吉巒

悲愴美の世界

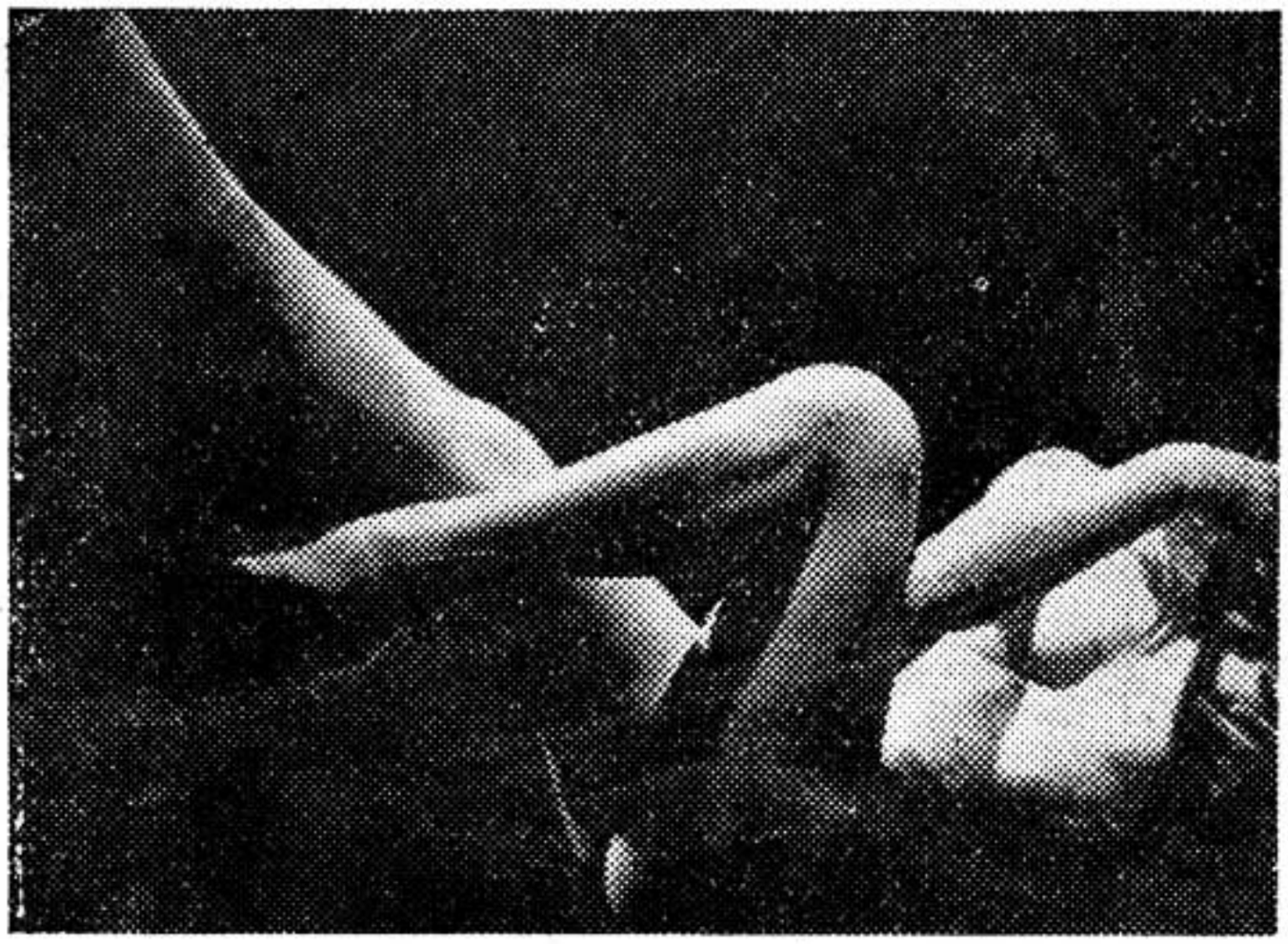
次号予告

美童切腹史

中康弘通

栗原伸・画





特集執筆者

飯田豊一
矢桐重雄
中村節
島本春雄
吉橋爪彦七
八藤見郁達
三円城寺
佐賀八郎

定価150円・送料16円

＝六月二十三日発売予定＝

東京都中野区江古田1～2302
株式会社 久保書店
振替東京・10756

樋口一葉

発売予告。

東叡山青龍院のちご喜平
朝がほのもろき命をもろ共に
あはれと思へ露の身の上

この喜平というのはほかでもない、衆道の恋の板挟みになって、みずから生を短かく了えた美少年の名である。すなわち、寛永のころ武州東叡山青龍院に、喜平とて十六歳になる屠従があった。容儀美麗というからよほどの美形であったと見える。心ばえも優雅な少年であったところから、御本坊の李之助という者が深く恋着し、在三位という僧を仲立ちとしてしばしば云い寄ったが、一向に喜平はなびこうとしない。

李之助はこらえかねて自室で太股に刀を突き貫き、喜平をひそかに招じ入れて、「こうも思い込んでいるものを」と命がけで口説くのであった。喜平はすぐさま振袖の裏を切り破り取り出した綿で流血を拭うと、薬を塗って李之助を介抱した。これからというもの、疵の癒えるまで昼夜となく人目を忍んで看病に努めたから、李之助の喜びはいかばかりであったろうか。

ところがある朝、陽もかなり高くなっているのに、喜平の居間のみは固く鎖されたままである。納所坊主の玉泉坊が戸を敲いても、何のこたえもない。怪しんで戸を破ると、喜平は机によりかかったまま居眠っているように見えた。玉泉坊は傍へ寄って起そうとして、あッと驚いた。端麗な横顔に血の気もなく、噛みしめた唇の色もはや褪せていたからである。

悲愴美の世界（二）

女腹切りの史実と小説

はしがき

灘中康弘通
五郎・画



思うに切腹は、仇討とともに我が邦武士道精神の象徴であった。もはや今日では封建の遺風として全く廃れたことはいうまでもないが、その文芸、演劇方面における表現はなおすたれきらぬもののようである。

筆者が女腹切の史実を探り、女剣劇における切腹の演劇効果に言及してから、はや七年の歳月を経過したが、その間、女優が切腹を模する軽演劇や女剣劇は、東西においてしばしば上演され、多数の観客の関心を集め、興行的成功を納めたかに見える。同時に小説においてもまた、少なからず女腹切の特異な設定を試みた作品が発表されている。

こうした女腹切を採り上げた作品について明治以降の文献を渉猟検討するのも、あながち無価値ではあるまい。

いったい、切腹の元祖は藤原保輔とするのが定説であるが、資料を神話時代にまでさかのぼって求めるならば、吾人は淡海神なる女神にその根源を得るにいたる。

筆者は、従来あまり本誌に接するの機を得なかったのであるが、昨秋知人より注意を惹かれ、本誌九月号において、会津女

丈夫の凄壮な立ち腹を描いた「父恋い娘旅」に接し、また一月号では、異常心理に憑かれた夫に強いられて、雪中に端座し切腹を模する美女を描く遥泉院切腹に接するに及び、著るしい感銘を受けた。もっとも、これらはいずれも全くのフィクションであり、史実ないし事実ではないようである。

ここに掲題の一文を草し、女腹切の史実とその作品化についての貧しい考察を示す次第を追って紙幅が許せば参考作品として、女性の自刃を扱うフィクションにも触れたいと思うのである。

1、今参の局

今参の局は足利義政の乳母であった。九歳で将軍職についた義政を幼少から哺育したのであるから、その信頼もひとかたならず、一時は天下の三魔と呼ばれた側近派の筆頭であったから、将軍の生母日野一門の女、重子との間に勢力争いが起ったのも当然である。

たまたま尾張の守護代の職を争う者が重子と局とをそれぞれ頼り、局の推した人物を義政が任命したので、重子は家出し、やむなく将軍が局を退けて一応ことが収まった。

さて将軍のもとには重子の意向で同じく日野の一門から富子が十六歳で嫁いだ。時に義政は二十一歳である。

富子が丁度二十歳の春、初めて将軍の子をみごもったが、不運にも死産であった。するとそれが今参の局の呪咀によるものだ、という噂が立った。重子や富子はこの噂を利用して義政の怒りが爆発し、局をめぐって義政をそそのかし、義政の小説は、ヒロイン日野富子が、間接ながら克明に描写したのは、女流作家の加賀淳子氏「火の女」である。副題にも示すごとく、この小説は、ヒロイン日野富子が怠惰なエゴイスト義政を利用して、自我のおもむくままに権勢をほしいままにし、やがて継嗣問題をめぐって応仁の大乱に突入してゆく姿を描くのであるが、彼女の文字通り火のように激しい性格を浮彫りするためにも、また女から女へと権勢が推移する経緯のわりなさを描くのにも、今参の局の壮絶な自刃のさまが、富子と重子の会話の形式で効果的に配

悲憤の涙を噛みしめて局が輿で近江の国、甲良の庄まで来たとき、追討ちをかけるように、死罪を命ずる将軍の使者が追いついて来た。甲良仏寺に入った局は、

「妾も大館家の娘、女ながら自害くらいできまが、富子と近づくのも押しとどめ、刻をへて絶命したから、そのの涙を誘った。

時に長禄三年正月十九日、ちょうど五百年ほど昔のことで、そのとき局は四十を幾つか出ていたろうか。湖岸を埋めた雪に散りしく紅梅よりも紅に、無念の血汐は局の白絹の肌着に滴々と散りしぶいたことであったろう。

この悲話はさまざまの歴史読物、考証の類に引用されているが、小説として、局をめぐる情勢から説き起し、局の悲愴きわまる最期た。局は北国へ配流の科に処せられたのである。

いでか」

と追手の目前で右手に握った護り刀を腹に刺し、左手で腸をつかみ出して見せた。さすがに見かねた警固の武士が、

「介錯を」

★絹の柔肌を真紅に染めて潔い死を選んだ女丈夫達の凄艶な最期をここに探る！

置されている。

富子の初産は不幸にも死産に終った。重子は転禍為福の詭計を案じて、今参の局の呪咀によるものと将軍に進言し、さらに死罪を陥す。しかしなおあきたりずに与えるように計らう。そしてである。

やがて室町御所に局の幽霊が出るとの流言が世間に拡まり、局を死に至らしめた張本として重子は、不安を感じないではおれない。しかし幽霊を信じない富子は姑にいうのである。

「生霊や幽霊がこの現世にがありません。鬼もいないって、みんな下民たちの心の迷いだと思いいます」

「でも、あの女は人のしな期をとげた。その執念の強いていてはない」

「腹を切って自尽したこと「ただ腹を切っただけではでは、ちょうど唐崎の寺でらしく、右手に持った短刀し、その右手に左手まで添中を掻きむしっていたそうじゃ！」

「よほど口惜しく無念に狂っていたのでしょうか……」

富子は、きたないものを見るように眉をひそめる。

「追手の兵士を見て、あのたをえぐりながら凄い眼でう。お前たち下郎の手に殺ではないっとあの女は叫んそれはその通りだった。をふりしぼって

「われは由緒ある大館家のお前たちに生きてオメオメのホマレをけがしてなるもとわが死にざまを眺めて、にせいっ！」とまた小刀を中に通るまで刺しつらぬいさまじさに討手の将兵は呼いだった。

「あれほどまでに今を時めおかたが……」今参が呼吸してから、しばらくして討手の将はわれにかえって泪を押しぬぐった。

「富子……あの女が幽霊に化けて恨みをのべにくるのも……ありそうに思われるが……」

「そうは思えません。どのような死にざまをしようとも死んだものは死んだもの、ふたたびこの世に形をあらわすわけにはまいりますまい。それよりも今参の幽霊話は誰かのつくりごとにこしらえ話の本元が何者か……私がしらべてみます」

こういう富子の考え方は合理的で、至って情愛に乏しいものを感じさせる。彼女の性格はむしろ常に、強いもの、逞しいもの、権力を持つものへの傾注を呼びさますのである。

今参の局を死に至らしめたとき彼女はまだ大人になり切っていなかった。やがて重子が病死したとき、彼女は再度成人の智慧で今参の局を量る。



自分の胸の底を打ち割って云えば、姑の重子はとうてい今参の局の足もとには及ばない女だった…と富子は思う。わずかの期間に富子が見聞しただけでも、今参の局は義政将軍にとっては頼もしい相談相手だったし、見識をもった後見役だった。

政治向きの難問題にしろ家庭内のことにしろ、また軍事の点についても、すぐれた教養と智慧のひらめきが感じられた。そういう意味では富子は、かすかな羨望と畏敬の念さえ抱いていた。

自分も今参のような女にならなければ……富子が得た教訓はその一事だった。

きっと良人義政のよき伴侶になってみせる！

今参は経済のことについてだけは、しばしばその無智をさらけ出していた。利殖の道では今参にもひけをとらない自信が富子にはあった。生れながらの智慧をそなえていた。

こうした自信が、義政のあとはその弟の義視が嗣ぐと決まったはずの将軍職に、彼女の生んだ義尚をつかせるために、永い戦乱を堵けてまで彼女の意志の貫徹を推進するのである。



ロインである。

戦国のころ、伏見に奈良左近義成という武士があり、京の西の岡に棲む笛の上手、貞光久左衛門尉を師として笛を習っていた。たまたま貞光は妻子ある身をも顧りみず、義成の妹に恋着し、

「妹御を賜わらぬか。現在の妻を離縁しても

そうした自信の裏付けとして彼女には、義政への愛情よりも義尚への母性愛よりも強い執念にも似た権勢欲が作用していたとしか思えない。まことと、火のような女であったがそれだけにまた、たとえてみれば木のような、高く、まっすぐに伸びるだけで、伸びきればやがて思わぬ嵐にポッキリ折れてゆく今参の局の姿が、この作品では余すところなく対比的に素描されているのはさすがである。

2、奈良義成の妹

文字通り美人薄命の言葉を地で行ったような女が、この物語のヒ

末永う添い遂げようと思う」

と、きつい執心ぶりを打明けるに至った。

この妹というのは、容顔たぐいなく、手をよく書き歌の道をも心にかけたとあるから、文字通り才色兼備の女性だったらしい。左近は心の正しい武士であったから、様な不義を企らみ申しては武士の道に外れ申すらず師弟の礼と軽くあしらい、その後も変障りがあってをとっていた。しかし妹に何かせたのであもと、友人の野村高勝と婚約さる。

貞光はこれを怨みに思い、いつかな宿望を遂げたいと希う折しも、永禄二年正月、将軍足利義昭が六条の本国寺へ入ったところを三好笑岸、同じく釣閑斎一統が諸国の浪人を催おし、五千余騎で攻め寄せる事件が起った。左近も寄手の一人であったが、三好義継の軍勢が公方方に来援したため、寄手は打破られ、左近も東寺を指して退いた。

これを見ていた貞光が、返せと追討ちをかけ、左近一人を多勢で取り囲んで討ち果してしまった。こうなると師弟の道もあったものではない。左近も勇戦はしたが、矢で頭を射られ倒れながらに近寄る貞光の膝を薙ぐほどの力闘も、多勢に勝てず、とうとう討死を遂げたのである。

さて貞光はただちに伏見へ向い、左近の妹を捕えて自宅の小屋に連れ帰った。女は、この戦いで兄ばかりか夫と頼む野村越中をも失思う色さえ見せず、

「この上は頼り少ない身、の縁と存じます」

と打ちなびく態に見せ、貞光は喜んだ。貞光は喜んで使いの者を兄と夫を一時に失い、今はとへ持たせてやる。

その文には緑の黒髪を少母への便りを希っに、女の文を親もしばかり切り込め母に先立つ悲しみまと書きつづって当てつつ口の内に、

「南無阿弥陀仏」

を唱へてゐたが、柄頭を腹へ当てると共にそのまゝぐつとのしかゝって心臓を突破つた。

驚いて使いの者が還ってくれば、貞光が喜びのあまり何の用心もなく戯れかかる油断を見すまし、彼女はとびかかりざま脇差を奪い取ると、抜き打ちに憎い男の首を刎ね、返す刃でわれとわが腹をかき切って伏した。

これまた、四百年ほど前の物語である。

前代未聞、女の腹きりけることよ、あたら女性かな、と聞く人みな哀惜してやまなかったという。

直木三十五氏の「本国寺合戦」は、氏が企図した「新作仇討全集」の中でも異彩を放っているが、あらすじは、右の史実に忠実に、小説化したもの、彼女の名の伝わらぬのを惜しみ、仮りにA子、綾子と名付けたところから筆を起している。彼女の自刃の姿を抜き書きしてみよう。久左衛門を刺し殺して怨みをはらし、心おきなく最期を遂げるくだりである。

乱れてゐる髪へ手を当てて直してから、暫く伏見の方へ合掌してゐたが、やがて端座して、腰紐でしっかと雙脚を縛った。さうして、胸をくつろげて、乳の下へ鉾先を当てつつ口の内に、

「南無阿弥陀仏」

と記された綾子が、酔にそのまゝぐつとのしかゝって心臓を突破つた。

人形の如く美しい、とびのあまり何の用心もなくいにまかせて戯れ寄る久左衛門の脇腹を、思見すまし、彼女はとびかかりざま脇差を奪い取ると、抜き打ちに憎い男の首を刎ね、とどめをも刺したの刃でわれとわが腹をかき切って伏した。

これまた、四百年ほど前の物語である。

前代未聞、女の腹きりけることよ、あたら女性かな、と聞く人みな哀惜してやまなかったという。

直木三十五氏の「本国寺合戦」は、氏が企図した「新作仇討全集」の中でも異彩を放っているが、あらすじは、右の史実に忠実に、小説化したもの、彼女の名の伝わらぬのを惜しみ、仮りにA子、綾子と名付けたところから筆を起している。彼女の自刃の姿を抜き書きしてみよう。久左衛門を刺し殺して怨みをはらし、心おきなく最期を遂げるくだりである。

乱れてゐる髪へ手を当てて直してから、暫く伏見の方へ合掌してゐたが、やがて端座して、腰紐でしっかと雙脚を縛った。さうして、胸をくつろげて、乳の下へ鉾先を当てつつ口の内に、

「南無阿弥陀仏」

を唱へてゐたが、柄頭を腹へ当てると共にそのまゝぐつとのしかゝって心臓を突破つた。

驚いて使いの者が還ってくれば、貞光が喜びのあまり何の用心もなく戯れかかる油断を見すまし、彼女はとびかかりざま脇差を奪い取ると、抜き打ちに憎い男の首を刎ね、とどめをも刺したの刃でわれとわが腹をかき切って伏した。

これまた、四百年ほど前の物語である。

前代未聞、女の腹きりけることよ、あたらしてあますところないが、史書には腹かき切

って、とあるのを、心臓を突いたことにしたのはいかがなものか。武士の切腹の悲愴な様相を種々描写してみせた氏にしては、やや安易な描法であったかに見える。

3、溝口与之

大和国柳本の城主、織田下野守信方の家中に溝口七郎衛門という者があった。家中でも美男の噂が高く、中村家から迎えられて溝口七太夫の一人娘与之の養子となったが、たまたま主君信方が駿府御在番の間に奥方と通じ奥方はついに懐妊、内々に流産を計らうに至った。

世間の口に戸は立てられず、醜聞は与之の耳にも入り、心痛した彼女は、一再ならず夫を諫めたが、一向に改心の様子も見えない。この上は主家の疵、生家の恥、二つながら免れがたしと思いつめ、一夜、父の七太夫が碁会所へ出かけた留守に、委細を書き認め、下男に父のもとへ持ちやらせ、夫の帰宅を待った。

やがて七郎右衛門が何気なく戻って来たのを座敷へと行く背後から、懐剣で刺した。彼は脇腹を刺されて倒れながらに、

「おのれ、女め、不義密通でもいたして、だまし討ちを企みおったか」

となじる。与之は涙ながらに今は一家中の不明を嘆じ、

「再三のお諫めもお用いなく、お家もいかが相成るや計り知れませぬ。よって……」

道理千万の言葉に七郎衛門も、

「早う腹切って死ぬべかりし身を延引いたした。早うとどめを」

納得しきった覚悟の声も、もはや自ままの自害は見逃がなっていた。与之は耐えきれず、

「妾も必ずお跡から参りまするほかはない」

と、泣き伏すのだった。

七郎右衛門の悪事を認めた与之の文に、驚いて帰って来た七太夫は、己れの不明を嘆じながらも、自害を願う与之を押し、

「もはや自ままの自害は見逃がは磔と決っているもの。お上のお下知を待つ」

と目付へ訴え出た。駿府表で七太夫の忠勤に免じ、手刃を許下した。しかし、与之は、

「ありがたい思し召し、さりながら、女ながら侍の娘、切腹いたしとう存じます」

そう申し立てて検使を乞うた。

七太夫は万一仕損じもせぬかと危ぶみ、翌朝、身を潔め最期の化粧に鏡に向う与之を、背後から斬ろうと近づくのであった。

与之は早くも察して跳びのき、何ごと、と父に仔細を尋ねれば、父もやむなく胸中を隠さず告げる。聞いて莞爾と打笑んだ彼女は、あり合わせた剃刀で、右の腿にサッと一とすじ、ほとばしる血汐にも顔色も変えなかった。

やがて刻限ともなれば、正副検使、徒目付が着座する用意の部屋に、与之は悪びれもせず入って、下女が差し出す三宝を前に端座した。

その装いは、白無垢二つ重に厚板織の帯を折目高に締め、黒ちりめんに扇子流しの小袖を着し、作法通り諸役人に会釈、押し肌脱いで、白無垢を押し下げ、清らかな肌を従容と撫で下すさまに、哀れさ極まった諸人思わず顔をそむけるのであった。

さて三宝より腹切刀をとり、押しいただくなりただちに腹へ、と見えた時、七太夫が、

「しばらく、……介錯のお方は、いかが？」

と声をかけた。由来切腹は本人より介錯人が大事と口伝されたほどのことで、誰彼と詮議する内に、与之はキッパリと、

「介錯人おわさずとも苦しゅうござらぬ。さらばお暇つかまつりまする」

腹なでおろしざま、刃をズブと左の腹に突立て、臍の真下を深く一文字に掻き切った。

見る者なべて、あなやと嘆ずる間もあらせず石脇で止めた刃をさらに鳩尾に刺し、縦に切下げ、みごとな十文字の切腹である。徒目付の稲葉惣八という者が、与之の髪を前に刎ね介錯したが、やがて、その勇烈を賞され、七太夫の跡目は無事に立ったという。

腹を切った女は決して少くはないが、かくも勇気のある女性は少いようである。

この物語は、小滝操子女史の「をんな物語」にもとり上げられているが、井上民子氏の史伝小説「血汐の花」は、彼女の生涯を詳述している。

ただし、敍述はもっぱら七郎右衛門との愛情や、刃傷前後に詳しく、切腹のことはわずかに、

検視の役人来れば優やかに座に着きて、徐かに腹割きて見事最期を遂げ了んぬ。

とあるのみで、むしろ「をんな物語」の方が、その十文字切腹の壮を詳しく記述している。

4、吉村礼津

元禄年間、武州忍は阿部対馬守正盛の治世であった。

「礼津、このたびの不幸、何とも慰めの言葉とてない、どうぞして其方の家の立つよう、殿にもお願い申したが、法はまげられぬとのお言葉には力もない。頼み甲斐ないあるじと怨むであろうな」

端正なおもざしに涙さえ浮かべて、奥方は礼津の細かく震える肩の辺りを見守った。

「勿体ない、父の不所存は何とお咎めあろうと詮ないこと、ただお側を離れまするのが何よりの歎き……」

礼津も涙声であった。

礼津は不幸な娘であった。十三歳の春、母を病床に失い、嘉六が、一人娘を継母にかけまいとする配慮から後添えを求めなかったから、親一人子一人であった。間もなく奥に仕え、女芸百般の修錬を積む内、奥方の寵を得、小太刀を取っては男まさりと謳われた。

二十一の春、父の嘉六が突然変死した。夜中、腹を切って死んだのである。礼津には養子も定まっていなかったので、嘉六の死は乱心の自害と断定され、礼津も奥から永のお暇となったのである。

二、三日すぎた夜、お側用人、渡辺茂太夫の玄関に礼津は立っていた。

待つほどもなく手燭を取って茂太夫が式台に下り立ったとき、

「ご用、繁多のところを、おじゃまいたしまする」

艶やかな裲襠を装った礼津が口を切った。

「いや、なに、このたびは」

茂太夫が軽く会釈を返して答えた瞬間、

「意趣、覚えたかッ」

花鳥の裲襠が目にも止まらず飜えり、白い光りが春の宵の重い空気を裂いた。

抜き合わすはもとより、かわす間もなかった。茂太夫は呻きとともに崩折れ、二の太刀に胸を貫かれた。

「父の仇、思い知ったるか」

脱ぎ棄てた晴着の袖で刃の血を拭うと、礼津は何ごともなかったように立ち出た。

自首して出た礼津に、目付は同情的であった。彼女を乱心者とし、吟味かなうまじく、と殿に言上するつもりであった。刃傷の事情を察し、孝女を打ち首か縛り首にしてしまうのが哀れと思うのである。しかし、そうした配慮を見抜きながら、礼津は潔く服罪を望ん



順序」見苦しい縛り首より、せめて打ち首に、と目付は思っていたのである。

「よきに計らえ、助命はならぬぞ」

苦りきって正盛は顔をそむけた。

目付の報告に、奥方は考えた末、

「侍なみに切腹を」

驚いたが奥方の命とあって、正盛に伝えると、女だてらに、と憎み深い正盛は、

「それもおもしろかろう」

一日も早く片付けてしまいたい意向であった。礼津は切腹を賜わり、一方、刀も抜き合わさなかった茂太夫の断が渡辺家にも下った。

翌日、目付の邸で早朝から身を潔めた礼津は、駕籠で下屋敷へ送られる時、斬奸状を目付に頼み、殿のお手もとへ差し出した。

時刻が来て、庭上に設けられた切腹の座に礼津は白装束で端座した。下屋敷の留守居役浜田新六郎から、申し渡しを承ると、何のためらいもなく礼津は微笑さえ含んで一礼し、双肌脱いで三宝の腹切刀を取上げた。

その時である。あわただしく駈け込んで来て制する声。

「切腹までッ」

新しい用人安井頼母であった。

「ただ今、ご赦免相成った」
その一言に、居並ぶ人々が息を吐いた。
斬奸状には、茂太夫の私曲を記し、嘉六が清直ゆえに茂太夫にしりぞけられ、養子の申し出でも殿に取次がれず、憂悶の末に憤死した仔細を記してあったのである。正盛ははじめて後悔し、急いで切腹を差止め、家中の宮木三右衛の息勝之助を養子として、吉村家を嗣がすことまで、命じた。礼津は勝之助を後見せよ、との恩命が頼母から伝えられた。
しかし、涙を払って、礼津はいった。
「御恩命ありがたく存じまする。さりながらいったんお仕置仰せ出だされながら変改あるは、殿の御威信にもかかわりまする。御家中の所存もいかがかと存ぜられ、奥方様お情けにて賜りましたる切腹、かたじけなくお受け仕りとうござりまする」
凛然といいきった。頼母は再度馬を駆って正盛に礼津の決心を伝えねばならなかった。
やがてしばらく待つ内に、頼母は勝之助を伴い帰った。妹分の扱いして取らせよ、という主命を奉じ、頼母は彼女の切腹を見届けに帰って来たのである。
礼津は改めて切腹に先立ち盃を乞うた。盃が三宝にのって据えられると、彼女はいつたん肩を入れた白装束を再度押し寛げ、おしいただいた腹切り刀の切先を左脇に当てた。
人々が息を呑む瞬間、刃先は深く刺さり、彼女は噴き出る血汐を盃に受けると、みずから半ばを呑み、勝之助に残りを呑ませ、母子の固めの盃を心おきなく交すのである。
少年が飲みおえるのを見て嬉しげに礼津は最後の礼を誰にともなく頭を下げ、三たび手にした刃を、左手の指の間から疵口深く探り入れ、呻き声を立てじと唇かみしめ、みごとに力まかせの一文字、血汐は白装束に斑々と散った。心ゆくまで腹かき切った刃を抜くと「いざ」最期の合図とともに大刀一閃忠孝両全の礼津の一生は短かく潔く終った。
この壮烈にして清純な娘は、しばしば作品化された。史伝、随筆の類いまでは

5、前田節子

浅野吉長の室は前田綱紀の娘、節子といい生来文筆に優れ馬術長刀に長じ、召仕う侍女もまた皆、武芸の嗜みがあった。また至って夫婦仲もよく、一男一女を得た。ところが吉長が新吉原に通いはじめ、酒色に溺れるに及び、奥方がしばしば諫めたけれども放蕩やまず、花紫、歌野の二遊女を落籍、さらには芝神明の少年二人まで召抱え、帰国に際し引連れようとした。

奥方もさすがに、上の聞えよろしからずと強く諫めたので、かえって吉長は夫人に何の挨拶もなく女や少年に美々しく旅装させて発駕してしまった。ひそかに物見からこの様子を見て取った奥方は、

「かほどの御乱行を諫める者とて一人も家中にはないか。さりとてあまりなお仕打、わが一命もはやこれまで」

と、その夜居間に入り、弟の前田吉徳へ仔細の書きおき認めたのち、腹一文字にかき切り、白綾の肌着を朱に染めて俯伏した。

気配に驚いた女中どもが仰天し狼狽する中に、局の外山、沢井、中老の豊田は奥方を抱え起し、医者よ薬よといいさわぐ。

しかし奥方は気丈にも、

「日ごろほどにもない、切腹する身が助かるような切り方はせぬわ。かねて覚悟のことゆえ、騒ぐでない、豊田、介錯を」

キッパリいいきった。やがて

「是非もございませぬ、こうまでの上は、われら三人、追腹を仕りまする」

と言上すれば、奥方は聞えて、和子の行末を

「殉死は天下の法度、ましてや

頼む」

と拒んだ。しかし女たちは口をそろえて、

「たとえ御勘気こうむりましょうとも、お供つかまつりまする、お許しを」

いっかな聞き入れない。

「めがね通りの忠心、嬉しい志よ、されば外山、沢井は供いたせ。豊田は跡をおさめ、三命ぜられ、即夜、人知れず、並んで端座し、拝領の短刀で鳩尾を刺し、一方、九寸五分を左脇腹に突立てた美少年とともに、藩主の介錯で散ってゆく、哀恋物語である。

畠山勇子を扱った小説、史伝の類や、また大東亜戦争中に、夫君をして後顧の憂いなからしめんと自刃された鷹林花代夫人の生涯を記した竹田敏彦氏の「みたての花」などはあまりにも年代が近いので、不日また稿を改めて触れることにしたい。

豊田に至っては、腹を切ったものか、咽喉を突いたのかさえつまびらかではない。しかし女ばかりの主従が並んで切腹したというのは史上にも稀有の例であろう。

村上元三氏の「加賀騒動」は有名な大槻伝蔵の生涯を描いた名作であるが、その中に女腹切の一節を設けてある。しかし記述はきわめて簡略である。むしろ歴史読物として三田村鳶魚氏の大名の女腹切の方が詳しいかも知れない。

敍上のほか、史実に取材したものとして、赤木春之氏の「不義」がある。これは長岡藩の家老の家に事実起った物語というが、会津藩との説もある。これは、小姓とひそかに通じた藩主の愛妾が、こと露われて共に自刃を命ぜられ、即夜、人知れず、並んで端座し、拝領の短刀で鳩尾を刺し、一方、九寸五分を左脇腹に突立てた美少年とともに、藩主の介錯で散ってゆく、哀恋物語である。

畠山勇子を扱った小説、史伝の類や、また大東亜戦争中に、夫君をして後顧の憂いなからしめんと自刃された鷹林花代夫人の生涯を記した竹田敏彦氏の「みたての花」などはあまりにも年代が近いので、不日また稿を改めて触れることにしたい。

足のしもべ

牧戸信雄　美濃村泉・え

むっちりとみのった女の足に踏まれる陶酔が私を支配した！

1

私がおんなの足というものにたいして、とくべつの関心と執着をいだくようになったのは、まだ母親の手にひかれてあるいているおさないころからだったと思いますす。それから五十をすぎる初老のこんにちまで、めんめんとしておなじおもいにさいなまれつづけているのですから、いわば私の一生はおんなの足に憑かれた男の、あわれなドレイの境涯だった、ということができるでしょう。

私が、おんなの足にたいして、とくべつな目をひらかされたのはいまもいったようにまだおさない日の、ある一日のことでした。

その日、私はうちの者につれられてある遊園地にあそびにゆき、そこでうまれてはじめて少女歌劇というものを見たのです。

その遊園地は、戦後は競輪場としてすっかり有名になってしまいましたが、競輪というもののなかった戦争まえのころは、いまの後楽園なんかよりもっとおくゆきのふかい、小高い自然の山や樹立ちをもった立体的な遊園地として知られており、ジェット・コースターのような新しい設備こそはありませんでしたが、回転木馬のようなものをはじめ、童心をかきたてるありとあらゆる乗物、お化けやしき、ボート遊び、樹立のあいだをぬい、斜面を下っている五十米もあろうかと思われる「大山すべり」と呼ばれる大すべり台。それに天文館のようなものまでが、広大な地域に配置されていて、それはその中にいったん迷いこんだら最後、極彩色の迷路に閉じこめられたように、出口さえわからなくなってしまうメルヒェンのジャングルだったのです。

子供にかこつけて、大人もけっこうそうした遊びをたのしんでいたようで、あとになってかんがえると、アベックもなかなかすくなくなかったようです。園内のところどころに生い茂った林や、池の端のベンチや、スワン形のボートでゆける島かげや暗いお化けやしきの中は、そのときの私にはわからなかったのですが、そうしたアベックの群にとってはある性的な意味をもっていたのかもしれません。

さて、この遊園地には劇場の設備があって、専属の歌劇団の出演する少女歌劇が、一日に何回か、時間を切って上演されていました。だし物は舌切雀とか、せいぜい子供むきの内容のものですが、それをやるのは立派に成熟した娘たちでしたから、これは大人たち



にとっても、充分に観賞にあたいするものだったにちがいありません。

「さあ、そろそろ少女歌劇がはじまる時間だから、行って見ようかね」

といい出すのは大人で、大人としては、子供にひっぱり回されて園内を遊びあるくことに疲労と倦怠をおぼえたうえでの、気分転換兼足休めの意味をもっていたのかも知れません。正直のはなし、演じられている内容はお伽話的なものであっても、歌と踊りによってつなぎあわされている劇の進展を

じっとながい時間にわたって追っていることは子供にとってはあまり楽しいことではなく、すぐ活動的な戸外に出たくなってしまうのです。

ただ、黒々とひしめいている観客たちの後姿のシルエットや、その向うにカッとあかるく見えている舞台、そして、きらびやかな衣裳の踊り子たちの動き、そうしたもののかもしだす、へんに錯覚的なふんいきが、子供心にめずらしいといえばめずらしかったのです。

それでも私は、家族のものたち

にはさまれ、座席から立ちあがって、じっと劇の展開を追っていました。はじめは私は、舞台の上で劇を演じている女たちが、子供か大人かわからなかったのです。というのは、客席と舞台との距離感がぴんとこないので、舞台の上の女たちの姿がひどく小さいものに見えた上に出演者が子供の役をしていたりすると、ほんとに子供くらいの大きさにしか見えなかったのです。

そのときは「舌切雀」のような昔の童話ではなく、なにか喜劇風な現代劇をやっていて膝までしかない紺ガスリの着物の裾から二本のスネをつきだし、ズックの学校カバンを肩から下げた小学生の男の子が舞台に登場して、脳天から絞りだすような不自然なきいろい声で、なにかしゃべっていました当時の、田舎の小学生風俗をしたその「男の子」を、私はふしぎな、あいまいな気持で眺めていました。その小学生に扮している人間の性別、それに年令が子供心にもピンとこないのです。

「男の子かなあ。それとも……」

私は、ほっぺたに両方ともリンゴのように赤い丸をつけた、おどけたその顔をながめながら、考えるのでした。

しかし、子供心にも、一種の性的な嗅覚ははたらくものです。私はまもなく、その小学生の男の子に扮しているのが女、しかも、大人の女であることに、おぼろに気づいたのです。ひとつは、その不自然なつくり声、もうひとつは、紺ガスリの裾からつき出している二本の足からでした。その、肉づきのいい二本の足は、決して子供のものでもなく、そして男の子のものでもない一種のふてぶてしさとなまめきを持っていることに、私は気がついたのです。

だいいち、その小学生の男の子と、いっしょに登場しているお爺さん役が、身長が同じなのでした。そして、女が男を演じるときのあの不自然なつくり声——そのために、かえって女である生理を強調する結果になってしまうそのつくり声の秘密を、少年の私は嗅ぎあてていたのです。そして、なまなましい肉感をムキだしにして紺カスリの裾からつき出ている二本の足の映像は、異様な鮮烈さで私の柔軟な心のフイルムにやきつけられたのです。扮装やつくり声にだまされることから脱けだしてその「中味」を発見したおどろき。それは男装の女の偽瞞をひきはぎ、ひきすえようとする男の残忍なよろこびにも似かよったある秘密っぽい戦慄を、おさない私の心につたえたのです。

じっと舞台に眼を注いでいる私を、家族のものが思いだしたように見かえって、

「どう？　おもしろい？」

とたずねたとき、私は、

「うん」

と、気がなさそうな返事をしたのですが、ふとそうした自分の返事の中に、へんに秘密っぽい作為がかげっているのを感じて、子供心ながら、なんとなくうしろめたい思いになるのでした。このときすでに「足に憑かれた男」の宿命はめばえつつあったのです。

2

それは、私が中学四年くらいのある日のことでした。ちょうど学期末の試験がちかづいていたので私は両親の許しを得て、友人の家に泊りがけで勉強にいったのです。

私と友人は、勉強部屋にこもったまま、しばらくは神妙にノートなどをひろげていましたが、そのうちそれにも倦んで、どちらからともなく、

「あーあ」

あくびと共に畳の上にひっくりかえってしまったのです。

そのうち友人が、

「おい、いいものをやろうか」

いいながら、本箱の隅からだい

じそうに取り出したのは、十本入りのチェリーの箱です。当時チェリーは一箱十銭であり、七銭のバットにくらべると、やや高級な部類のタバコだったのです。

「へえ、すげえなあ」

私はいいながら、すすめられるままに一本とって、それに火をつけます。

ふたりはしばらくのあいだ、ひっくりかえったまま、黙々とタバコのけむりを天井に吹きあげていました。そうやって、ひそかな悪のたのしみに身をゆだねていますと、しだいに奔放な思念が、波のように全身をひたしてくるのです。ふたりは小悪魔のように、目をギラギラ光らせながら、そうした思念を追っていましたが、そのあげくのはてに、陥ちこむところといえば、セックスに対する身をやくような憧憬と、どうにもならない欲求不満の袋小路にほかならなかったのです。むろん、そのとき私たちはすでに自分ひとりで楽しむ習慣を身につけてはいましたが……

試験勉強という大っぴらな名目があるのでいわばその部屋は治外法権のようなもので、時おり友人の母親が、襖の外まで来て、

「貞夫。お茶が入ってるよ」

と声をかけたりするほかは、なんの妨害も入りません。淫らで放縦な気分の充溢をさまたげるものは何もなかったのです。もし、そこに突然誰かが足を踏みこんだとしたら、そこにたちこめた背徳のたのしみに身をゆだねていますと、しだいに奔放な思念が、波のように全身をひたしてくるのです。ふたりは小悪魔のように、目をギラギラ光らせながら、そうした思念を追っていましたが、そのあげくのはてに、陥ちこむところといえば、セックスに対する身をやくような憧憬と、どうにもならない欲求不満の袋小路にほかならなかったのです。むろん、そのとき私たちはすでに自分ひとりで楽しむ習慣を身につけてはいましたが……

試験勉強という大っぴらな名目があるのでいわばその部屋は治外法権のようなもので、時おり友人の母親が、襖の外まで来て、

「貞夫。お茶が入ってるよ」

と声をかけたりするほかは、なんの妨害も入りません。淫らで放縦な気分の充溢をさまたげるものは何もなかったのです。もし、そこに突然誰かが足を踏みこんだとしたら、そこにたちこめた背徳の匂い濃い空気に思わずむせかえってしまったにちがいないのです。

ところが、とんだ伏兵があったのです。

「あっ」

といって、私と友人がタバコを消してからだを起すまもなく、いきなり部屋の襖があいて誰かがいきおいよく入ってきました。

「あっ、お前！」

それは女学校の三年生になる、友人の妹でした。

彼女は学校から帰って来たばかりのところらしく、私たちによってその部屋が占領されていることを知らないで入ってきたのです。

こっちでおどろいた以上に、向うでもおどろいたようです。もうもうと立ちこめる煙や、澱んだような熱っぽい部屋の中の空気、それに寝そべった私たちの肢態などから、彼女は本能的にある悪徳の匂いを嗅ぎつけたらしく、

「あ」

声をのんで、一瞬停立するようでした。

それから、しばらく気味わるそうにジロジロ部屋の中を見まわしていましたが、

「フケツよ。この部屋の空気！」

「てやがんでえ」

友人は偽悪的にひらきなおってわざとタバコのけむりをふうっと大げさに吹きあげてみせます。

「兄さんの不良。いいわ、お母さんにいいつけてやるから」

彼女はギラギラ光る目で兄をニラみつけながら、そういいます。その、憎悪ともつかない妖しい眼の光りをうつくしいものに思いながら、私はじっと兄妹のやりとりを見まもります。

私の友人は、ふだんならそうした場合、おそらく妹に対し、

「ないしょだぜ。たのむよ」

ひらあやまりにあやまってしまったにちがいないのですが、私がいたことによって、兄たる者の威厳を誇示しようとでもしたのでしょう。

「ああ、いいつけてみろってんだ。勝手にいいつけなさいよって。そのかわり、おめえがF中からレターをもらって返事を出したことだって、俺アバラしてやるぜ。え、おい、不良はおめえじゃねえかよ」

そのコトバをきいたとたん、彼女の表情がひっぱたかれたように硬直したのを私は見たのです。

友人のそのひとことは、たしかに彼女のハートをグサリと一突き

したようでした。彼女はそのままコトバを失うと、本箱のそばに行って必要なものをひったくるようにして取り、それからギラギラする眼で兄をニラみつけながら、背中で壁をつたって、じりじりと出口のほうへ後退してゆきます。まるで、ちょっとでも油断したらとびつかれる、猛獣の檻の中からにげ出そうとでもしているようでした。

それから、もうひとこと、

「兄さんの不良！」

ちいさい声で、投げつけるようにさけぶと、さっと身をひるがえして部屋を出ていってしまったのです。

「だいじょうぶかい？　君」

私は友人を見かえりました。彼女が、やっぱりそのことを、母親につげ口するのではないかという不安があったのです。しかし友人は心得ている風で、

「大丈夫さ。ゼッタイいいっこないよ。だってこっちだってヤツの弱味をニギっているんだものな」

ニヤリと唇を歪めて、

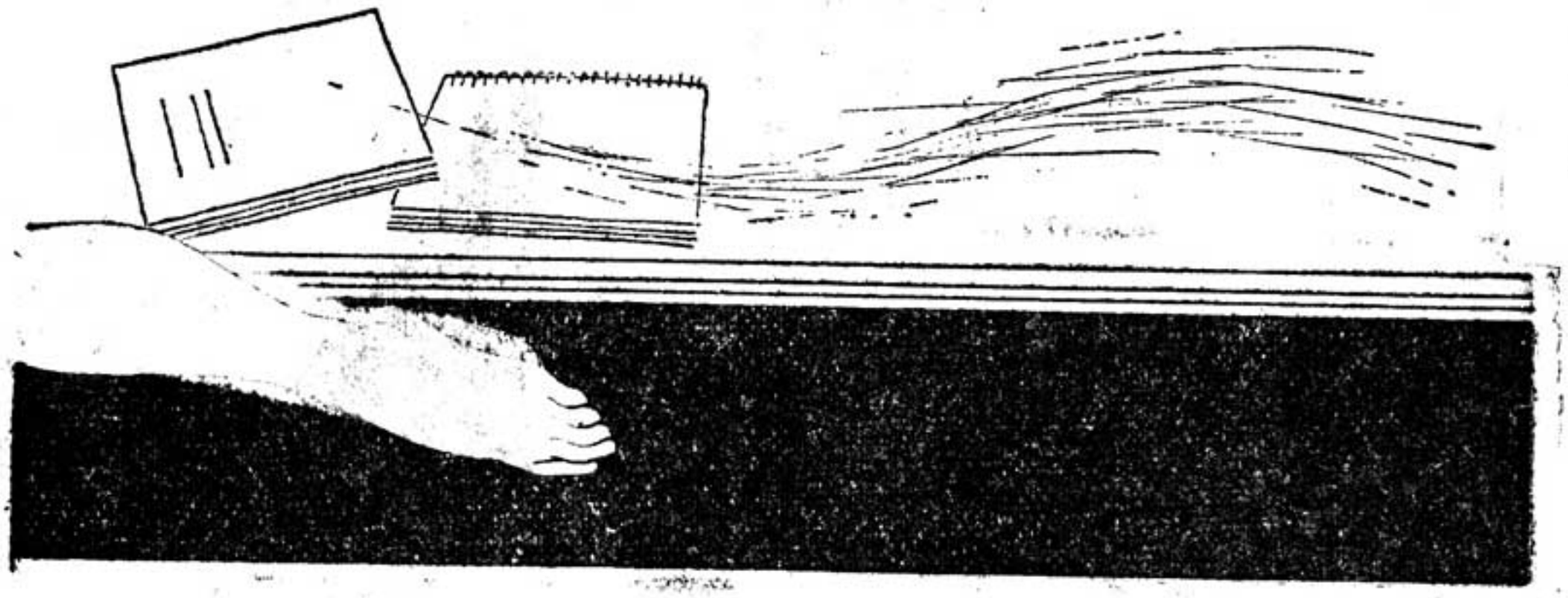
「あいつ、色気づいてやがるんだ。いつか脱ぎわすれてあるパンツを見ちゃったんだ。そしたら。……」

さりげない友人のそうした言葉は、私をハッとさせるに十分でした。女のきょうだいもない私には若い娘の生理を、そうした角度からのぞく機会はなかったので、友人の立場がひどく羨しいような気がするのでした。その晩、友人とならんで寝床に入り、電気を消してからも、私はしばらくねつかれませんでした。友人の妹の、あのギラギラと熱っぽく光る目や、大きく波うっている胸のふくらみや、スカートの下からのぞいていた、肉づきのいい張りきった足などが瞼のうらに残っています。

そうかと思うと、

「見ちゃったんだ。そしたら…」

という友人の言葉が、ささやくように耳もとに聞えてきたりするのです。



正直のはなし、私は例の手の誘惑とたたかうのに、ほとんど必死の思いをしなければなりませんでした。ふだんなら、とっくのむかしにその誘惑に負けていたはずです。ところがその時に限って、辛うじてもちこたえたというのは、

「がまんしろ。いまは試験前なんだぞ」

という必死の自制と、寝ているのが自分の寝床ではなく、友人の家で泊っているのだというこだわりのためでした。そうして、いつかたたかいつかれて、泥のようなねむりの底におちていったのです。

どのくらいねむったのか——私はふと、自分の夜具の裾を踏むらしい誰かの足の感触でふと目をさましました。見ると、しめきったカーテンの隙間からいぶし銀いろの光線が忍びこみ、室内をうすぼんやりとした明るさの中に照らし出しています。そして私の視線は

その室内の一隅、私の夜具の裾のところに、うごめいている人影を発見したのです。

「彼女だな」

と、私は思いだしました。和服仕立てのネルの寝巻を着た彼女は私の夜具の裾ぎわの壁つきに置いてある自分の本箱のところで、しきりに何か探しものをしているのです。おそらく、寝起きに勉強をしようと思い、必要な参考書の類を探しに来たらしいのですが、それがなかなか見つからない様子なのです。



私は、彼女にさとられないように寝たふりをよそおったまま、うす目をひらいて、じっと彼女の動作を観察しました。

そういうと、いかにも私が冷静に眼をはたらかせていたようにきこえますが、じっさいには私は、すでに恍惚として我をわすれかけていたのです。

彼女が本箱について少しずつかで、その裾を踏まずに行動することは不可能だったのです。

彼女の足の位置が変るたびに、その体重がこころよく夜具の上からのしかかってくるのです。むろん、彼女は夜具の下にかくれている私の足を踏まないよう、用心しながら行動しているので、私はその体重をまともに支えることはありませんでした。それにもかかわらず、彼女の足が、ほとんど私の足とスレスレのところを踏んでくるので、それは夜具を通して間接的な圧迫となってふんわり私の足



を押してくるのです。
「あの足が、踏んでいるのだ」
私は、うっとりとそう思いました。すると彼女をうす目でぬすみ見ているその視線はしだいにぼやけ、全身は触感だけになってしまうのです。
「あっ」
私は思わず、歓喜のさけびをあげそうになりました。なにかのはずみに、彼女の足がまともに私の足を踏んでしまったのです。
彼女はビクッとして、すぐ足の位置をかえそれから私の様子をうかがう気配でした。が、私は踏まれた足はそのままに、タヌキねいりをしたまま、寝息さえ乱そうとしませんでした。
それを見て彼女は安心した様子で、また探し物に熱中します。
その当座はきわめて注意ぶかく私の足を踏むことをさけているのですが、またどうかしたはずみにほんの少しばかり、私の足のはじっこを踏んでしまうのです。
足のはじっこを、小さくかじるように踏まれたとき、その痛みは鋭く快く私の全身をつきぬけました。踏んでいる御当人は、それに気がつかないのです。しかし、私は、気が遠くなるような陶酔の中で、
「踏んでくれ。もっと強く、もっと長く！」
と、さけんでいたのです。
彼女がそうやって探しものをしていた時間は、四、五分くらいなものだったでしょう。しかし私にとってはそれは、無限にながい時間のようにも、また、あまりにもあっけない一瞬間のようにも思われました。あるいは強く、そしてあるいは弱く、夜具を距てて圧してくるその重量の微妙な変化は、まるで絶妙な音楽のようでした。
それはリズミカルな「むぎふみ」の動作のようでした。私はたかぶる呼吸をおさえ、ともすればさけびだしそうになるのをこらえこらえてじっとその「むぎふみ」に身をゆだねていたのです。
突然、夜具の上からすうっと圧迫がのぞかれました。
「終ったな」
と私は思いました。気の遠くなるようにはるかなたのしい「むぎふみ」の行程が終ったのです。
「さようなら」
私は目をとじたまま、無限の哀惜をこめて、去ってゆく足に呼びかけました。やがて、すうっと襖の開閉する音がきこえて、彼女は部屋の外へ出ていったのです。
若いピチピチした生命力にあふれた足に踏まれているあいだの気の遠くなるような陶酔感にくらべそのあとの空虚さときたら、まるで暗い穴底にでもひっぱりこまれるようでした。
「あーあ」
じいんとまだ鳴っている足をもてあましながら私がタメ息をついているとき、奇蹟が起ったのです。またしても、忘れ物があったのでしょう。しのびやかに襖があいて、彼女がひっかえしてきたのです。
私の足は、そして全身はふたたび踏まれることを期待して、あまく熟れたようになってしまいます。はたせるかな、じわりとなつかしいあの感触です。こんどの探しものはほとんど一瞬に終ったのですが、反復して加えられたその甘美な最後の一撃は、ついに私を崩してしまったのです。
「しまった！」
ギリギリに耐えた生理の糸が、その緊張の頂点で
——プッツン！——
と音を立てて断れはじけそれが熱湯となってたばしるのを感じながら、うろたえた私の視線は、襖の外に消えてゆく白い足のひらめきをチラととらえていたのです。

3

こうした年少時のこのみや傾向は、年をかさねるに従って消えるか、消えないまでも潜在化してゆ

く場合が多いと思われるのですがさきにも述べたように、私の場合はなんの因果かますます強い性癖となって執着し、露骨化していったのです。

青年時代になってからも、私はたとえば街を歩いていて、美しい足の女を見かけると、フラフラとして前後をわすれ、そのあとをついていったりすることがチョイチョイありました。むろん、ついていって、どうしようというのではありません。美しい花をめでる気持といっては嘘になりますが、要するに憑かれたような状態であって、その美しさにたんのうし、倦きるまでは、どんらんに眺めつくしてやまないのです。

いちどなどは、そのために痴漢とまちがえられ、あやうく交番につき出されかけたこともあるのですが、私に限って、そうした危険性はぜったいにないのです。知らない女に対してはあくまで、私の場合は観賞という態度に徹していて、指いっぽん触れる気づかいはなかったのですから、……もっとも、金で買った女とか、妻とか、ある程度自分の自由になる相手の場合は別ですが……

私の足の好みについていえば、それはむろん年齢と共にいくらかずつ変化してはいましたが、すんなりと伸びた、しなやかで高貴な感じのする足もむろん結構なのですが、ほんとうのところは、もっと荒くれた女の足が私は好きでした。肌などもいくらか荒れ気味で陽にもやけており、脛のところにブツッと大きな吹出物が一つ出ているといった感じの、たくましくて生活力の強そうな足です。そんな足を見ていると、しみじみとあきない生活的な色気があって、

「ほんとにいいなあ」

と思い、うやうやしくその足下にひざまずき、頬ずりしたり、接吻したいと思うのでした。それは例の「むぎふみ」の要領で、心ゆくまで踏まれてみたいという願望にも通じていたのです。

私は何回か妻も持ったのですがいずれもそうした私の足への極端な執着のために長くはつづきませんでした。私にとって、極端ないい方をすれば、女とはそもそも足そのものだったのです。こうなると、顔とか心なんかはどうでもよくなってくる。足の相が問題なのです。街でひろった行きずりの春婦でさえ、私のねぶるようにねっとりした足の玩賞ぶりに接すると途中で、

「きゃっ」

といって、足をスカートの中にひっこめてしまうのです。まるで裸の貝の肉が、なにかにおそれてキュッと貝がらの中に身をちぢめてしまうように……ずいぶん、職業がらいかがわしい好みの客にも接しつけている彼女たちにしてからがそうなのですから、ふつうの女性はなおさらです。

「なめさせてくれ」

くらいまではまだよいのですがその足で俺の顔を踏んでくれの、顔の上に腰かけてくれのという注文を出すに及んでは、さすがに気味悪がるというふうで夫婦生活もながくはつづかなかったのです。

そんな私が、五十をすぎてから三十くらいも年下の「みや子」を自分のものにできたのですから、その執着のほども察しられようというものです。

みや子はあらゆる意味で、私の希望する条件を充す女でした。第一に、その足において。第二に、その足を、惜しみなく私にあたえ得る神経の太さにおいて……

信州の高校を出てまもなく上京東京でB・Gになったみや子は、信州の乙女らしい荒削りで野性的な面を多分にまだ持っており、それが上京後身につけた東京風と、ごく無秩序に雑居しているような感じの女の子でした。

ナイロンのストッキングなどをはいてはいますが、その足は骨組みもしっかりしている上に肉づき

もよく、いかにも見ていて安心できる感じでした。靴も女の子としては大きいのをはくほうで、はだしになると、肉づきのいい五本の足指がみっちりならんでいて安定感があり、ムッとくるような野性的な色気がありました。そして、それにふさわしい、大ざっぱな気性をもっていたのです。

私はあるちっぽけなインチキ会社に入社し、そこで経理係をしていたみや子とはじめて知ったのです。

その会社は「ガリ球」という変な名前の、ニンニクを主成分とした錠剤の強壮薬を卸している会社でした。むろん、名の通った会社の製品ではなく、宣伝らしい宣伝をするわけでもありませんから、新聞で募集した外務員を使っては行商の要領で売込みに歩かせ、それが主な販路になっていました。むろん、外務員はわずかの交通費をのぞいては固定給らしいものの支給もなく、もっぱら収入といえば、ガリ球を売った売上の歩合に限られていたのです。

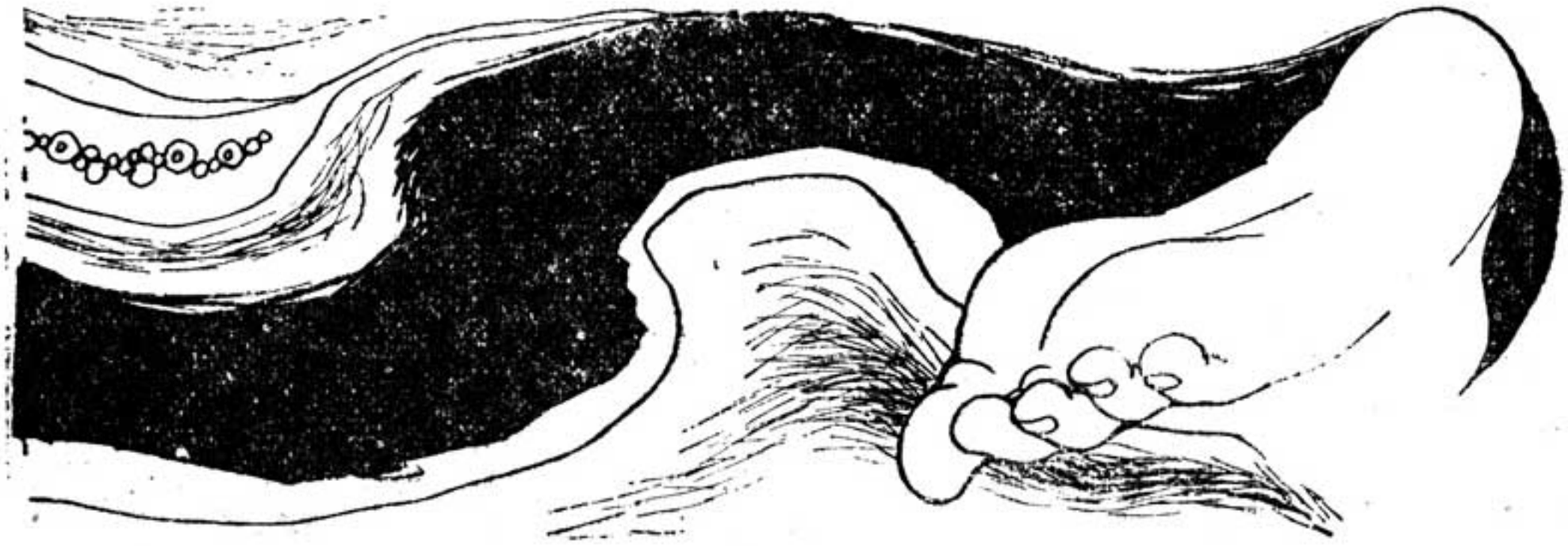
私はある相互銀行の、小口の掛金の集金係をやっていたのですがちょっと金銭上の問題でそこをやめなければならなくなり、三ヵ月ほど浪人したあげく、そのガリ球を扱っているK商事に新聞広告で入ったのです。むろん、たいした職場ではないことは、さいしょからわかっていたのですが、五十をすぎた男などをオイソレと雇ってくれるところもなく、従って年齢を制限していないK商事のようなところしかもぐりこむところはなかったのです。それにニンニクを固めた錠剤というのが、強壮剤ばやりの昨今に向いているのではないかというような、漠然とした期待もあったのでした。

さてK商事とはいっても、社長とみや子を除いては、いずれもアブレ者みたいな、新聞募集の外務員ばかりです。その中でも私は最年長で、しかも年よりは老けて六十才ぐらいに見えたので、もはやこの世の員数外といった感じでした。そんな私が、どうしてみや子と結ばれたかというと、それにはこんないきさつがあったのです。

ある時、社員慰労の意味で、湯河原温泉に一泊旅行にゆくことになりました。社長にみや子、それに外務員十名ばかりをまじえた一行です。

当日になると一同はガヤガヤいいながら湯河原に出かけてゆきます。みや子はさしあたり紅一点というところです。さして美しいというのではなし、いかにも陽の当らないそんなインチキ会社の事務員にふさわしい目立たない女の子ですが、一行中でたった一人の女性ということになれば、また事情は別でした。もっとも私は、長年の経験から、みや子のようにあまり人がふりむかないところにこそおいしい肉がかくされていることを、知っていましたが……

先方につくと、すぐ酒宴にな





呆

る。やがて一座は酔いくずれます。ふだん、あまりたのしみにめぐまれない下積みの外交員ですから崩れたとなるととめどがない。やがて宴会はおひらきになり、寝る者は寝る、麻雀組は麻雀となりましたが、さて、男連中は雑魚寝でいいとして問題はみや子です。雑魚寝もいいが、その晩の酔い崩れた座敷の情況は、とても男十人の中に女一人でまぎれて寝るのを許すようなものではありません。まかりまちがえば、酔った誰かがみや子の寝床にはいこみかねない収拾すべからざる無政府状態です。

困った社長が、帳場と交渉したあげく、四畳半を一間、空けて貰うことになり、そこにみや子を寝かせることになりました。

ところが、みや子がその部屋で寝てまもなく、

「きゃっ」

といって、みんなのいる座敷へ寝巻のまま逃げて来ました。一行の中の一人が、またしてもそこへ忍んでいったのです。なにしろ、酔っているから、始末におえません。

手をいいました。

「Oさん。今晩は彼女と一つ部屋で寝てください。要するに貞操のというわけですな。ぼくがやってもいいんだが、誤解があってはいけないから」

なるほど、社長というのはまだ四十そこそこだから、それは無理かも知れません。つまり、その役目を私がいいつかったのは、すでに私が男性とは見なされない年齢に達しているという判定だったの

です。私もみや子も、そして一同も、社長のその措置を了承したのでした。

その晩のなりゆきは、まったく魔がさしたというほかはありません。私は社長の、そして一同の信託を裏切ってしまったのです。その動機としては、たぶん、自分が男性あつかいされなかったことへの、無言のレジスタンスがはたらいていたのかも知れません。が、それにもまして意外だったのは、その晩のみや子の態度でした。彼女にあっては、野性と都会性が同居しているように、処女性と娼婦性が奇妙な風に同居していました。そして、その娼婦の泥沼に、私はズルズルと足を突っこんでしまったのです。その晩、みや子がさして抵抗もなく、むしろすすんでそうなった原因としては、温泉場の特殊なふんいきとが、父性コンプレックス（彼女は小さい時から両親ともなかった）とか、要するにいろいろな因子がはたらいていたにちがいありませんが、私はやはり、事がらをそこにみちびいていった、私の老年の狡智を認めないわけにはいかないのです。（私は老後の孤独の淋しさを彼女に訴え、もし老年を慰めてくれる者があれば若干の財産や保険金をあげて提供するつもりであることを巧妙ないい回しでいった。そして、彼女は少なからず、それに動かされた）

あくる朝、それからその後をふくめて、彼女が例の一件に関し、連中に対し口を拭ったように知らん顔をしている、その仮面の完璧さについては、私は感心のあまり空恐ろしいような気持にさえされたものです。そしてそれからも、二人はしめし合せては、外でちょいちょい逢うようになりましたが

そうしたことを重ねるうちに、この一対の奇妙な男女における優位は転倒して、彼女はまったく私の上に君臨し、そして私はその頤使に甘んずるようになったのです。それはもともと私の好むところでいわばなるようになったまでの話でした。同時に私は、そろそろと用心深く、例のクセを出しはじめ彼女の様子をうかがっていまし

奴に復讐する最上のやり方は，奴の大嫌いなネズミを使うことだ！

また、悲鳴をあげやがった。まるで胃の腑の底から、ぶくぶくふくれ上って、ガッとほとばしり出たようなやつだった。どうも俺には、がまんのならねえやつだ。

「止してくれ。なあ、止してくれよ。ハリイ……」と俺はいった。

「お前さん、ねずみをおどかしたいんじゃねえだろうな」

奴は、しかし、止めるどころか、もっと大きな声を出した。しばられた両手の指が、椅子の背中をにぎっていやがる。ふとっちょの身体をぶるぶるさせ、綱を引っぱれるだけひっぱって、なんとか俺の方へ身体を傾けようと一生懸命だ。脚を縮める。膝を持ち上げる。身体をゆすぶる。

苦しまぎれの気色のわるい表情で、俺の方に目くばせをしたので奴が目をこらしている方をふり向いた。するとそこに、最初のやつがいた。

小さな怪物だった。小型ギロチンの刃のような鋭い歯をむき出し

た。

稀有なことには、彼女は私の足に対する異常なまでの執着と玩弄癖を他の女のようにはイヤがらず、かえって逆手としてそれを効果的に駆使することを、おぼえはじめているようでした。

たとえば、自分でなにか欲しいものがあったりすると、彼女はそれを私にねだり、その代償として

「ホラ、じじい！　これが欲しくないの。これが……」

いいながら、スカートのはしを指先でちょっとつまみ、まるで貴重なものをひけらかすように、それを少しずつ持ちあげてゆくのでした。それは、飢えた犬に投げあたえられる甘美な一片の肉でした。だが、私はそれでよかったのです。しだいに露出面をましてゆくみや子の脚に頬をすりよせ、なつかしいふとももの匂いにむせながら、私は恍惚としてつぶやくのです。

「む、ぎ、ふ、み……」と——。

「ていた。まるい、憎々しげな赤い目が、暗闇の中で燃えるような、奴らの誘い声が迫ってくる。

「リュウ、追っ払ってくれ！　そ、そこにいる。悪感が走った。怖しい死が、そこにいる。リュウ、見えるんだ。俺には見えてるんだ。そこに！」

そういって絶叫したかと思うと、奴は子供のように泣きじゃくっていた。ふとっちょの身体がふるえながら、椅子の中でちぢこまっている。涙が、はれ上ったまぶたの間から止めどもなくにじみ出て、頬から口の隅へしたたり落ちている。

「や、やつらは来るんだ。ハリイ」と俺はいった。やつらは、そこへ、うしろへ——椅子の中のふとっちょの方へ、迫ってきていた。いまや、俺がやらなければならないこととといえば、たった一つ、やつらが恐れている電灯を消してやることだけだった。

ネズミぎらい

RAT HATER

ハーラン・エリスン



以下，詳しくは久保書店発行のマンハント7月号を！　価150 〒12

三四郎草紙

顔の三つある侍

一夜明ければだれも彼を知らなかった。三四郎は白昼夢の中でおのれを探し求めた！

島本春雄
山田彬弘・画



一、恐怖の夢

暗かった。まるで地獄の底を覗いたような墨一色の闇である。

しかし——

奇妙なことに、その無明幽寂の闇の中に立っている溝渕九十郎の姿は、まるで舞台の役者を見るように、くっきりと鮮明であった。

いま、役者といった。

そうだ。九十郎が役者なら、まちがいなく敵役——それも、こけおどかしな見かけだけの敵役でなく、美貌で頭のきれもよく、弁も腕もたつ、白面鬼——つまり座頭役の敵役である。

その溝渕九十郎は、燕切りと名づ



ちにけた二尺八寸の業物を水月のかた
（危ない）
と、おれは思った。
大道寺道場の同門で、九十郎の難剣は身に泌み
てわきまえている。
水月の構え……
このあとに来るものは、避けるに難く、受けるに手なき必殺
の妖刀、大道寺派極意の地獄袈裟――大道寺鉄心斎老いて、その
進退意のごとくならぬ現在、溝渕九十郎ただ一人が自在にこなす恐怖
の一閃であることを、おれは知っていた。
呼吸がつまった。
溝渕九十郎に対峙して、青眼に構えている男、かれの地
獄刀が狙っている相手……それは、ほかならぬ、このおれ
神保三四郎だったからである。
死は瞬後であった。
人斬り庖丁を腰にしてはいても、おれは人を斬った経験
がなかったし、関宿の大道寺道場では、いつも九十郎のい
いおもちゃであった。
剣を執って対峙したのでは、問題にならなかった。
（――斬られる）
と、自覚しても、しかし、さて、不思議と恐怖の感じは
なかった。
おれは考えていた。
（この無明の闇の中で、いったいこれはどうしたことだろ

恐怖異色感覚・特集

う？）

九十郎の姿を、舞台の上の役者といった。

水月に構えたかれの顔が、くっきりと浮かんで見える。太い眉、たかい鼻、きっと結んだ唇、半眼に閉じた不気味な眼……それらがまるで龕灯をつきつけたような鮮やかさで、白々と見てとれる。

顔ばかりではなかった。

白帷子の上に、黒絽の羽織を着ていて、その羽織の紋――溝渕家の丸に二両引の紋までがはっきり瞳に映じたし、一本独鈷の帯や、燕斬りの名を呼ぶもとになった鉄鍔の双燕彫りまでが、その一条一痕にいたるまで、あますところなく見えたのである。

こんなはずはなかった。

どこにも灯はなく、天も地も墨汁を流したような闇であった。

（不思議だ？）

恐怖よりも、おれの頭を支配したのは疑惑であった。

が――

それも瞬後に変転した。

水月の構えをとった溝渕九十郎が、ニヤリと笑ったのである。

それは、白鬼の妖笑――といってよいのであろう。

とたんにおれは、ぞくっとした。

足の爪先から膝を、太腿を、背骨を、そして首筋を縫い脳髄に至る痛いような痙攣……ツーンと突っ走る恐怖……疑惑も思考も一瞬にしてケシ飛んでしまった。

腋の下から冷汗がつるりと滑った。

青眼に構えて、黒糸の櫺を握った十本の指が、こちこちにこわばった。棒を呑んだようにして死だ）

（死ぬ。あいつの刀尖がチラッと動けば、あとは血と激痛と、そして死だ）

九十郎がジリッと半歩出た。おれは動けなかった。

「死ねっ！」

声と同時に、燕切りの二尺八寸が、おれの頭上にきた。

「げっ」

叫んで、おれは飛び上った。同時に百万の白矢がおれの眼を襲った。

「ああっ」

と、おれはうめいた。躰中びっしょりの汗であった。おれは夢を見ていたのである。

夢……

障子越しに、昼の陽が一杯に射し込んでいた。

二、金田家の婿

いやな夢だった。不愉快な夢……おれは、覚あと味の悪い、しばらくぼんやりしていた。めてからも、

のどがカラカラにかわいている。

昨夜から一睡もしておらず、イライラする心をどうすることもできずに、屋敷をとびだしたのは、朝の六ツ半ごろのことであり、それから、なんの目的もなく足にまかせて歩きまわった。

江戸の町には不案内だった。

もっとも、おれの郷里は江戸よりわずか十三里の関宿であり、これまで再三出向いていたので、浅草奥山や両国の盛り場、そのほか記憶にとどめている場所はかなりあった。

おれはいつのまにか、両国の広小路へ来ていた。

歩きまわって、のどがヒリつくようになっていたし、多少疲れも覚えたので、料理茶屋の一室を借り、朝から不謹慎とは思ったが、ええいままよと盃を重ねた。

酒では人後におちぬ自信があった。

しかし、空きっ腹ではあり、疲れと寝不足もてつだって、一本の銚子がからになるころには、ほろっとしたのをおぼえている。おれは横になった。そしてじまったのであろう。

――馬鹿なことをしたものだ。婚礼の翌朝に、屋敷をとびだすなんて……

（神保三四郎……いや、昨夜からは金田三四郎だ。おい、三四郎！　きさまは馬鹿だぞ。阿呆侍だ。ぐずぐずするなっ。屋敷へ、美しい新妻、千絵のもとへとんで帰れっ！）

おれの心が、おれを怒鳴りつけた。

おれはもう後悔しはじめていた。し、新床でおれの手をこばんだ千絵の顔が、眼前にちらつきはじめたので、はじかれるように腰を上げた。

もう歩いてなんぞいられなかった。かといって、武士たる者が、白昼尻からげをして走るわけにもいかなかった。

駕籠だ。

おれは駕籠を求めて帰りを急いだ。あと味の悪い夢と、寝不足と、疲労と、みたされぬ心の悶えが絡みあって、たしかにこのときのおれは、平静でなかった。頭が重い。ズキズキする。何を考えても、いっこうに思考がまとまらない。

しかし――

おれは金田三四郎である。一昨日までは、関宿の郷士神保弥左衛門の次男三四郎であり昨日からは、直参旗本金田伯耆守の娘千絵の婿となって、近く御勝手御日記医学館聖堂学問吟味見習を勤め、やがては伯耆守のあとを継ぎ幕府御目付の職につく男である。

狂ってなんぞいやァしない。だれがなんといっても、おれは狂っていなかったのである。

おれは、もと神保三四郎、現在金田三四郎、おれが、おれ以外の……たしかにそうだし、おれが、だれかであるはずがあるものか。

駕籠に乗っているときはよかったのである。――が、が重かっただけである。

たとたんに、おれは、じぶんが正気なのか、狂っているのか、それとも、おれ以外の人間がみんな変になったのか、おれが誰なのか、さっぱり理解に苦しむ立場にたたされてしまった。

ホイッ

白昼の江戸を走り続けて、やがて駕籠がぴたりととまった。

「旦那。お屋敷の前でげす」

後棒の声に、おれはうなずいて駕籠をおりた。

新しいおれの屋敷、金田伯耆守三千石の屋敷の前であった。

おれは脇門を押して中へ入った。それは、運命の一歩……正気と狂気の境界を越える一歩……といってよいのであろう。

とにかくおれは門内へ入ったのである。

門小屋の前にいた志波多十郎がチラッとおれの顔を見た。

「戻った」

と短かくいって、おれは玄関の式台へ進んだ。

と――

「あっ、もし」

多十郎が、背後からあわてたように声をかけたのである。

「ん？」

振りかえると、かれは咎めるような顔でいった。

「当家は御目付職金田伯耆守様上屋敷、案内

もこわず侵入の儀は無礼でござろう」

冗談や茶番の声でなく、返答次第では脇差まで抜きかねぬ態度であった。

おれはまごついた。

なるほど、金田家の婿養子として、この屋敷へ入ったのは昨日のことであり、中間小者や端女なら、おれの顔を知らずにいたとしても不思議はないが、志波多十郎は、当家の用人志波多左衛門の伜だったし、親子二人で関宿までおれを迎えにきている。道中も一緒であった。このおれの顔を見間違えるはずがなかった。

「何を申す！　わしは当家の婿に参った三四郎じゃ。主人の顔を見忘れおって、ここなうろたえ者め！」

おれは、しかしをえなかった。

「奇ッ怪な。そのような者は当家にはおらぬぞ」

多十郎は、いよいよいよいよ妙であった。

「なんと!?」

おれはア然となった。多十郎は狂気したのか。それとも、このおれが狂っているのか……それとも……それとも……

三、狂　人

まなじりを吊上げて詰め寄る多十郎に手を焼いたおれは、いや……むらむらとこみあげる怒気に押されて——といったほうがより正確かもしれぬ。とにかくおれは、そんな多十郎を相手にせず式台を踏んだ。

と——

まずはじめに飛びだして来たのが、用人の多左衛門であった。この老人も、おれの顔を見て、ギョッとしたらしい。

「何者ッ？」

と、としに似ぬ大声をあげた。

「何者とは何事だ。当家の婿、関宿の三四郎を見忘れたかッ」

おれもまけずに屋敷中に響くような大声をぶつけてやった。

「な、な、なにっ？　当家の婿じゃと？　その顔でようもぬけぬけと……このところの馬鹿陽気で狂うたとみえる。さ、そのような世迷言を申さず早々に立去るがよい。狂者とあっては、斬りすてるも無慈悲じゃ」

「ええい。狂人はその方だ。親子揃って狂ったな」

お互いが相手を狂人よばわりである。しかし、おれのことは、おれが一番よく知っている。おれは狂ってなんぞいなかった。

「曲者っ！」

いきなり多左衛門老人が奇声を発した。そのままでなくとも、すでに家人が駈け付けつつあったし、たちまちおれの前後は、おっとり刀の家士たちで埋まってしまった。

「みんな聞け。多左衛門が狂うたぞ」

前後を見て、おれは静かにいってやった。

おれの方では、家人の一人一人に記憶はないが、むこうはたった一人の婿であるおれの顔だし、それも昨日の今日だ。一人残らず記憶しているはずであった。



とこうが、そうは問屋が卸さなかった。みんな無言で、おれの顔を睨みつけていた。
「こういう男だ。見れば垢じみた素浪人でもないようだが、陽気の加減で気がふれたままふらふらと当家にまぎれこんで来たのであろう。斬って捨てるも気の毒じゃ。おのおの怪我せぬように門外へ抛りだしなされ」
多左衛門は、その皺深い顔をさらに皺めて吐きすてるようにいった。
「心得た」
と、一人がこたえて、つかつかと進み出た。
おれは、もう、口がきけなかった。これだけいて、おれの顔を覚えている奴は一人もいないのである。そんなはずはない。そんなはずはないのだが……ここで逆らっては、当然腰の物をひっこ抜くことになるし、そうなっては腕に自信のないおれだ。嬲り殺しになる。
おれはひとまず退散することにした。
「大川の水で、頭をひやすことだ

な。すれば正気に戻るだろう」

おれの両肩に手をやって、突き飛ばすように押しだしたのは、いやに背のひょろ高い若侍であった。

変化は、その刹那におきた。

「げっ」

叫んで、そいつが地に這ったのである。いや、這った——というより、叩きつけられた蛙……といった方がよいのであろう。

どうしたことだ？

おれは途惑った。——が、考えてみると、瞬間の変り身で、このおれが叩きつけたものらしい。

らしい？……

そうだ。おれは、そんな器用なことのできる男ではなかったのである。

「逆らうかっ！」

背後にいた家士たちが殺気だったのを感じて、おれは一散に逃げだした。

（ばかな……ばかな……ばかな……）

走りながらおれは、胸のうちで、叫んでいた。

頭の中が渦を巻いている。疑惑、当惑、憤怒、焦燥——四つの芯を持った巨大な渦である。

四、千絵

なにかある。なにか、事情があるはずだった。途方もない、何かの理由が……

おれは考え、そして疲れた。

どう考えても、いかに智慧を絞っても、その理由が、事情がとんと呑みこめなかった。

望まれて婿となったおれであるに、こっそり千絵と対面するのだ。

望んだのは、上野の花見でおれを見染めた千絵であり、今は一介の郷士ではあっても、遠く古河足利の血に発して、綿々と築田の流れを継いだ家柄に、眼をつけた伯耆守であった。

そのおれを家臣の者は知らぬという。狂者だという。そうして、門付けを追い払うようにつまみだした。

ばかなっ！

おれは、昨日、金田家に婿入りしたばかりの男ではないか。

歩き疲れて、おれは宿をとった。

陽がおちて、あたりが薄墨の世界になると守三千石の屋敷の前に立った。

案外にうまくいった。

さきほどから胸のうちでどろどろしていた一つの想念が、やっと凝縮して一つの決意になった。

千絵だ。

千絵……おれの美しい新妻……多左衛門がなんといおうと、この女だけはおれを認めてくれるだろう。どんな事情があるにしろ、この女だけは……

おれはさらに夜の更けるのを待った。

奥の寝所の案内は心得ている。伯耆守屋敷に夜忍びをかけて、こっそり千絵と対面するのだ。

昨夜はなぜか、新床でおれをこばんだが、もともとおれを見染めて、婿にと望んだ女である。こよい、夫婦のちぎりをすませば、翌朝はまたガラリと事情が一変するかもしれない。

おれは、そう考えたのである。

夜盗のまねは初めてだが、大道寺流は乱波に発して、陰の兵法をそのみなもととしていた。刀法はカラッペたでも、下忍の法は一通りわきまえている。

亥の刻……

おれは、闇の中に黒々と横たわる金田伯耆守三千石の屋敷の前に立った。

案外にうまくいった。

かえって建てこんだ町家なら、こうはうまくゆかなかったに違いなく、三千石の宏大な屋敷は、隙だらけといってよかった。

おれは、千絵の寝所に忍びよった。
（ちっ。良人たるものが、妻の寝所へ入るのに、なんという苦労だ……）
おれは唇のはしをひん曲げた。
千絵は、微かな寝息をたてて眠っていた。
（美しい）
千絵の寝顔を、こうしてつくづく眺めるのは初めてであり、昨夜の取り澄した顔、怒った顔、哀願した顔――そのいずれとも違ってまるで別人を見るようだった。
「千絵」
おれは声をひそめて呼んでみた。
千絵の寝息が、ふッと途切れた。しかし、眼覚めたのではなかった。やがてまた軽い、すこやかな寝息がはじまったのである。
（千絵……）
と、胸のうちで呼びかけて、おれは夜具の下からのぞいている、ふくよかな肩に手をやった。
寝息がとまった。
そして、こんどは閉じられていた眼が、ぱちりと開いた。
眼覚めの原因を知らず、枕元のおれにも気づいていない顔であった。
「わしだ。三四郎だ」
おれの声に、千絵はギョッとなったようである。
あわてて夜具をはねのけると、はじかれたように起き直った。
おれの眼と千絵の眼が、宙でピタリと合った。
千絵は一言も発しなかった。――が、おれは、その表情を見て一切をさとった。この女も、いや、この女までが、まるで一面識もない夜盗を見るような眼でおれを見詰めたのである。
千絵が叫んだのは、この時であった。
「く、曲者ッ」
「何をいう！」
あわてて、とびついて、その口をふさごうとしたが、それはもう無駄――とは思いながらも、おれはこうわざるをえなかった。
千絵はこたえなかった。
その瞳に恐怖の光りが走り、唇が小刻みにわなわなとふるえはじめた。
（なんのために、そんな芝居をする。おれをしかし、それ以上に熱火のような憤怒がこみあげた。他の者はともかく、また、どんな事情があるにせよ、この女までが……
おれは狼狽した。
期待が微塵に砕け、おれは前後を忘却した。
（くそっ。このままではすまさんぞ。たとえ八つ裂きにしても、その理由をただしてくれる！）

恐怖異色感覚・特集

おれはいきなり当身をくれた。腕はなまくらでも、相手が可弱い女なら、おれにだってこれくらいのことはできる。

五、墓地責め

おれは、無我夢中で走った。わながら不思議であった。大道寺道場の厄介者であり、男っぷりには自信があっても、腕っ節のほうはからっきしで、その棒振り剣術は百姓町人に劣るといわれたこのおれが、千絵を小脇にして、追いすがる金田屋敷の若侍を、おぼえているだけでも六人は斬ったし、まんまと追手をくらませて、気づいたときには名も知らぬ古寺の墓地へ逃げ込んでいたのである。

夜空に月があった。

そのひかりが、蒼白く浮彫りにした墓碑面には、佐々木家累代之墓——とある。おれはその墓石の前で足をとめた。千絵はまだ正気づいていなかった。

もう掌中の雀である。

おれは左手の血刀を墓地に突き立て、刀の下げ緒を解いた。墓地へ迷い込んだときからおれの考えはもうきまっていた。

——なぜ、おれがおれでないのか。この謎を、みんなして、まるで見も知らぬ赤の他人を解いてくれる。たとえ千絵を責め殺してでも、この不思議な、やり場のない、おれの立場を解明してやる。

おれは、まるで憑かれた者のように、まだぐったりしたままの千絵を、佐々木家累代之墓——その墓石に縛りつけた。

手加減はしなかった。

ギリッ

ギリッ

力まかせに縛りあげたので、む、む、むーと呻いて、千絵は正気づいたようである。

「千絵！　見ればわかるだろう。ここは三千石の旗本屋敷ではなく、墓石の林立する冥府の寝所だ。もう茶番は許さぬぞ」

おれは千絵の正面に立ちはだかって、胸のうちにとぐろを巻いていた忿懣を、ぶちまけた。

「さァ、申せっ」

「理不尽な。何をいえというのです？」

「くそっ。たとえ夫婦のちぎりは済まずともいったん婿入りした以上、この三四郎はおぬしの良人であり、金田家の養嗣子だぞ。それを、みんなして、まるで見も知らぬ赤の他人——狂人あつかい……いったいこれはなんのためだ。さ、聞こうしゃるのですか？」

「おう、正気だとも。おれは金田三四郎、おぬしの良人だ」

「狂人じゃ！」

「なにっ」

「わたしは、そなたのような良人を持った覚えはありませぬぞ」

「千絵！」

「わたしの名は千鶴……」

「ええい、まだそのようなことを——千絵、この三四郎を甘く見ておるな。女には不自由せぬわしだ。夫婦のちぎりが済んだ上で、お縁にすると申すのならぬしの気が変った、不縁にしておらぬ。このものにしてしまうのだ。黙って引きさがりもしよう。しかし、わしはまだ、おぬしを自分の心がすまぬのだ。のまま退散しては、わさ、申せっ。なぜこの三四郎を狂人あつかいにする？　どこが気に入らぬ？」

「わたしは、そなたを初めて見るのです」

千絵は、憎々しげにおれを睨んで、吐きすてるようにいった。

「うぬっ」

おれの右手が、千絵の頬の上で激しく音たてたのは、この時であった。

「あっ」

「もう一度いってみろ！」

こんどは左手が千絵の右頬を襲った。
溝渕九十郎は、おれのことを女たらしといった。おれは、あえて否定しないまで手荒なまねをしたことがなかった。事実そうであり、それだけに、女にはこれ
女は、利用するもの、可愛がるだけでは曲むれるものであった。
が——
この墓地で、おれは、かってな荒々しい兇暴な発作におそわれた。
「千絵。ここは亡者どもの眠る墓地だ。おぬしもその仲間に入りたいか。——わたしの良人がない。たまには、こういう目にあわせてくんだ。わしに、それだけの勇気がないと思っれるのも一興……と、おれはこの時思ったもているのなら、とんだ量見ちがいというものよ。これを見よ、この血刀を……」
のである。
おれは千絵の鼻先へ、血まみれの志津三郎兼光を突きつけた。なまくら腕のおれにはすぎた刀だが、これも、千絵の父伯耆守紀道が婿養子のしるしとして、縁組の日にくれたものである。
「ど、どうしようというのです」
「こうするのだ」
おれは、血刀を前に下げて、長襦袢一枚をささえている紐——を斬った。
「あっ」
と、千絵が狼狽する。
「この通り、よく斬れる。……そして……」
「だ、だれかっ！」
たまりかねて、悲鳴をあげた。
「ふん。さわいだとてなんかいないぞ」
おれは、千絵の首に手をやって、ぐいぐいと締めあげた。
「馬鹿者ッ」
こういうのを大喝というのであろう。このときは、背後からいきなりどなりつけた声があり、振りかえると、そこに白衣の老僧が立っていた。
おれはドキンとした。
よわい七十にちかく、枯木のような老人でありながら、身に一寸の隙もなかったし、また、一べつして、それを見破ったおのれの眼力に、おれは驚いたのである。
（今夜はたしかにどうかしている？）
ひと目見て、相手の構えに隙があるかどうするのか、そのか。それがわかるほど、おれは剣の道に熱心けに、おれは、ではなかった。
惑乱した。
それに——
（おれは、狂っ今夜は、追手の人数を六人も斬っている。いるもんか！（狂ったのか!?）
関宿から千絵の関宿から千絵のもとに婿入りした三四郎なんだ）
「ほう。おぬし、心に迷いがあるな。振りか

恐怖異色感覚・特集

えった刹那の身のこなしでは、たしかに一流の師と見たが、――ふむ、その足の構え、飛騨陰流……。しかし、心に迷いがあってはのう」

老僧の声は、うってかわって穏やかであった。

「ごめん」

と、ひと声残して、おれは走りだしていた。なぜそうしたかわからない。ただ、そうしたのである。

（おれが一流の師……飛騨陰流……ばかな。おれのなまくら剣法は、大道寺道場の一刀流だ……）

走りながら、しだいにおれは、自分で自分がわからなくなっていた。

おれの中に三四郎が二人いる。

その一人は、女たらし、腰の刀は飾り物の三四郎……。別の一人は、飛騨陰流とやらの使い手で、わけなくすばりと人を斬る三四郎……。

女たらしの三四郎は、三千石の旗本の娘に見染められて、その入り婿になったけれど、一夜あければ、別の三四郎だ。

そんなことがあってよいものか。

六、医師の娘

変な話だが、しかし、おれは関宿へ戻って自分が関宿の郷士、神保弥左衛門の次男坊、三四郎であることを確かめる必要にせまられた。

自分がだれであるか確めるなどは、着物が変っているのだけのことであり、それだけのことがあるだろうか。

（馬鹿馬鹿しい）

と思いながら、それでも、そうせざるを得ない境遇におかれてしまったのである。つまり、おれの心に迷い――が生じたのだ。

おれは狂っていない。そう信じたかった。しかし、あの老僧に一喝され、夢中で今日一刻のいこいを取った宿まで逃げ帰り、じっくり考えてみると、色フにおちないことがあった。

今朝、むしゃくしゃして屋敷をとび出したときに着ていた物と、現在身につけているものと、違っている。よく似た縞物で、今までついぞ気付かずにいたのである。

着替えをしたおぼえはなかった。

両国の料理茶屋で、酒を呑んだ。酔いの廻るのが、いつになくはやく、つい横になって寝てしまった。

そして、夢を見た。

それだけのことであり、着物が変っているのは理解に苦しむ異変である。

あの酒には眠り薬でも入っていたのであろうか。眠り薬を呑ませて、眠っている隙に着ている。そうだ。ごくありふれた紙入れだったが、たしかに違っている。中の金子も、今朝屋敷を出たときよりは、多いような気がする。中味の金子まで確かめて屋敷を出たわけではなかったが……。

すりかえたとすると、いったい何の必要があったのだろう？

――おれは、もう考えることをやめにした。

とにかく、関宿から出直すのだ。おれがお



態度も、料理茶屋に繋がっているのかもしれず、いずれにせよ、こうなっては真正面から押しかける訳にゆかなかった。

さいわい、下忍の法を身につけている。女をものにするときに、その弱点を探り歩いた要領で、からめ手から金田屋敷の秘密をさぐるのだ。

――おれは、ぐっすり眠った。

翌朝、まだ陽が昇ったばかりの頃に宿を出て関宿に至る十三里の道をあるきはじめた。

江戸の町並を出はずれるまでは何の変化もなく、しかし、松並木の見えはじめる庚申堂の前まで来たとき、おれに新しい衝撃を与える一つの事件が起った。

――いきなり、左手の庚申堂の扉が、はじけるように開いて、一人の女が飛び出したのである。

髪が乱れていた。

紺の手甲脚絆に草鞋ばきで、しかも埃をかぶった道中着が、肩のあたり、びりっと裂けていたし、そこから白い肌が、下着の緋の色が、あざやかな色調で覗いていた。

陽焼けはしているものの、美しい娘――である。

料理茶屋てやろう。千絵や、金田屋敷の連中のあの不可解なこれであること を確かめてから、あの

黒眼がちの眼が大きく、頬が豊かで……いや、そんなにじっくり見たわけではない。飛びだした娘は、夢中で、おれの背後に身を隠したのであった。

庚申堂から飛びだしたのは、この娘一人ではなかった。

続いて、あとから二人の男……いのびた浪人崩れ、もう一人は月代どちらもあまり人相のよくない男である。

「おい、おいぼれ」

と、遊び人風の男がいった。

「邪魔すると叩ッ斬るぜ」

と、これは浪人崩れである。

おれは事態を了解した。旅の娘の美貌に眼をつけた二人組の悪党が、いずれ売りとばす魂胆で、まずその手はよくあることだった。

が——

これは、おれにとって、はなはだ迷惑な行きがかりであった。さっぱり、腕に自信がない。相手は、いずれこうした悪事を重ねてきている男に違いなく、ことに浪人崩れのほうは、かなり腕が立つようである。

（——といって、さて、無恰好に逃げもなるまい）

おれは迷った。

「お、おたすけ下さいまし」

背後の娘が、おれの腰にとりすがっていったのは、この時である。

「弱ったな。身共は先を急ぐのだが……」

どっちつかずの、こんな返事が口をついてでたが、おれの身になってみれば、これは無理もないことだろう。

と——

その直後に、おれにとっては見ず知らずの旅娘が、おれをギョッとさせるようなロをきいたのである。

「あっ、そのお声は……？」

と、はじめにいって、これだけならなんのこともなかったのだが、背後からすようにしておれの顔を見ると、

「先生！　……や、やっぱり、馬場先生！　ご門前の里絵でございます！」

ほっとしたように叫んだのであった。

「馬場先生？　人違い致すな。身共は金田三四郎と申すものだ」

「ほほほ、おとぼけ遊ばして」

と、女は、つい今の今までの必死の声とは打って変って、すこぶる陽気になってしまった。

「やいやい！　なにをぐずぐずいってやがるんだ。おれたちゃ、芝居の見物人じゃァねえんだぜ。さァ、唐変木、その女を渡すのか、渡さねえのか、はっきりしろい！」

たまりかねたように、遊び人風ががなりたてた。

「ふん。もう怖くないよ。この先生はね、京の六条で、飛騨陰流の道場を開いていらっしゃる、滅法強い先生なんだから」

おれが絶句していると、この娘は何をいいだすやら知れたものではない。

（馬鹿を申すなっ）

と、制止するつもりで、しかしまだ声にならぬ先に、眼の前の浪人崩れが、理不尽にもいきなり、

「たあッ」

と斬りつけてきた。

（げっ）

驚いておれは、ともかく夢中で、右へ避けた。ただそれだけのつもりだったのに、その一瞬、おれは居合抜きの形で、浪人崩れの胴を払っていたとみえる。

「ぐえっ」

妙な声で呻いて、その浪人崩れがぶっ倒れたのである。

おれは見た。いつのまに抜いたのか、右手の志津三郎にべったりと血がついている。

おれはもう、なにがなんだか判らなくなってしまった。——おれが、この三四郎が、こんなに強いはずがない。なにかの間違いだ。夢……夢にちがいない。今のこの出来事も、金田屋敷でのいきさつも、墓地の千絵も、みんな夢……長い長い夢……おれは夢を見ているんだ。

覚めろ、三四郎！　こんな不気味な、いやな夢……さめてくれ……さめてくれ……。

しかし——

眼前の浪人崩れは、夢ではなかった。

「くそっ！」

遊び人風の男が、懐から抜きとった九寸五分を逆手に持ち、じりッと一歩でるには出たが、

「おぼえてやがれ」

捨てぜりふを残して、いきなり走りだした。

おれはホッとした。

とにかく、なんとか形がついたのである。

七、変貌

奇妙な話である。

里絵と名乗る女の説明が事実とすれば、おれは金田三四郎ではなく、京都の六条とやらで、飛騨陰流の道場を開き、諸藩の京都蔵屋敷侍、所司代、町奉行所の与力同心——に指南する馬場鉄太郎、号して白雲という男である。

その鉄太郎師範であるおれは、鹿島神社の社前でおこなわれる諸国武芸者奉納試合にのぞむため、京都を旅立ったのだそうな。

里絵は、道場の向いに居を構える医師、杉原玄道の娘で、父の命を受け、下僕の直造を供に、京では手に入れ難い薬草を買い求めるため江戸へ旅立ったのだという。下僕の直造は、先刻の二人組に斬られ、里絵は正に危機にひんしていたわけである。

もっとも女の話が事実ならばだが……。

関宿へ足を向けるおれと、その後を追って来る里絵——二人の問答は、まことに奇妙なものであった。

「でたらめもいい加減にしろ。なるほど、悪党共の度胆を抜く、とっさの、智慧としてなら、かなり上手な嘘だったかもしれない。しかし、万事うまく行ったいま、その嘘に上塗りをする必要もなかろう」

「先生こそ、ご冗談もほどほどになさって下さいまし。直造を死なせて、心細いあたし、どうしてそんなふうに空っとぼけて、邪慳に遊ばしますの？」

「身共は、まだ京都へ行ったことがない。六条とやらがどこにあるのか、それさえ知らぬのだ。何度もいう通り、金田三四郎……もとは、関宿の郷士神保三四郎——これが名前で、まだ当年とって二十五歳、おぬしのいうような、一流の剣士になれる年ではない」

「まァ……」

里絵は、大げさにいって、いきなりプッと吹きだした。

何がそんなにおかしいのか、おれにはさっぱり理解ができなかった。

おれは、そんなにおかしなことをいったろうか？　いや、ごく当然のことを口に出したまでである。

「何を笑う？」

「だって、先生……」

里絵は、またひとしきり笑った。

おれは次第にいらいらして来た。どいつもこいつも、おれをおれとして認める奴は一人もいやしない。千絵、多十郎、多左衛門、金田家の郎党ども——ばかりでなく、見ず知らずのこの女までが、おれをとんでもない別人に見立て、否定すれば笑うのである。

異妖な寂寥感が、足もとから忍び寄ってきた。

そして、持って行き所のない忿懣が……おれは、もう相手にならず、黙々とあるいた。関宿の実家へ戻ればすべてが氷解する。——と思いながらも、おれは考えざるを得なかった。

一刻の眠りが、恐怖の夢が、おれを一転、別人に変えてしまったのであろうか？　それとも、あの酒の中に、おそろしい秘薬でも仕込まれていたのであろうか？

着物も袴も、酷似してはいるが、変っていた。しかし、紋は四つ目結び……金田家の紋である。

紙入れが変っていた。

声が……。つい今までは、茶屋でのうたたねで風邪気味になり、それで声の調子が少し妙なのだと思っていた。しかし、考えてみると、自分の声でありながら、きのうまでのおれの声とは調子が違っている。

うたたねから飛び起きたときは、不気味な夢のせいで頭が重く、キリキリ痛んだし、千絵のことばかり思い続けて、なにか一つ気づかなかった。

その後は、多左衛門の不思議な態度や、千絵の否定に動顛し、心に余裕がなかった。人を見、おのれを考えるゆとりを持たなかったのである。……

いきなり里絵が、おれを追い抜いて、眼の前に立った。

手にキラリと光るものがある。

鏡だ。

「先生、そら、鏡を見るといいわ。——それでもう、おとぼけ茶番はおしまいよ」

里絵が懐中鏡を、ぐいッとおれの鼻先につきつけた。

おれは思わず眼を閉じた。どうしてそうしたのか、自分でもわからない。とにかく、一瞬、おれは眼を閉じていた。

が——

異様に動悸する胸を押さえて、そっと鏡に薄眼を開いたのは、ほんの一呼吸の後であった。

おれは見た！

これが、これが、おれの顔であろうか？

懐中鏡の中に映った顔……それは、頭に銀髪をいただいて、額から右の頬まで走る刀創が、まったく見も知らぬ顔であった。

これがおれの顔か？

あわてておれは振りかえった。ぐるりと、あたりを見廻した。

だれもいなかった。

鏡の中に映った顔は、おれの顔であった。

関宿の郷士の次男坊で、陽にこそ焼けてはいても、黒々とした髪、彫りの深い、男らしい、女には魅力のある顔……昨日までの三四郎の顔はいったいどこへ失せたのであろう。

一夜、いや、一刻のうたたねで、人間の顔がこうまで変るものであろうか。そんなはずはない。そんなはずはなかった。

多左衛門が否定するはずだ。千絵が恐怖するはずだ。これはおれの顔ではなかった。

おれは金田三四郎は、どこへ行ったのだ。そして、このおれは何者なのだ……？

いったい、金田三四郎としての記憶を持ち、剣客馬場鉄太郎としての肉体を持っている。

おれは鏡の中の顔を、喰い入るようにして眺めた。その顔の中に、三四郎の面影を探したのである。

ある！

どこかに、三四郎の、おれの……面影がある。唇の形、眼の形——唇は肉が薄くなり、眼には鋭い光りがあるにしても、その形には三四郎の面影があった。

おれは関宿行きを思いとどまった。江戸へ引き返して、あの宿で、里絵の話をじっくり聞いて見る必要を感じたのである。

八、二十五年

宿へ戻ると、意外な人間がおれを待っていた。いや、待っていたのでなく、おれを訪ねて来て、その旅立ちを知り、おれの行先を宿の主人にくどくど訊ねていたのである。

金田屋敷の用人、志波多左衛門であった。

「三四郎さま」と、多左衛門はいった。

「え？」

おれはどきんとした。おのれの名を呼ばれてドキンとする。妙なはなしだ。しかし、その変貌を自覚したいま、いきなり三四郎の名を呼ばれることは、一つの衝撃であった。

「このおれを、三四郎と呼ぶか」

「はい」

「しかし、屋敷へ戻ったときは……」

「驚きました。婚礼の翌朝、行方知れずになられて、ちょうど二十五年目の御帰邸です」

「な、な、なんと!?」

おれは飛び上った。

「平地に波乱……わたしは、あなたさまを無理矢理狂人に致しました。お許し下さい。千絵様はすでにこの世になく、金田の家は、新しい婿養子の世になっております」

「しかし、千絵は？」

「あなたさまがお連れになった。……墓地へ……あれは、千絵様の一粒種、千鶴さまでござります。千絵さまに生きうつしの一粒種、千鶴さまでございました」

「馬鹿なっ！」

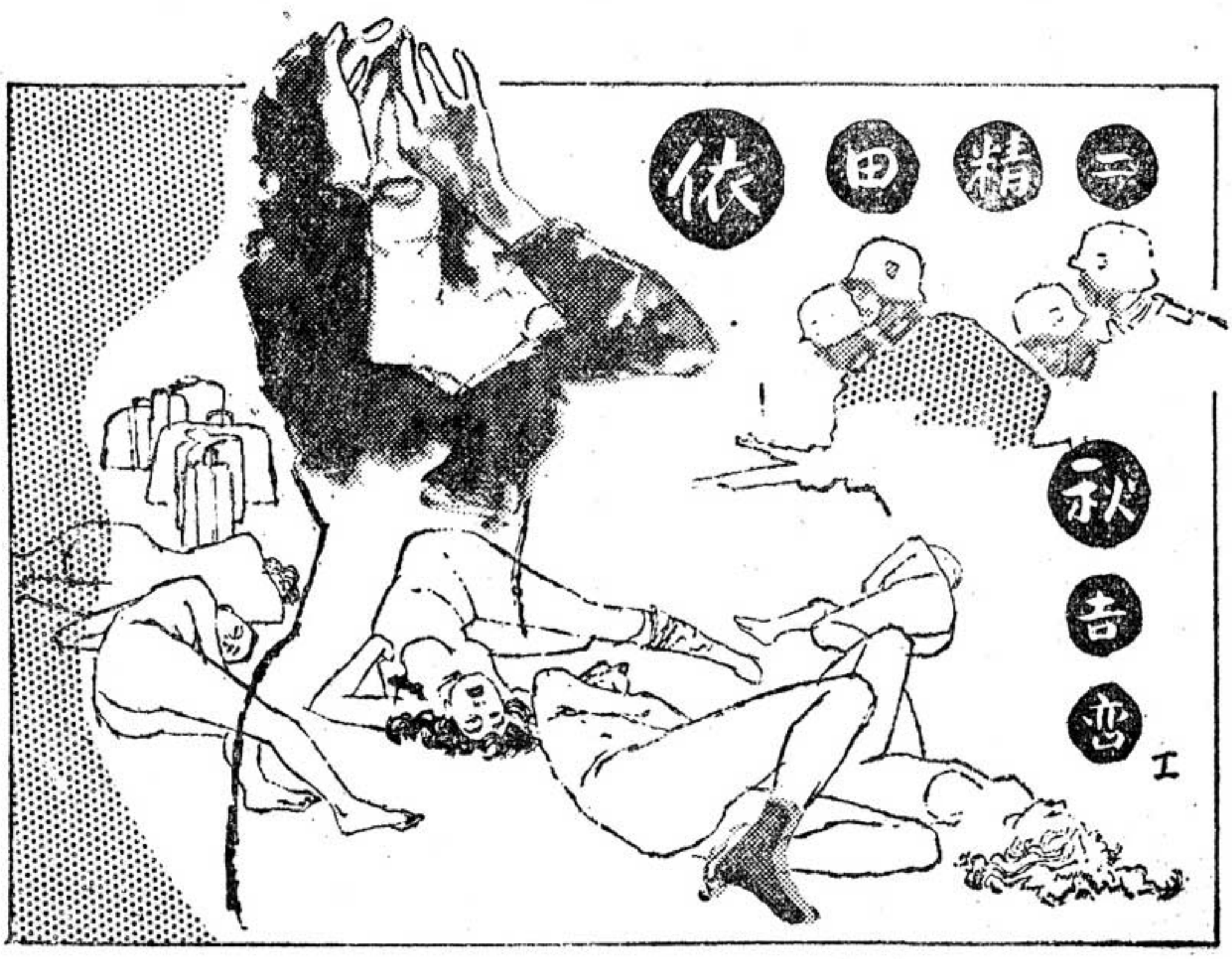
「いいえ、二十五年経っております。手前も、むかしの多十郎、父多左衛門のあとを襲ってとなったこの男の言葉に嘘はなかった。

多十郎、いや、父のあとを襲って多左衛門が、里絵様が、いや、この世の中みんなが狂っているのであろうか？

文政の人、馬場鉄太郎兼光の残した「不思議草」——という内容の物である。今日の頭で推理すれば、この男は、一種の記憶喪失者であり、二十五年目に昔の記憶を呼びもどし、同時に、記憶喪失以後の二十五年間の記憶を失ってしまった……という事になるのではあるまいか。

長篇絵物語

婦人諜報部員



①ウィリー大佐

「暑い中を御苦労だったが、今日、みんなに集って貰ったのはほかでもない、最近のB国との問題についてのことだ。われわれが、クーデターに成功して以来、B国の敵対行為が露骨になり、国境線附近では、最近でも、警備隊同志の衝突が五件も起きている。これは亡命した連中の悪宣伝に、踊らされている結果かも知れないけれど、このまま放置しておいたら、おそらく戦争状態にまで発展すると思う。そこで、今のうちにB国内の親C国派の人々と連絡をとり、友好のよりを戻すための足掛りをつけたいのだ。その情報収集の役を、君達に頼みたいのだ」

ここは、南米の一角を占めるC国、つい一と月ほど前クーデターを起し、政権を掌中に握った革命軍本部の一室、窓の一つもない二重に防音装置が施こされた秘密室であった。

柔かい螢光灯がテーブルを囲んだ人々を明るく浮き上らしている。

咳音一つ立てず、真剣な表情で聞いている革命軍制服をまとった数人の男女を前にして話を進めているのは、諜報部長のウィリー大佐だった。

②飛行命令

通風装置のモーターの回転する音だけが静かな室内に流れる中で、部長の低い話し声がさらに続く。

「そのためには君達に、B国潜入を決行して貰わなくてはならないんだが……これは思ったよりむずかしいことなのだ。この工作にはすでに数名のものが選ばれて侵入を計ったがいずれも失敗して捕えられている始末なので今度は、多少の冒険をおかすつもりで、空から潜入する奇襲方法を考えてみた」

部長は、ちょっと言葉を切って、一座を見まわした。

長身のポニー大尉、肩巾が広くガッシリした、マクギー少尉、若く男性的なロメロ少尉等、三人の航空隊員。

他は、看護隊に属した婦人隊員達で、洗練された美しさの持主のパーカー大尉、切れ長の眼の美しいカザリン準尉、キッと結んだ口元や鳶色の眼もとに、男勝りの気質を漂よわせたケイ軍曹、新鮮な感じのニール伍長、近代的な娘らしい芯の強さの匂うオハラー等兵それに本部附で、金髪と美貌に輝やくロイ中尉。



いずれも、諜報部にも籍を置く人達である。自己の意思を捨て命令の中に生きる、スパイとしての誇りを胸に、頬を紅潮させて聞き入る人達を前に、部長は椅子から立ち上ると壁にかけられた地図の前に進んだ。

「ここが、目的地のB国主都カール市だが……、まず君達は、赤十字機に乗り、国境線上でカール市に一番近い距離にある、このパクタまで飛ぶ。もちろん操縦するのはポニー大尉達だが……このパクタから国境上空を突破し、一気にB国領土に侵入する。そして、カール市郊外のこの丘陵地帯に着陸後、B国官憲の眼をごまかすため、機を爆破させ、同時にカール市潜入の機会をつかんで貰いたい」

といって、諜報部長のウィリー大佐は、一座の一人一人の顔をゆっくり見た。

③女中尉

「もし発見された時は不時着を主張しろ。こちらから何らかの手を打って見る。では、出発は明日午後二時、全員制服のまま、変装具を持って、一時間前までに、ダゴボ飛行場に集合してくれ」

命令を聞き終ったみんなの瞳の色は、平常と少しも変らず、決意をみなぎらせて輝いていた。

（大胆な潜入計画だけれど、やり甲斐がある わ）と、ロイも決心していた。

席を辞したロイは、ようやく夏の気配を濃くしつつある街中を、オレンジ色のオープンカーを走らせて、自分のアパートに急いだ。

把手を握る彼女の頭に、今受けたばかりの秘密指令にからんだ、いろいろな状景が、次次と浮かんでくる。

ケイは眠れないままに、一夜を過ごした。

――翌朝、陽の高さを感じて、ベッドから身を起こすと、窓辺のカーテンを引いた。

さっと、眩しいほどの陽の光が、部屋一杯に溢れる。

（さあ、今日はもう、ここには戻れないのだわ）と思いつつ、ロイは、ガウンをゆっくりと脱いで、ベッドの上に無雑作に投げた。



ピンク色のパンティだけをつけた、彼女の白くしまった裸身があらわれた。

クッキリと盛上った豊満な乳房の上で、乳首がツンと頭をもたげ、そして、くびれた腰、スッキリと伸びた脚が、なやましい色香を発散させている。

ロイは、着換えを始めた。

豊かな胸のふくらみの透けて見えるブラジェアー、腰部を締める純白のコルセット、色ちがいの、花ビラのフリルをつけた豪華なスリップ、そしてパンティに至るまでも、原色の花模様を浮べたセキシーなものに、穿き変えると、

（これでいいわ）と、何かしらさわやかな、そして、はればれとした気分になれた。

④飛行侵入



操縦席にポニー大尉達が、そして後部の二十余りの座席には、六名の婦人隊員達だけが乗組んだ中型輸送機が、午後の陽に照りつけられて、白く乾ききった滑走路を飛び立ったのは、予定通りの、午後二時近くだった。

赤十字標識を、グッキリと銀翼に描いた輸送機は、ごうごうたるエンジンの音につつまれながら、グングンと上昇して行く。

やがて、機体が水平に戻ると……

すでに眼下一杯に展がったボゴダ市街の中に今飛び立った白い滑走路は溶けこんで見えないほどになっていた。

外部からの轟音も、震動もあまり感じられない機内で、しばしの間、隊員達は使命から離れ、解放された気分となって、美しい下界の景色に見とれた。

緑に映える大地、紫色に煙る遥かな地平線点在する街々、曲りくねった白い河の流れ。

「ニール、ブリング山脈が見えるわよ」

「あら、ほんと、きれいね」

「あ、あそこに、太平洋が……ほら！」

そんな隊員達を乗せて、輸送機は依然として、快調なエンジンの音を響かせつつ、浮雲の中を飛び続けている。

（もう、だいぶ飛んだようだけれど……）

窓辺を掠める風圧音を耳にしながら、ロイは腕時計に眼を落そうとした。

その時……

ビー、ビー、とブザーが鳴った。

次いで、操縦席のマイクを通じて、ポニー大尉の声が拡声器から流れて来た。

「国境線をこれから越える。不時着の予定地まで、あと三十分だ」

（いよいよ、B国侵入の時が来た！）

快適だった空の旅の気分をいっぺんに吹きとばして、目前に迫った潜入の身支度を整える隊員達。

消音拳銃を内腿に、小型麻酔ガス弾と手榴弾を上衣の縫い込みに……。

⑤ 敵機

すでに、C国とは異なった感じのB国の大地が、眼下に展がっている。

エンジンの回転を落して機体はグングンと空中を滑るようにして高度を下げて行く。

緊迫した空気の中で、ロイが（時間って、こんなに長いものだったかしら……）と感じた時だった。

突然、タ、タ、タ、タ、と、空中に、連続した金属音が響いた。

（ハッ）と息を呑み、隊員達が不安気な視線を見交わした瞬間。

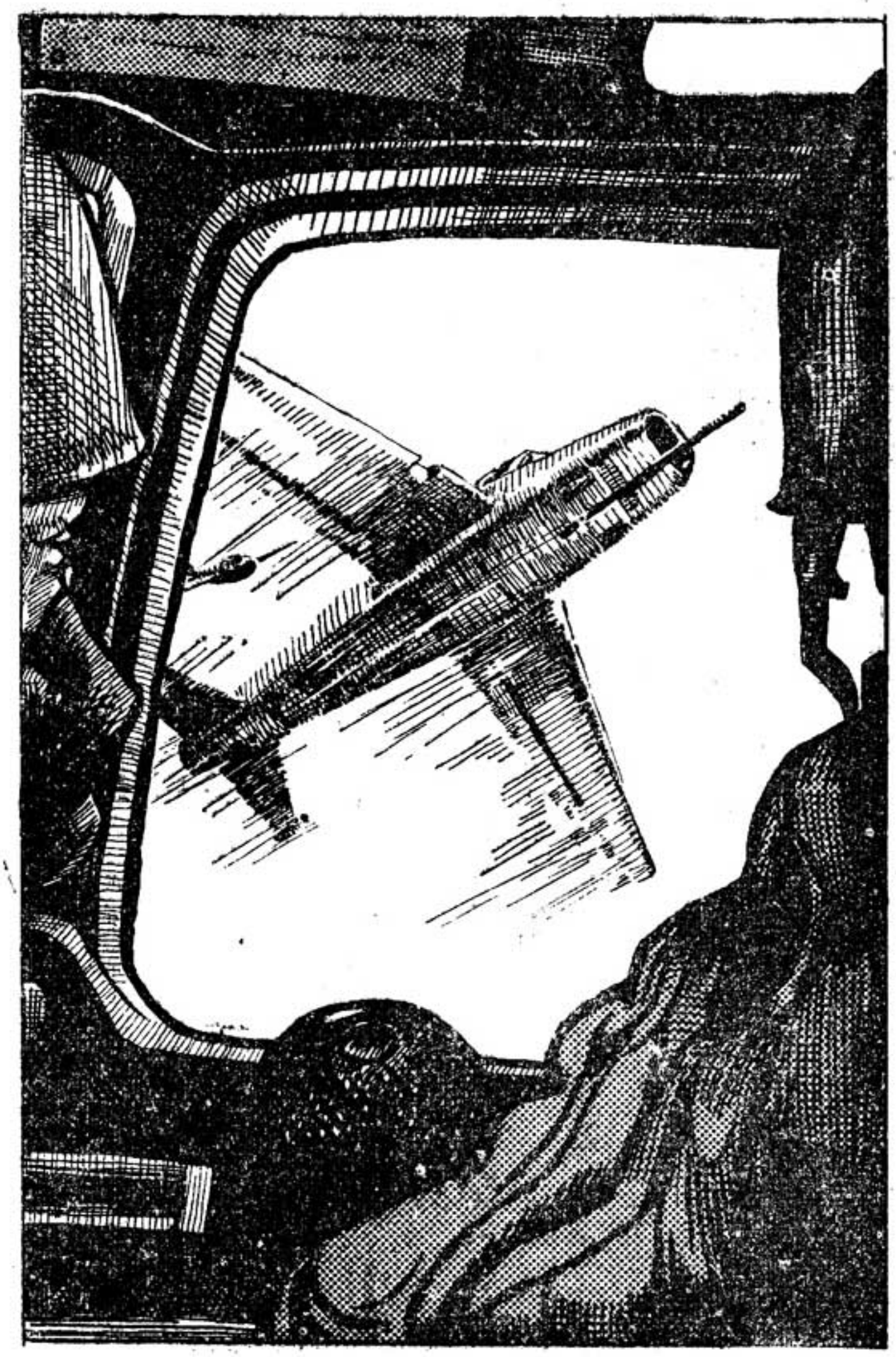
「あっ！　飛行機！　機関銃が……」

と、右窓際からのニールのうわずった声がさらにみんなを驚かせた。

いつ現われたのか？　大地の中から飛び出した三つの黒い影が、赤い閃光ランプを明滅させつつ、猛烈なスピードで、こちらに向かって来るのが見えた。

やがて、ゴーッと鋭い爆音の尾を引いた、黒い大きな影が、隼のような早さで、輸送機の眼前を上に突き抜けるようにして通った。

（ああっ）手に汗を握った隊員達の視線に、続いて襲いかかる二番機が映る。



それらは、B国のジェット戦闘機だった。

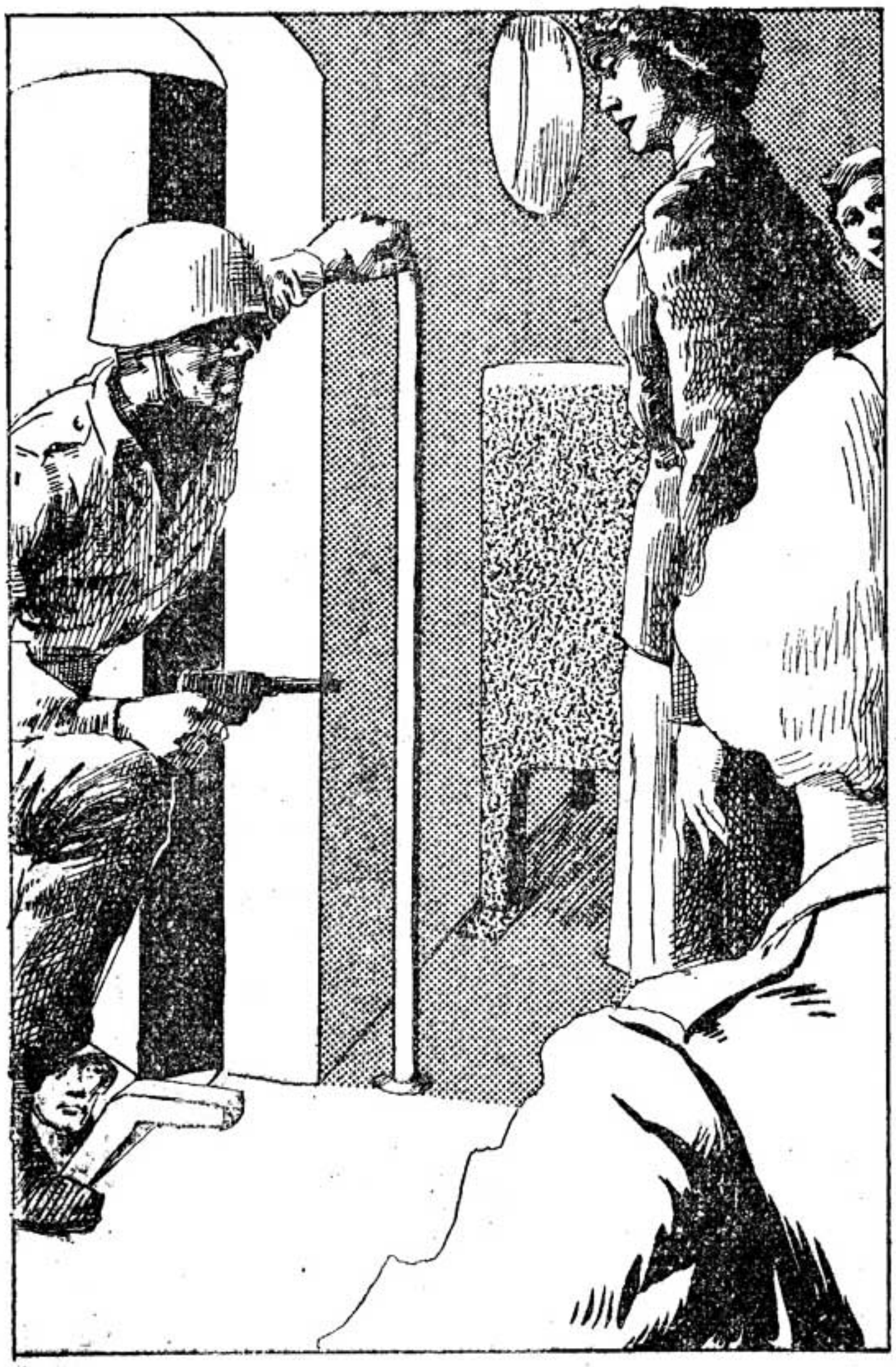
飛行場から連行される途中で、脱走しよう。

（もうだめだ。こんなに早く見つかるとは思わなかったのに）と、成行に任せる以外手段麻酔ガス発生弾を使うから、君達は予防薬を今のうちにのんでおいてくれ。機体には、二とてもないロイ達の耳に、ポニー大尉の声が時間の時限爆弾を仕掛ける。希望を捨てず聞えた。に、がんばってくれ」

「おとなしく降りるぜ。仕方がないさ。赤十字機が、針路を間違えたことにすれば、まあそんなに手荒なこともしないだろう。だから

ジェット機に誘導されるがままに、やがて輸送機は、静かにしずかに高度を下げて行った。

⑥思惑はずれ



見なれないB国の飛行場の一隅――
降りたったロイ達の機の方に、格納庫の蔭からB国兵の一団が、バラバラと駈けよって来た。
中からそれを見たパーカー大尉が、隊員達の方を振向きながら、
「拳銃は見つからないように注意して……。それから、あくまでも赤十字隊員で通すのですよ」と早口で伝えた。
タラップがかけられ、それを馳け上る数人の足音、続いてガタンと乱暴に、扉が引き開けられた。
外の明るい陽ざしが、拳銃を手にしてドカドカ乗り込んで来たB国兵達の背に映った。
先頭の兵士が、座席に腰かけたままの隊員達を見て、
「ほう、女だ！」と奇妙な声をあげた。
通路に立って、ロイ達を見降しているB国兵達の狼のような視線……。
息づまるような沈黙は、
「君達を、不法越境のカドで逮捕する」との将校らしい男の言葉で打破られた。
パーカー大尉が、腕をつかまれて引き出された。
「両手を揃えて出すんだ！」兵士が、そう命令しながら、手錠を取出すのを見て、パーカーは（あっ）と声を呑んで、その場に、立ちすくんだ。
（脱走計画がダメになる……）他の隊員達とても思いは同じだったが、とっさには、良い思案とても浮ばず、顔色を変えたままパーカーを注視する。
「あの……私達は赤十字のものです。おおせには従いますから、手錠だけは……」
「だめだ！」途中で、パーカーの言葉をさえぎった兵士は、なおも執拗に訴えつづけようとするパーカーの脇腹に、銃口をグッと向けると、「黙って、両手を出せ！」と顎をしゃくった。

⑦ 危機

不気味な銃口を前にして、彼女の美しい眉がピクリと動き、思わず身を後に引こうとしたとき、その腕は横合いから他の兵士につかまれていた。揉み合う二つの影——しかし、その後には、無益な抵抗に髪を乱したポニーの、両手首に金属製の輪をかけられた哀れな姿があった。

「ああっ。こんな……はずしてくださいっ」

興奮に頬を染め、身悶え続ける妖艶な年増盛りの体が、

「静かにしろよ」

と、グッと引かれて扉の方によろめいた。

オハラ一等兵が引き出された。

同じように手錠をかけられた彼女の若鹿のような肢体は、今はもう扉口で悄然としているパーカーの傍に引かれて行き、そこで手錠と手錠とを、一つ鎖でつながれるのだった。

「そうだ、ちょっと体を調べておけ！」

将校の声が、強い語気で、オハラの方に浴びせられた。

（あっ）

眼を見張り、身を固くして、思わず寄り合う二つの手錠姿——。



（手榴弾が、そしてガス弾が、発見されたら……）

オハラは思わず小さく震えた。

他の隊員達も、顔を蒼白に変えて、その場の空気に息を呑んだ。

そんな隊員達の気持をよそに、一人のB国兵がニヤッと淫らな笑いを浮べて、オハラの前に立った。

両腿を固く一つに合わせ、手錠をかけられている両手を胸にあてて、

「止めて……」とあえぐ、小雀にも似たロイの肢態の上に、兵士の手がのびて行った。

髪、肩、胸、と探りながら下にさがって行く指先の感触。

紅い唇から絶望的な溜息が、洩れた。

「ああっ……」

⑧妖しい肢態



その時だった。

「待って……」とケイ単曹が、大きな声を出し前に飛び出した。

「そんな恥をかかせなくてもいいじゃありませんか。検査をするなら、後でゆっくりしてください。後でなら、全部脱いで見せて上げますわ」

「何だ、貴様は！　邪魔をするな、どけ」

「いいえどきません」

「なんだと？」

「どうしても調べたいなら、さ、私を先に調べて下さい」

いつの間にか、オハラと兵士との間に、体を割りこましたケイは、制服のボタンに手をかけて上衣を脱ごうとしている。

他の兵士達が一斉に、その方を注視した。

輸送機の中で、呆気にとられる兵士達の好色な眼を前にして、ケイ軍曹は素早く上衣を脱ぎ、続いてブラウスをとり、スカートも床に落した。

（ほう）兵士達が一斉に眼を輝かせた。

均整のとれた美しい肢態の線を透して、真紅のスリップが、窓からさしこむ光に、白く悩ましげに映る白肌と対照的な妖しさで、ケイの体を包んで揺れている。

「フフフ。まあ邪魔をするな。退けよ」

「退きません。さ、私から先に見て……」

ケイは必死だった。

（身体検査の手から皆を守るには、彼等の注意を、私一人に引きつけ、そして時を稼がなくては……）と考え、もしこれでも防ぎきれないような時は、スリップも、又、最後のものさえも脱そうと、拳銃やガス弾を座席の蔭に投げて、ここに飛出していたのだ。

「退け！」「嫌です」

「なにっ、こいつ！」兵士の顔色に、ありありと憤怒の色が湧き、ケイの半裸の肩口をグッと掴むと、手許に引き寄せて、羽掻い締めにかかえこんだ。

⑨女体とロープ

ケイは、苦しさに、躰をよじり、肩先でもがく。真紅のスリップの薄衣の艶が、キラキラと光る中で、その吊紐が、プツリと音をたてて切れ、その下から滑らかに発達した彼女の乳房が、ブラジャーといっしょに盛上った。

「おい、手錠をかけろ」

「いや、こいつは、ロープにしてやろう」

兵士は、他の兵士の声をさえぎると、ケイを床に引き倒し、むっちりとした白い両手を掴み、背中に捻じり上げた。

「むむむ」と腕の痛さに、ケイは床上にうつぶしたまま、足をもがいて呻いた。

暴れるたびに、形のよい脚が、妙に肉感的に露われ、そしてスリップの裾をずらす。

「おい、ロープをくれ」と、背の上に馬乗りになった兵士が、荒い息を吐きながら叫ぶのを聞くと、(あ。私は、縛られる)とケイは、異常な衝撃に、全力をあげて暴れた。

スリップが腰の辺までまくれ上り、はずれかかったコルセットの下から、白い腿のつけ根と、黄色い薄衣のふくらみが、妖しくうごめいて見えるのが兵士達の眼を射るようだ。



「さあ、覚悟しろよ」

ロープを手にした兵士は、素早い手捌きでケイの両手首をいっしょにして縄を巻いた。

両手を括った縄尻を、彼女の白く透きとおるような首筋にまわして、引き絞ると……

「ううっ。あっ」

ケイの両手首が、呻きと共に、縄に引かれて肩先の方に苦しげにズリ上がり、細い十本の指が躍る。

縄が首筋にくびれるほど喰いこんでいる。

髪を乱し、上体を海老のように折り曲げて苦痛にこらえる彼女の上半身は、更に、二の腕から、乳房にかけても、二筋の縄でギリギリとまかれた。

「ああ……ううっ」

ケイは呻き続けた。

⑩ケイの悲鳴



「まあ、しばらくそうしていろ」と、言葉を浴せる兵士を、ケイは、身動き出来ないほどに、高手小手に縛り上げられて転がされた床上から、肩で息をつきながら睨んだ。

そんな騒ぎの間に、ロイも、カザリン準尉やニール伍長といっしょに、手首に冷い手錠をかけられていた。

「自動車は、まだ来ないのか。まだ時間があるのなら、ちょっと又、体にさわらして戴くとしようか」ケイに刺激された兵士のつぶやきを耳にして、隊員達が、又、ギョッとしたように顔を見合わせた。

その兵士のつぶやきを、ケイも耳にした。

(何んとか、時間を稼がなくては……)とケイは、荷物のように緊縛され、しびれ切った四肢に力をこめると、

「解いて……こんな縄……」と叫んで、傍の兵士のズボンを、足で力一杯に蹴上げた。

「いててっ……この野郎」

怒りに燃えた兵士の手が、ケイの髪の毛をグッと掴むと、引き上げる……

「ヒェーッ」眼を吊り上げたケイの悲鳴が、機内の空気を再び震わした。

「解いてくれ、だって。俺を蹴とばしたお礼に、逆に一本ふやしてやるからな……」

ロープを受けた兵士は、ケイの半身を引き起こすようにすると、

「さあ、開くんだ」と言いながら、必死に合わせようとする腿をこじあけて、スリップをまくり上げると、二筋のロープを股間に通した。

前にまわした縄を、首を挟むように肩で二つにわけ、後手のところで他端をくぐらせると、

「さあ、いいか」と絞り上げる。

尻の溝に、後にまわされた縄が喰い込み、

ケイは、

「ひいっ……ああっ」と、身をもだえ、体をのけぞらして呻いた。

⑪ 護送

婦人隊員達は、ケイの犠牲心によって、スパイの身を発見されず、鎖で数珠つなぎにされたまま、タラップから降りると、二台の護送車に分けられて、押しこまれた。

ロイは、ニールとオハラと共に、後の車だった。

粗末な二列の椅子、小さい両側の窓には、覆いが被せてある。

「さあ、乗るんだ」半裸にされ、痛ましい縄目のケイが、兵士に縄尻を引かれて、よろめくようにして乗せられて来るのを見て、「ケイ……」と、思わずロイは口走った。

「しゃべるな」と険しい目付で、兵士が銃口を向けるのを見てロイは唇をかんで黙った。

護送兵は二人だった。彼等は三人の向い側にすわった。

――後の扉が閉じられ、前の車に続いてロイ達の車も動き出した。

ピチピチと、タイヤがアスファルトをかむ音だけが聞えるほかは、あまり物音が聞えない。車がカーブするごとに、手錠姿の三人の体が左右に揺れてふれあう。

だが二人の護送兵の視線は、無惨な半裸体の美しい獲物……ケイの方に注がれがちだ。

自動車の震動に、肌に喰いこんだ縄目の痛さが加わるのか、苦痛の呻きを洩らす彼女の下顎の豊かさが、兵士達には、不思護な色香として感じられるのかも知れない。

しばらくして、車が急にスピードを落したと思うと同時に、車体の動揺が激しくなり、彼女達の手錠の間から、床上に垂れた鎖が、ガチガチと音を立て、荷物が床上で左右に踊りだした。



（飛行機から見たあの丘の路だわ、きっと。逃げるなら今だ）とロイはとっさに思いつくと、体の揺れを利用して「ガス！」とささやきながらニールの体を小突いた。

彼女の視線が、それに応じた。

車の動揺に、ケイが喘いでいる。

⑫ 麻酔ガス



ロイが、媚をふくめた眼ざしを兵士に向けて、話しかけて、立上った。

「ね、お願い。タバコを一本吸わして……」

「動くな。なに、タバコだって……」

「あら、駄目なの。あっ！」車体の揺れを装ったロイが、ニールの上に倒れかかる隙に、ニールは上衣の下の麻酔ガス発生弾の操作を巧みに終えていた。

静かに流れ出すガスの効果が、予防薬を口にしていない警護兵の上に、あらわれ出したのは、それから数分後のことだった。

「おや、何か臭いぞ」

警護兵の一人が、何かを探ぐるようにして立上ったかと見る間に、グラリと上体を揺らし、床に膝をつくと、十四連発自動小銃を前に投げ出すようにして、床に崩れて、そのまま動かなくなった。

それを見て同僚が、

「おい、どうした」

と倒れた兵士の肩口をゆすったが、それもつかの間、彼も又、そのまま体を折り重ねるようにして倒れた。

（うまくいったわ）ロイとニールが顔を見合してほほえんだ。

「さ、早く」ロイ達は、手錠の鍵を脱し、グイの縛しめも解いて、それぞれ身支度した。

後部で、そんな事態が起きているとは知らずに、車は悪路の峠道を、なおも車体を揺らしながら徐行を続けていた。

一瞬……地軸をゆらして、爆音が空中に散った。

（輸送機の爆破音だわ。きっと）

ロイは、車の中で、直感していた。

車が止って、運転台から人の降りる気配がして、間もなく、

「うわー、凄い。真黒な煙が吹き上っている。飛行場に何か起きたらしい。おーい。ちょっと出て見ろ」

と外で叫ぶ声がした。

⑬ 銃戦

中から応答のあるはずがなく、そこには、息をひそめたロイ達が、拳銃と、警護兵から奪った自動小銃を手に、じっと外の気配に耳をすましているのだった。

「おーい」外の足音が近づいてきて、扉越しに、又声をかけた。

（さ、チャンスよ）ロイ達は互いに眼で、しめしあいながら更に息を呑んで身構えた。

「おい、何してるんだ」外の声が半分ほど怒気を含むと、把手を二、三度ガチャガチャとゆすり、鍵を外す音と共に扉を勢いよく開けた。

中を覗きかけて、腰の拳銃に手をのばす兵士目がけて、ニールの消音拳銃が〝プスッ〟と鈍い音を発して、火を吐いた。

「あっ……」左胸をうち抜かれて、兵士は物もいわずに、地ひびきを立てて、地面に転がって動かなくなった。

オハラが、奪った十四連発自動小銃を運転台に向けて構えると、グッと引金を引いた。

薬夾が散乱し、バリバリと空気を震わす発射音の中で、人の叫び声が運転台から聞えた。ロイは地上に降りて、そっと辺りのようすをうかがって見た。

そこは、カール市に続く峠道、赤く夕焼にもえた西の空が、美しい彩りをそえている。

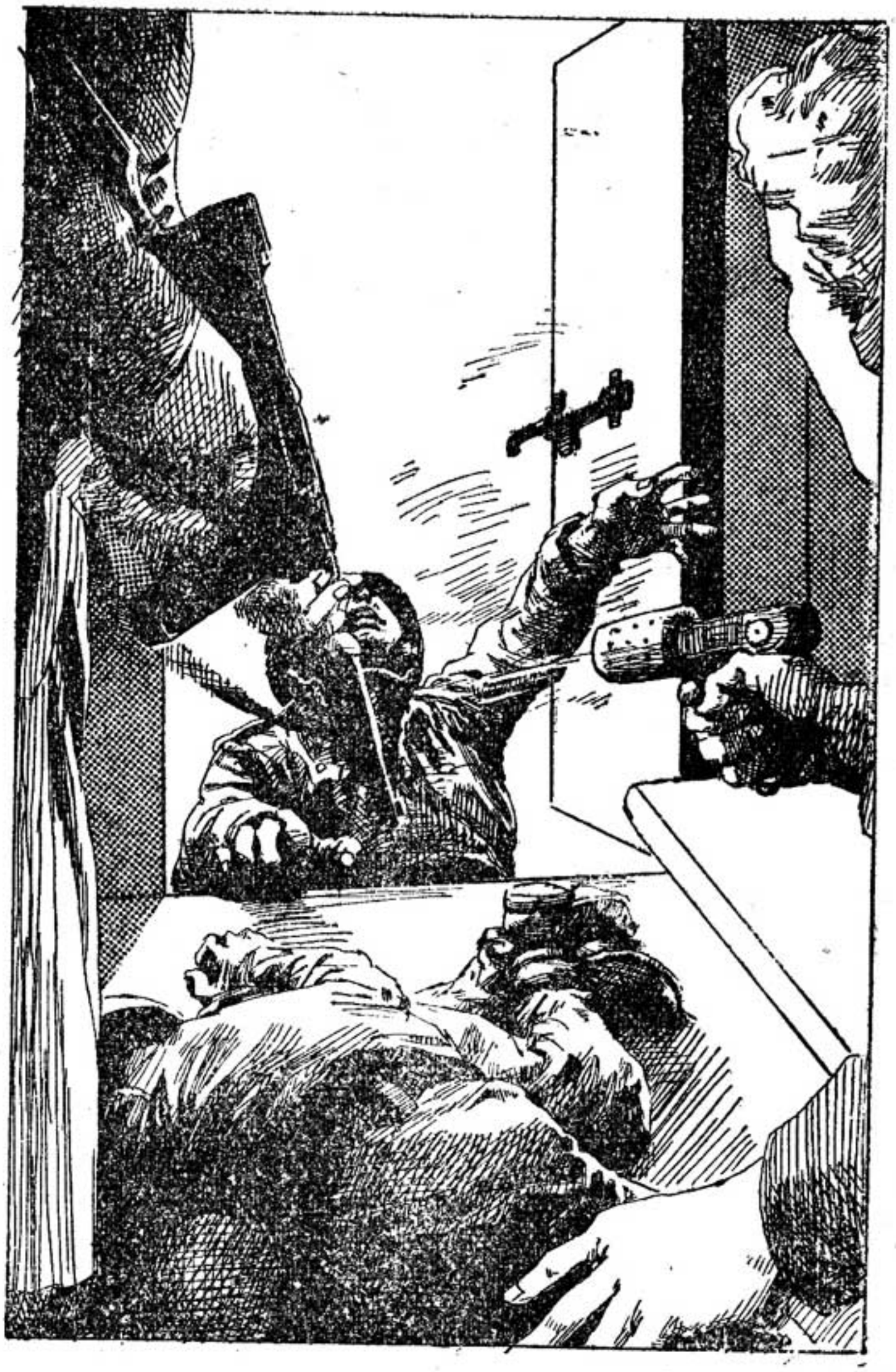
幸い附近に人影もなく、ただ、今の音を聞いて急停車したのか、後方の道路上に横向きになった自動車があるきりだった。

ホッと一息入れて、車の試運転をして見ようと、運転台の方に歩きかけたロイの歩みが止った。それは銃声をききつけた先行の護送車が、引返し、前方三十米位の所に止るのを見たからだった。「オハラ、B国兵よ」

運転台からとび出した三つの影がこっちに駈け寄ってくるのを見てロイが声を出した。

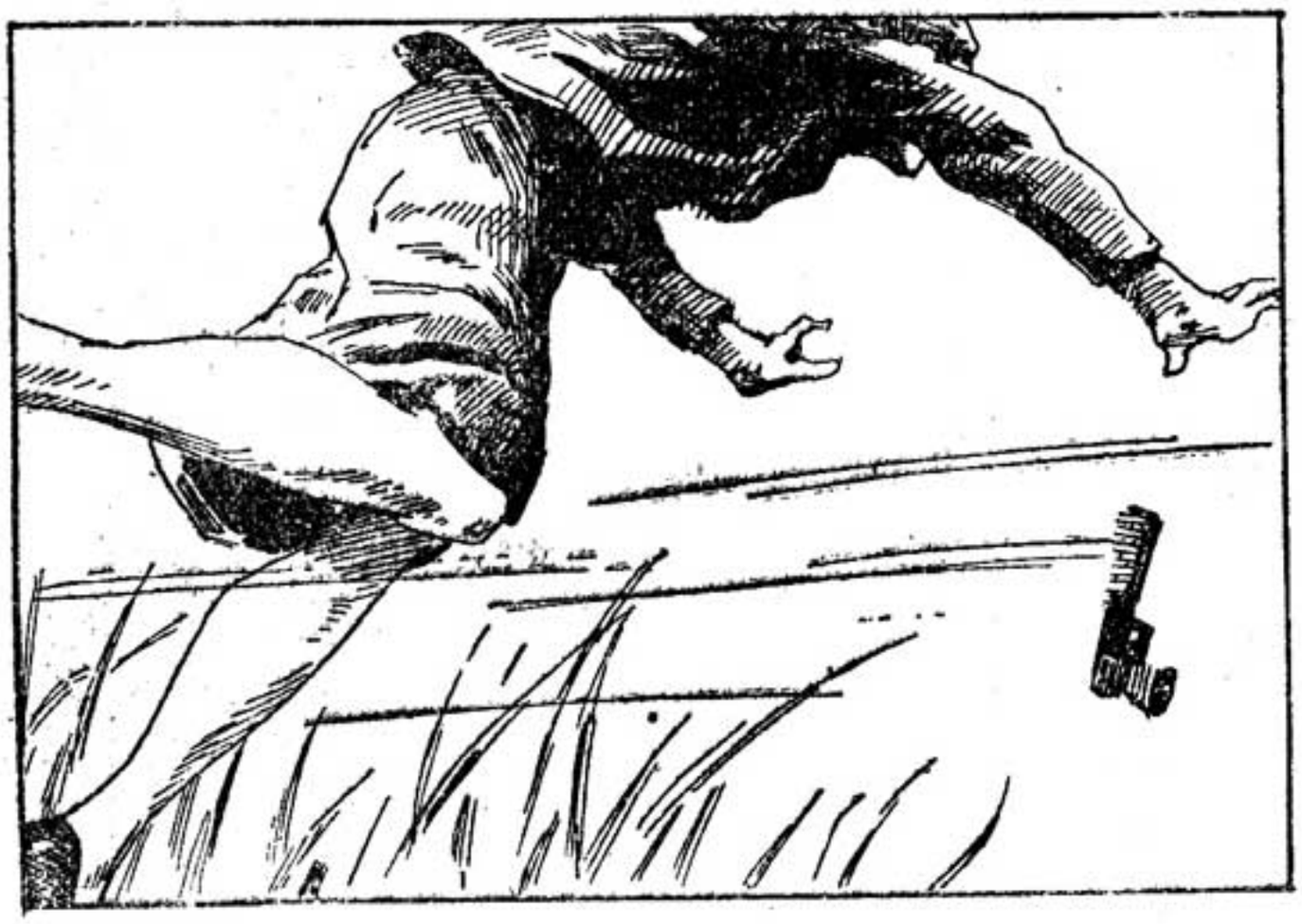
オハラの自動小銃が火を吐いた。

パッと人影は、道端の木蔭の中に散ったがすぐに林の間から自動小銃で応戦してきた。



⑭ ポニー大尉





ヒューン、ヒューン、と銃弾が附近の地肌に注がれ、青白い火花を散らした。

時折、位置を変えては乱射してくる銃声が轟々とこだまし、車体にカン高い音を立てて降り注いだ。

タイヤが音を立てて破裂し、運転台のガラスが砕け散った。

（このままじゃ私達の負けだわ）ロイは、ピッタリと身を車の蔭につけ、掠める銃弾に対して気持を焦立たせてきていた。

突然、別な方向で、連続的な銃声が起きたが銃弾がこっちに注がれて来ないのを知ってロイの眼が、

（おや）

とそちらを覗き見たロイの声に、

（あっ、ポニー）

と、生き生きと輝いた。

雑木林の中に銃弾を浴びせながら動き出した護送車の運転台に、ポニー大尉の顔を見出したからだった。

「ポニー」嬉しさに、思わず大きな声でどなるロイの声に、

「うまくいったぞ！　こっちに乗れ！」と、ポールが応えた。

ニールが、走って行った。

ケイといっしょに、ロイがそれに続こうとした時だった。

今まで沈黙していた敵の銃弾が、狂気のように、二人に注がれて来た。

（いけない）と思った瞬間、ロイは腿に、ジーンと熱い衝撃を受けて、

「あーっ」

と、悲鳴を残すと、道端の脇のくさむらにもんどりうって、転がった。

又、一しきり被我のうち合いが激しく響く中に、遠くからサイレンの音が近づいて来た。

（何やら叫んでいる隊員達の声）

――しかしロイの意識は、すでに遠いかなたに飛び去っていた。

腿を掠めた銃弾で、路傍に意識を失って倒れているロイを、眼の前にしながら、ポニー大尉達は、新たに増援されたB国兵の銃火の前に、その救出をはばまれ、しかも刻々と情勢が悪化して行くのを知って、思いを後に残しながら、その場を逃れることをきめた。

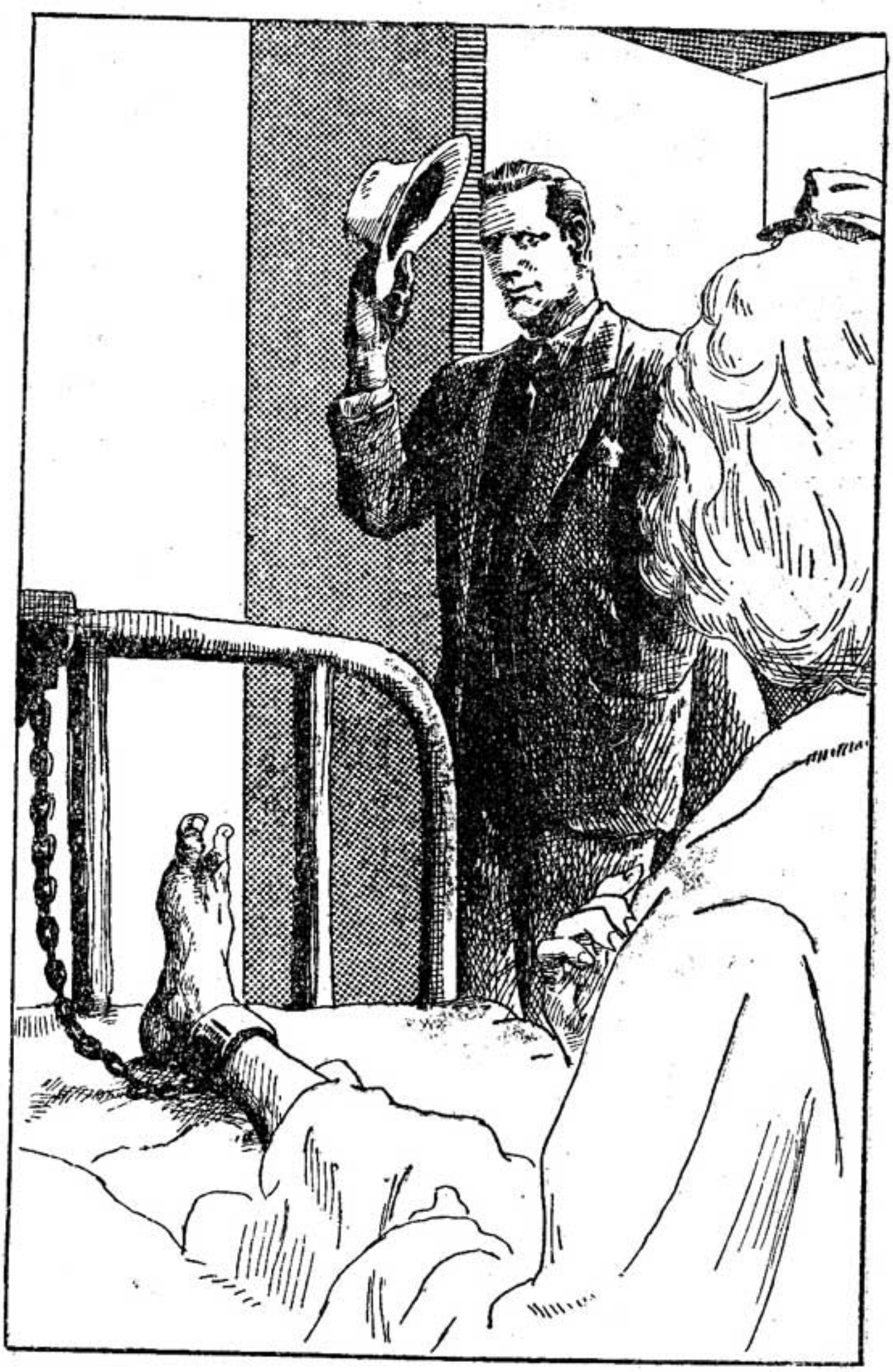
こうして、ロイは、再びB国兵に捕えられ一応、傷の手当のために、カール市にある陸軍病院に送られたけれど、彼女の病室は、一般病室とは異なった小さいコンクリート壁の一室だった。

小さい窓が一つ、高い所にあるきりの薄暗い部屋の中で、彼女は、白いガウンを着せられ、足首をベッドの脚と鎖でつながった鉄の輪で固く締めつけられた姿で……

一日に一回の治療、その他は一切の事柄から遮断された監禁の身を横たえていた。そして処刑される身の悲運を嘆き続ける日が続いた。

こうして日を過すうちに、ロイの傷は次第に快方に向い、もうこのごろではすっかり痛みもなくなって傷口も元通りに癒えていた。

そんな或る日の朝のことだった。——



（今頃、ポニー達は何をしているだろう。それにひきかえてこの私は……）と、ぼんやりと朝食後の一刻を過していた時、ロイは、入口の扉の鍵孔が鳴り、その開く気配を感じて何気なくその方をふり向いた。

「やあ今日は。俺達は、秘密警察の者だが、用事があるのでいつしょに来て貰いたい」

扉の蔭から、見馴れない背広姿の男が二人姿を現わしたのを見て、彼女は、顔色を変えた。

（何しに来たのかしら。もしかすると……）

得体の知れない不安に襲われ、ジッと息を呑んで見守るロイの予感は、不幸にも、当っていた。

とロイに言葉をかけてきた。

⑯不気味な男



「えっ、秘密警察……」彼女は口の中で、そうつぶやくと、反射的にベッドの上に身を起こした。

（いよいよ、処刑されるのだわ、きっと）と期してたこととはいえ、やはり現実にそれが訪れて来て見ると、彼女の心は緊張に高鳴りそして五体がかすかに震えるのだった。乱れた金髪、褪せた唇、疲れ果てた様な顔色、とっさの事に返事もできないロイではあったがその着くずれた白衣の端々から覗いた白い肌が、妖しい魅力を漂よわしているかのようである。

静かにベッドから降り立った彼女から、男が足首の鉄輪を解きながら、

「時間がないんだ。さ、白衣は置いて行くから脱ぐんだ」といった。

（着換えは？）といぶかし気に見返して立つロイの視線に、更に男が言葉を続けた。

「かわりの服かい。それなら持ってこなかったよ。フフ」

「えっ。じゃ裸になれとおっしゃるのですか」ロイは驚き、自分の耳を疑ぐるかのように聞き返した。

「フフ、その通りだよ。君には特別にそうしろと言われて来たんでね。だから、裸とねそれから、ホラ、これさ」

男が冷ややかにこたえ、そして手にした麻縄の束を、眼の高さに上げて見せた。

「……」耐えられないほどの屈辱と羞恥感とから、頬をほてらしたロイは、思わずガウンの端を強く握りしめ、そして無言のままで、男達とロイ、その間に重苦しい空気が流れ過ぎて行く。そして数刻……。

「おい、早くしろ。温和しく言う事を聞いた方が身のためだぜ……どうしても嫌だと言うなら……」男たちの眼が妖しく光った。

ロイの運命は？次号御期待下さい

灰色の壁の中

★隔絶された冷たい壁の中で，囚人達は生き，悩み，声なく訴える。むせかえる人間臭と赤裸な魂のぶつかり合うなまなましい手記！

新谷芳美

既決囚

検事の求刑は、無期である。

が、裁判長は十三年を宣告した。私はこの情状酌量に、ひそかに落涙したのである。犯罪の理由はどうあろうとも、重罪を犯したことは間違いのない事実であって、それに価する刑罰は当然であったのだから私は覚悟していたのである。ところがこのように、予期に反した判決宣告を受けたのだから、思わず、嬉しさに落涙したのであった。

私は、この日をもって、既決囚としての青い囚衣を着せられることになって、O刑務所へ、初めて見る名も素性も知らない多くの裁判確定者と一緒に、護送されることになった。

冷たい手錠を拇められ、腰にロープをもって十名の囚人が珠数繋ぎにつながれて、それが四組、トラックに乗せられた。何のことはない、ちょうど、豚か牛が、屠殺場につながれて行くような恰好で、トラックに乗せられて真夏の町々を、埃を捲きあげてO刑務所へと疾走したのであった。

O刑務所に着いた私達は、汗と埃にまみ

れて、お互いの眼ばかりが異様な昂奮で光っていた。

O拘置所の護送看守が、手早く私達の腰縄を解き、手錠をはずした。そして一つの建物の中に追い込まれた。そこは、O刑務所の新入調所である。

O刑務所の会計課の看守や領置係の看守が、私達の所持金や衣類雑品を調べる。一人一人が所持品の点数を合せて記入してもらう。それには、C拘置所から身柄と一緒に届けられた領置書類と引き合せるのだ。だがここでは、青い囚衣と着替えながら調べを受けるのだから忙がしい。

「おい、お前、服が一着足らんな。不明と書いてあるが、どうした?」

「へえ、モク(煙草)と替えましたんで」

「何、モクと——、こいつ、反則ばかりしてんな、懲罰もんだぞ」

「へえ、どうもすんまへん」

看守部長に叱られて、ペコペコ頭を下げている若い男がいる。かと思うとまた、

「おっさん、お前、鍋釜や布団まで持って来てるが、なんでこんなもんまで持って来たんや?……」

「世帯を畳んで来ましてん」



「なんや、殺しか——。なるほど殺人と書いてあるな、馬鹿なことしたもんやな……」

「お前ひとりもんか——」

「そやおまへん。嬶がおましてんけど、間男しやがったもんやさかい殺しましてん」

「へえ——」

「阿呆なことしたらあかんで、ええ齢して……」

「すんまへん——」

「まじめにつとめて、早く出してもらわなあかんな——」

親子ほど齢の違う若い看守から、初老の男が、眼に涙を溜めて神妙にかしこまっている。

私は何一つ所持品を持っていなかったので、簡単に調べがすんだが、こうして取調べの中に、おぼろげながらも、お互いの素性がわかったので、何かしら親近感が湧いて見合す眼に親しさが籠められて来た。

そしてそこで、番号が決められた。称呼番号である。この日から、何の某という姓名は、娑婆に出る日までお預けである。なかには、病いのために獄死する者もあって、称呼番号は永久についてまわる。ともあれ人間失格にも等しい称呼番号を頂戴するために、私達は一列横隊に並んだ。

看守部長が一冊の帳簿を持って、一人一人の前に立って、

「お前は、二五〇九番。いいか、わかった

と、いちいち念を押して、私の前に来た。

「おい新谷、お前は三一一六番だ、忘れるなよ」

私は復唱した。私自身の心にはっきりいい聞かすように——。そして今日からは、受刑者として三一一六番が私の姓名なのだ。

新入生活

私は一つの独居房に入れられた。称呼番号が決められると、すぐ配房されたのである。皆それぞれに私と一緒に来た仲間（そうだ、そんな言葉でいうほど、お互いが別れ別れになってしまった今は、なつかしい仲間なのだ）私達は、独居、雑居に別れて入って行った。

ここでは、新入者の重罪は独居房、軽罪は最少九人から、二十人位までの多数の雑居房ということになっている。私は強盗傷人という重罪囚だったから、独居房に入れられたのである。

部屋は、いや房は、一、七五メートルの私が手足をのびのびと一杯に伸ばしても、奥行にまだ八〇センチ位のゆとりがある。C拘置所の未決独房よりはだいぶ広い。しかし驚いたことには入口のドア近くの壁が切り抜きになっていて、そこに木桶の便器が入れてあったことだ。どこの刑務所でも、たいがい便器は後ろにあるものなのだが、それが寝れば頭の上になる入口にあるのだから、ちょっと驚いた。後で聞かされて知ったのだが、全国刑務所の中にこうした不潔な設備の所が多いらしい。C拘置所などは入口にむき出しに置いてあったのだから、まだこのほうが、ましかも知れない。ものは取りよう考えようで、けっこう得心のゆくものだ。それにこのO刑務所では第一区から第四区までと第五区という特殊区があって、便器の位置も設備も違っている。私のいる所は第二区の一舎であった。

朝も昼も夜も、真白い三方壁に高い窓、そして分厚な欅の頑丈な扉。ただそれだけを見まわしてぼんやり坐っている私は、孤独という気持も、そして無聊という気持も、憂愁に耐えられないといって、看守は去って行くのだ。

部屋は、いや房は、一、七五メートルの私が手足をのびのびと一杯に伸ばしても、奥行にまだ八〇センチ位のゆとりがある。C拘置所の未決独房よりはだいぶ広い。しかし驚いたことには入口のドア近くの壁が切り抜きになっていて、そこに木桶の便器が入れてあったことだ。どこの刑務所でも、たいがい便器は後ろにあるものなのだが、それが寝れば頭の上になる入口にあるのだから、ちょっと驚いた。後で聞かされて知ったのだが、全国刑務所の中にこうした不潔な設備の所が多いらしい。C拘置所などは入口にむき出しに置いてあったのだから、まだこのほうが、ましかも知れない。ものは取りよう考えようで、けっこう得心のゆくものだ。それにこのO刑務所では第一区から第四区までと第五区という特殊区があって、便器の位置も設備も違っている。私のいる所は第二区の一舎であった。

朝も昼も夜も、真白い三方壁に高い窓、そして分厚な欅の頑丈な扉。ただそれだけを見まわしてぼんやり坐っている私は、孤独という気持も、そして無聊という気持も、憂愁に耐えられないといって、看守は去って行くのだ。

かと思うほど、虚脱状態の日が三日も続いたであろうか、その間、ちっぽけな官食の五等めしさえ食い余していたが、やっと四日ほどしたら、初めて私の心の中に感情らしいものが湧き上って来たのだった。悔と哀しみというものが私の心にもあったのだった。

突然に孤独の寂寥が、悲哀を誘い出して来て、悔恨がひしひしと私をさいなんで来た。私は目頭に浮かんで来た涙を、なんどか。そんな時、ドアに開けられた細長いのぞき窓から、じっと眺めている看守の眼と見合って、戸惑い怯えた。

「おい三一一六番。何泣いてるんや——」

私は黙っていた。すると看守は、

「泣くぐらいやったら、来るなよ、今さら後悔したかてあかへん。これから永い月日や、工場へ出たらけっこう皆おもしろうやってる。何も心配したことあらへんで、くよくよすんなよ、な——」

揶揄やら忠言やらわけのわからんことをいって、看守は去って行くのだ。

——そうだ、永い月日だ。来てしまった以上仕方がない、身体を大切にすることだ。

と思った。しかし十三年は永い。その間にどんな変化が心身に起って来るだろうかと思うと、やはり心配な気もする。が、なるようにしかならない。と、こう割り切ってしまうより仕方のない、灰色の壁の中だった。

私はすっかり諦めることにした。で、食卓兼用の粗末な小さな机によりかかって、役所から貸与される修養書と経典を読んでいた。が、それは無味乾燥であった。白々しく書かれているに過ぎない修養書や経典は、すぐ倦きが来て、見向きもしなくなった。ただ所内発行の機関誌「泉」というのが多少なりとも、社会のにおいをさせてくれるだけだった。

その間、一日に一回または二回位医務調べや教務調べに引き出された。そしてまた作業の適性検査などにも出た。いわゆる新入考査というやつで、これが新入生活には一番愉しみなのだ。特に独居者には、同囚のいろんな顔を見ることができるし、またそっと、ニュースが聞けるからである。

社会のこと、所内のこと、お互い受刑者のいろいろなできごとを、いち早く耳に入れて来てささやいてくれるからであった。それには必ず、放送屋とか新聞屋とかのニックネームを頂戴している者が、吾々の集まった所には一人や二人は居たからであ



る。それともう一つ、新入者にとって愉しいことを書いておかなければならない。それは運動と入浴である。

運動は毎日三十分、入浴は週に一回、夏季は五日目に入浴することになっている。これがまた、ニュースが聞けるので愉しみなのだ。それに、顔馴染もだんだん多くなって、独りぼっちという孤独感が薄らいでいくことだった。みんな、同じように頼りない寂しさを抱いているのだということがわかって、寂しさは自分一人ではないのだと思うと、いつの間にか寂しさわびしさというものを忘れるようになって来る。

これが刑務所に慣れる、というのであろうか——。

さて、明日は待望の工場配役だった。

工場へ、舎房へ

朝から雨が降っていた。

その雨の中を、私達新入者は工場配役係の看守に引率されて、それぞれの工場に配役されることになった。

鍛冶工場もある。洋裁工場もある。自動車修理工場もある。製材工場もある。そして便舎（下肥汲取り）または炊場などへ、一人二人と仲間達が置かれて行くのだ。

「按配やりや」

「元気でな——」

別れる時にはこういって、お互いが励ましの言葉を交わし合った。そして最後に、私は印刷工場に送り込まれた。印刷工場は元、二区にあった。それが四区へ移転したのだ。従って新築工場で木の香もさわやかで、気持がよかった。

私は印刷工場へ配役と知ったとたんに、この第四区を思い出したのだった。それはC拘置所でまだ未決囚でいた時、多くの前科持の被告から聞いていたからである。

「O刑務所へ行ったら、四区へ行けよ、舎房は新しいし、房内は寝台と水洗便所だ。とても感じがよい――」

と聞かされていたので、今夜からは寝台で眠れる。第一、鼻先に便器がない。水洗便所だということは、清潔な感じがして、たまらぬ嬉しさだった。

さて、印刷工場の担当看守は福田という、まだ二十五六の若い看守だった。

その担当の福田看守が私にこういった。

「新谷、お前は今日から当工場の一員として働くことになったのだが、ここは社会の工場と違って、作業能率よりも規律規則を守るということが第一なのだ。作業能率を上げることも大切だが、反則をしないということが、お前達受刑者にとって一番大切なことなのだから、そのつもりでまじめにつとめること。第一雑談は一番やかましいのだ、絶対にしてはいけない。わかったな――」

私はかしこまって神妙に聞いていた。

「よし、ではお前は紙細工工だ」

福田看守はこういって、一人の齢若い作業補導工を呼んで、

「おい、役席場所を決めてやれ」

とこう命じた。

「おい、こっちへ来い――」

その作業補導工、つまりここでは雑役さんに連れられて、私は三十人ばかりが藁の円坐を敷いて坐って仕事をしている場所へ行った。

そこで、懐炉灰の紙袋を貼っていた。

――はは ん、今日からこれをやるのか。

と私は思ったが、変な気がした。

印刷工場というからさだめし、機械の手伝いをして油まみれになるのだろうと思っていたが、案外にも、糊まみれになることになったのだ。あとで聞いてわかったのだが、やっぱり、人間としての温かい心は持っているのだ。

これが、来るところへまで来た、お互いの不幸への同情というのであろうか。

そして一日が暮れた。いよいよ水洗便所

のある、舎房へ帰るのだ。私は初めて検身場に入った。

「前の奴のするとおりにやれよ。称呼番号を大きな声でいって、両手の掌を広げて、足の裏を見せてから口を大きく開けて、横に渡してある丸太ン棒を渡るのだ。ええか間違うなよ。間違うと、検身の担当にどなられるぞ――」

親切な雑役さんが、こんこんと噛んで含めるようにこう教えてくれたのだが、やっぱりその場になると、まごついてしまった。というのは、検身場の異様なありさまに気押されてしまったのだった。誰も彼もが、一糸まとわぬ裸だし、男のしろものを平気でぶらぶらさせている。そして検身口へ一列に並んで行くのは、まさに奇観だ。荒彫りのような裸体美もあれば、女かとまちがうほどの色の白い、ぼってりとした柔肌の美男子もいる。もし、それぞれのポーズをとって、動かずにいたら、彫塑家のアトリエか、展覧会場にでもいるような錯覚を持ったかも知れない。

ともあれ、私も裸の行列に並んだ。だが私の痩せた裸身はみすぼらしい。それにしても案外受刑者が肥っているのには驚いた。

さて私は検身口に立った。が、向う側に検身の担当看守が鋭いまなざしで、私の一挙一動も見逃がすまいとして、じっと見詰めていたから、あわてて両手の掌を開いて大口を開いてしまったのだ。

「こら、称呼番号だ」

看守がどなったので、なおさら泡を喰った形で、私は急いで、

「三一一六番……」

と早口にどなり返した。と看守が、

「わからへん、もう一ぺん――」

で私はこんどゆっくりと、一字一字切り離して番号を唱えた。

「三　千　百　十　六　番――」

すると、どっと哄笑が湧き起った。裸の男達の笑い崩れた顔と、いかめしい顔を崩した看守の顔とが、私の眼前にぐるぐる揺れ動いた。私は真赤になって、眼の前の横に渡された丸太ン棒をどう渡ったか知らない。新入者のためにわざわざ舎房衣を持って待っていてくれた雑役さんの手から、引ったくるように舎房衣を受け取って着た。

そして、舎房へ連れ込まれた。

私の入った舎房は、一舎の階下六房だった。ここは裏庭が運動場になっていて、陽当りのよさそうな房だった。事実、免業日といって、日曜または特別な休日のことなのだが、そんな日には、一日陽が当っていた。

房内は片側に五つ、反対側に四つの板張りで仕切りのある寝台があって、便所は水洗便所であった。上半身が透して見えるガラス囲いの中の水洗便所はたいへん感じがいい。気持だけでも、清潔なのが嬉しかった。

午後五時三十分、各工場の配役受刑者の還房終了のサイレンが刑務所の隅々に鳴り響くと同時に、舎房人員の総点検が始まった。これは刑務所にとって、一番重大なかつ厳粛な人員点検である。

私のいる一舎でも、夜勤看守が大きな声でどなった。

「一舎階下、点検――」

同時に各房いっせいに、居ずまいを直して正坐し、点検を待つのだった。一房から順番に各人称呼番号を唱えて、点検を終ってくる。私の房も、どうやら無事に点検が終った。

さあ、これから就寝の命令が出るまでの

二時間、大きな声は出せないで喋り放題、受刑者にとって一日の箝口令から解放された愉しいひとときなのだ。お互いがいいたい放題なことをいって、愉しんでいる。

私はこうした雑居房は初めてでもあり、また何となく珍らしく愉しい気持がした。もう独居にいるような孤独ではないのだ。これから永い間、一緒に暮して行かねばならない友がいるのだ。

私はこの夜、自分の犯した事件の話をさせられた。どこの刑務所でも、新入者にさせるしきたりだという。

間もなく、七時四十分、死の憩いに入る就寝の号令が、小さな声でだました。

型めし

私が印刷工場に配役となって、はや六ヵ月がたっていた。いっぱしの受刑者ぶりになった私は、作業も変って植字工になって、正規の印刷工になったわけである。紙細工と違って、食等も一等食上がって、三等食になった。紙細工は四等食である。

ここで「めし」の等食をちょっと説明しておこう。

「めし」は、一等から五等食まであって、それが文字型のある丸い器に炊きたての釜めしを入れて型を抜き出すのであるが、それが熟練とは云え、なかなか手早い。何しろ、焼けつくような熱いやつを扱うのだから、炊夫は大変である。初めのうちは手の皮がすっかり剝けてしまって、まるで火傷でもしたようになることはしばしばだそうだ。特に夏場は大変だ。汗だくだくになって掲かれた「めし」はしまう。だがこうして掲かれた「めし」は冷めるとすっかり固まって、つかんでも箸で突き刺してもちょっと崩れない。この「めし」という。だが受刑者のみならず役人達までこのいっている。

そして一等食はだいたい重労働に支給され、後は作業の軽重によって定められているが、五等食だけは、新入考査中の者と昼夜通しの独居拘禁者と、それに反則取調べや懲罰者のみに給されるのである。もちろん懲罰には減食処分もある。一等食は二合七勺位で後はそれに準じて等食の量は下がっている。五等食で一合ほどだ。むろんこれは炊飯ではなく、生で麦の六三である。

だが受刑者にとっては、この僅かばかりの「めし」が一番楽しみであり、また一番待たれるものなのだ。なにしろ、一年中この「めし」以外には何の喰い物もないのだから。時には寄贈もあり、また祝祭日には紅白の大福餅やおはぎなどが支給されるがそうしたほんの五六回ほどの間食の甘味品を除いてはこの「めし」だけである。だから、「めし」が待たれるのであった。今のお菜に期待がかけられるのと楽しい想像を日は何のお菜だろうか？　と楽しい想像をえがく。すると、必ずニュースが入って来る。

まず炊事夫が朝食を運搬して来ると、食当番なり食事配膳係の者からニュースが受け継がれて、それが工場内の、先にも述べた放送屋とか新聞屋なる受刑者が、

「おいどうだ、ええニュース聞かしたろか」

「なんや、ええことあるのか？」

「今晩、じゃが豚だ」

「えっ、ほんまかいな」

という具合に、聞かされる者は喜びと期

待とに胸元から咽喉へ生唾が込み上げて来るような思いがするのだ。まさに垂涎三尺というところだ。じゃが芋と豚の煮込は、刑務所では御馳走である。そして愉しいタ食を待つことになるのである。

ついでにここでお菜の符牒を一部並べて見ると、うずら豆が赤鳩、大根が旅役者、ひじきが闇鉄砲、昆布と大豆と豚の煮込が軍馬、鮭が赤煉瓦という具合にいろいろ符牒があるのだ。

ある時、それはたしか春であったと記憶するが、私が五六年もつとめて、もはや工場では、一番の古参になった、ある日のことである。

昼の食事の時に、思いもうけぬ鯖の刺身が出たのだ。これはさすがの新聞屋や放送屋達も聞き洩らしていたか、あるいは炊夫がわざといわなかったのであるか、とにかく、刑務所始まって以来の初めての刺身だったから、さあたいへんだ。工場全員食堂に集合して、それぞれの膳板、ちょうど一膳めし屋の食卓と同じ恰好の食卓で、西側に長床几がある。片側に五人ずつ腰を下ろすことになっている。で私達は自分の定められた席に着くと、まず膳板の上の小皿に盛られた刺身を見て、お互いが相好を崩してしまった。

「ほう、珍らしいやないか――」



「どないなったんや、いったい……」

「あした、大丈夫か?」

「また、一週間菜葉ばっかり喰わせるんやろう」

こんな私語が、あっちにもこっちにもしている。たしかに御馳走のあった後は、数日お菜が悪くなることは事実であった。年度末の予算の金が余った時は、数日御馳走のつづく時もあるが……。だが、目前の鯖の刺身が、きざみ紅生姜の色の鮮烈さと、わさびの食欲をそそる香りに、誰もの顔が、明日のお菜を案ずるより、目前の御馳走に満悦していたのである。

私が十年間、刑務所にいた間に、後にも先にも、たったこれ一度きりの鯖の刺身だった。おそらく今後二度とあるかどうか?

だいたい刑務所という所は、朝は味噌汁それも名まえは味噌汁だが、味も色も香もない汁と、昼と夜は菜葉の煮込か寄せ煮ぐらいのもので、他に別菜と称して煮魚か焼魚があるが、そのいずれもが、娑婆では買い手もなさそうな材料ばかりであつた。

ただ正月だけは、見た眼には体裁のよい折詰料理が出るが、それも中身は貧弱なものである。しかし、受刑者にとっては、この正月料理の噂が、十一月末頃から始められると、何となく、子供のように正月が待たれる。折詰料理を待つことも事実である

が、それよりも、もっと受刑者にとって楽しみなことは、受刑者出演による素人のど自慢や、各種の演芸会が催されるし、間食として三ケ日、飴などの甘味品や蜜柑、りんごなどの果物が貰えるので、一番の楽しみなのであった。もちろん、雑煮餅もあればあべ川餅などもあって、お互いにまるで子供のように心にはしゃぎをもって楽しむのである。こうした正月の御馳走を、受刑者は一年中の喰い溜といっているのであった。

それに、三四年前から、各区の舎房内にラジオが取りつけられたので、これだけはどんな受刑者でも喜んだ。社会のニュースが聞ける。（ただし、受刑者に聞かせて悪いものは除く。従ってほとんどスポーツなどである）漫才、落語や浪花節も聞けるし今流行のシャンソンとラジオドラマに人気が集まって、一日の作業の終りを待ちかねている者もあるくらいで、若い人も老人も、共に楽しむのだ。

特に大晦日の歌謡歌手の勢揃い番組は、もうたいへんな騒ぎで、房内は騒然ごうごうたるありさま。その後は、除夜の鐘が私達を静かな眠りに入らせてくれる。

映画と演芸の会

「おい、あした、映画やで――」
「そうか、題はなんや？」
「長谷川一夫の月形半平太や」
「ほう、テクニカラーやな！」
「山本富士子が見られるな……」

明日は四区の映画だとニュースが飛んだら、もうこんな会話が始まっている。

月に一度、全区の受刑者およそ四千人が待ちかねている映画なのである。それだけに、一週間も前から何だ彼だと、嘘とまことの入り交ったニュースが乱れ飛んだ。その映画は街の映画館から借りて来るのであって、映写設備は第二区の教誨堂にしつらえてある。そして映写機は、大枚四十何万円かを出して購入した三五ミリ映写機が据えられてあるのであった。

そこで朝から、喃々と恋を囁くキッスシーン、涙を絞る親と子や夫婦の愛別離苦を見せられ、ほろ苦い甘さと哀しさを胸に抱いて、また一日の仕事をするのだが、何かしらのやるせなさが、ふっと、娑婆への郷愁を呼ぶと、黙々と作業をしているだけに思わず溜息が出る。そうした辛さは、社会人とはまた別な味気ない辛さであって、受刑者だけが知っているのだった。

映画とは別に、年三、四回催される演芸会にもまた、愉しみがあった。

ストリップやロカビリー的なものはないが、普通の軽音楽や歌謡歌手の三流どころも来たし、素人劇団も来た。ラジオでお馴染の芸能人達も来てくれた。それらの人達は私達を爆笑させ、腹の皮をよじらせて、たとえしばらくでも娑婆気分に浸らせてくれたのであった。かと思うと、人気相撲の関取衆が慰問相撲に来てくれるというので前日には土表を作る砂運びで大騒ぎしたこともある。

こうした催し物は皆、社会の篤志家の寄贈になるものであったから、受刑者は毎年その季節が来るたびに、首を長くして待っているのであった。今年もまた、誰か名士が寄贈してくれはしまいかと思って、はかない楽しみを抱いて待っていたのである。そんな時にはきまって、どこかの区から、風声鶴唳的なデマが流されて来るが、無味乾燥な生活をしている受刑者達は、デマと知りつつも、けっこうそれで楽しんでいるのであった。

だがそうした催しのあった夜は、多くの受刑者が秘かに、どれほど枕を涙で濡していたことか……。

親を想い、子を想い、妻を想い、そして自分自身のみじめな境遇を想って——。

恩赦とは

——全面にしろ、単独にしろ、媾和会議が開かれれば、その調印の日には必ず恩赦がある。今度の恩赦は広範囲だから、罪名を問わず全受刑者や裁判確定者は間違いなく恩赦に浴することができる。だから早く裁判の確定をして、既決に下がれ……。

と、社会ではもっぱらの噂があったし、弁護士のみか検判事までがそういったので警察の留置場にいる者は一日も早く未決囚になることを望んだし、拘置中の者は裁判を早くしてもらおうとあせった。また裁判公判者は、刑の軽重を問わず即日服罪し、上訴中の人達もあわてて上訴権を放棄して急いで刑務所へ下がって行ったのだった。

私も必ず恩赦が貰えるものと、信じていた。ところがその調印の日、私達は破廉恥罪の重罪の故をもって、恩赦に浴し得なかった。洩れたのである。

その日、四月二十七日午前九時から私達受刑者は教誨堂に集合した。恩赦の条文発表を聞くためにである。耳に全神経を集めて、分類審議長の読み上げる条文の一言一句も聞き洩らすまいと、受刑者全員が異様な昂奮を顔一面にみなぎらせていたのだ。



私はべっとり、脇下に汗をかいていた。おそらく、全受刑者がそうであったろうと思う。だが、どの条文にも、私達大部分の者は該当しなかった。

恩赦に浴した者の喜びに引きかえ、もれた者の落胆、嘆き、誰がその心の中の哀しみを知っていようか——。

そして、房内では、その日一日、気まずい沈黙が続いた。

恩赦を貰った者は、喜びを胸に秘めて、顔色にさえ出すことができなかったし、貰わなかった人達は、沈痛な顔で懊悩の苦しみを胸の中で味わった。あれほど恩赦を楽しみに、待った日なのに……。

やがて、息苦しい房内の空気を衝き破って、誰かがわめいた。

「何がめでたい媾和だ、ばかばかしい。国家なんか滅亡してしまえばいいんだ。日本中が、原子爆弾でなくなってしまったらよかったんだ……」

破廉恥罪でも重罪には恩赦を与えない。が同じ破廉恥罪でも、軽罪者は恩赦に浴せた、ということは、兇悪犯をより一層に、兇悪犯罪へ馳り立てる。恩赦は社会を呪詛する、国家意識の喪失者を作っているのと

同じだ。

いかなる罪名の者でも、人の喜びは己れもまた、同じ喜びを得たいと思うのは人情だ。何が故に、破廉恥の重罪には恩赦をやれないのか？　私は不思議でならない。

今度もまた、皇太子御成婚の恩赦があるだろうが、おそらく、破廉恥の重罪にはなかろう。全国の刑期執行中の受刑者は、この恩赦の噂を、何と聞いているだろうか。またこの恩赦に期待をかけて、わが夫、わが妻、わが子、わが父の身を案じている、受刑者の家族の人々の心の中を推し測ると私自身が今娑婆にいるだけに、これらの人人に同情を禁じ得ないのである。

社会の人々よ。人の性はみな善である。悔い改めた者の、聖なる心の芽を摘み取るような事をしてもらいたくない。

同性愛

男が女を愛する、これは人間の、いやすべての動物の本能である。だが、男が男を性的対象として愛するといえば、奇異な思いをするよりも、何かしら不潔な気がする。

美しい白い柔肌の女を抱くことは、甘美な陶酔であるが、肉の固い男と男の抱擁に何の甘美さがあるだろう、どんな陶酔があるのだろう。健全な理性を持った者から見たら、いったい何といっていいのだろうか？

ともあれ、刑務所には血腥いまでに物凄い同性愛が行われているのであった。

本間は四十年輩の頑丈な軀を持った、旋盤工だった。田宮は二十三才の女にもまがう白いぼってりとした肌を持った、眉目秀麗な美男子であった。この二人が猛烈な同性愛に、その精魂を狂わせていたのである。ところが、辻という三十才のハンサムな火造工がいた。この男は工場でもボス的な存在であった。この辻が田宮に想いを抱いていいい寄ったのだ。本間の隙を見ては田宮を口説いていたのである。で田宮は、齢の若いボスでハンサムな辻に心惹かれてその恋慕に応じて、本間の眼を隠れて情を通じていた。そして二人の抱擁の度が重なって、同囚の眼につきはじめたのである。たちまち、噂が広がったが、町内で知らぬは何とやら……、で、初めは本間も気づかなかったのだが、同囚の噂はやはり自然に本間の耳にもはいって来たから、納まらないのは本間の胸の中だった。

ある日、本間は人のいない時刻を見計らって、便所へ田宮を連れ込んで辻との関係を詰問したのだった。田宮は泣いて詫びたらしい。あまりにも本間の血相が物凄かったので、田宮は怖ろしくなって泣き出したのだ。本間は田宮に未練があったから、別れる気持はなかったが、田宮の偽らぬ真情が知りたいと思って、隠し持っていた小刀で、田宮の左の小指の第一関節から、切り落してしまった。小指を詰めることは、刑務所の中での三角関係のしきたりであった。だが二人の様子がおかしいと思った辻は、それとなく便所の外からガラス戸越しに、遠くからうかがっていたのだった。ところが田宮が小指を詰めたと知ると、とっさに側のハンマーを握って、疾風のように便所へ走った。

本間をハンマーで一撃のもとに——。が手元が狂ったか、本間は危機を脱して、小刀で辻の右腕の付根を突き刺していたのだ。

一言の声も発せず、無言で行われたこの惨劇を知った担当看守の非常信号に、区の事務所から馳けつけた数名の看守や部長に

三人は引っ立てられた。そして本間は革バンドのついた革手錠というのをはめられたのである。三人とも、完全に懲罰だった。

田宮は軽墲禁一ヵ月、減食二日。

辻は軽墲禁　二ヵ月、減食五日。

そして本間は戎具使用（革手錠）軽墲禁二ヵ月の減食五であった。

これは二区の鍛冶工場で起った、できごとである。が、こうした笑えぬ喜劇が、絶えず、どこかの区の、どこかの工場で行われているのだ。

三角関係は社会でもあることを聞く。また同性愛も社会にずいぶんあることを聞く。が、同性愛による刃傷沙汰は、おそらく刑務所だけであろう。それほど、刑務所での同性愛は物凄い。ばかげたものなのだ。しかし、セックスのはけ口を持たない受刑者の同性愛は、自由に女性を求めることのできる社会の人々の同性愛よりは、不純ではないといい得ないだろうか？

罰房に泣く

ある年、私は些細な事から懲罰を受けた。

家庭連絡未遂による懲罰、軽墲禁一ヵ月減食二日、これが私の懲罰のいい渡しである。

話をすれば、全くばからしい。



話はこうだ。

私は、工場内でも職場の関係であまり親しくしていない、藤村という若い男から、手紙の代筆を頼まれた。物を書くということの好きな私は、即座に快よく承諾して、彼藤村のいうままに手紙を認めたのである。

文意は「この手紙持参の者に金五千円をお渡しください。いろいろお世話になったお礼ですし、また若干の品物を差入れてくれることになっています。ぜひ金子を都合して渡してください」という内容で、名宛人は、藤村の叔父さんだということだった。私は何の気なしに、前後の考えもなく書いてしまったのだが、それをどうして見つかったのか、藤村が橋本副看守長に捕まって虜になってしまったのだ。

当然、私は区の事務所へ呼ばれた。

そして橋本副看の前に立つと、

「両手を出せ」

といわれたので、変だと思ったが、素直に副看守長の眼前に両手を突き出した。と素速く、冷たい手錠がガチリと箝められたのだ。

「何をするんです」

「なんだい、そんなことで懲罰か――」

と社会人ならいうような事柄でも、ここでは懲罰になるのだ。

詰問する私を、じろり見た副看は、
「お前のためだ――」
といいながら、一枚の紙片を私に見せて
「これは、お前が書いたのか？……」
見れば、藤村に書いてやった手紙であ
る。今さら隠して見ても仕方がない。多
分、藤村が喋っているだろうと思って、
「そうです」
「なんで、こんな手紙を書いた――」
「代筆を頼まれたからです」
「この手紙の内容を、お前は何と思って書
いたのだ……」
「別に考えて見ません」
「馬鹿野郎！　これは家庭連絡だぞ。藤村
は近く満期釈放する者に、これを持たせて
やるつもりだったといっている。お前は藤
村から報酬を貰うつもりだったんだろう！
……」
曲解もはなはだしい。私は弁解するのも
ばからしくなって、黙っていた。
――それにしても、藤村の奴、誰に持たせ
て出すつもりだったんだろう。
と私は、工場内の近く満期釈放になる同
囚の顔をあれこれと思い浮かべて見た。そ
れに満期者も、どうやって持って出るつも
りなんだろう？　出る時にはもちろん検身
の上囚衣は脱がされてしまうのだから――
私には藤村の計画が、不可解だった。考
えて見ると、あの手紙の文面たしかに家庭
連絡だ。なぜ藤村は直接叔父あてに無心状
を出さないのだろう？　という疑問も今さ
ら浮かんで来る。代筆を頼まれた時、よっ
ぽど私はどうかしていたのだ。全く間抜け
な話だ。
で、副看守長が何といっても、そのまま私は
「私は知らずに書いた」
といいきった。
「よし、懲罰だ」
副看守長の怒声がとんで、そのまま私は
地下房へほうり込まれた。
そこは文字通り地下に作られた、じめじ
めした湿気のある陰気な、太陽の光りの通
らない独房である。そして絶えず反則取調
べが抛り込まれていて、それが二日三日の
泊りの者が多かったので、ろくに掃除もし
てないのか房内は汚れ放題。しかも便器は
いつも超満員で溜まっているものだから、
鼻持ちならないその臭気が身体の毛穴から
浸み入ってくるようで、身体じゅうが汚物
臭い気がする。そんな中で、それっきり、
何の調べもなく、手錠をかけられたまま、
私は一週間いたのだった。せめて不自由な
手錠だけでも、はずしてもらいたいと思っ
て、担当看守にいった。
「橋本副看に手錠をはずしてもらってくだ
さい」
すると担当看守は、
「暴行を防ぐためだと、副看がいっていた
からだめだよ」
といった。
「暴れもしないものを、手錠かけるなんて
酷すぎる、無茶だ――」
私はいいようのない怒りに呟いた。
人の好さそうなその担当看守は、気の毒
そうに、
「仕方がないよ。ちょっと無茶だと思うが
ここでは何といってもな……」
諦めるんだ。
と担当看守の眼がいっている。で私はも
う二度と頼まなかった。
人権無視。
それは刑務所だけに通る言葉だった。民
主主義国家になって、人権尊重が叫ばれて
いる世の中に、そっぽを向いているのは刑
務所だけなのだ。威圧するような、分厚な

七メートルのコンクリート塀の中へは、人権尊重の風は吹き寄せて来ないのだ。ある看守長はいう。

受刑者が人権を口にするのはおこがましい。ここでは受刑者の人間価値など認めていないのだ、と。

法務省のお偉方は、受刑者にも基本的人権は認める。と一応は発表しているし、また刑務所も、対社会的には、いかにも受刑者の人権を尊重しているもののごとく見せてはいるが、それは対社会的な体裁にしかすぎない。事実は、どんな人権侵害が行われているか、一度刑務所に入って見たまえと、私はいいたいのである。

さて、そして私は、一週間後に、藤村とともに、保安課長から懲罰を言い渡され、一ヵ月間、懲罰房で暮した。

昭和二十五年三月の事であった。

最も当時私は、四級者であったから降級はしなかった。

ここでついでに級等のことを書き記しておこう。

今弁護士をしている某氏が、旧司法省の事務官をしているころに、考案した累進処遇法なるものが、昭和八年から全国刑務所に実施された。読んで字のごとく、逐次級等が累進して行く方法である。

一級、二級、三級、四級者、そして新入考査中の者は級等外の五段階に区別されていて、それぞれの級に応じて物質的にも精神的な面にも、優遇される。戦前各等級によって級別別菜と称して、食べ物をくれたものであるが、戦後は物資の関係で中絶された。しかし、最近また、刑務所は、復活実施している所もあるらしい。

でこの進級については、各受刑者自身の責任点数というものが定められていて、その点数を全償却しなければ進級できない仕組になっているから、刑期によって大体一年目二年目又は三年目、そして五年から六七年目位に長期囚は一級相当者になることができるのである。もちろん短刑期の者、つまり五年以下の刑の者は、ずっと早く進級するが、一級者として待遇されて出て行く者はまず少ない。おおかたは二級止りで釈放されて行く。

刑務所によっては、一級者に仮釈放の準備教育をしている所もある模様である。

娑婆の風

昭和三十三年五月、私は仮釈放の審査を受けた。刑務所の審査会にパスしたのだ。

そして、近畿更正保護委員会へ所長から等の上申によって、委員の面接引見の上審査されて、これもどうやら首尾よく通過した。後は、出る日を待つばかりであった。

だが、その日の来るのを待つ喜びの心の底に、一抹の不安があった。社会の冷たい眼を黙殺して行くだけの鉄石の覚悟が、自分にはあるだろうか……？

再度悪を働くまいと、入所の日に、お前は心に誓ったではないか。と私は、誓をもう一度繰り返して見た。そして出してもらえるという喜びに、もう、何も考えられなかった。

とうとうその日が来た。

私はその日、瀟洒な背広に着替えて、青い囚衣よさようなら、私はそんな気持で、折り目よく畳んで返納した。

そして、颯爽と娑婆の風に当った。

同じ風でも、塀の内と外と、何と感じの違うことだろうか！

私は一生の中で、初めて自由のありがたさを知った。監視が、どこにもないという自由さを——。

女体執念

七

首

（あいくち）

お佐和は男の眼から体を隠したかったが、魅込まれたように動けなかった！……

中林節三
江淵晃夫・画

わめかれる

お佐和は、何度も振り向きたい気持を、むりに捻じ伏せた。

振り向け、振り向け！

そう、大声で、何かが喚いている……。

立木がわめいている。

枝葉がわめいている。

黒い空がわめいている！

足の下の土が、駈け出している！

お佐和の体を、足先から呑み込んでしまうように、足をとめ、お佐和に振り向けとわめいている……。

それでも、お佐和は振り向かなかった。

振り向けば、それでおしまいだと思われた。

お佐和は、何かが、すこしでもそこをはなれようと駈けながら、ちっとも木立の間から出られないのに、ぞっとした。

駈けているつもりでも、本当は、足踏みしてるのかと思えると、お佐和は、考えるのをやめようと思った。

とにかく駈け出すのだ！

そのお佐和の右手に、血の染んだ七首が握られている。

それをすっかり忘れていた。

血に染まった七首を持って、町中へ出たらいっぺんにあやしまれてしまう。だが、そんなことは、お佐和は考えられなかった。

お佐和は、立木によりかかった男のことで頭をいっぱいにしていた。

その男は、まるでお佐和を、そうして待っていたように、身動きもせずに近づくお佐和を見つめていたのだ。

お佐和は、夢中で、右手につかんでいた七首で、胸の下あたりを、突き刺して来たのだ。

男は、声も上げなかった。

お佐和は夢中で、七首を抜くと、逃げ出そうとした。

すると、ぐいと、右手首をすごい力でつかまれたのだ。

お佐和は、その力に必死に抵抗した。

二度と、七首で人間の体を刺したくなかった。それでも、強い力にはかなわなかった。それで、七首をお佐和は自分のほうに向けた。そのままの恰好で、お佐和の右手は、立木によりかかっている男の、さっき、お佐和が七首で突き刺した傷口に押しつけられた。

お佐和は、無言で悲鳴を上げていた。傷口に、右手の拳が、すっぽりはいってしまったような気がしたのだ。肉を裂いた間へ右手をむりに押し込まれた、特異な感触が、腕をつたい、お佐和の五体へぞっとする戦慄を走らせていた。ぴくぴくと、まだうごいているような傷口の肉が、お佐和の右手をじわじわとしめつける……

一度、二度、お佐和の右手は傷口から抜かれ、またそれをひらいて押し込まれた。……

「――どうだ……人を殺した気持ってのは……」



「か、かんにんして……」
そう、お佐和は言いたかったかった。
また、ずぶりと、右手を、立木によりかかっている男の傷口へ押しこまれた。
「うっ……」
と、お佐和は、うめいた。
それでやっと許された。
「恐ろしいってことも、世の中にあるもんだと、これでわかったろう」
お佐和は、無言でいた。
声が出せなかったのだ。
お佐和は、そこから逃げ出そうとした。
「——ちょい待ち……」
お佐和は、駈け出した。
「待てといったら待て！」
お佐和は、すぐうしろに男が追い迫ったのを感じた。
頭の中が、わあっとわめいて振り向きたい気が、こわくて振り向けなかった。
男の手が、肩にさわった。
何かが、わあっと頭からつかみかかるような気持がした。
お佐和は、振り向いた。振り向きざま、右手を振り廻していた。
「わあっ……」
と、お佐和は、本当に声を出してわめいていた。
すっと、切られた袖がうしろへ消えた。
いきなり、髪の毛をつかんだやつがあったのだ。
それで、嘘のように、男の手をつかんでひっくり返ったんだと思った。
お佐和は、夢中で、右手を頭上で振り廻した。
また駈け出していた。
ばさりと、目の前に、葉をつけた細枝が落ちて来た。
お佐和は、飛び上った。戦慄を五体が感じていた。
お佐和は駈け出した。
左の着物の袖を、引っぱっていた。
（あの男が追いついたのだ！）
そう思った。
夢中で、お佐和は右手の七首で、袖を斬り取っていた。
すっと、切られた袖がうしろへ消えた。
お佐和は、あの男が、そのあとに、木の枝にひっかかったお佐和の着物の袖が取り残されていた。
やっと、お佐和は木立から抜け出ることができた。
そこから、土堤は傾斜をなしていた。
ころがり落ちるように、お佐和は道へ駈け下りていた。
そこから、どう駈けたか、お佐和はしらない。
家の格子をあけた。
階段を駈け上る。
すごく気がせいていた。
お佐和の足は、ちゃんと一段一段を上らずに、中途で下りていた。だから、時々、左右の足が同じ段で揃った。そのたびに、お佐和は向うずねに、いやというほどの痛さを覚えていた。
それでも夢中で駈け上ろうとした。
いつまでたっても、二階へ上れなかった。
だれかが、階段を下から引っぱっているような気がした。
それで、一段上ると、一段その段が下っているのだと思った。
（あの男だ……）
お佐和は、ちくしょう、ちくしょうと口の

中でわめいた。
何度も向うずねをぶっつけながら、やっと二階へ這い上った。
ほっと吐息が出た。
そのとたん、足首を片っぽ、あまれた。
どうと、お佐和は畳にころがって、ころがって、きっとうしろを振り向いた。暗くて、あの男の姿が見えなかった。
「ちきしょう、ちきしょう……」
お佐和は、立ち上ると、暗がりに見えない男を、右手の匕首でめったやたらに突き刺した。
なんとも、頼りない相手だった。風のような男だった。
しかし、また、風のようにすばしっこい男だった。
お佐和の振り廻す匕首を、ヒョイヒョイと避けながら、ヒョイとお佐和の右足首をつかんだのだ。
お佐和は、悲鳴を上げた。
つんのめるようにころがった。
両足が宙に躍った。
着物の裾が、ぱっと、尻のあたりまでまくれあがった。
その恰好で、お佐和は、足をばたばたさせた。
不思議なことに、足首をつかんだ男の手はいつの間にかはなれていた。
お佐和は、すっかり疲れ果ててしまった。ぐったり、体を俯つ向けに畳にうつ伏してうごかなくなった。
あの男は、部屋を出ていったようすはなかった。
しかし、二度とお佐和には手を伸ばさなかった。足首も、もうつかまれなかった。
お佐和は、その男に、出て行ってくれ！と言いたかった。
だが、声が、咽喉につまって出なかったし振り向こうにも、すっかりその気力が失くなっていた。
しばらくの間、お佐和は、じっとそのまま身動きしなかった。
何も、まとまったことが考えられなかった。
(あの男は、いつの間にか帰っちまった……)
そう思った。
一歩、お佐和は歩こうとして、
「あっ……！」
どうと、のめって畳に倒れていた。
(なんだ、裾を踏んだのか……)
いつの間にか、帯がゆるんでいて、前合せの上前が、畳にひきずられていたのに気がついた。
だが、お佐和は、さっきも、自分が着物の裾を自分で踏んで、ひっくり返ったなぞとは考えなかった。
お佐和は、あぐらをかくような恰好ですわったまま、
(あの男はどうして帰ってしまったのだろう……)
と、考えていた。
さっきまで、とても、こわい男だった。
(あたしに人殺しをさせた男なんだ……)
お佐和は、ぎょっとした。
右手が、あの匕首で刺し殺した男の傷口にぬめりこんだ気味悪い感触を、思い出していた。

恐怖異色感覚・特集

（あの男は、あたしに人殺しさせたんだ…）

どうしてそういうことになったのか、よくわからなかった。

でも、あの男が、あたしが人殺しをしたと届ければ、あたしは番屋に引っぱられるとお佐和は思った。

（でも、あの男は、どうしてあたしに黙って帰っちまったんだろう……）

お佐和は、両手で、胸の乳房をおさえて、ゆるやかにまわしていた。

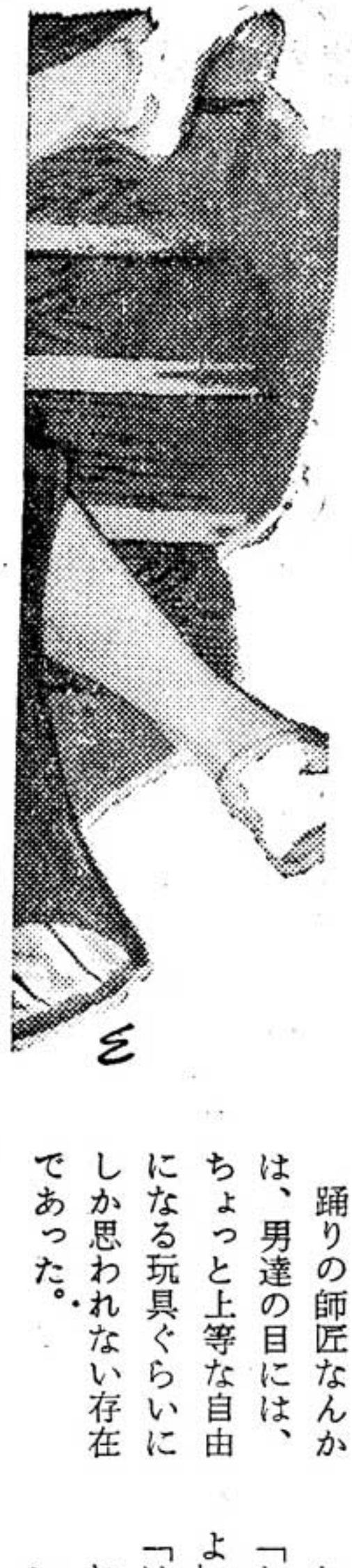
すっかり熟れきって、豊かな乳房だった。

でも、お佐和は、そうしていても、不安だった。

（あの男がここにいたら……）

お佐和は、一晩中、絶対にはなさないのにと思った。

はだかの腕



その日、お佐和は、夕方になって、弟子の一人に口説かれて、お座敷を勤めた。

男達は、五六人いた。

見知らぬ男達であった。

野暮な男達だったが、身なりはさっぱりしている男達だった。

「ご苦労さん、ま、いこう」

弟子と、その座敷へ入って行って頭を下げたお佐和に、一人の男がそう言って盃を出した。

「いただきます」

と、お佐和は、それから何杯も盃を受けた。

酒がきいてくると、お佐和はずいずん思いきったことをする女であった。

こわいものがなくなるのである。

お佐和のように、この年になるまで、旦那も持たず、坂東流の踊りの師匠を通している女には、こわいものがあったら、やって来られなかったのに違いない。

踊りの師匠なんかは、男達の目には、ちょっと上等な自由になる玩具ぐらいにしか思われない存在であった。

玩具に扱われたくなかったら、男に負けてはならないのだ。

対等につきあうか、上に出るかである。

「じゃあ、一つ、踊ってもらおうかな」

「踊りましょう」

弟子のお澄の三味線で、お佐和はかるい踊りを一つ二つ踊った。

こころよい酔いが、うごかす体の隅々までにゆっくりとしみ渡るようであった。

「盃をくださいな」

「よし、よし」

お佐和は、うっすらと汗をかいた体を、順順に男達の前に膝まづいた。

汗をかいたから、お佐和は着物の襟を、すこし大きくあけていた。

男達は、そこから、汗のいりまじった甘い肌の匂いを、かいでいた。

「もう一つ踊りましょうか……」

「頼むぜ」

お佐和は、にっこりとうなずいた。

「お澄ちゃん、一つ、音〆を高めておくれよ」

「はい……」

お澄は、返事をしたが、身なりはさっぱりしていくら男達にすすめられても、お澄は酒を



そ一杯も呑まなかった。

岡っ引の十吉の娘であった。

年は十八だし、美しい、岡っ引の娘だとは思えないような初々しい娘であった。

お佐和は、弟子の中では、よく目をかけている娘である。

すこし高い、三味線の音が、あたりにひびいた。

男達の一人が、すっと座を立った。

何気なく、お佐和は、見送って、唄い出してから、坂東流の踊りを踊りたい気がしただけである。

「お酒をください」

「よし、よし」

お佐和は、さしていった。

男が戻って来たときには、どかりとあぐらをかく。

「どうぞ」

「ありがとう」

盃を渡して、酒を注ごうとしたお佐和は、ハッと手を引こうとした。

盃を出した手をぐいとつかまれたのである。

男の目が、お佐和の顔をじっと見つめた。

お佐和は、握られた手首から、ゆっくりとその男の顔を見つめた。

「こわいか……」

微笑してそう男が言った。

お佐和は、顔を振った。

「いいえ……」

「強いな。俺はこわくってしようがない」

いたずらそうに、目が笑っている。

「あたしが、こわいんですか……」

「そう、師匠も、こわいな」

「そんな……」

そんなわけはないと、お佐和は思った。

（――あたしがこわいなんて……）

お佐和には、わからない。

逆に、お佐和は、笑っている男がすこしこわくなっていた。

気がつくと、酒の酔いが、体からいつの間にか抜けきっていた。

「いい体をしているぜ」

笑いながら、男が言った。

どうして、その男がこわくなったのか、お佐和はわからなかった。

笑っているのだ。だけど、なんだかこわい気がする。

（――本当は笑っていないのかもしれない……）

すっと、男の右手が、つかまれているお佐和の右手首をなぜた。

袖をかるくつかんだ。

すーっと、肩のほうへまくる。

お佐和は、ハッと息を吸った。

そこを見た。

白い、むっちりと肉づいた腕が、肘の上まで裸にむかれて露出した。

お佐和は、左手で、袖をたぐり落したい気がした。

だが、左手は、右手首を取られたときに、前へ体を倒すまいと畳についている。その左手を畳からはなすと、体が男の膝の前に倒れ込むのだった。

お佐和が、右腕を、肩のあたりまで裸にむかれているのを、ほかの男達は、じっと無言で見つめていた。

お澄は、いちばん、びっくりしているようだった。

お佐和の右腕が裸にされていることなんか、こわいもんなんかないだろうな」

「こわいことなんかあるもんですか……」

「そうだろうな、それほどいい体をしてりゃあ、ちっともこわくない。しかし、人殺しかなんかして岡っ引に捕まるとこわいぞ」

お佐和は、フンと笑った。

岡っ引に妙な目で見られることなんか、この年になるまで一度もやってないのが、安心だった。

「ひどい目に合うぜ。師匠は特別だよ。並の女を取っ捕まえるより、ずっと愉しいからな。師匠なら後手に縛り甲斐もある。ひっぱたき甲斐もある。いい体をしているからな」

「いい体をしてると、岡っ引は捕まえたくなるんですか」

「そうだとも。師匠は特にだよ。番屋へしょっ引く。柱を背中に抱かせて後手に縛り上げる。帯をひっ解こうかどうか迷うが、まあそれはあとにして、裾を左右にはだけて見るのが手はじめだな。たまらねえひざが裸であらわれる。その肉づきのいいところへ十手の先をぐいぐい突き入れる。こわいぞ。それで悲鳴を上げれば済むんじゃあないからな。何を

妙な欲望

言ったって、岡っ引はやめやあしない。並の女を取っ捕まえたんじゃあない。師匠のような女は、そうそう玩具にできるもんじゃあないからな。揚句の果ては、帯をひっ解かれて素っ裸にされる。仕様がねえや、師匠はそう男にさせるものを持ってるんだ。岡っ引のほうじゃあ、いつも道を歩きながら、あの女を一つ素っ裸にひんむいて柱に後手にくくりつけられている自分の姿が、さっきから目の前にうかんで来ているのだった。

「脅かさないでくださいよ。なんだかそんなそんな気持も、吹き飛ばしたかった。

目に合わされる気がしてくるじゃあありませんか……」

「はっはっは、こわいもんかこの世にありまだ」

男は笑った。

お佐和は、その男を睨みつけた。

「いいえ、こわいもんかと思った。

せんとも！」

お佐和は、負けるものかと思った。

「ついでください」

「よしよし」

お佐和は、何杯も盃をほした。

酒が体にしみ渡ると、お佐和はふらりと立ち上った。

「踊りますよ。」

そう言うと、お佐和は、自分の手で帯を解いていた。

男達を驚かしたかったし、男のいうようないい体だったら、ちょっと誇示したい気持だった。

それに、男のいった言葉が、ちょっと気になっていた。

番屋で、素っ裸にされて柱に後手にくくりつけられている自分の姿が、さっきから目の前にうかんで来ているのだった。

そんな気持も、吹き飛ばしたかった。

「お澄さん、三味線を頼むよ」

「……！」

お佐和は、着物を肩から落して、微笑しててい

お澄は、びっくりしてそのお佐和を見つめた。

「さあ、唄ってひいておくれよ」

お佐和は、長襦袢一枚の姿で、さっと舞い扇を構えて見せた。

その座敷の廊下で、一人の男がうずくまって、さっきから、内部から洩れる言葉を聞いている男があった。

岡っ引の十吉だった。

娘のお澄が、呼ばれている。

このあたりを歩いていて、ふとそのことを思い出して、のぞいて見る気を起したのだった。

その十吉は、稼業柄と、お澄の踊りの師匠というこことで、お佐和の顔は知っていた。

しかし、お佐和を、それ以外の目で見つめたことはなかった。

十吉は、さっきから、男とお佐和の会話をすっかり、そこで聞いていた。

（――特別な体か……お佐和を捕えるのが愉しいか……縛り甲斐があるとかいったな……ひっぱたき甲斐もあるそうだ……）

十吉は、注意しながら、障子をほんのすこし、うごかした。

自信があった。

いままでに、こうして中からさとられたことはない十吉だった。

十吉の目に、うまいぐあいに、お佐和の姿が映った。

十吉は、ごくりっと生つばを飲みこんだ。

目の中に、いきなり、お佐和の長襦袢姿が飛び込んだのだった。

十吉の耳は、お澄の唄う声も聞

恐怖異色感覚特集

いてなかった。三味線の音も届かなかった。
十吉は、獲物を見つめる目つきになっていた。それは猟師が、獲物を見つめる目つきだった。
お佐和は、踊っていた。
長襦袢の裾が、めくれ上り、ひろ口の袖からは、肩のあたりまで、ときどき腕がすっかり露出していた。わき腹がのぞいたりもした。
十吉の目は、そんなところは見ていなかった。
薄い布地が、はっきりとお佐和の体の線を見せてはくずれる。くずれてはすぐそのあとでハッとさせるような曲線をうごかしていた。
（——ちくしょう、いい体をしてやがる…）
十吉は何度も口の中でつぶやいた。
こんなに、こっちの胸の中をひっつかんで引っ掻き廻す女をいままで見たことはなかったと思った。
（あの女に、柱を背負わしたいもんだ……）
十吉は、その思いが、自分ではもう消すことができないほどの強い欲望にかわっているのだった。
もう、お佐和が、自分の娘の踊りの師匠だということも忘れている。踊っているお佐和を見つめている十吉は、目の前に、番屋の柱に後手に縛ってくくりつけたお佐和の姿態を想像していた。口の中が渇いてきた。
十吉は、自分の持つ十手が、そのお佐和をヒイヒイ泣かしているのにドキリとした。
（——なんとかあの女をしょっ引けねえか…明日まで待てそうもねえ……）
そっと、十吉は廊下をはなれた。

人殺しの味

（——行ったようだな……）
お佐和の、踊りを見ていた男は、そう口の中でつぶやいた。
さっき、厠へ行って、十吉が裏口から入って来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。人を殺して盗む。ある
は、盗みの途中で人に見られ、その人間を殺さなければならない破目になることを、もっとも恥としている男達だった。
それが、今日は、ここへ来る途中、妙な男にあとをつけられたのだ。
稼業に向う途中ではない。まして、盗みをはたらいての帰りでもない。あやしいと思われる身なりではないのだ。それなのに、妙な男はあとをつけて来るのである。
面倒だと思った。
それで、土堤の中へ連れ込んだのだ。
あとをつけて来た男は、いきなり姿を消した男に、キョロキョロした。
岡っ引だったのだ。
ふと歩いて来たのを、ちらと見たのだ。
（どっちが、あの男に告げたんだ！……）
そう考えたのだ。
踊りの師匠のほうか？
それとも、あの若い娘か……
しかし、あの現場を見られなかった自信があった。
仲間の男達も、知らないのだ。
男達は、泥棒であった。
だが、今までに、そのために一人も人を殺したことはなかった。



ガンと、横っ面を殴りつけられた。

「――なンで、俺をつけたんだ！……」

岡っ引は、答えなかった。

「どこで俺の面を見た！」

「しらねえ」

「吐け！」

ガンと、また顔を殴られた。

でも、答えるわけにはいかなかった。本当に、その男を、どこで見たとかというのではないのだった。

「仕方がねえ。面を見られていて、それでつけられたとなれば、生かしちゃあ置けねえからな……」

「うっ……」

岡っ引は、怖ろしさに呻いた。

「吐いたって、助けねえぜ――」

ニヤリと笑ったようだった。

でも、答えようが岡っ引にはなかった。ぐさりと、無言で、匕首が岡っ引の乳の下あたりを、突き刺していた。充分にえぐりつけてから、ゆっくりと引き抜き、岡っ引の着物で匕首の血を拭ってふところへしまった。

どこにも、血のしぶきをつけてなかった。しずかに、残酷に、岡っ引を刺し殺したのだった。

それから、何喰わぬ顔で土堤を下り、ここへ来たのである。

誰にも、見られなかったはずであった。

しかし、ここへ来て、こうして酒をのんでいるところへ、別の岡っ引きが現われたのだ。さっき小用を足しに席を立ったとき、十吉がこの部屋を覗いているのを知った。

男は、それでお佐和にカマをかけて見たの

だった。

だが、わからなかった。

(そっちの小娘かな……)

そう思って、小娘のほうを見ると、小娘は青い顔をしていた。

だが、小娘が岡っ引をひき入れたとも思われなかった。

お佐和は、踊り終えた。

「お酒をください」

「よしよし」

お佐和は、息もつかせないで、何杯も盃をあけた。

充分に、男達の目をたんのうさせたつもりだった。

長襦袢一枚、それだけを身にまとって、踊ったのだ。

そのお佐和は、座敷にいる男達以外の目にも、自分の体のすばらしさを誇示してしまったことには気がつかなかった。

「ひとまず、ここは切り上げよう」

男が言った。

男達はうなずいた。

「あすこで会おう。あの時刻だ」

前もって、打ち合せができているらしく、そういった。

お佐和は、男達を送って出た。送って出て自分もそのまま家へ帰るつもりだった。

祝儀は、もう、思った以上にもらってあった。

「送って行こう」

あの男が言った。

「すみません」

お佐和は頭を下げた。

「送り狼かもしれねえぜ。こわくはねえかな」

「こわいなんて……」

微笑した。

男は、あたしの体に参ってるんだ……

こわいはずがなかった。

が、男は別なことを考えていた。

(——岡っ引が飛び出すかもしれない。この女を連れていけば、女をかせにしてずらかることができる……)

そう考えていた。

男は、お佐和でも、お澄でもよかった。お佐和をえらんだのは、すこしばかり、お佐和の体に惹かれたからであった。

(ほかの奴は一人ぐらい捕まってもいい……だが俺はいけねえ……、八丁政が岡っ引に捕まるなんていう、ドジはふみたくねえ……)

お佐和は、男達を送って出た。送って出て

「すこし歩こうか」

お佐和は、男のわきへぴたりと体を寄せた。

肩が触れ、腰がさわった。

(岡っ引を呼んだのはこの女かな……)

それで、八丁政は、そう思った。

自然と、八丁政は、土堤のほうへ歩いていた。

気をつけているが、いま、自分をつけてる者はないらしい。そんなら土堤へ行って見ることだと思った。

(あの野郎の死骸があのまんまなら、なんてこたあねえからな……)

「どこへ行くんです……?」

お佐和は男に聞いた。

「こわくなったか」

「いいえ」

「どこまでもついて来るか」

八丁政は笑った。

それが負けず嫌いのお佐和に、カツンと来た。

「地獄までお供しましょう」

「生をいうな」

「おや? あたしがこわがってるとでも言うそういった。

んですか」

「いい度胸だ」

八丁政は、お佐和を土堤へ連れ込んだ。

お佐和は恐ろしくなった。

逃げたいと思ったが、一人になるのがこわい。前へ行く男が、急に恐ろしくなった。それなのに、ひとりで土堤を下りるのがこわいのだった。

いつのまにか、お佐和は、男の体にぴったり寄り添っていた。

八丁政は、あの岡っ引を立木に縛りつけて匕首で刺し殺した場所へ近づいた。

ぴったり自分に寄り添っている女を、脅かして見たいところがわいていた。

八丁政は、ぐいと、お佐和の手首をつかんだ。

「これを握るんだ！」

八丁政は、お佐和に、匕首を握らせた。

「いいか、すぐそこに男が立っている。これで刺し殺せ、失敗すると逆にお前が殺されるぞ……」

お佐和は、体を前へ押しやられて、ハッと息を呑んだ。

目の前に、ぼんやり男が立っているのが見えた。

お佐和はあたりを見廻した。匕首を握らした男は、消えていた。

お佐和は、ひとりぼっちだと思った。どうしても、目の前にぼんやり見える男を匕首で刺し殺さなければ、自分が殺されるのだと思った。思い込んでしまった。

お佐和は、頭の中が、すごくわあわあわめき出したのを感じた。

殺せ！

殺せ――

そう、何かがわめいている……

お佐和は、夢中で、男に駈け寄ると、匕首で突き刺した。

うまくいったと思った。

相手の男は、声も立てずに死んだようだった。

八丁政は、呆然としているお佐和を見て、ニヤリと笑った。

（――自分が刺し殺したと思ってやがる……）

そろそろと、お佐和に寄ると、八丁政は、お佐和の匕首を握りしめている手首をつかんだ。

（もう一度、人殺しの味を味わって見るがいいんだ）

必死にお佐和は、こばんだ。

（おもしれえ。この女に、恐ろしいってことはどういうもんか、とっくりと教えてやろう）

八丁政は、お佐和の右手を、自分が前に刺し、切りひらいていた傷口に押しつけ、ひらいた肉の裂け目に押し込んだ。一度、二度、三度……

第二の殺人

お佐和は、全身で、ぎょっとなった。

だれかが、階段を上って来る。

ミシリ、ミシリと、きしる音が、全身を耳にしたお佐和にきこえた。

（あの男だ……）

そう思った。

（あたしが人殺しをしたのを、岡っ引に知らせて、岡っ引を連れて来たんだ……）

お佐和は、あの男が、この家を知らないはずなのを、すっかり忘れていた。

一度、そう思ってしまうと、固くそれを信じていた。

お佐和は、自分が番屋に引っ立てられた姿を目の裏に描いた。

人を殺しましたなんて、白状できるものではなかった。

お佐和は知らない、あたしじゃあないと頭を左右にふっている。

柱に、そのお佐和は、後手に縛りつけられていた。

（ネタあ、あがってるんだぜ。素直に白状するんだ）

十手の先が、お佐和の太腿をぐりぐりえぐりつけた。

いつのまにか、お佐和は裸に剝かれていた。

ミシリ、ミシリ……

お佐和の想念をかき消すようにあたりを、はばかるような足音が近づいた。

お佐和は、ハッとなって、立ち上った。気がついて、七首をさがして、右手に握った。

「――師匠は、そこにいたのか……」

お佐和は、ハッとなった。

（十吉さんだ……！）

弟子のお澄の父親だと思った。

が、すぐ、岡っ引の十吉だと思った。

（あの男は、十吉にあたしが人殺ししたのを知らせたんだ……！）

十吉は、十手稼業を忘れていた。忘れていなければ、血の匂いを知ったはずだった。だが、十吉は酒を飲んで来たし、妙な欲情で頭の中をいっぱいにしていた。

（どうしても俺は、この女を素っ裸に剝いてヒイヒイ悲鳴を上げさせてやるんだ……）

十吉は、お佐和が、どう叩いても埃りが立たないのを、いまいましく思った。

それだからって、もう二年も前に女房を亡くしている十吉には、妙な欲望をおさえることは不可能だった。

「――お、俺は、どうしても師匠をふんじばらなくっちゃいられないんだ……」

十吉は、自分の声が、いつもの声と違っているのに気がついた。

しかし、そんなことは、お佐和は気づかなかった。

岡っ引の十吉があたしをしばりに来たと思っているだけだった。

「おとなしく俺にしばられるんだな……」

お佐和は、無言でいた。

十吉は、そうやってお佐和にまっすぐ見られていると、いくら暗いからって、飛びかかってふん縛るのには気がひけた。

「向うを向いて、手をうしろへ廻すんだ。そうすりゃ。命は取らねえぜ……」

その十吉の言葉を、お佐和は、別の意味で取っていた。

（――おとなしく白状すれば、命乞いだけはしてくれるっていうのかしら……）

「向うを向け！」

と、十吉がどなった。

お佐和は、おずおずと、十吉に背中を向けた。

「すいません……でも、あたしは殺したくなかったんです……」

そう言おうとしたが、お佐和は恐ろしくって声が出なかった。

「手を、両手を上に上げろ！」

十吉は、かすれた声でどなった。

そして、飛びかかるように、お佐和の腰に両手をかけると、夢中で帯を解きにかかった。

「いいか！　俺の自由にならねえと、ひどい目に会うぜ！」

それで、ハッと、お佐和は、ゆるんだ帯をおさえるのをやめた。

もうだめだと思った。

裸にされてしばられるんだと思った。

帯を解いた十吉は、女を素っ裸にしなければ我慢ができなかった。

「自分でみんな脱ぐんだ……！」

お佐和は、着物を滑り落した。

その時に、妙な物音を、お佐和はきいたような気がした。

そうである。岡っ引の十吉は、いつの間にかそこへ上って来た黒い影に、首を絞められて、無言で気を失って、畳にそっと置かれたのだった。

黒い影は、八丁政の仲間だった。

約束の場所に、約束の時刻に姿を現わさない八丁政を心配して、お佐和の家を料理屋で聞き、尋ねて来たのであった。

その男は、お佐和の後姿を見つめた。

お佐和は、湯文字一枚の裸体で向うをむいている。

そのお佐和は、恐怖で、胸をいっぱいにしていた。

十吉を絞め落した男は、お佐和に、八丁政のことをきこうとして、そっと手を伸ばしてお佐和の裸の肩に触れた。

その瞬間……

お佐和は、体をよじって、右手でうしろから襲いかかった（そうだ、お佐和は襲いかかられたと信じていた）男を払っていた。

「うわっ！」

と、男が悲鳴を上げて、どさりと畳に倒れ込んだ。

ちょうど、十吉の体の上である。

十吉は、ハッと気づいて立ち上っていた。

「――お佐和……！」

十吉は、ぞくぞくとして、呆然としているお佐和を見つめて、声に出した。

（この男を殺ったんだ！

だから、大っぴらで女を俺あふん縛ることができるんだ！）

そう思うと、もう躊躇しなかった。

「神妙にしろ、お佐和」

十吉のような岡っ引には、お佐和のような女をふん縛るのは、赤子の腕をねじるように簡単なことだった。

（調べるんだ。灯りをつけたっていいに決ってる……）

十吉は灯をつけた。

それを行灯に移すと、部屋のまん中に持って来た。

お佐和は、その明りの中で、後手にしばられた湯文字一枚の裸体をちぢめていた。

「立て！」

と、十吉は、そのお佐和をひきずるようにして、柱にくくりつけた。

（このひざだ、ちくしょう……この太腿がたまらねえ……）

十手の先が、湯文字を左右にはだけて、ぐいと、太腿に喰いこんだ。

「ヒイッ……」

「ど、どうして人を殺しゃがった！」

十吉は、有頂天だった。

これからゆっくり、思う存分、この女を責められると思って思わずニタリと笑っていた。

「あたしは……」

と、お佐和は、十吉が期待している返事が出なかった。

殺す理由もない。

お佐和は十吉が襲いかかったのを本能的に逃げようとしただけなのだ。しかし、そんなのかもしれなかった。

はっきりしない言葉を、十吉は期待していた。

「さあ、なんでもみんな言っちまうんだ！」

お佐和は、いまにも死ぬような悲鳴をつづけて上げた……。

◎見渡す限り雑誌雑誌雑誌の山の中。百花リョウランの書店の店先に、宝玉の如く光り輝く魅力の雑誌裏窓六月号。

今月もまずデラックスな表紙が目をうばう。

目次を開けば「サア、どこからでも好きなものをお食べなさい」と云わんばかりの名作の山惜しみながらも、買って来た夜は二時までかかって読みましたお世辞ぬきにたんのうさせ、楽しませてくれました。

欲をいえば、時代ものが多すぎるのではないでしょうか。近代的な、都会風の読物もゼヒ欲しいと願うのは、私ひとりではない筈です。もちろん慎重な会議の末に決定されるのでしょうから、偏っているとは申しませんが、現代ものを考えてほしいのです。期待した「未整理の棚の中から」が休みなのはガッカリです。山のように集まる読者の作品から、そのよいところのみを採って紹介する雑誌界では珍らしい試みを期待します。ゼヒこれは続けてください、それから中間読物として軽い短篇を多数入れて下さい。更にマソものもとねがうのは欲が深いでしょうか。それにしても、六月号から一篇をえらべと云われれば「肌絵双紙」に私は一票を投じます。（東京・I・K生）

◎四月号は、今までになくマゾヒスチックなものが三篇もあって嬉しかった。ただいつも思う不満をこの号でも感じたのでペンを取りました。

その一つは、これらマゾ的な小説のさし絵に良いものがないということです。上手なもの、と同時に出来得る限りリアルなものを、という意味で。更にフオーヴなものや、抽象的なさし絵は、やはりこういう小説では物足りない思いだし、つまらないと思います。いうならば、中島喜美さんや、喜多玲子さんの画かれるようなものが慾しいということです。

もう一つは、これは作者への註文ともいうべきものですが、マゾ小説というものは、もっと美しくあって然るべきだと思います。それは全体を流れる感覚の上でもそうですし、作中の主人公なる能動的な女性は勿論、受動的な男性においてもです。不具者のようなものや、少しはけた丁稚などが主人公では興趣半減です。これは前のさし絵にも云える事ですが、マゾの男性が、変にごつごつしたみにくい容貌に画かれる事が多々あります。マゾの読み物には本来不思議な、というか妖しいというか一面の詩的な美しさを持っているものですから、又、S女性、M男性は性格的に多分に知能の高い者が多いのですから、くどいようですが、もっと美しく書き、画いていただきたいと思います。以上の点が、今まで裏窓から得た私の感想といえるものです。編集の方の苦心はよくわかりますが、出来れば、もっとマゾ小説を掲載して下さい。（東京・中野満寿雄）

読者短評

◎裏窓六月号拝見しました。少し本号は時代物が多かったように思います。時代物では、高月大三氏か嶋本春雄氏ぐらいにしておいて、その他は、未発表の作品を少しずつ誌上に発表されたいと思います。佐々木氏の作品など、非常に特異性があり、本誌にピッタリのように思います。また、本誌の内容は、息づまるような小説で満載ですが、ちょっと息抜きに、漫画か、または海外の美しいヌードなど入れてみては如何かと思います。

種々の情勢もあり、編集部の方々の御苦労は大変なことでしょうが、本誌の持つ特異性のある魅力を失なわぬよう、御努力下さいますことを祈ります。

読者も相当この特異性に目をとめて、それが本誌の人気を高めているとも考えられますし、私自身も、裏窓の持つこの魅力を愛しています。時にはノンフイクションの告白物のようなものも一編ぐらいあると、より以上楽しいのではないかと思いますが如何でしょうか。（東京・岡本　敬）

◎一ケ月近くも待ちつづけて買った、まだ印刷のインクの香りも新らしい「裏窓」を、心ときめかせてパラパラとめくって挿絵を見る。それによって、私はその月の善悪をきめます。そして、一週間位で読み終えるのですが、その後はことあるごとに挿絵をみて、次の発売まで待つわけです。一日に五回ぐらいめくっても一ケ月には百回以上本

の頁をめくることになります。それで結構たのしいのです。このように書きますと、私が挿絵に興味をもっていることが、よくおわかりになると思います。本誌の挿絵の横綱は、なんと云っても中島氏でしょう。まぼろし侍の挿絵など、素晴らしいと思います。次の大関級は山田氏と喜多氏です。喜多氏は、元来この種のものでは横綱格ですがこのところ、すこし遠慮がちなところがあります。

希望を一つ、この頃「ある美容体操」の掲載を望む短評がきれないようですが、私もその一人です。グラビアには、美容体操をのせた方がいいと思います。（秋田・SS）

◎小生、六月号裏窓を歓喜の中に読み終りました。その意味で美の絵物語は、相変らず迫真力のある傑作でした。末筆ですが貴誌の一層の精進を望みます。（京都市・京都子）

◎SとMの中に詩が宿るとき、それはアンドロメダの伝説となって、人々の永遠の夢となる。そうした詩情と云う観点から六月号を眺めてみよう。まず「伝奇紅蓮党」の最初の挿絵がずば抜けている。十字架か又は柱の上で空中にかかる女体は詩の極致である。この絵一枚で数十頁の記事に匹敵する。次に「絢爛たる舞踏」のアイデアがよい。タクシーで人知れず運ばれる女も詩の源になる。だから、この物語りの絵は一枚一枚たのしい。

鎖の扱い方もアンドロメダを連想させる。次に「魔童子秘文」もよい。危機に陥る女と、それを救う男とが双生児兄妹というのは奇抜であるが、不潔な兄妹愛にならなかったのは二人を無言にしたからである。その、パントマイムのような扱い方が、女と、それに対する同情者とを一体化している。だから、ククリ猿の絵も楽しい。「巷説人肌呪縛」の鉄帯の夢も、絵もよい二篇で、麗筆の冴えはまだ鈍っていない。伝奇紅蓮党の挿絵は特にいいと思いました。中島喜美の絵物語は、相変らず迫真力のある傑作でした。末筆ですが貴誌の一層の精進を望みます。（京都市・京都子）

◎SとMの中に詩が宿るとき、それはアンドロメダの伝説となって、人々の永遠の夢となる。そうした詩情と云う観点から六月号を眺めてみよう。まず「伝奇紅蓮党」の最初の挿絵がずば抜けている。十字架か又は柱の上で空中にかかる女体は詩の極致である。この絵一枚で数十頁の記事に匹敵する。次に「絢爛たる舞踏」のアイデアがよい。タクシーで人知れず運ばれる女も詩の源になる。だから、この物語りの絵は一枚一枚たのしい。

鎖の扱い方もアンドロメダを連想させる。次に「魔童子秘文」もよい。危機に陥る女と、それを救う男とが双生児兄妹というのは奇抜であるが、不潔な兄妹愛にならなかったのは二人を無言にしたからである。その、パントマイムのような扱い方が、女と、それに対する同情者とを一体化している。だから、ククリ猿の絵も楽しい。「巷説人肌呪縛」の鉄帯の夢も、絵もよい二篇で、麗筆の冴えはまだ鈍っていない。

読者短評

◎小生、六月号裏窓を歓喜の中に読み終りました。その意味で美の絵物語は、相変らず迫真力のある傑作でした。末筆ですが貴誌の一層の精進を望みます。（京都市・京都子）

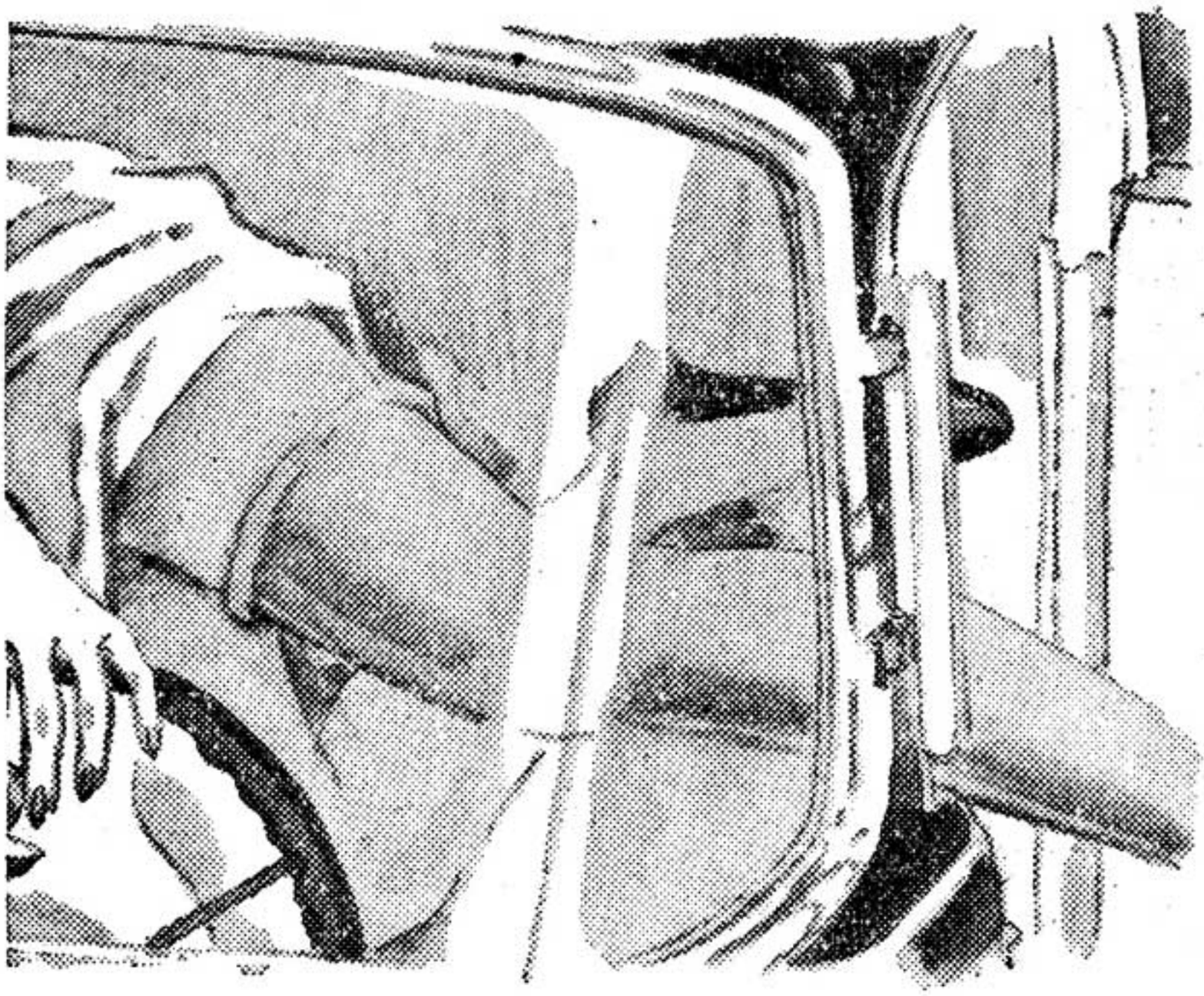
◎SとMの中に詩が宿るとき、それはアンドロメダの伝説となって、人々の永遠の夢となる。そうした詩情と云う観点から六月号を眺めてみよう。まず「伝奇紅蓮党」の最初の挿絵がずば抜けている。十字架か又は柱の上で空中にかかる女体は詩の極致である。この絵一枚で数十頁の記事に匹敵する。次に「絢爛たる舞踏」のアイデアがよい。タクシーで人知れず運ばれる女も詩の源になる。だから、この物語りの絵は一枚一枚たのしい。

鎖の扱い方もアンドロメダを連想させる。次に「魔童子秘文」もよい。危機に陥る女と、それを救う男とが双生児兄妹というのは奇抜であるが、不潔な兄妹愛にならなかったのは二人を無言にしたからである。その、パントマイムのような扱い方が、女と、それに対する同情者とを一体化している。だから、ククリ猿の絵も楽しい。「巷説人肌呪縛」の鉄帯の夢も、絵もよい二篇で、麗筆の冴えはまだ鈍っていない。伝奇紅蓮党の挿絵は特にいいと思いました。中島喜

ホンキイ・トンク

黒羽　新・訳

藤原　隆画



全く一風変った……

首吊りっていやァ、普通、オレたちの目よりも上で、ブランコしてるのが常識だ。だけど、あんまり好いざまじゃねえ。どうしても死なきゃならねえ土壇場に追いこまれても

オレは絶対に首を吊って死なねえな。

二三度そんな仏さまを拝見したが、中でも一風変ってたのは、二重首吊り心中だった。

ドアを中にはさんで、男と女が、ドアへ鼻っ先をくっつけてブラ下っていた奴さ。しかも、縄は一本。恐らくこんな風に吊ったんだろう。まず男が首に縄をしっかり巻きつけて結んでしまうと、椅子にのって、その縄のはしを、半開きにしたドアの向う側に投げかける。反対側の女も、男と同じように椅子にのって、首に縄をまいて結んだんだろう。

それから先は、多分、男が椅子を蹴る。女は椅子を蹴るまでもない。男の体重で、女の身体がうき上る。その拍子に女の足の下の椅子が転がって、それっきり。

だから、男も女も一緒に行っちまったわけだが、オレが見たときゃア、男の足は殆んど床につきかけていた。

みられたざまじゃなかった。

ところで、今度の首吊りは変っていた。オレは、その首吊りを上から見下して、名状しがたい気持に襲われた。人間みたいな感じが全然しなかった。上からみたんじゃア、縄と頭と、肩と、ぶらりと垂れた両腕くらいしかみえなかった。まるで、バスケットを窓から下ろして、下の屋台の品物を買おうとしている、そんなバスケットみたいに、首吊りはブランとぶら下っていた……。

はじめ一寸、縄をたぐって仏さまを引きずり上げてやろうと思ったが、やめた。現場保全だ。オレはすぐ電話で、オコーネル警部に

の犯人はだれだ？　カマトト娘の相手は？

アブチック・サスペンス

縛り首の寝台



頼まれたのはちっぽけなロケット探しだがこの縛り首

まかせることにした。

変った首のくくり方をしたもンだ。オレは改めて部屋の中をみまわした。壁は灰色で、家具といえば、洋服箪笥と小卓に椅子が二つ。それから、窓のところへ引きずられて行ったにちがいない、鉄の寝台。

その寝台の上に、運転手の制服の上着と帽子が投げすててある。

時計をみると、六時十五分。まだ夜は明けていない。もっとも、窓の向うは別の建物で同じような壁がこっちへ向いていて、下は露路になっているから、まだ窓の下はかなり暗かった。

首を吊った先生は、自分の首にまきつけた縄を寝台の鉄柱に結びつけ、窓から下へとびおりたのか、身体の重みで寝台が窓のところまで急激に引きずられたとみえ、窓口の下の壁が床へ剝げておちていた。

自殺する気なら、こんなに複雑な真似をしなくったって、窓から下へ飛びおりるだけで楽に死ねるのに、奴さんは、わざわざ首を吊って宙に、いや、壁に甪うようにブラ下っている。

オコーネル警部がやってくるまで、オレは部屋をさがしてみた。しかし、出てこなかっ

た。たしかに、この部屋だと睨んでいたのにオレの眼の狂いだったのだろうか？

いや、ここになくても、一向オレには構わない。ない方が反っていい。あったことにして、誘きよせるという手もあるンだから……

カビ臭い地下室で

眠くって堪らなかったが、新規播き直しだと思ったんで、もう一度、ウッドロックの邸へ引っかえしたのが七時二十分ごろ。

裏へまわると、丁度、屑をすてに女中のアンナが外へ出てくるところだった。

「あら、あんた！」

ちょっぴり驚いたような顔をしたが、すぐニコリと笑うと、髪に手をあてた。オレは小さい声でいった。

「ケネディは、いるか？」

「いらっしゃるわよ、たしか――」

「何だ、そのたしかってのは？」

「ほんの一時間前だけど、車庫のドアをガタピシやってる音がしたの。だから、そのころ坊ちゃん帰ってきたと思うんだけど――」

「ふん、例によって朝帰りか？」

「朝帰りなんかいい方よ、三日も四日も、黙って家をあけて、平ちゃらなんですもの」

オレはアンナの尻を叩いてやった。

「話がしたいんだ、まだみんな寝てるんだろう。そうだな？　よし、地下室で待ってるから、酒と何か食い物のさし入れを頼むぜ」

「運転手のジョーが、首を吊ったぜ」

「まさか？」

「オレが、たった今、この目で見たのさ」

アンナは嘘だ嘘だといいはった。

「どうして嘘だっていうんだ？」

「ジョーが、首をくくる男と思って？」

オレはうなずいた。「オレもそう思う」

「殺されたんじゃないの？」

オスーネル警部と同じことを、アンナもいう。

「ジョーは、昨日、何時に邸から帰ったんだ？」

「いつもの通り、七時よ、夕御飯を食べてからすぐ」

オレは、もう一口のんでから考えた。

アンナは、猫みたいに、身体をこすりつけてきた。

「ねえったら――」

「よせやい、朝っぱらから」

すぐアンナはウイスキイとソーセージにクラッカーをかえて下りてきた。オレはうっかりよりかかると、ひっくり返るおそれのある長椅子へ、両足をふんばってかけると、まずウイスキイの口のみ。腹がへっているんで

「大丈夫、上の扉に鍵をかけといたわ」

しようがない、これも奉仕（サービス）だ。オレが首を抱いてキスしてやると、アンナは、さっさと、

陰にある壊れ寝台のところへ行って、ジッパーの音を立ててから、服の裾へ手をかけた。

おこされて目をあくと、もう午後二時近かった。アンナはあわてていた。

「大変よ、警察の人がきて、今しらべてるの」

「オコーネルって奴が来たろう?」

「まア、寝ていたと思ったら、あんたって」

実は寝ていたンだが、来たのはオコーネルだとわかっていたから、オレはアンナをちょっとばかり驚かしてやった。

警察は警察。オレはオレだ。

「みんな、家の連中そろっているのか?」

「マギイ嬢さんだけがいないの」

「いつ出たんだ?」

「昨夜から――」

あの尻軽娘め、いったいどこへ行きやがったんだ。二十だってのに、まるでティーン・エージャーみたいに無軌道だ。男とどのくらい寝やがったんだろう? そのくせ、顔は娘マトトと気づかなかった。

「警察の奴らにゃ、オレがいることを黙ってろ。でないと、お前もごたごたに引きずりこまれるからな」

アンナは、唾をのみ下ろすと、黙ってうなずいて石段を上って行った。下からみあげたその脚は美しかったが、時とところをわきまえず、やたらに甘えやがるんで、こっちは始末に困る。

将を射んとせば

ことのおこりはこうだ。

先代のウッドロックは石油成金で、その未亡人が今の当主。七十五の婆さんで、脚がわるいから車椅子を使っている。

婆さんの孫にあたるのが女二人に男一人。この連中の両親は、もう死んでしまっていない。だから、婆さんが一家の采配をふっていて、脚はわるいがまだぼけてない。

一番上の孫娘は、マリアナといって三十二だが、一度ハンフォードという男と結婚して今は別居し、いわば出戻り娘の格、その弟がケネディで二十六。金にこまらないから、働かないで、遊んでばかりいる。一番下がマギイで、これが二十のカマトト娘。

他に家族は執事の老人と、運転手のジョーと、女中のアンナ。

婆さんは財産を自分で握っていて、孫たちには、一月にいくらという小使いしかやらない。もっとも、婆さんが死ねば、それこそ一人頭何十万ドルの遺産がころがりこんでくるはずだから、孫たちは別に不服をいわない。

オレの事務所の電話がかかってきたのは、一週間前のことだった。依頼主は、ウッドロック未亡人。すぐ来てくれというんで、行ってみると、紛失ものがあるから、内々で探してもらいたいという依頼だった。

「外部のもんじゃないよ、たしかにうちのものにちがいない」

婆さんは自信たっぷりにいった。オレはあンまり、そういったたぐいの依頼を歓迎しない、なぜかというと、そんな仕事は、誰にだってできる仕事だからだ、だからオレは断わった。すると婆さん、千ドル出すと高飛車にいった。こんな事仲の成功報酬は、よくって二百か三百なのに、千といわれたんでオレは思い直した。

「で、なくなったってのは?」

銀のロケットだっていう。おどろいた。たかが銀のロケットの紛失に、千ドル出すのなら、新しく注文したって、十やそこらは千ドルで作れるはずだ。

「そうだよ、ロケットだけならね」

「と、いうと?」

「ロケットの中に、ある人の写真が入っているのさ。その写真は、もう、いくら金を出しても買えない写真だし、私が死ねば、いや、そうじゃない。死ぬまで私はその写真を手放したくないからなのだよ」

オレには見当がついた。きっと、婆さん、そのロケットの中に、こっそり昔の恋人の写真かなンか、しまいこんでいたのにちがいない。そんなことはどうでもいい。千ドルの半分、五百を手金にもらってオレは引受けた。

婆さんが家のものにちがいないといったんで、オレはすぐ女中のアンナを丸めこんでしまった。うまいことに、運転手のジョーは通いだし、他に女中はいないから、アンナは個室を一つあたえられていた。

婆さんが、お送りしろと命令したので、アンナが玄関まで送ってきた。いいチャンスだと思ったんで、オレはすぐ晩の約束をした。一目みて、こいつならチョロイと睨んだオレの眼に狂いはなかった。

その晩九時には、もうオレはアンナの個室にいた。

「私を女にしたのは、ケネディ坊ちゃんよ」

嘘をつけといってやろうと思ったがオレはやめて、その代りに、アンナの髪をなでてやりながら小声で聞いた。そのくせ、オレの眼はアンナの胸の隆起に吸いつけられていた。

「お婆ァちゃんの銀のロケットを、いったい誰がとったと思う？」

アンナはオレの下唇を少し噛んだ。

「マリアナか、マギイね」

「ケネディかもしれないぜ」

「坊ちゃんは、あんなものに目をくれるもンですか、もっと金目のものを狙ってるわ」

「というと？」

「大奥様の部屋に、かくし金庫があって、壁の絵の裏よ、その中に、宝石が唸るほど入っているの。でも、金庫の符号は大奥様しかしらないから――」

「お前に、その符号を盗みとれっていったんだろう、ケネディが、こんなふうにお前を抱いてやって――」

「よしてよ」アンナはオレの手をふり放した。

「じゃァ、よそう」こういうと、逆にしがみついてくるのが女なンだ。

「マリアナ、マギイと、どっちだと思う」

アンナは考えていたが、わからないと答えると、もう一度と鼻をならした。

三日目には、いろんなことがわかってきた。

ケネディは酒と賭博がとても好きで、もぐりの賭博場に二千ドル近い借金をこしらえていた。しかし、胴元は、いずれケネディのふところへ遺産が舞いこんだら、その時の清算払いでいいといって貸しっ放しにしていた。女関係はなかった。しいていやァ、アンナくらいなもの。もっとも、アンナなら金がいらないという、打算的な意味も含んでいたようだ。

カマトトのマギイは全く手のつけられない娘だった。家では「お婆ァ様」などと呼んでいるくせに、外に行けば、くたばりぞこないと平気でいっていた。男関係は、まるで浮草も同然、自分の小使いをみんな男とのデートに使っていたから、たいして美人じゃないが男がちやほやした。まだ、マギイが貰うかもしれない遺産を目的にしているボーイ・フレンドは一人もいない様子だった。

一番厄介なのは、出戻りのマリアナ、亭主のヘンリイ・ハンフォードにもあってみた。

「こっちじゃ別れるつもりはないんです。それなのに、ほんのちょっとしたことをとっこにとって、別居すると弁護士の口を通じてい ってきました。どうも、ウッドロック未亡人

問題のロケット



の遺産をあてにしているようです。はっきりしたことはわかりませんが、他家に嫁いでいると、遺産の配分が少くなるからなどと前からいっていましたから、僕の落度をいい幸いに、逃げ出したんじゃないんでしょうか？」

このヘンリイという男は、まことに小心翼翼、典型的な小市民タイプだった。

ところが、マリアナの方は、いうなれば恐妻タイプ。つんと鼻を上にむけ、みくだすようなもののいい方をするし、身体全体が冷えているように冷たい感じの女だった。

ロケット紛失の次第はこんなふうらしかった。それが失くなった晩、珍らしく三人の孫は家にいた。

「十時半だったかしら、大奥様のおよびで行くと『マギイがおきていたら、ちょっときてもらっておくれ』」

こうアンナに命令された。そのとき、プーンとアンナの鼻に香水が匂った。マリアナのいつもつけている香水だという。

「だから、私のしらないうちに、マリアナが車椅子をおして、アンナが婆さんを寝室に送りこみ、ベッドに寝かせたのが、夜の九時半だった。ケネデイとマギイは、居間でテレビをみていたという。マリアナは、婆さんが寝に入ると、自分の寝室へ引き込んだ。

ケネデイは十時一寸すぎ、出かけるよとアンナにだけいいおいて、車でどこかへ出かけて行き、翌朝九時ごろ、はれぼったい眼をして戻ってきた。だから、ケネデイであるはずはないと、アンナがオレにいった。

大奥様のお部屋へ行ってたことは間違いないわ。それから、十分くらいして、マギイも行ったでしょう。その翌朝、ロケットがなくなっていたんだから、とったのは、マリアナかマギイのどっちかよ」

なかなか理路整然たる推理だ。運転手のジョーは七時に帰ったし、執事の老人は八時にもう自分の部屋へ退っていた。

「しかしだぜ、アンナ、お前かもしれない」

「よしてよ、あんなロケット、質屋へもってったって、二ドルも貸してくれっこないわ」

そうだろう。話を聞いてみても、もう色あせた、まことに旧式のロケットらしい。

問題は、そのロケットの中に入っているものだ！

念のため、オレはアンナにたずねてみた。

「写真じゃないかしら？　時々、ロケットの蓋をあけて、大奥様がみていたけど、私がそばへ行くと、いつも蓋をパチンとしめてしまったのよ。寝るときは、枕の下へつっこんでおやすみになっていたくらいだから、よっぽど何かわけがありそうだと思ったくらいよ」

当の婆さんは、ただロケットだけ探してくれとオレに頼んだ。オレはそうなると、ロケットより、ロケットの中に何が入っているかの方に興味をひかれてしまった。オレのこれが悪いくせなンだが……。

ハロルドという坊や

それからあと二日、オレは一応マギイが盗ったと仮定して、マギイには、他の線をたどってしらべた。マギイには、仲がいいというボーイ・フレンドが五人いた。

オレはその中のハロルドって奴に目をつけた。というのは、ロケットがなくなった次の朝、マギイは車を自分で運転して、ボーイ・フレンドと一日中、どこかへドライヴに行き、夕方の五時ごろ一人で帰ってきた。そのときのボーイフレンドが、ハロルドという二十一になる若僧だとわかったので、オレはハロルドを連れだした。ひょっとすると、マギイは、何の気なしに、もし盗んだとしたら、ロケットのことをいったり、みせびらかしたりしなかったと思ったためだった。

「遠慮すんなよ、ハロルド、お前大分のめるって聞いてるぜ」

多少面の寸法は長いが、子供子供しているハロルドは、大人のオレの前で、やっぱり小さくなってしまった。

「用ってのは何です、おじさん」

「さア一杯ぐっとあけなよ。いやね、たいしたことじゃねえのさ。礼はするよ」

急に、ハロルドの眼が輝いた。現金なやつだ。

「マギイ、マギイ・ウッドロックを知ってんな？」

「知ってます」

「どの程度のつきあいだ？」

「どの程度ったって、ガール・フレンドですよ、おじさん」

「この前の水曜に、マギイとドライヴして、どこへ行ったんだ？」

すぐに返事はしなかった。何か考えていたらしい。酒を一息にのみ干すと、フーッと吐息をもらした。

「なぜそんなことを聞くんだい？」

「ドライヴの行き先をいいたくないのなら、別にしいて聞こうっていっちゃいない。だけど、ドライヴの行き先がいえないってはおかしいぜ。出かけたのは朝で、帰ってきたのは夕方じゃないか。誰が聞いたっておかしくない質問だと思うけどな」

これで少し安心したらしい。いきなり今度

はペラペラしゃべり出した。
「マギイってのは愉快な女だぜ、おじさん。実をいうとね、これまでマギイと踊ったり何かしたけど、ドライヴに二人だけで行ったのははじめてだったんだ」
「どこへ行った？」
「L湖まで吹っとばしたよ。一ぺん行きたいと思ってたし、マギイも行ってみたいっていったんで行ってみたんだ。すばらしかったね。町に住んでちゃ水たまりしかみたことがないだろう、本物は。昼から一時間ばかり、思いっきり泳いで、それで帰ってきたんだ」
オレは少々がっかりした。これくらいのことなら、若い連中のよくやることだ。
オレは念のために聞いてみた。
「そのとき、もしや、マギイはその日、身につけの銀のロケットを、マギイがそのロケットを首にかけてなかったかい？」
「首に？」
ハロルドはそういってから、何かいいかけて、それから、ずるそうに、ニヤリと笑った。
「おじさん、ウッドロックの家の人に、何かたのまれてきたんだろう？」
「どうしてお前、そんなことをいうんだ？」
「だって、銀のロケットを、首にかけてたかどうか聞いたりして、人がわるいぜ」
「なぜ人がわるいんだ？　当り前のことをオレは聞いたんだぜ」
「だからずるいといってんのさ」
何だか少しばてているようなロぶりに変った。オレには、すぐその意味がのみこめなかった。
すると、ハロルドが小さな声で、
「僕のせいじゃないんだぜ、マギイがいい出したんだから」
話が飛躍したのでオレは心の中で呆気にとられたが、口では合づちをうまく打った。
「何もオレは、お前さんのことをどうのこうのっていってるんじゃないんだ。さっきもいった通り、礼はする。オレが聞きたいのは、銀のロケットを、マギイがその日、身につけてもっていたかどうかってことなのさ」
「なアンだ、そんならそうと早くいやァいいのに、おじさん、もう一杯奢ってくれよ」

廊下の足音

ハロルドもカンちがいしていたし、オレもカンちがいしていたんだ。
ハロルドは、その日のことをオレにあらいざらいしゃべるのが、はじめは恐ろしかったとあとでいった。
オレはオレで、ロケットというものは、元来首にかけるものだという、そんな先入観念にとらわれていたんだ。
「マギイの奴、ふざけてやがるの何のって、ガーターのところへ、その銀のロケットをぶら下げていたんだよ、おじさん。僕は、何だかわかんなかったから、何だって聞いたんだ。そしたらマギイの奴、いうことがいいや、これアアタシの貞操帯のカギよっていったんだ。だから」
「だから、どうした？」
「鎖をひきちぎって捨てちまったよ」
「どこへ？」
「どこだか覚えてない」
「覚えてない？」
「当り前じゃないか、おじさん。マギイがもうお待ちかねだったんだぜ。眼をつむって、シートの上にあおむけに寝て——そんなものなンか構っていられるかってんだ」
「なアンだ、そんならそうと早くいやァそうかもしれない。
なるほど、当の二人にしてみりゃァそうかもしれない。
「あとで、マギイは何かいってたか？　そのロケットのことを」
「ちょっとはね。お婆ちゃんにきっと怒られざらいしゃべるのが、はじめは恐ろしかった

るってしよげてたけど、もう帰るときは、けろりんかんとして、帰るまで歌を歌ってたよ」

「どこに捨てたか覚えてないのか？」

「覚えてないったら、しつこいな」

「もう一度だけ聞かせてくれ。窓の外へすてたのか、それとも――」

ハロルドは考えこんだ。

「左の手で引きちぎって捨てたから、車の外じゃなかったような気がするけど」

用はすんだ。オレはハロルドに礼をして、すぐウッドロックの邸に引き返した。幸いマギイがいたので、オレはアンナに案内させてマギイの部屋へ行った。階段を上る途中で、アンナの奴、オレをつねりやがった。

マギイは、あっさりロケットを盗んだことを白状した。いうことが、いたって当世流だった。

「ぬすむ気じゃなかったのよ。ちょっとかくしておいて、お婆ァちゃんがさわぎ出したらここにあったわって持ってきゃァ、御褒美にお小使いがもらえると思って、かくしただけなの」



「ロケットの蓋をあけて中を見たかね？」

「見やしないわ、どうせ写真か何か、ろくなものが入ってないじゃないの。それなのにお婆ちゃんたら、まるで命から二番目のものみたいに大事にしてたでしょう。だから、いたずら半分にもち出しただけ、とったんじゃないわ、返す気だったのよ」

「ハロルドが、鎖を切って捨てたといってたけど、あとで探さなかったのか？」

「いやアね、ハロルドったら、そんなことまでいったの？　おじさん、くわしく聞いたんでしょう？　だから私、おじさんみたいな年頃の人嫌いさ。あれこれ想像を逞しくして、一人で喜んで、ニヤニヤするんだもの」

これは手きびしい。オレも照れた。

「探したわ。でも、結局出てこなかったの。それに、私がかくしたってこと、私しか知らないし、ハロルドには、貞操帯のカギだなんてごまかしといたから、ばれっこないと思って、それっきり忘れちまったのよ」

「たしかに、窓の外にすてたんじゃないだろうね？」

「見てなかったわ。だって私、そのとき目をつむっていたもの」

これでだいたい見当はついた。マギイの部屋を出ようとしたオレの耳に、かすかだったが、廊下を遠去かって行く何者かの足音が聞こえた。立ち聞きしていた奴がいた？

急いでドアをあけたが、もう人影はどこにもみえなかった。

自縄自縛の原理



立ち聞きしていたのはマリアナか、息子のケネディにちがいなかった。

オレはすぐその足で、運転手のジョーを探しに行った。ジョーはとって三十五歳、まだ独身で、だから酒が好きと聞いていた。

ところが運のわるい時はその通りで、ジョーの部屋までコトコト上って行ってみると、いくらドアを叩いても、返事がない。十時じゃのんべにとって、まだ宵の口だ。

やれやれと思ったが、オレは巡礼をはじめた。アンナから、用心のためジョーの行きそうな巣を聞いておいた。

だが、やっぱり無駄だった。その日に限って、ジョーは行きつけの店へ一軒も、顔を出していない。

後でわかったのだけど、ジョーはオレが尋ねて行く十分前に呼び出され、別の人間と、全然ちがう場所で逢っていたのだった。

オレの目算じゃァ、問題のロケットは、車の中にあったと睨んだ。おそらく、ハロルドは引きちぎって捨てたといったが、二人の恰好から想像すると、捨てられたロケットは、運転台の方へ投げられたにちがいない。そして、運転台のシートとシートの間にでも落ちたのを、あとで運転手のジョーが拾って、猫婆したか、かくしたとオレは見当をつけた。

だからこそオレはジョーを探してあるいたんだが——。

とにかく、オレは十二時にジョーの部屋へ又やってきた。部屋は暗かった。叩いても返事がなかった。

そこでオレはまた、聞いているのみ屋を片っぱしから探しまわった。

午前二時に、もう一度オレはジョーの部屋へ上って行った。やっぱり灯が消してあって返事がなかった。

そして、オレはなおも当てどなくジョーの姿を追い、六時近くまで足を棒にして街を歩きまわり、六時ちょっとすぎに、もう一度ジ

ョーの部屋まで重い足をひきずって登って行った。

灯りはついていなかったが、ドアをノックすると、ドアが向うにあいた。

そして、ぼんやりした夜明けの光りが、大きく開け放たれた窓からさしこんでいた。

窓のすぐ下に、鉄の寝台がよせてあった。窓から何の気なしに下をのぞくと、ジョーがお前とオレの仲じゃねえか」

縄を首にまいて、宙にぶら下っていた。

「やっぱりホンク、自殺じゃなかったぜ」

オコーネル警部は、オレの肩を叩いてこういった。

「当り前さ、あんな恰好で自殺する奴はあるまい。はじめになぐられて、それからぶら下げられたはずだ」

しかし、これはちがっていた。

オコーネルは、だから首をふった。わかるかい。

「ぶら下げられたんじゃないんだ。どういう意味なんだ？」

「ぶら下げたんじゃないってのは、どういう意味なんだ？」

「殺人が、あの部屋で行われたようにみせかける犯人の細工だったんだ」

なるほどとオレは膝を叩いた。オレは十二時に行き、二時に行った。二度ともドアには鍵がかかっていた。六時には、ドアがあいていた。

「アリバイを作る目的で、あんな妙な真似をしたんだな」

「それもそう考えられるがね、ホンク、これには因縁ばなしがからんでいるんだ」

「おいおい気をもたせるな、はつきりいえよ、お前とオレの仲じゃねえか」

いつもこっちがじらすもンで、オコーネルの野郎、このときとばかりと、銀のロケットをもっているのは、ジョーだと見当をつけて、すぐ邸からジョーに電話して、あいつをどこかへ呼びだしたんだ」

「どこだと思う？」

「のみ屋じゃない。うん、車で行ったから、どこかでジョーを拾って車をすっとばしながら取引きしたかな？」

「どこで？」

オレは爪をかんだ。すぐ、霊感がきた。

「モーテルだろう？」

「よくわかったな？」

「マリアナは冷たそうな顔をしているが、何といったって女だ。女の武器は一つさ」

「武器か？　お前も、よくその武器にやられるな」

「何がわかった？」

「車の中に釣竿がおいてあった。オレは女中が坊ちゃんが――といったんで、ケネデイが朝帰りしたと思ってたのが、そもそものまちがいだったんだ」

「それで？」

「マギイとオレの話を、廊下で立ち聞いていたのは、マリアナだったぜ」

「マリアナもそういってたぜ」

「そこでマリアナは、銀のロケットをもっているのは、ジョーだと見当をつけて、すぐ邸からジョーに電話して、あいつをどこかへ呼び出したんだ」

「どこだと思う？」

「のみ屋じゃない。うん、車で行ったから、どこかでジョーを拾って車をすっとばしながら取引きしたかな？」

「どこで？」

オレは爪をかんだ。すぐ、霊感がきた。

「モーテルだろう？」

「よくわかったな？」

「マリアナは冷たそうな顔をしているが、何といったって女だ。女の武器は一つさ」

「武器か？　お前も、よくその武器にやられるな」

「黙ってろ、ちがってたら訂正しろ」
「よし」
「モーテルで、まずロケットを返せとマリアナがいった。ジョーって奴は、なかなかの曲者らしい。それに嫌いじゃない。身体を餌にマリアナはロケットを手に入れた。いや、ひょっとすると、ジョーの奴、もっていなかったか、もっていても、ここにないといって、マリアナをちょっと怒らせたにちがいない」
「そうだ、その通り、もっていないと、あとでいい出したそうだ」
「そこで、ジョーの部屋へ取りに行こうということになった。モーテルの前に車がとめてある。だいたい、三時か四時ごろだったはずだ。死体を解剖して、そうだとお前がいってたじゃないか？」
「うん」
「車の中か、それとも、どこか途中で、車をとめて、マリアナはうしろからスパナみたいなもので、ジョーの頭をなぐりつけた。そうだろう」
「途中で車をとめて、やったんだ」
「だが、ジョーはまだそのとき死んでいなかった。マリアナは、用意して行った縄をジョーの首にまきつけた。それから車を走らせてジョーのアパートの露路の入口で、車をとめた」
「おいおいホンク、お前、まるで見てきたようにいうじゃないか」
「当り気よ。釣竿からこんな推理が生れたんだ」
「お前、釣竿のつの字もオレにいわなかったぞ」
「黙ってきけ。オレは最初、上から死体をみ下してから、すぐ下へおりて行って、下から死体をみあげてみた。そのあとで、のこのこやってきたオレが、仏様にお目にかかったって寸法だろうが？」
オコーネルは目を丸くして驚いた。
「寸分のたがいなしだ。しかしホンク、因縁ばなしの方はわかるまい」
オレは黙って返事をしなかった。
オコーネルに別れると、オレはウッドロックの婆さんに逢いに行った。約束の半金五百ドルをもらうのがおもな目的だったが、もう一つ二つ聞きたいことがあったからだった。
婆さんは渋い顔をしていた。アンナにいわせると、脚が痛いと機嫌がわるいそうだ。
「さァ約束の残金。もう用がすんだのだから引きとっていいよ」
オレはゆっくり札をかぞえてから、こうい
「茶々を入れるな。これからが、女にしちゃァ一仕事だ。縄は丈夫だし、充分長さはあったが、引き上げるにゃ女一人の力では少々無理だ。だから、山登りのコツで、縄を鉄の寝台の柱へまきつけ、二呎あげてはグイ、二呎上げてはグイと、おちねえように柱を、一種のテコ代りにして、ほどよいところまでつり上げると、縄のはしを寝台の鉄柱にしばりつけ、余分な縄を切った。それから、縄と釣竿をもって一目散。そのあとで、のこのこやってきたオレが、仏様にお目にかかったって寸法だろうが？」
オコーネルは目を丸くして驚いた。
「寸分のたがいなしだ。しかしホンク、因縁ばなしの方はわかるまい」
オレは黙って返事をしなかった。
オコーネルに別れると、オレはウッドロックの婆さんに逢いに行った。約束の半金五百ドルをもらうのがおもな目的だったが、もう一つ二つ聞きたいことがあったからだった。
婆さんは渋い顔をしていた。アンナにいわせると、脚が痛いと機嫌がわるいそうだ。
「さァ約束の残金。もう用がすんだのだから引きとっていいよ」
オレはゆっくり札をかぞえてから、こうい

次号予告

あぶちっく・さすぺんす

なめくじ屋敷

宇治川竜



彼女は見た！　巨大な半透明の生物がヌルヌルとうごめいているのを！　なめくじ屋敷に住み込んだ娘探偵の恐怖！

次号予告

もう一つ聞きたいことがあった。

「こんなことを聞いて怒るかもしれませんがね、御隠居さん」

婆さん眉毛をつり上げて怒った。

「私は隠居じゃありませんよ」

「これは失礼。では奥様。例のロケットの中に、いったい何が入っていたんです。あのロケットのために、一人が殺され、一人が殺人罪で起訴されるんです。それほど、値打ちのあるものが入っているとは思えませんがね」

婆さんの顔で、オレにはよくわかった。オコーネルのいった因縁てのは、これだったんだよ。マリアナや、マギあの首吊り縄のしばり方は、一種独特で、いわゆる「縛り首結び（ハングマンス・ノット）」だったからだ。

車椅子が、ギッと鳴った。

「どうして、いきなりそんなことを聞いたりするんだい？」

その顔で、オレにはよくわかった。オコーネルのいった因縁てのは、これだったんだよ。マリアナや、マギあの首吊り縄のしばり方は、一種独特で、いわゆる「縛り首結び（ハングマンス・ノット）」だったからだ。

「お宅の御祖先に、首吊り役人でもいませんでしたかね？」

恐怖異色感覚読物

奇妙な博物館

峠　浩介





なんだってあたし、こんなにそそっかしいのかしら。改札口を出たとたんに気がついて、幸子は苦笑しながらつぶやいた。知らないところって、やはり具合の悪いものだ。東京へきて、気持がそわそわしているせいもあるだろう。おぎくぼとおおくぼを間違えたのだ。だいたい、駅の名前をかなで書いておくからいけないんだわ。幸子はもう一度つぶやいた。

出札口の上にかかっている案内図を見ると、荻窪はまだまだ先だ。だが、すぐにまた切符を買って、出てきたばかりの改札口へ逆戻りするなんて、どう考えても面白くない。意地の悪そうな駅員に、駅を間違えましたと言って切符を返してもらうなど、いっそう癪だ。別に急いでいるわけでもないし、荻窪にいる叔父や叔母にしても、幸子の行くことなんか夢にもしらないのだから、降りたついでに、一つ東京の街とやらを散歩してやれと、小型のスーツケースをぶらぶらさせながら、幸子は駅を出た。家からは、もう一つ大きなスーツケースも持って出たのだが、それは昨夜のうちに神戸駅からチッキにしておいた。

東京駅まで乗ってきた列車も、東京から大久保までの電車もかなり混んでいたから、街へ出ると、夕暮近い初夏の風が、ほこりっぽいながらも気持よかった。十時間ばかりの旅だったけれど、それほど疲れも感じない。が、とにかくのどがかわいた。歩きながら、なんとなく雑然と落ち着きのない東京の街に、幸子はきょろきょろと視線を

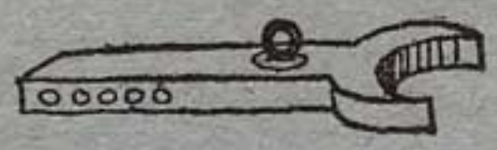
投げる。すぐに、あまりパッとしない喫茶店がみつかった。

こんなことなら、新宿ででも降りたほうが、よほど気が利いていたんだわ。いかにもみすぼらしい喫茶店の椅子は、幸子が腰をおろすとかすかにきしんだ。ひどく空いている。音の悪いスピーカーが、聞き手もないのに、いささか流行おくれのポピュラー・ソングをわめいていた。

隅っこの方にアベックが一組。これはどうやら学生らしい。それともう一人、幸子の席から一つテーブルをおいて、しなびたじいさんが一人、コーヒーをすすっている。じいさんが、ふと眼をあげて、幸子を見た。

注文したアイス・コーヒーは、てんでなっていなかったけれど、のどのかわきを治めるのには結構間に合った。一気に半分ほど飲み干して、幸子はほっと一息、小さなスーツケースからピースの箱を取り出した。いつになく朝が早かったので、少し睡い。神戸の家では、ママがもう置手紙に気がついたかしら。急に飛び出したので、さぞ驚く、神戸の街を一人で飛び出したことだけで、幸子は満足していた。無性に嬉しかったのだ。

あたりはだんだん薄暗くなってきた。足の向くままに歩いてきたのだが家のことを思って一人微笑んだり、叔母の家で最初にいうせりふを考えたりしているうちに、ふと気がつくと、いつの間にか大通りをはずれている。いつまでぶらついているわけにもいかないし、さて、駅はどの方角だったっけと振り向くと、後ろからやってきた男と視線がぶつかった。さっきのじいさんだ。まさか後をつけてきたのでもないだろうが、少しばかり薄気味のわるい。他の人間なら、駅へ行く道を訊くつもりだったのだが、幸子はそのままもう一度歩きはじめた。家出娘を狙うポン引だかの記事は、新聞や週刊誌でおなじみだが、幸子はよもや自分が、そんな間の抜けた家出娘と同様に見られるとも思っていない。それでもなんだか気になって、少し行ったところで振り向いてみた。じいさんの姿はなか



った。今度は、姿の急に消えたことがかえって気になり出した。気のせいだろうが、どこかそのへんの家の蔭に、身をひそめたようにも思えて、幸子はふいに歩調を早めた。

いやだわあたし、東京へ着いたのでちょっぴり昂奮してんのかしら。笑いとばそうとするのだが、どうもうまくいかない。駅はどっちだったのだろう。神戸だと、山を見てすぐに方角がわかるんだけど——。

住宅街へ入ってしまったのか、あたりがいよいよひっそりしてきた。なあに、歩いてればそのうちに、交番にでもぶつかるだろう。時々後をふり返りながら、幸子は歩き続けた。そば屋の青年が、ざるやどんぶりをしこたまかついでやってきたが、相手は自転車だし、かなり急いでいるようだから呼び止めるのはやめにした。

右手の方から、国電のらしい警笛が聞えてくる。だいぶ離れてしまったようだ。いい加減の見当で、幸子は曲り角を右へ折れてみた。折れたところで周囲の家とはひどく変った、いかにも古めかしい洋館が幸子の眼をひいた。何気なくその入口へ眼をやると、すっかり古ぼけた大きな表札が一枚、史料博物館と読めた。

これでも幸子は西洋史が専攻だ。街の好事家が開いた小規模な博物館だろうけど、史料と書いてあるからには、立ち止らざるを得ない。午前九時——午後八時。表札の隅に公開時間も書いてある。八時までやっているのなら、まだ一時間はたっぷりあるわけだ。どうせついでなんだから、ちょっとのぞいてみようか。一瞬ためらったが、のぞくだけのぞいてみて駅への近道もつけばいいんだし、幸子は表札の下の呼びリンに指を押しつけた。

すぐにドアが開いて、顔を出したのは六十過ぎらしいじいさんだった。さきほどのじいさんを、幸子はちらと思い出した。どうも今日は、じいさんに縁のある日らしいわ。

「紹介状は？」じいさんが訊いた。

「あら、紹介状がいりますの？　ここに公開時間と書いてあるものだから…」

「ああ、一般観覧の方ですか。どうも失礼。さあ、どうぞ」じいさんは一歩わきへ体をよせた。

「一般のほかに、何か特殊なものがあるんですか？　あたし、大学で西洋史をやってるんですけど」

「そうですか。いやね、時々、偉い先生方の紹介状を持ってみえる方があるんですよ。特に詳しく説明を求めるような人がね。いやいや、西洋史をやってらっしゃるんなら、別に説明の必要もないものばかりですから、気をつけて。どうぞ、入ってください。暗いですから、気をつけて。なにしろ、ろくに経費がないもんで…」初めてじいさんが、にやりと笑った。

じいさんのわきを通り抜けると、すぐにホール。なるほど、確かに暗い。よほど経費がないのね、この博物館は。でも、外の暗さに馴れていた幸子の眼には、陰気なホール全体を見渡すのが、それほど困難なことでもなかっ

た。左右の壁に沿って、大きなガラスのケースが並んでいる。中世のものらしい甲冑や、剣や、薄汚れた鞍など、さまざまな武具が雑然とおさまっていた。

「あちらのものが主なんですね？」

「はい。死んだこの家の主人の道楽でしてな。大変な金持だったちゅうことですが、その財産を残らず注ぎこんだにしては、こんなガラクタを、いや失礼しましたこういった史料を集めたんですよ。わしらには、とんと値打もわかりませんが……」

金持が財産を注ぎこんだにしては、あまりたいしたコレクションでもないみたいだわ。心の中で幸子はつぶやいた。もっとも、まだまだ奥にあるのかもしれない……けれどここにあるものだけなら、もっと立派なのを、今までに幸子は幾度も見たことがある。

陳列品の前には、それぞれ小さな札が立っていて、英文と和文とで簡単な説明が記されていた。

「で、ご主人って方は、早くに亡くなったんですか？」陳列品よりも、こんなガラクタを集めた人間の方に興味があるわと、幸子は何気なく聞いてみる。

「はい、亡くなったのは終戦の前年でした。全然身よりらしい身よりのない方で、わしと、もう一人の連れとで身の廻りのお世話やら、陳列品の整理などに手伝っていましたが、主人に死なれてはまず見られんでしょうが――」

幸子にもほぼ想像がつく。きっと、何かエロティックなものを集めたんだわ。日本でも、よく春画なんかの収集家があるじゃないでしょうね、といった版ね。それならそれで、十分に興味があるわ。クラスメートの父親に、春画をかなり持っているのがいて、一度その父親が留守の時、友人がこっそり見せてくれたことがある。

「史料と名のつくものなら、なんだってこれだけじゃないでしょうね、といった視線を投げるとまりますわ」つとめてさりげなく、幸子は言った。さっきじいさんの案内しますが……お嬢さん方に興味がおありかどうか……」

「というと？」

「ここの主人はひどく変り者でしてね。ちょいと特殊なものばかり集めたがったんですよ」

「でも、やはり史料なんでしょ？」

「そりゃ、もちろん、史料ですよ。他



じいさんは階段を降りはじめた。階段を降りると、薄暗い通路になっていた。右側の壁にケースが並んでいる。何か、蛇のようなものが、ケースの中でとぐろを巻いていた。

「何かしら？」

「鞭ですよ。いろいろあるでしょう」

確かに鞭だ。ずいぶんあった。ただの革ひもみたいなのや、先におもりのついたのや、五六十本はたっぷりあるだろう。薄くほこりのつもったケースのところどころに、豆電球がほの暗い光を投げている。

通路を抜けて最初の部屋は、まるで劇場の舞台裏を思わせた。周囲の壁には、やはりケースが並んでいたが、それよりも、部屋じゅうに、何か得体のしれないものが幾つも転がっている。一番手前にあるのは、木製の、ちょうど簡易ベッドといった大きなしろものだった。ちょこんとのっかっている説明書に、幸子はそっと顔を近づけた。ラックA。文字はそれだけだ。頭の中で、幸子はラックという単語をしきりに探した。

「ここの主人が、一生と全財産をかけたコレクションですよ。外国ならともかく、日本ではまず最大なコレクションでしょうな」

じいさんの口調がふいに生き生きしてきたのに、幸子はやつと気がついた。

「これはつまり、拷問ベッドとでもいいますかね。十五世紀にイギリスで用いられたものですよ」

じいさんは、拷問ベッドの隣りにあるものを指さした。首のない、背中が鋭くとがった木馬だ。

「これにまたがらせて、足におもりをつけるんですよ。背の高さから考えてこれもどうやら男用ですな。こいつは手足をそれぞれこのロープにしばりつけるんです。レバーを引くと、ロープがひっぱられます。少し前に、背を高くする機械が売り出されましたな。つまりあれですよ。こいつでうんとひっぱると、まず肩の関節が外れるそうで

「まあ――」

じいさんが微笑んだようだった。薄暗い地下室、実際に拷問が行なわれたのも、おそらくこんな感じの部屋だったろう。じめじめした地下室の壁に、哀れな犠牲者の悲鳴が、何度も何度も反響したことだろう。奇妙な感じが、幸子の背骨をつっ走った。同じクラスにいる、点取り虫の青白い秀才を、このベッドに寝かせてやったら――そんなことを、幸子はチラと考えた。

ただのベッドとちがっているのは、頭と足のところの枠に、ひどく太いロープがついているのと、その横に大きなレバーのあることだった。

「ここへ……人を寝かせるのね？」幸子の声が、いつもより少し甲高い。

「そうです。当り前のベッドより、うんと長いでしょう。ここへ寝かせて、手足をそれぞれこのロープにしばりつけるんです。レバーを引くと、ロープがひっぱられます。少し前に、背を高くする機械が売り出されましたな。つまりあれですよ。こいつでうんとひっぱると、まず肩の関節が外れるそうで

「まあ――」

じいさんが微笑んだようだった。薄暗い地下室、実際に拷問が行なわれたのも、おそらくこんな感じの部屋だったろう。じめじめした地下室の壁に、哀れな犠牲者の悲鳴が、何度も何度も反響したことだろう。奇妙な感じが、幸子の背骨をつっ走った。同じクラスにいる、点取り虫の青白い秀才を、このベッドに寝かせてやったら――そんなことを、幸子はチラと考えた。

「これは木馬ですよ」

じいさんは、拷問ベッドの隣りにあるものを指さした。首のない、背中が鋭くとがった木馬だ。

「これにまたがらせて、足におもりをつけるんですよ。背の高さから考えてこれもどうやら男用ですな。こいつは手足をそれぞれこのロープにしばりつけるんです。レバーを引くと、ロープがひっぱられます。少し前に、背を高くする機械が売り出されましたな。つまりあれですよ。こいつでうんとひっぱると、まず肩の関節が外れるそうで

「まあ――」

じいさんが微笑んだようだった。薄暗い地下室、実際に拷問が行なわれたのも、おそらくこんな感じの部屋だったろう。じめじめした地下室の壁に、哀れな犠牲者の悲鳴が、何度も何度も反響したことだろう。奇妙な感じが、幸子の背骨をつっ走った。同じクラスにいる、点取り虫の青白い秀才を、このベッドに寝かせてやったら――そんなことを、幸子はチラと考えた。

ただのベッドとちがっているのは、頭と足のところの枠に、ひどく太いロープがついているのと、その横に大きなレバーのあることだった。

「ここへ……人を寝かせるのね？」幸子の声が、いつもより少し甲高い。

「そうです。当り前のベッドより、うんと長いでしょう。ここへ寝かせて、



たりに、重苦しい感じがこみあげてくる。

「いや、実際に変った主人でしてね。西洋の拷問道具となると、もう夢中でしたな。隣りの部屋に置いてあるラックBって奴なんかちょっとした家ならも、二三軒まとめて買えるほどの値段でしたよ」

木馬の横には、とてつもなく大きな木の車輪があった。巾が人間の巾と同じくらいあるところをみると、やはりそこへ人間をしばりつけるのだろう。

「拷問車とでもいうのでしょうな。これはいろんな使い方がありましてね。車のへりへ、背中を下にしばりつけると、さっきのベッドと同じことができるんです。こいつの方が効果的だそうですがね。とことんひっぱると、背骨がばらばらにはずれてしまうそうですよ。人間をしばりつけたまま、ぐるぐる廻すこともできますしね」

「毛唐って奴は、実に面白いことを考えるもんですなあ」じいさんは一息ついて、すぐに続ける。「ケースの中にも、いろんな小道具がありますよ。足の指を裂く道具だとか、肌をはがす器具だとか、お嬢さんの前じゃちょっと説明しにくいが、女の人を困らす道具もいろいろと揃ってますぜ。まあ、話すと、関西でなの。急に思い立ってのタネに、ゆっくりごらんなさい。あの隅にあるのは、鉄の処女って奴ですよ。よく探偵小説に出てくるでしょう。もっとも、鉄の処女ってのは拷問道具ではないんですがね。あれは人間を殺してしまう機械ですよ。まあ、あてみたのよ。萩窪に親せきがいるの。別に行くってことを知らせてあるわけじゃなし、史料となると一応はのぞいておかなきゃと思ってね」

奇妙な道具に驚いているなどと思われてはしゃくにさわる。そんな気持が幸子をいつになく饒舌にした。

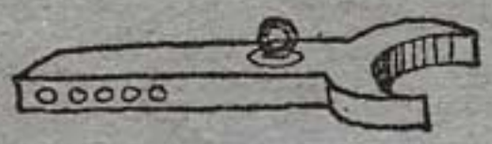
「そうですか。わしはまた、てっきり誰かに教わってきなさったんだと思いましたよ。なにね、今日はいつもとちがって、特別会員の方たちが集る日なんですよ。月に一二度、集るんですがね。世の中には、ここの主人と似たような人がいるもんですな。研究発表をやったり、モデルをやとって道具の使い方を実験したり、いや熱心なもんですよ。ちょうどいい機会なので、偶然に通りかかりましたの。

「ところでお嬢さん、この博物館のことを聞いてらしたんで？」

「いえ、萩窪と大久保を間違えてね、すぐ電車に乗り直すのも気が利かないと思ってぶらぶら散歩していたら、あの表札が眼についたのよ」

「ほう、それはそれは。お言葉から見ると、関西でなの。急に思い立ってきですね？」

「そう、神戸なの。萩窪に親せきがいるの。よ。よく探偵小説に出てくるでしょう。もっとも、鉄の処女ってのは拷問道具ではないんですがね。あれは人間じゃなし、史料となると一応はのぞいてみたのよ。



んだから、ついでにのぞいていったらどうですね？」

「ええ、そうね……」幸子は言葉尻を濁した。興味がなくもなかったが、やはり薄気味悪い。

じいさんは拷問道具の間を通り抜けて、部屋の一番奥にあるドアを開けると、スイッチを鳴らした。隣りの部屋にぼんやりと灯がともる。

似たような部屋だった。ただ、こちらの方が周囲のケースも少ないし、全体にがらんとしている。広さも、三分の二くらい。左手には、どういうつもりか赤い緞帳が壁を隠している。この緞帳も、あるいは史料の一つかしら。部屋の真中に、さきのとは少し形の変った、やはり拷問ベッドらしいものがでんとすえられていた。ラックB——そう記した札がのっかっている。背中にあたるところが、長さ一メートルくらい、巾が三十センチくらいの四枚の板でできていた。従って、全体の長さは、二メートルくらい、巾が六十センチほどになるわけだが、四枚の板の端はそれぞれ手かせと足かせらしいものになっていた。さっきのはロープだったが、これにはがん丈な鎖がついている。レバーも、これは二つついている。

「十八世紀に、フランス人が使ったものですよ。先にあった奴を、うんと改造したんですな。いうなれば万能拷問ベッド、わしの想像ですが、こいつはどうやらご婦人用でね」

今度ははっきりと、わずかに声をたてて、じいさんは微笑した。ご婦人用と聞くと、とたんに幸子は気持悪くなってきた。自分と同じような若い娘もあるいはこのベッドに寝かされたのかもしれない。魔女狩り、陰謀、そんな言葉が幸子の頭にひらめいた。

「先の奴は、ただ手足をひっぱるだけですがね。もちろん、これでひっぱることもできますよ。しかしね、それだけじゃ面白くないってわけで、このレバーを引くと、四枚の板がこの真中をこいもんですよ」

さっき幸子たちの入ってきたドアがこの時急に開いて、もう一人じいさんの顔がのぞいた。ふいだったので、幸手足をぴんと伸ばしたまま、手と足首がくっつくところまで開くんですよ。もっともそこまでやれば、サーカスの芸人でない限り下っ腹が裂けてしまうでしょうがね。そこへ行くまでには、関節がはずれますよ。それだけじゃなくて、このベッドはぐるぐる廻るんです。囲りを取り巻いた連中が、じっとしたまま、いろいろと眺められるようにね。それにですよ、ほら、ここに踏み板があるでしょう。二つね。こいつも踏むと、足の方でも、頭の方でも、自由に持ちあがるんです。垂直になるまでね。ベッドに寝かせた奴を、そのまま逆立ちさせられるわけですよ。こいつは利きますね。足は裂けそうだ、おまけにさかとんぼになって頭に血が下ってくる。たいてい泥を吐きますよ。おまけに、附属の小道具がどっさりあるんです。ハハハ、いや、すごいもんですよ」

子は思わずぎくりとして、ドアの方へ眼をやった。先に喫茶店にいたじいさんだ。幸子の後から、薄暗い街をやってきたじいさんの顔が、幸子をじろじろみつめながらのぞいている。

「ぼつぼつ時間だぜ」のぞいた顔はそれだけ言って、すぐにひっこんだ。

「わかってるよ」幸子と一緒にいるじいさんが答えた。ドアが閉った。

「あれが相棒なんですよ。主人が死んだ後、二人でここを管理してるんですがね、いや大変ですな。ぼつぼつ会員の集る時間でしてね、よかったら見ていらっしゃい。めったに見られませんぜ。歴史を研究してらっしゃるんなら何かの参考にもなりますよ」

「……」

幸子はやはりためらった。いつか、ひどく気分が悪くなって、胸のあたりが猛烈に重苦しい。

「どちらにしても、時間はまだ少しありますから、ゆっくり見ていってください。わしはちょっと失礼して、いや手洗いへ行くんですよ、年を取るとどうもね。すぐにきますよ。ゆっくり見てください。一人でも多くの人に見てもらえば、それだけ死んだ主人も喜びますよ」

じいさんが出て行った後、幸子はそっと、拷問ベッドに手を触れてみた。古い木の感触が、地下室の湿気のせいか、妙にじっとりと気味悪い。黒ずんだ木の肌。幾人の女たちが、このベッドに寝かせられて、あさましい姿を見せたことだろう。悲鳴と涙と、汗と血が、木目の奥までしみこんでいるような、そんな感触だった。

もしも自分が、こんなベッドに横たえられたら、一体どんな思いがするものだろう。じいさんはなかなか戻ってこない。逃げだしたくなってきた。なんだってあたし、こんな変なところへ飛びこんでしまったんだろう。

ふと、赤い緞帳の奥で、何かの気配がした。あちらにも部屋があるのかしら。あのじいさん、あちらから廻ってくるのかな。赤い緞帳から、じいさんの首がにゅっとのぞいたら——お気味が悪い。いやいや違う。一人や二人の気配じゃない。ああそうか、会員とやらいう物好きな連中が、きっとあちらへ集り出したんだ——。

ドアが開いた。じいさんが二人、入ってきた。二人とも、いやにまじめな顔だ。幸子は思わず、一歩後ろへ体を寄せた。

赤い緞帳が、微かに音をたてながら、真中からゆっくりと左右に開く。その向うに、およそ十人ばかりの顔があった。

「どうもみなさん、お待たせしました。さあ、この人がモデルですからそばへお寄りになって結構です」

じいさんが言った。

一週間ほどたって、都内の大新聞の案内広告欄に、こんな広告がのっていた。——幸子、心配しているすぐ連絡せよ、父。

髪ぐるま

黒髪慕情



長く豊かな黒髪に魅せられた三人兄弟！

東武線で自殺——

女の黒髪をふところにして——

十五日午後十時三十分ごろ東武電鉄亀戸——水神森間で二十五才ぐらいの紺背広を着た男が飛込み下り電車にひかれ即死した。城東署の調べによると「遺書」もなくただ胸ポケットに一にぎりほどの長い女の髪を入れているだけで身元不明。失恋から自殺を図ったものらしい。

二不摩志

伸　原　栗・画

一

女の二十五という歳は今の時代、決して婚期の遅れているうちに入らないのだが、宮内雪江は一つ違いの弟の健吉が近く嫁を貰うことになったので、あわただしくせかされ、世話する人のあるまま、汽車会社の職工をしている男と見合することになった。

相手は五ツ違いで猪瀬一郎といい、弟二人と父がいた。男ばかり四人暮しの家庭である。

話があってから雪江は仲人の近所の小母さんに連れられ、その家に行った。二十五という歳にはばかられたが、小母さんにせがまれて、二十の時に造った派手な着物を着て、髪はそ

のまま、リボンで結んだポニーテールのような格好だったので、せいぜい二十一二にしか見えない姿だった。わざと相手を選んだからなに逢わせるつもりで、日曜日の猪瀬の者はそろって家にいた。

亀戸七丁目、都電の通りから一ちょっと入った都営住宅街、木造の二階建、その一軒だった。玄関の土間と部屋、奥に四畳半、そして六畳半と三畳、わりあい広い家だったとたんから、その家の男臭さも壁も畳も、汗と油の匂いがムンムンしている。それは壁にずらりと並んでいる菜ッ葉服の汚れから発散する臭さばかりではないらしい。

びっくりして眉をしかめた彼女を見て、相手の男の父は、照れたように、「汚ねえだろう？　男ばッかりもんで……」といって頭を掻いた。五分刈りの半白な髪に、がっしりした体格、五尺七八寸の背高の老人だった。単純な性格で人が好さそうである。雪江は好感をもった。彼女が幼い時慕っていた近所の駄菓子屋の小父さんと雪江に座席団をすすめてすわらせると、

「わたくし、一郎の親爺、武市です。よろしく――」侍が殿様に礼をするように辞儀をした。小母さんは雪江を紹介しながら、

「一郎さんは？」と聞いた。すると武市は二階に向って、

「一郎！　英二！　勇三！　お嫁さんが来たぞ！　んだぞッ！」

物凄い声でどなった。雪江は小母さんも飛上ってしまった。そのあと、雪江はおへソのあたりがムズムズして仕方なかくて、笑いと遠雷が近づいった。声に応じて、ドカドカと遠雷のようてくるような音響、地震のようをさせて、階段を降りて来た三人の青年。

雪江はかしこまって上目づかいに、相手の一郎がどれだか観察したが、三人が三人、どれもこれも同じように見えて判断がとっさにつかなかった。自分ばかりが上気していたわけではない。三人の青年も同じもじもじと、顔を真ッ赤にしてコチコチに固くなりお膳を囲んでいるので武市はたまりかねていった。

「やい！　おめえたち、いつまでボヤーッとしてンだ。ごあいさつしろいッ！」

するとその隣りにいたのが、親爺に腿でもつねられたのか、身をよじって、

「痛テッ！　ほ、ぼく、一郎です。三十歳、汽車会社の組立工です」

蚊の鳴くような声で自己紹介をした。

「つづいて、僕は英二です。二十六歳、同じく汽車会社の修理工です。よろしく」

これは三人のうちで一番体が細く、少し青白いような青年で、口調はわりに落着いていた。

三人目のは丸い顔に、クリクリした丸い目のまだ子供々々した青年だった。言葉も幼なかった。

「さて、どんじりにひかえしは……だ。へへへへ、どんじりの末ッ子の勇三。二十一歳成年式済ましたンだから子供じゃないンだ。……です。汽車会社入ったンだけど、つまンないから、今、バーのボーイしてる――。喧嘩は石原裕次郎より、ちょッと弱いけど、ワリかし強いンだ、痛テッ！　痛えから終りです――」

雪江は、とうとうシビレを切らせて笑いだした。

「ハハハハハ、アハハハ」

押えに押えていたのを爆発させたのだから止らなくなってしまった。それこそ、小母さんがつねったって、とまるどころではなかった。

四人の男たちが沈黙して見守っているのに気づいた時、ようやく笑いが納まったのだが

「いけない、お見合に笑っちゃった！」

と恥かしさのあまり、ペロリ舌が出た。と

また失敗とあわてて、

「落第だ……。小母さん！」

と、隣りの小母さんに救いを求めた。すると、狼狽したように父の武市が、

「と、とんでもない！　いい嫁さんだ！」

と叫んだ。そして息子たちに、

「そ、そうだろ？」といった。息子たちも、

「そ、そうだ！　とてもいいお嫁さんだ」

「笑ったとこ！　白川由美そっくりだ！」

「よせやい！　京マチ子そっくりだぜ！」

「その二人より、もっと美人だぜ。そんなこというと失礼だぞ！」

「そうだな。このお見合、だ、だめかな？」

末息子の勇三が雪江に心配そうにいった。

「ホントだ！　お、おねえさん、だ、だめだぜ……」

「なにが？」

「なにがって！　僕達の家に、てくれることがさ」

「アラ？　いいわよ。でもサ……。あたしの方がだめじゃない？　こんなお嫁さんに――」

「い、いいんだよ。とてもとてもいいの。昔のお姫さまみたいだ」

「そ、そうだよ」

「来てください！」

最後に武市が両手を侍のようについていった。

「頼みます――」

こうして、仲人小母さんが心配することもなく、雪江の縁談はまとまった。

二

雪江は幼い時から母が自慢するほどいい髪をしていたので、十七八から伸ばしたままの自前の毛で嫁入りの高島田を結った。

婚礼の日、勇三は彼女の角隠しをいじりながら、大きな目をクリクリさせた。

「おねえさん、これ鬘だろ？」

「いいえ。これあたしの毛で結ったのよ」

「ほんと？　そうすると、おねえさんの毛、ずいぶんあるんだねえ」

「切らずに長くしておけば、こうできるのよ」

「ふゥん！　おねえさんの毛、どのくらい長いの？」

「これくらいよ」

雪江は立ったまま、ちょッとかがんで、手を自分の膝ほどまで降ろした。

「凄いなァ！　そんなに長いの。昔のお姫さまみたいだ」

雪江はその言葉に微笑んだ。

「こんど、解いたとき、見せておくれよね」

「ええいいわ――」

「今ちょッと、さわってもいいかい？」

「こわさないようにね。まだ本当にお式終ってはいないんだから――」

「うん！」

勇三は、かがんだ雪江の肩に、片手を置きそっと手を入れ、鬢つけ油角隠しの間から、自前の毛で固められた髪を弄った。それは冷めたかったが、そこから発する甘く温い芳香に彼は夢見るような思いになった。

「おれ……、おれ……」

口ごもっている勇三に、

「なアに、勇三さんたらいいのかなア――。お

れ、いや、僕、おねえさんの髪の毛、とても好きになっちゃった。へんだなア。ううん、ものも大好きも、もちろん、おねえさんそのものも大好きなんだぜ。だがよ、そりゃア兄貴のお嫁さんなんだから無理だからよ。俺、おねえさんの髪の毛だけなら、そンだけならもいいだろ？」

「そうね。そりゃア、かまわないわよ。じゃア、おねえさんの髪の毛は勇三貴のお嫁さんたげるわ。でも、これは一郎さんの物にしの人にも、絶対内緒よ、いいこと？」

「もちろん！」

「ふふふふふ」二人はいたずらッ子の秘密ごとのように笑い合った。

そこは玄関口の三畳間、今日の仕度部屋だった。そこの襖を開けて英二がいった。

「おい、勇三。お父さんが二階で呼んでいるよ」といった。

「へーい！　じゃア、おれ飲んでくるよ」

勇三が出ていくと、英二はまぶしそうに雪江を見やって、くたぶれたでしょう？　といった。ううん、と首をふると、

「いつまで飲んでるンだろうな、奴ら！」

「いいじゃないの。うちのお母さんも、凄い呑ンべえでしょう？」

「ええ、うちの親爺はあれで、小母さんにあおられてマゴマゴしていますよ」

「まア？」雪江はあきれた顔で、目に見えぬ二階を見るように天井を見上げた。その二階では四畳半と三畳を抜いた座敷で、式の済んだ解放感から、人々の寛いだ響いて来る。化粧直しといってされた花嫁を世話するはずのも、それっきり降りて来ないで母親と同じく呑ンべえだからしまっているのだろう。気の人々の集まりだから、のんき

「いい匂いだな！」ポツンと

「え？　なにが？」雪江がふ

と英二の青白い顔が、頬だけて、彼女の肩あたりに寄って

「う、うん！　あんたの匂い

離れ、畳にあぐらをかき、うむような格好になった。

「死んだお袋の匂いとも違うると、なんだな……、お嫁さやつかな……。やっぱり……」

「ホホホホホ、英二さんのい

山下清みたい――」」

花嫁らしくない声を挙げて笑う雪江に、

「おれ、そうなんですよ。頭も似ているらしい。この前、女の子にそういわれた――」

「まア？」雪江はあきれた顔で、目に見えぬ二階を見るように天井を見上げた。その二階では四畳半と三畳を抜いた座敷で、式の済んだ解放感から、人々の寛いだ響いて来る。化粧直しといってされた花嫁を世話するはずのも、それっきり降りて来ないで母親と同じく呑ンべえだからしまっているのだろう。気の人々の集まりだから、のんき

「い、いいですよ、そ、そんな」

英二はあわてて立ち上ると、部屋から出て、もう一度、

「ほ、ほんとに、いいンですから――。あんたの長い髪見てればそれで僕いいんだ――」

雪江は意外な思いでその言葉を聞いた。

それから一時間後、ようやく仲人の小母さんと髪結の小母さんがやって来た。ふたりとも相当酔っていたが、髪結はさすがに商売柄きちんとやることだけは、やってくれた。

「どうします。丸髷に結い直しますか？」と聞かれた時、いいえ、解いたままにしてくだ

さいと雪江は答えて、小母さんたちを驚ろかせた。

衣装を直して、洗い髪のように、黒髪を背に垂らし、二階に上って改めてあいさつすると、お祝いの人々は一様に息を飲んだような顔をした。

美しいというより、雪江の姿を凄艶なまでに感じたのである。

「すげえすげえ、おめえの奥さん、すげえなァ――」

同僚や上役に肩をぶん撲られるように叩かれて花婿の一郎は、ただペコペコと頭を下げていた。

一郎兄弟の母は勇三が四才の時死んだ。父の武市は甲府の出で、ちょッと常規を逸しているほど実直である。三十数年汽車会社へ勤め二人の息子をそのまま育てあげた。だから兄弟は母以外の女気など、少しも知らずに過して来たといってもよかったのである。猪瀬家には十五六年目に女気が再び入ったのである。雪江は珍らしがられ、大事にされた。

三

義父は老人といってもまだ五十六、労働で鍛えあげた骨格は、青年の息子たちよりずっと男というものを雪江に感じさせた。去年勤めをやめ、退職金と息子達の取る金で楽な身分になっている。

「わしにも女の子が、まるっきりなかったわけでもないンだ。勇三のあと信子というのができたが、二つの時クループ性肺炎てやつになって一晩のうちに、コロリいっちまった。と、女房の奴もそのあとを追って、こいつもコロリ。バカなもんよ。よりによって、いちばん惜しい娘が死んじまって、余っている男がみんなピンピンしてやがる――」

息子たちがみんな勤めや遊びに出たあと、舅と娘の茶呑み話であった。



「わたしは十の時父に死なれたンです。それでも家が小間物屋で、家作や土地が少しばかりあったンで、お母さんどうにかやってこられたンですけど、女の子には、やっぱりお父さんッて欲しいもンですよ。でもよかった。十五年目に、わたしにもお父さんができて」

「そう思ってくれると、わしも嬉しいよ。でもこの娘、ずいぶん大きいな。こンな大きくちゃおぶうことも、だっこすることもできやしない。わしゃア、今でも信子を抱いて歩いてる夢をよく見るんだよ」

「わたしも、お父さんに抱かれていたころの夢をよく見ますよ」

「あんたのお父さん、あんたが重くてころびゃアしないかい?」

アハハ……、ホホ……、と舅と嫁は笑った。

「ほんと、わたしのお父さん、とても小さくてやせていたから、今じゃとても無理ね。でも今度のお養父さんなら大丈夫ね。大きくてガッシリしていて、これだけお若いッですものね」

「いいや、もうだめだよ」

「だめじゃないわ。一郎さんたちよりずっとしっかりしているわ。じゃア、ためしに立って、雪江を抱いてみて……」

雪江は武市のグラブのような掌をつかんで立ち上らせた。

「ウハハ……、だめだよ、だめだよ」笑いながら立った武市は、それではいながら雪江の脇の下に両掌を入れて、その体を後ろから抱き上げた。十三貫近い肉体が軽く持ち上った。キャッキャッ笑いながら、

「ワーッ! 凄い力! ホーレ今度は雪江を信子ちゃんだとしてみて!」

雪江はすっかり甘え、武市の太い猪首に腕を巻いてぶらさがった。と、武市はよろめいて、あぐらをかくように畳に尻をついた。その膝の上に体重を乗せた雪江は

「フフ……」と嬉しそうに笑った。

「うんうん」目を細めた武市は彼女にオズオズ頬ずりしていたが、

「なあ雪、ちょっとお前さんの頭、解いてみていいかな?」太い指でアップにしている髪に触れた。どうして? と聞くから、あんたどうかしちゃったわね」といったが——初子も英二のこのころの気持を敏感に感じて、

「どうしたのよ。一郎さんがお嫁さん貰ってから、あんたどうかしちゃったわね」といった。

紺色の上っぱりの事務服が、くりくりした丸い白い顔によく似合う娘だった。英二は初子の頭を見た。太陽を透かして見る髪は、緑濃く、手に触れると太いのにしなやかであった。

「いいえ。あたしこそ皆さんにこンなにかわいがられてしあわせ……」

真実雪江はそう思っていた。武市はその髪の中に鼻口をうずめた。やがてその目から熱いような涙が頭の膚に染みてくるのを雪江は感じた——。

昼どきになった。巨大な鉄の唸りが一時停止して機械にこき使われていた人間たちが自分を取り戻す。英二は裏の空地で初子が誘うまま逢っていた。最近ふたりの仲は停頓状態で一向進捗しなかった。兄の一郎が結婚したらすぐにでも初子と一緒になろうと思っていたのだが——初子も英二のこのころの気持を

る。だが襟元で惜し気もなくバサリと刈ってあって、なんのつもりか先をガサガサに散らしているのである。無雑作のように見せて、これでなかなか大変なのだそうだ。英二はまず切ってそろえているのだそうだ。絶えじめな顔で初子にいった。

「君、髪を長く伸ばせよ！」

「いやよ！　あたし髪長くしてる人大嫌いッ！　第一何のために長くするのよ。お正月に日本髪結うため？　結婚式に角隠しするためのよ。日本髪なんて封建時代の遺物なのよ。女性を奴隷視していたころあんな格好をさせて、動きを鈍くして男性は己れの身を守ろうとしたのよ。現在そんな必要がないのになぜ髪を長くしなければならないのかしら？　あんたなぜそんなことというの。その理由をきかせてよ」

初子は高等学校の優等卒業生であった。文学少女で非常に頭がいい。英二とは会社の文学グループで親しくなったのだが、そのあらゆる現代的な割り切り方が、英二の繊細な感受性を絶えず圧倒していた。彼は最近になって、僕たちは失敗するな、という疑念を抱いてきた。しかし気の弱い彼は、なんとかそれを好転させようと、はかない望みをもち努力していたのである。

「兄貴の嫁さんが、君と同じようなとてもいい髪の毛しているンだ。それがとても長くしていてすばらしいンだ。だから君も長くしたらもっとチャーミングになると思ったのさ」

「それだけ？」とバカにしたように初子はいった。「あんたも案外なのね。あたしもっとあんた人間というものを深く見ている人だと思っていたわ。人間って外形のモンではなくその内にあるものが、人間の美醜を決定するのよ。髪が長いから好きだでは、チャーミングなニュー・モードを着ていたからだったが――。

四

「俺、少しイカレているンだ！　おフクロに小さい時死なれたろ。だからおフクロか姉さんのような年上の女に凄くミリキを感じてたられたい、騒がれてみたい女が、ニューモードを着たり、髪を長くしたりして男の眼を魅こうとする媚態なのよ。娼婦みたいな心で不潔だわ。それを第一望んでいる男性があるンだから――」

「なに？」英二は怒って立ち上った。

「初子なんかに男の気持、いや人間の本当の姿なンかわかるもンか！　君の体の中のすばらしい才能と学力と理知が、これからの君の恋愛にどれだけ役に立つか試してみるといい僕にはそれが鼻持ちならなくなって来た！　僕はもう君とは交際しないぜ！」

こうして英二は初子と破綻を起してしまった。人間の表面だけに愛するものがあるのではない。それはもちろんである。だがその中ではない、裏面に切実な愛の対象になるものがひそンでいるのだ。英二はそれを初子に求めて得られなかったのである。真実求めたい人は兄の妻であって、それは不可能だと知っていたからだったが――。

「俺、少しイカレているンだ！　おフクロに小さい時死なれたろ。だからおフクロか姉さんのような年上の女に凄くミリキを感じてたンだ。そこへな。ピシャリの嫂（あによめ）が来たろ。俺嬉しくなっちゃって、ウキウキしてナ、おめえが見たって、すぐわかるくらいテコヘンだろう？」

江東楽天地の中を歩きながら勇三は、最近彼の勤めるバーに入った芙美にいった。芙美は彼より一つ歳下だけだが細面の淋しそうな顔で小柄だった。十六七ぐらいにしか見えな

いのは、細いが真っ黒な髪を腰まで長くしていることだった。偶然彼と同じ小学校の出だったので急速に二人は親しくなり、今日は遅番なのを幸い流行歌手の実演を見に来た、その帰りだった。芙美はうつむいたままいった。

「勇さんそのおねえさんが好きなの？」

「好きさ。はじめて逢った時からホレちゃったぜ。そして嫁に来て一緒に暮すようになってからますます好きになっちゃった。けどもよ、所詮は兄貴の嫁さんサ。どうなるものンじゃアねえ。このハート察してチョーダイよだな！」

「そう――。お気の毒ね」

「誰が？　嫂がかい？　それとも俺がかい？」

「勇さんが……。その気持よくわかるわ。あたしも女ばかり姉姉の五人のいちばん上でしょ。それにお母さんだけで、貧乏で苦しい生活、お父さんかお兄さんのような人がいたらなッていつも考えているの。人間って女も男もみんな同じようなこと思っているのね」

「ふゥン！　じゃアおめえもそのお父さんかお兄さんのような人ってえのを、早く探せばいいじゃアねえか」

「ふふ……。ようやく探したけど、その人だめなのよ」

「どうして？」

「その人、ひとの奥さんに夢中になっていてチットモあたしのことなど考えてくれないのよ。あたしその人が髪の長い女が好きだからっていったから、お店の人が短くしろっていってもいやだっていって切らずにいたり気をつけてゴシゴシと頬ずりしてみたかった。ふたりきりになれれば、その望みも得られるのだが……。だって、嫂さんのあの黒髪は俺のもんなんだから――。

兄貴なンか！　一郎兄貴なンか、死んじまえと思った時、彼はジーンと全身に異様な衝撃を受け、思わず立ち止った。

バカヤロ――、俺は泣いてやがら……。

ヨーロッパだかアメリカだかの、どこかの国に結婚してから向う一ヵ年、悪事をした以外多少の落度や失敗があっても解雇できないという、法律か社則があるそうである。なかなか粋でほほえましい規則であると思う。だれだって結婚した当座はボーッとしているものである。

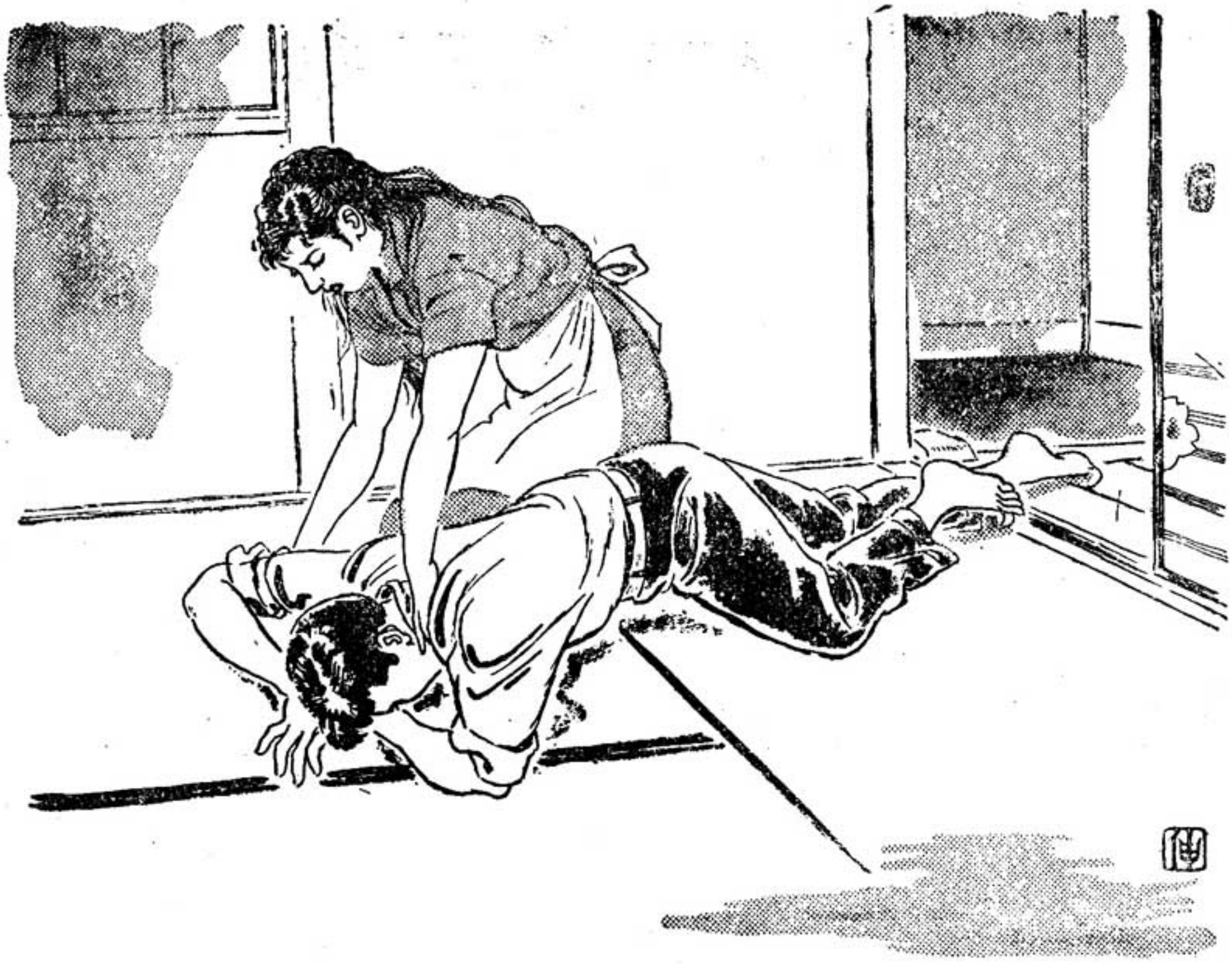
猪瀬一郎もそうだった。やさしい妻、美しい妻、その心も肉体も十二ぶんな妻。平凡な見合結婚でこんなすばらしい嫁さんを貰うことができたなんて、宝クジに当った以上の、百万人か千万人にひとりの僥倖者だと思えるなかった。夕方から徹夜の勤めの彼でも、雪江には昼は父の武市がいたし、夜は兄の一郎がついていた。あのすばらしい嫂の長い黒髪に顔をうずめ、思いきり愛撫してみたい。口に含んで俺の歯でカリカリと噛みさいなんでやりたい。俺の掌に握り、指に髪の束を巻きつけてゴシゴシと頬ずりしてみたかった。ふたりきりになれれば、その望みも得られるのだが……。だって、嫂さんのあの黒髪は俺のもんなんだから――。

兄貴なンか！　一郎兄貴なンか、死んじまえと思った時、彼はジーンと全身に異様な衝撃を受け、思わず立ち止った。

バカヤロ――、俺は泣いてやがら……。

ヨーロッパだかアメリカだかの、どこかの国に結婚してから向う一ヵ年、悪事をした以外多少の落度や失敗があっても解雇できないという、法律か社則があるそうである。なかなか粋でほほえましい規則であると思う。だれだって結婚した当座はボーッとしているものである。

猪瀬一郎もそうだった。やさしい妻、美しい妻、その心も肉体も十二ぶんな妻。平凡な見合結婚でこんなすばらしい嫁さんを貰うことができたなんて、宝クジに当った以上の、百万人か千万人にひとりの僥倖者だと思える



のである。自分があわせ者だと心から思っているうえに、家中の者まで雪江が来てくれたことに大よろこびだし、近所の人も、会社の同僚達もみんな彼女をほめ、彼を羨んでくれる。

彼は彼女のもとから勤めに出る時の、毎朝の別れが辛かった。若夫婦は二階に住っているが、階段を降りる時それがしばしの別れなのに自分だけが華厳の滝か、三原山の噴火口へ突き落されていくような気分になるのだった。

その辛さを雪江にいうと、彼女は彼が彼女のうちで最も愛撫する黒髪の一束を切って、「あたしはいつでも、あなたに抱かれているのよ」といいながら、それを彼の肌着の間に入れてくれた。親指と人差指で輪にしたぐらいの量があり、彼女のからだのようく肌のあくまで白いのとは反対に、それはあくまでも緑濃く漆黒の艶をもっていた。一郎は休憩時間になると人のいない物かげや、厠の中に入って妻の黒髪を取り出した。三十歳の今日まで彼も幾度か恋をし、肌に触れた女も二三あったが、これほどまでの黒髪をし、やさしく美しい女はなかった。髪は雪江そのままに彼にまといついてくる。香りを嗅ぐと紅い絖(ぬめ)のような唇の甘い口づけを想い、頬ずりして口に含むと、彼女の全身の柔い肌に埋れた時の快い気持に浸れるのだった。

再始業のサイレンが鳴ると、彼はまた朝のような悲しさを感じ、疲れた体を作業場に運ばねばならない。頭上にクレーンがきしり、周囲で鉄と鉄がぶつかり合う轟音も、今彼の耳をこそばゆくくすぐる彼女の甘いささやきには勝てない——。雪江はあなたに……、そう彼女がいった時、彼の背後から巨大な轟音がおおいかぶさって来た。とたん全身に強烈な衝撃を受けて彼のからだは押しつぶされて

叫声と怒号の中に、英二は兄の無惨な姿を見た。やがて同僚たちによろめく体を支えられながら英二は兄の屍体と共に、事務所の一角に運ばれた。工場の専属医が呼ばれて検死した時、拡げられた肌着の間に、彼は嫂の黒髪を見つけた。彼は突き上げてくるおえつとともにそれを取ると、自分の肌着の間に入れた。

一郎のデスマスクは、雪江と話し合っている時そのままの幸福そうな表情であった。

五

猪瀬一家は一瞬のうちに悲痛のどん底に叩き込まれた。新妻の雪江はもちろん、男手ひとつで育てあげてきた武市は腰が砕けたようにすわり込んだまま、動けなくなった。ただ口だけがブツブツと動き、（バカめ！　バカめ！　一郎のバカめ！）と呟きつづけている。

勇三は兄の死を聞いたとたん震え上った。恐怖のために全身が痙攣を起したようになり止まらなくなった。棺に納められたとき、彼は号泣して棺の中に飛び込み、屍体にしがみついて叫んだ。

「あんちゃん、ごめんよごめんよ。俺が悪かったンダ。あんちゃんなんか死んじまえなんて思ったから悪かったンだ。かんべんしてくれ、許してくれよなァ！」

人々は彼の姿に貰い泣きした。雪江はその彼の体を抱き上げて棺から出すと、ごった返している座敷を抜け、二階へ彼を連れていった。そして泣きじゃくる彼の背を撫でながら相談したあげく勇三の嫁にすることにした。

「勇さん、どうしたのよ。そんなに泣いてはだめよ。あんちゃんなんか死んじまえなんて英二は好きな女子がいたが、勇三は今まで好きになった女子はねえさんの雪江だけだというんでね。それから雪江のおっ母さんに相談ぶつと、おっ母さんはいったん嫁にやった娘だから、そっちのいいようにしてくれといってくれた。それで今晩、皆さんにもそのことをお話しておこうとわざわざ来ていただいわけなんで……」

人々は武市の言葉に、どうにかこうにかうなずいた。雪江と英二と勇三はその間膝に両手を置いて、じっとうつむいていた。

一郎の写真の前に漂よう線香の煙りだけが複雑な人間のありさまを戸惑うように右に左に揺れていた。

四十九日が過ぎたころ、英二は雪江に、

「形身わけとして、兄貴の着ていたもの僕にすべて思ったから悪かったンだ。かんべんしてくれ、許してくれよなァ！」

人々は彼の姿に貰い泣きした。雪江はその彼の体を抱き上げて棺から出すと、ごった返している座敷を抜け、二階へ彼を連れていった。そして泣きじゃくる彼の背を撫でながら相談したあげく勇三の嫁にすることにした。

「勇さん、どうしたのよ。そんなに泣いてはだめよ。あんちゃんなんか死んじまえなんて英二は好きな女子がいたが、勇三は今まで好きになった女子はねえさんの雪江だけだというんでね。それから雪江のおっ母さんに相談ぶつと、おっ母さんはいったん嫁にやった娘だから、そっちのいいようにしてくれといってくれた。それで今晩、皆さんにもそのことをお話しておこうとわざわざ来ていただいわけなんで……」

人々は武市の言葉に、どうにかこうにかうなずいた。雪江と英二と勇三はその間膝に両手を置いて、じっとうつむいていた。

一郎の写真の前に漂よう線香の煙りだけが複雑な人間のありさまを戸惑うように右に左に揺れていた。

四十九日が過ぎたころ、英二は雪江に、

「形身わけとして、兄貴の着ていたもの僕にすべて

くれないかな」と父のいるところでいった。
「うん、いいだろう。なア雪江」武市の言葉に雪江は、一郎が結婚の時作ったオーバーと紺背広上下を彼にやった。万事に地味な英二は、はでな勇三と違って、いいものを少しも持っていなかった。英二はすぐさまその背広を着て、
「今夜あったかいから、オーバーはいらないな」といった。
「初子さんとデイトの約束でもあんの？」
「ああ……」
「お金もってる？」
「三百円あっからいいよ」
「心細いな。少しカンパする！」雪江はむりに千円札一枚を持たせた。英二はそして出ていった。
その夜彼は帰らなかった。翌る日の夕方、
「英二さんどうしたのかしら」
「兄貴今まで、家を空けたことないンだぜ」
勇三も意外そうにいった。みな少し心配しだした。武市はわりにのんきで、
「金がなくなったら帰ってくるだろうよ」といった。次の日の朝、新聞を何気なくのぞきこんだ雪江は、そのまま危く気を失いそうになった。

——東武線で自殺——
——二十五歳ぐらい——
——紺背広——

武市も勇三も戦慄した。彼らはガクガクする膝を辛うじて警察署まで運んだ。
英二は一郎の着ていたものを着て死んだ。それは単に死を飾るために新しいものを着たのであろうか？　一郎の身代りのつもりでだけであろうか？　一郎の死後一ヵ月もならぬうち結婚した雪江と勇三、それをさせた父への抗議、いや面当てといった方が言葉がピッタリする、その面当てにしたのではないだろうか？
それとも、初子との間がうまくゆかず失恋の痛手にたえ切れなかったからか？　それゆえ雪江の黒髪を後生大事に持っていたのか？
すると雪江が弟と一緒になってしまったことに絶望を感じた果か？　彼は雪江を愛し、彼も心から彼女との結婚を望んでいたのであろうか？　その真実はわからない。なぜといって英二は遺書を残さなかったのである。彼を知る人々が、彼の死をどう考えようと勝手であった。各人各様に考えるのは当然だった。第一英二自身、自分の気持が割り切れなかったのではないだろうか？　彼の恋人だった初子が、
「あたしが悪かったンだわ。一郎も英二も勇三も、どうしても、どうしてもあたしの髪の毛ぐらいのことで、こんなことになったのかしら？　死ぬくらい望むんなら、あたしの髪の毛を長くするンだった。やっぱりあたしが悪かったンだわ」
といって泣き伏した。
雪江はまだぼうとした思いの中で、
「あたしの髪を持って……。自殺するほどあたしを思っていてくれたのなら、そうと一言いってくれればいいのに……。あたしは英二さんとでもよかったのよ——」
勇三は雪江にしがみついて震えていた。震えは一郎が死んだ時より激しかった。
「俺こわい、俺こわいンだ。こ、こんなことになるなんて！　俺が一郎兄貴も英二兄貴も殺しちまったンだ！」
その恐ろしさは雪江にもあったのだろう。
英二の葬式が終った夜、身の廻りの物だけ持って、雪江と勇三は姿を消してしまった。近所の人々は、一郎が死んで四十九日もたたないのに二人がくっついたバチだ、と噂した。
猪瀬の家にはたった一人武市だけが残された。武市は癈人のようになってただぶつぶつと呟いている。
「バカめ！　一郎も英二も勇三も雪江も、そしてわしも、みんなバカめ！」

夢幻境秘話

平家部落の怪

二人の旅商人

秋藤吉郁　鬼・画



江戸生れの小間物商、叶屋玉吉——越中富山の薬売り、三造——二人とも、商いの荷をかついで、旅から旅をまわり歩く、旅の小商人である。

二人は、飛驒の元込村の木賃宿で、はじめて顔をあわせた。ほかに客のいない、さびしい田舎の旅籠である。

同宿のよしみで、どちらからともなく名を名のりあい、風呂からあがったあとで地酒を酌みかわしはじめると、たがいに心がうちとけた。

「ほほう。すると、小間物屋さんも明日は鴨沢を越えて、下呂へいきなさるのかい」

と、薬売り三造がいった。まっ黒に陽焼けした顔、身体つきもがっちりした男である。

「というところをみると、薬屋さんも明日は鴨沢越えだね」

と、あいづちをうつ玉吉のほうは、いかにも婦女子相手の小間物屋らしく、色の白い、やさ男である。



★あでやかな女ばかりの村に飛び込んだ男達は桃源の夢も束の間、奇妙な運命に！

二人の旅商人は、妙に気が合った。

「飛騨の山奥は深くてさびしい。ここで出逢ったのもなにかの縁、どうです、ここ当分のあいだ、二人つながって山里をまわりませんか――」

薬売りが提案した。玉吉にも異存はなかった。

「それは結構ですね。よろしくお願いいたします……」

さびしく、けわしい飛騨の山道。道づれのあったほうが、山歩きははかどる。

その翌朝、小間物屋と薬売りは、仲良く肩を並べて、宿をあとにしたのである。

しかし、それから三日後――。

二人の旅商人は、山奥の間道で、不意の嵐に出遇った。

一寸さきもわからぬ雨しぶきに視界を失ない、道に迷った。全身びしょ濡れになって、盲歩きに進むうち、あっというまに、足もとの草むらがくずれた。

崖から足を踏みすべらせると、二人の身体は、ずるずると谷底へ転落した。

「玉吉さァん！」

「三造さァん！」

恐怖異色感覚・特集

二人は、夢中で相手の名を呼びあった。つきでた岩角に、したたか頭と脾腹をうち、もう駄目だと思った。

平家部落の謎

ハッと意識をとりもどしたとき、小間物屋玉吉の全身には、激烈な痛みが走った。

眼をあけると、ここは、うす暗い板敷きの部屋のなかである。

頭の上に、チョウナで削った梁と太柱がのしかかっている。天井の角笛型のアマから、ふとい自在縄が吊され、二尺余もある銅製の鯉の鈎に、大鉄瓶がかけられてある。

その下には、一間の大炉が切られて、灰のなかには木の根がくすぶっていた。

すべてが重々しく黒光りしていて、おそろしく時代がかった部屋の様相である。

「――お気がつかれたか……」

正面の暗がりから、ふいに女の声がした。

身を起そうとした玉吉は、そのとき、全身をうしろ手にぐるぐる巻きに縛られているのに気がついた。

「あッ……」

かたわらをみると、薬売りの三造も、同じように縛られてころがされているのだ。

二人とも、命だけは助かったらしい。

だが、この姿はどうしたことだ。ここは何者の住家なのだ。

「ふふふ……。珍らしい。男とはの……」

暗がりのなかから、女の白い顔が、ぼうッとあらわれた。

粗末な手織木綿の白衣を着ているが、ぞっとするほどの美しい女だ。能面のように磨ぎすまされた表情のまま、足音もなく、すうッと玉吉の前に近づいた。

「あ、あなたさまは？」

その妖しい気配にのまれ、玉吉はおののきながらきいた。

「この部落の女長（おんなおさ）、山吹じゃ……」

女は、うすい唇から、不気味な声音を発した。低いが、蟬の羽のように透きとおった声である。

「こ、ここは、どこの、なんという村でございますか？」

三造も、その女の不気味さに気押され、ふるえ声できいた。

「この村に、名などない。――が、そなたたちは、この里のことを、平家部落などとよんでいるのであろう……」

「平家部落！……」

二人の旅商人は、同時にさけんだ。

昔、源氏の軍勢に追われた平家の残党が、人里離れた山奥に落ちのびて、隠れ住んだといわれる平家の落ち人部落――。

瀬戸内海に面した土地には、源義経に滅ぼされた残党が住みつき、この飛騨地方には、木曾義仲に敗れた平家の郎党たちが住みついたと伝えられるが……。

道に迷い、崖からころがり落ちた玉吉と三造は、谷底にひそむ、この秘密部落の女長に命を救われたのである……。

「――それで、あの、山吹さま。わたしどもは、なぜこのように縛られているのでございます？　わたしどもは、決して怪しい者ではございません。旅の商人でございます……」

「わかりました。どうやら、そなたたちは、私らに危害をくわえる者ではないらしい。縄はといてあげましょう。――だが、そなたたちの身体は、しばらくの間、この部落にとどめおく。よいか、その打ち身の傷が癒えたとしても、この部落から逃げようなどと思ってはならぬぞ……」

うす気味のわるい命令である。いいながら山吹の瞳の奥が、妖しい光りをみせて、チロチロと燃えた。口もとに謎めいた冷笑をただ

よわせるのだ。

いつのまに現われたのか、山吹の背後に、侍女ともみえる三人の女が、幽霊のように坐っていた。

二人の男は、ゆえ知れぬ恐怖に襲われて、背筋に冷水を浴びたように、ゾォッとした。

女だけの部落

玉吉と三造は、こうしてこの部落の女長、山吹の屋形に監禁され、傷の手当をうけた。

切妻合掌づくり、ひどく古びてはいるが、宏大な屋敷の一室である。そして二人の男はなぜ自分たちが、ここに足どめを強いられたかを、思い知らされるのである。

「てへへ……。おい、玉吉さん、こいつは夢、夢じゃなかろうか」

そのことをきかされたとき、三造は他愛のない喜色を満面にうかべて、自分で自分の頬っぺたをつねった。

「だが三造さん、あたしゃなんだか、気味がわるいよ」

玉吉のほうは、やや分別くさかった。あまりのことに、不安のほうが先にきた。

二人が、この部落の異常な様相をさとったのは、崖から転落し、救われた日から数えて十日目だった。それまでは寝たきりで傷の養生をしていたのだ。

「お、おい、玉吉さん。おどろいた、まったくおどろいた。この部落は、なんと女ばかりだ。女だけしか住んでいねえんだよ！」

ふらりと外へぬけでて、部落内の様子をさぐってきた三造が、うわずった声をあげて、あたふたと戻ってきたのだ。

「まさか……」

だが、それは本当だった。

そしてその夜、山吹から与えられたのは、その女どもの胎内に、子種を植えつけよという、意外な命令だったのだ。

三造は、単純によろこんだ。

玉吉は、うそ寒さを感じて不安になった。

だが、山吹のその奇怪な命令の理由は、すぐ思いあたった。

三造のみてきたとおり、この平家部落には男が一人もいなかったのだ。

三年ほど前までは、それでも五、六人の男が生き残っていたらしい。が、その男たちもやがて悪い血が頭にのぼり、発狂して死んでしまった。

悪い血——。

つまり、外界の人間たちと隔絶しているために、必然的に血の近いもの同志が夫婦になる。生れてくる子供は、次第に白痴や片輪が多くなっていった。

しかも、この部落の近親結婚による夫婦間には、なぜか女の子ばかりが生れ、男が生れないのだ。

これでは、やがてこの部落は滅亡してしまう。

どうしても、血の遠く離れた、よその男の子種が欲しいのだ。

そこで、偶然この谷間に転落してきた二人の旅商人が、その犠牲にえらばれたというわけだった。

不気味な愛撫

いただきを切られた檜の生垣が、塀のかわりにびっしりと立ち並び、その奥に、切妻合掌づくりのわら屋根が、くろぐろとそびえている。

これが、この部落の共同の祈禱所であり、集会所であった。そして、そのなかの一室に山吹の屋形から移されてきた三造が、一組の

しとねとともに閉じこめられていた。

やがて、女長、山吹の通達によって、部落の女たちは、ぞくぞくとこの集会所につめかけた。

飢えた女たちは、三造をめがけて、かわるがわる襲いかかるのである。

「うふふふ……。えへへへ……。こいつはどうして、たいへんなべっぴんぞろいじゃねえか。うふふふ……」

この思いもよらぬ果報に、三造はよだれを流してよろこんだ。

たしかに、容姿ともにすぐれた女がそろっていた。さすが、平家の女官たちの後裔を思わせる、ろうたけた美しさである。

しかし、その女たちの、ほとんどが白痴であることを知って、三造はさすがに慄然とした。

なかには、はっきり狂人とわかる女も混っていた。

なかば好奇、なかばヤケになって、三造はかたっぱしからひきうけた。

三日……

五日……

七日……

その頃になると、さすがの三造も、げっそりした。

顔の色が、みるまに青くなっていった。頬の肉が、そげたように落ちくぼんだ。眼のまわりに、青黒いくまができた。

しかもなお、二百人の女たちは、いれかわり、たちかわり、ひるよるの境なく、三造の部屋に現われるのだ。

「いひひひ……おんたね、たまわれ、たまわれ……。イヒヒヒ……」

おどろに乱れた長い黒髪。うりざね型にとのった白い顔。青白く透きとおる、なめらかな肌……。この世のものとは思われぬほどの美女群なだけに、なおさら不気味なのである。

「ひえッ、ま、待ってくれッ……」

押しのけ、払いのけても、飢えきった白痴女の、恥も見栄もない本能むきだしの、執拗な愛撫である。

そろり……

へたり……

そろり……

抱きついたり、しがみついたりするのではなく、まるで人形でももてあそぶような、もの柔らかな、ねっとりした手つきの愛撫なのである。

「た、たすけてくれい！　もうたくさんだ。やめてくれ！　はなしてくれ！　これじゃ、おれがキチガイになっちまう！　玉吉！　助けてくれえ！　玉吉！」

三造は、ついに悲鳴をあげた。

女長の情火

その玉吉は――。

さいわいに、彼は、二百人の女群のいけにえからはまぬがれ、三造の悲鳴からは遠い、女長、山吹の屋形に、いまだに軟禁されていた。

だが――しかし。

玉吉は、山吹だけの男として、これもまた

てふるえあがる。

その頃になると、さすがの三造も、げっそ

七日……

五日……

三日……

かたっぱしからひきうけた。

なかば好奇、なかばヤケになって、三造は

ていた。

なかには、はっきり狂人とわかる女も混っ

た。

わせる、ろうたけた美しさである。

しかし、その女たちの、ほとんどが白痴で

あることを知って、三造はさすがに慄然とし

る。

この思いもよらぬ果報に、三造はよだれを

流してよろこんだ。

たしかに、容姿ともにすぐれた女がそろっ

ていた。さすが、平家の女官たちの後裔を思

か。うふふふ……」

うして、たいへんなべっぴんぞろいじゃねえ

「うふふふ……。えへへへ……。こいつはど

がわる襲いかかるのである。

飢えた女たちは、三造をめがけて、かわる

けた。

の女たちは、ぞくぞくとこの集会所につめか

やがて、女長、山吹の通達によって、部落

しとねとともに閉じこめられていた。

蛇のような女体に、身をさいなまれていたのだ。

この山吹という女の年令は、三十ほどであろうか。

肌の色艶が、十八、九のういういしさに輝やくときもあれば、一族の女長らしく、四十の分別を眼の色にあらわすこともある。

玉吉は三造にくらべると、色も白いし、やさ男である。この玉吉の男前が、乾ききった山吹の心をとらえたのだ。

山吹は、女長の権限をもって玉吉を独占したのだ。

彼女はさすがに部落の長におさまっているだけあって、白痴でもなければ、狂ってもいない。このなかでは、数すくないまともな女の一人であった。

しかし、ひさしぶりの男の体臭の前には、もろくも狂いはじめたようだ。

「――玉吉、こちらへおいで……」

白蛇のような手が、妖しい微笑をみせてさしまねく。

「も、もう、おゆるし下さいませ。このとおりでございます、山吹さま……」

玉吉は、板敷きの間に、額をすりつけてゆるしを乞う。

玉吉とて、決して、きらいなことではなかった。

しかし、この日夜の強烈なお相手には、もう疲れ果てて、眼がくらみそうだった。

「ならぬ！　ゆるさぬ、玉吉！」



山吹は、ほそい眉を、ピリリとふるわす。

「どうか、もう……」

玉吉が、青い顔で這いつくばると、山吹は弓の折れを握って、彼の前にふりかぶる。

「ならぬ。さあ、起きよ。立ちやれ！」

弓の折れを、ぴしぴしッと、玉吉の背に肩にふりおろすのだ。

玉吉は、うっとうめいて這いつくばる。山吹は、さらに怒り猛って片足をあげると、玉吉の背中を、むずと踏まえ、その首すじのあたりへ、力まかせに鞭の雨をふらせるのだ。

「ううッ、おゆるし、おゆるし下さいませ。山吹さま……」

「ならぬッ、このいくじなしめが！」

山吹の足の裏が、全身の重みをこめて、玉吉の首すじを、ギュウギュウと踏みつける。

しまいには、その顔の上に、どっかりと腰をおろし、ぐいぐいと全身をゆすって、玉吉を苦しめる。

こうしてなぶることも、山吹にはこころよいことなのだ。

玉吉は、ポロポロと涙をこぼしながら、苦しい息でゆるしを求める。すると、その泣き顔のいくじなさが憎いとのしって、玉吉の脇腹を蹴りつける山吹であった。

地底からの声

この女長の屋形には、侍女が三人いた。山吹につかえる小間使である。

この屋形で数日を過すうちに、玉吉はその中の一人、楓という娘に、ふと心を惹かれた。白痴と狂人ばかりの部落で、玉吉はこの楓だけに、人間らしい匂いをかいだのだ。

たしかに、この娘は冷静な物腰で、いつもしとやかに山吹につかえていた。

しっとりと哀愁に濡れた瞳、なにものかを脅えているように暗く沈んだ表情が、うつろな狂女たちのなかに住む、玉吉の心をとらえたのだ。

そのときであった。

ふいに、どこからか、

「うふふふ……」

という、不気味な笑い声がおこった。しかも、男の声である。

「うふふ……無駄だ。きさまは、種つけ馬となって、やがてここで衰え果てるのだ。逃げられるものか、うふふ……」

地の底からひびいてくるような、男の声である。

「あ、あれは！」

玉吉は、ぎくりとして叫んだ。男は一人もいないはずのこの部落に、たしかに男の声である。

楓は、憐れむような眼で玉吉をみつめ、頭を横にふった。

「でも、一ヵ所ぐらいは、かならず外へぬける抜け道があるにちがいない。たのみます、教えてください。あたしはもうこんな怖しいところにいるのは、一日だってがまんできないんだ……」

玉吉は両手をあわせて楓に哀願する。楓も玉吉の苦しみがわかるだけに、次第に同情を寄せはじめるのだ。

ますが、それは無駄なことです」

楓の顔が蒼白になった。そして胸乳の下、帯のあたりを、両手でしっかりとおさえた。

「いいえ。わたくしにはきこえません。なにもきこえませんわ！」

楓は、うめくようにいった。

「いや、たしかに男の声がした。なにやらつぶやいて、笑い声がした。あれは誰です。この部の部落には、やっぱり男がいるんだね？」

玉吉は、その不気味な気配におののき、ふるえながら耳をすました。が、その妖しい声はもうきこえなかった。

空耳かも知れなかった。

「辛抱していれば、そのうち、いつかはゆるされて、外界へ戻されます。無理に逃げようとすると、怖しいお仕置きにあうのです」

楓は、なぜかしっかりと自分の腹のあたりを抱きしめ、そういった。

「逃げようとすると、怖しいお仕置きに？」

玉吉は、ききかえした。

「はい……」

楓は、暗い表情でうなずいた。

ふかい憐れみをうかべた瞳で、まじっと玉吉をみつめる。長いまつ毛が、好意をみせて濡れた。

（おそろしい仕置きが……）

そうきいただけで、腋の下につめたい汗がながれる。

あの残忍な山吹のおこなう刑の怖しさは、玉吉にはもう、容易に想像がつくのだ。

肉づけの刑

楓の忠告した言葉が、現実となって玉吉の眼の前にあらわれた。

白痴女の群れにも耐えきれずに、この部落からの脱走をはかったのだ。

そして、失敗したあそばれ、責められつづけた三造が、ついに、山吹に、三造をゆるしてやってくれと嘆願した。

「ならぬ！　わが一族の掟じゃ」

その刑の意味もわからないが、玉吉はふるえあがってしまった。そして、玉吉にも山吹は冷酷にこの処刑の場に立ちあうように命じた。

その処刑の場に立ちあうように命じた。

部落の北はずれに、草木の生えない、赤土のむきだした空地がある。

その空地のまんなかに、大きな穴が掘られた。底までの深さ十数尺、穴のまわりも十数尺。かなり大きな穴である。

力の強い女たちが選びだされて、この穴を掘り終える五日間だけ、三造の命がのびたことになった。

三造の体力は、もってうすっかり女たちに吸いあげられ、しぼりとられて、ぬけがらのようになっていた。

たとえ、憂が切れ、三造はまた転落してうめいているところを、女たちに捕まったのである。

憂が切れて、三造はまた転落し

「ゆ、ゆるしてくれ！　おねがいです、もう逃げません。おれを殺さないでくれ！」

高手小手に縛りあげられた三造が、よろめ

恐怖異色感覚・特集

きながらひきだされてくる。

縄尻をとるのは、女兵ともよばれるべき、身体の大きな女である。

この処刑を見物するために、部落中の女が集まっていた。

「たのむ！　ゆるしてくれよう！……」

恐怖のあまり、三造は泣きだした。周囲の女たちが、それをみてゲラゲラ笑いだす。

「それッ、男を穴のなかに追い落せ！」

山吹の命令である。

縄尻をもった女兵が、三造の首すじをつかんで、どんと突きとばした。

「わあッ！……」

縛られたまま、三造の身体は、もんどりうって、穴のなかに転落した。

（生き埋めか！——なんというひどいことをするんだ！……）

玉吉は戦慄し、顔をおおった。

（三造！　お前の殺されるのを目の前にしながら、手をだすことのできないおれを、ゆるしてくれ！……）

玉吉は、眼をかたくとじて合掌した。

だが、その刑はそれだけで終らなかった。単なる生き埋めではなかった。

つづいて、十名ほどの裸女が、この刑場にひきだされてきたのである。

いずれも、ブクブクに肥え、髪ふり乱し、うつろな眼の女である。

白痴と狂人の多い部落民のなかでも、これらの裸女たちは、とりわけてひどい狂い症状を呈していた。

歯をむきだし、天を仰いでゲラゲラ笑いころげる女、大きな乳房を、ぶるんぶるんふるわせてはしゃぐ女、ワアワアと声をあげて泣きわめく女……。

縄尻をつかむ女兵たちが、ひきずりまわされるほどの馬鹿力をだして、騒ぎまわる女である。

すべてがもう、とり扱いようのないほどに狂ってしまった十名の女たちである。

狂った血筋のおそろしさ。血縁同志のまじわりがつづき、濁りに濁った血のなかから生れた、不幸な女たちなのだ。

山吹は、このもてあました女たちをも、ついでに生き埋めにしようというのだ。

「それ！　投げおとせ！」

残酷、無慈悲な命令を発する。

周囲にむらがる見物客たちの間から、どっとどよめきがあがった。

さきに投げこまれ、穴の底でうめいている三造の頭上に、肩の上に、突きとばされた裸女たちが、つぎつぎに転落してきたのだ。

「ひゃあッ！」

「うわわッ！」

「きゃあッ！」

「ひひひッ！」

それぞれの悲鳴をあげて、ぶんぶん落下してくる女たち。肉の雨だ。肉のなだれだ。

「ぐうッ！」

三造はうめいた。悲鳴をあげた。

穴底に這う彼の顔の上に、鼻の上に、口のなかまい穴底に満ちる。

「助けてくれ！　息がつまる！　苦しい！」

もがいても、あがいても、ぶくぶくと肥えた裸女たちの足は、三造の身体を踏みつけ、彼の頭を顔を肩を台にして、穴のなかから這いあがろうとするのだ。肉地獄だ。

二十本の女の足にめちゃくちゃに踏みつけられ、三造はついに息をふさがれて死んだ。

狂いまわった女たちも、やがて疲れ、静かになった。

その頃を見はからって、この穴の中には、土が投げこまれた。狂女たちは、頭から土を浴びて、またひとしきり騒いだが、やがてその声も消えた。

土葬であった。

呪咀の言葉

玉吉は、いまはもう、必死になって楓にすがった。

(この娘の心をおれのものにし、この部落から逃げだす道を、どうしてもきださなくちゃならない！……)

三造の悲惨な最期は、ひとごとではなかった。やがては、自分の身にもふりかかってくることだ。

だが玉吉は、ただ抜け道を知りたいために楓をかきくどくのではなかった。

彼は、ほんとうに、楓に惚れはじめていたのだ。

(こんないい娘を、キチガイどもの中に置いておけるか！)

楓と一緒に、この恐怖の平家部落を脱出する覚悟になった。

(江戸につれてかえり、女房にするんだ！)

しかし楓は、玉吉の真心こめた熱っぽいくどきにも、なかなか心をゆるさなかった。

これは不思議なことだった。すべて男に飢えているはずであった。三造が処刑されてから女たちは、山吹の隙をうかがってまでも、玉吉のところへ忍んできた。

それなのに、楓だけは、玉吉のしつこい懇願にもかかわらず、自分の身体に、彼の手が触れることをおそれた。

「どうして、どうしてあなたは、あたしの願いをきいてくれないんだ。あたしが、そんなにもきらいなのかい？」

玉吉は、逃げる楓の裾をつかみ、せつない声で訴える。

「いいえ。きらいではございません。わたくしとて、あなたのお情けを、いただきとうございます……」

あえぎあえぎ楓はこたえた。

「それなら、いまま――」

玉吉は、あせった。

と――そのときだ。

不気味な男の声が、いつか玉吉がきいた、ひびいてきたのだ。

またどこからか、ひそものの男にだまされるな。お前はわしのものだ……」

それは、地の底からうめくような、陰にこもった声音である。

「きこえた！　またきこえたぞ！　たしかに男の声だ。この部落には男がいるのだ。どこかに隠れているんだ。でてこい！」

玉吉は、ゾッとして天井を仰ぎ、また背後をふり返ってさけんだ。しかし、声だけで、姿はみえないのだ。

あやかしか。亡霊のしわざか――

「いいえ。それは、あなたの空耳です。わたくしには、なにもきこえません！　まことに、不思議なそぶりであった。

それから、また数日たった。

男奴隷の毎日が過ぎていく。さすがに山吹はもう、すっかり飢えが満たされたらしく、前ほど玉吉の身体を責めつけることは、すくなくなった。

しかし、玉吉の心は、もう一日もがまんできなくなっていた。

（こうなったら、もう楓を手ごめにしても、自分のものにし、あの女と一緒に、この地獄部落から逃げだすんだ！……）

玉吉は決心すると、山吹の留守を狙って、楓の居間を襲った。

はげしい息づかいと、思いつめた眼の色だった。

「しかたがございません。それほどまでの御心なら、あなたのお情けを頂戴つかまつりま す……」

楓は、ついに観念した。その表情には、悲愴な色がながれた。

楓は、眼をとじた。

そのとき、また、どこからか、

「ならぬ！　ならぬぞ、楓！」

という、呪咀に似た男の声がきこえた。

しかし、玉吉の心は、楓の承諾にもう夢中だった。



楓の膝をつかんだ。

「わたくしの……わたくしの主人がいま、亡くなられました……。わたくしの命も、もうわずかでございます……」

不気味な呪いの言葉も、すでに耳にははいらない。息をはずませて、奔馬のような狂暴な動作に移っていた……

戦慄妖異譚

みじかい時刻が過ぎ、二人はわれにかえった。二人の間に、なにやら空虚な沈黙がながれた。

「――玉吉どの。……この部落から、外界へのがれる抜け道、たしかに、お教えいたしましょう……。けれど、わたくしはもう、お供できません……」

蒼白な顔で、楓がいった。その下の腹部には、白布がぐるぐると巻きつけてあった。

楓の指は、ブルブルとふるえながら、その白布の腹帯を解きはじめる。

（なにをはじめようというんだ？……）

玉吉は、奇異の眼で、そのしぐさを見つめるのだ。

「――ごらんくださりませ……」

楓の腹部をおおった白布が、すべてとりのぞかれた。

そこにかくされていたものは……。

楓の言葉は、意外な事実を告げるのだ。

「えッ！　あんたには、御亭主がいたのか。そんな馬鹿な！　ここには男がいないはずじゃないか！」

玉吉は、おどろいてのけぞった。

「はい。……どうか、おどろきなさいまするな。実は、わたくしの夫は、ここにいるのでございます……」

というと、楓はふるえる手で、いま身づくろったばかりの着物の前を、静かにはだけるのである。

ゆたかにまるい乳房が、まだ汗に濡れて光っていた。その下の腹部には、白布がぐるぐると巻きつけてあった。

さっきはひどくあせっていて、玉吉はそんなところに気がつかなかった。

楓の指は、ブルブルとふるえながら、その白布の腹帯を解きはじめる。

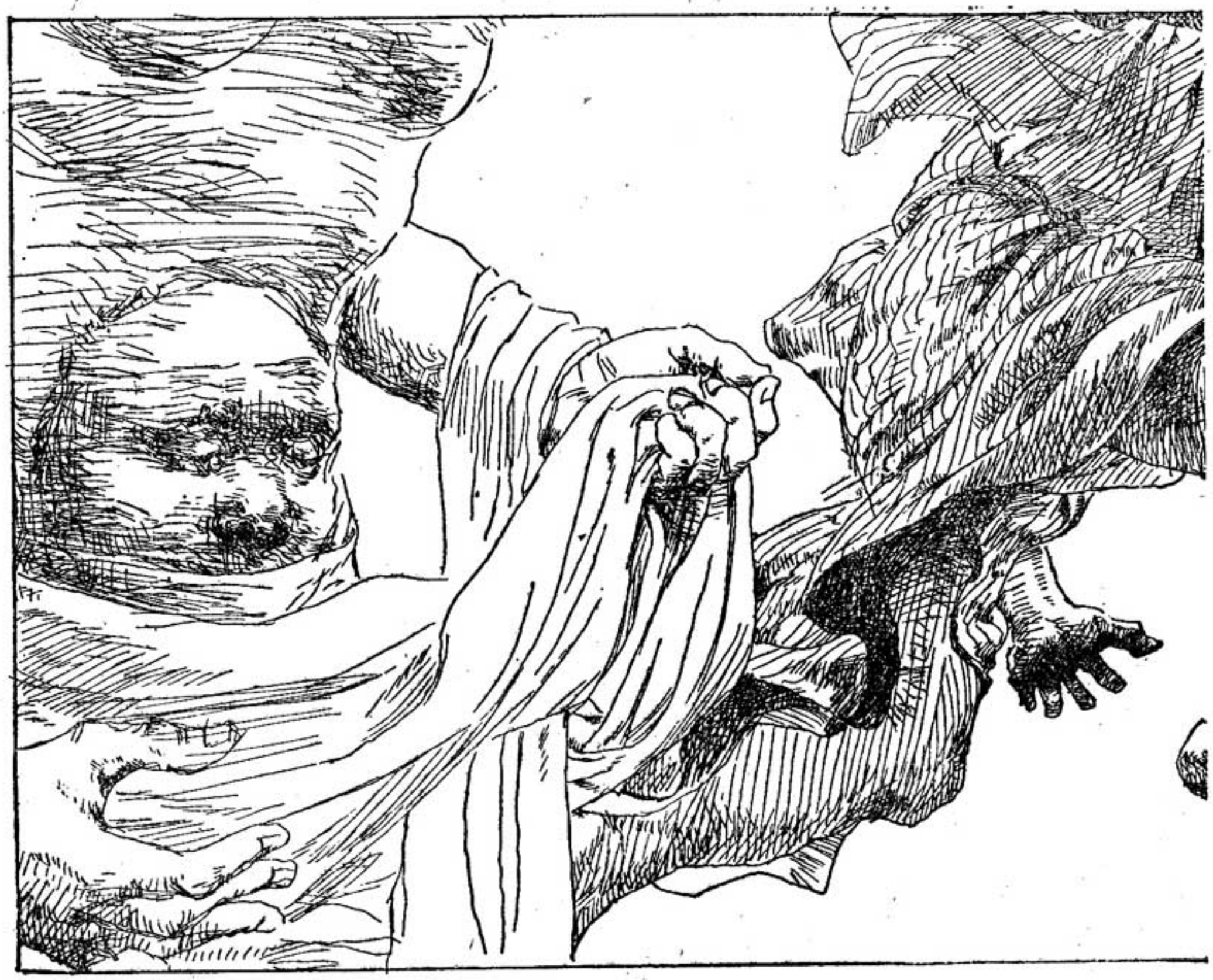
（なにをはじめようというんだ？……）

玉吉は、奇異の眼で、そのしぐさを見つめるのだ。

「――ごらんくださりませ……」

楓の腹部をおおった白布が、すべてとりのぞかれた。

そこにかくされていたものは……。



その、あらわになった楓の腹に、ひょいと眼をそそいだ玉吉は、

「げえッ！」

と、さけんで気を失なった。

奇怪——。

そこには、不気味な形相の男の顔が、眼も鼻も口もそっくりそのままに、はめこまれていたのである。楓の臍のあたりに、ちょうど男の鼻が植えつけられているのだ。

「——玉吉さま、玉吉さま！……」

楓の介抱によって、やがて玉吉は息をふきかえした。

「そ、それはなんだ！　その怖しい顔は！」

あまりの恐怖に歯の根があわない。カチカチと鳴らしながら、玉吉はきいた。

この娘は化け物か。悪夢にしてはおそろしすぎる……。

楓は、わっと泣き伏し、涙に濡れながら、語りはじめるのだ。

「これが……これが、わたくしの夫なのでございます。名は、平の春盛と申します……。この春盛は、幼少のときからの白痴でございましたが、いまから三年前、急に発作がおきて、脳がはげしく狂いはじめ、症状は重く、余命いくばくもない身体となりました……」

春盛は、この平家部落における、最後の男だったのだ。

女長の山吹は、春盛が死んでしまうことをおそれた。たとえ、その肉体はほろびても、せめて男の息の根だけでも、この部落に残しておきたいと思った。

そして、これも数年前、幕府に追われて、この部落に逃げこんできた、切支丹伴天連の宣教医師、ペオドロに命じて、怪奇の大手術をやらせたのだ。

すなわち、春盛の頭脳と顔の部分を、許婚者である楓の腹部にはめこんで、生きながら

えさせようというのである。

切支丹伴天連医師は、楓の腹を刀で切りひらき、まず、はらわたを三分の一に縮めた。

そしてその隙間に、春盛の頭をはめこんだのだ。頭といっても、脳の髄だけを山猫の肝皮で包み、あとの眼、鼻、口は、バラバラにして、楓の腹部に移し植えたのである。

すると、春盛の首は、楓の体内にあって、楓の肺で息を吸い、楓の心臓で血をめぐらせて生きつづけるわけなのだ……。

人間寄生虫——神を怖れぬ、この無惨怪奇の手術……。

この施術を終えたあとで、ペオドロ医師もまた発狂して狂い死したとあれば、この切支丹伴天連もまた、狂人の質であったにちがいない……。

そして、この手術を命じた女長の山吹は、やはりもっとも悪症の狂女なのにちがいない……。

こうして、幸か不幸か、この手術は成功して、春盛は、楓の死ぬときがくるまで、共に生きつづけることになったのだ。

玉吉の耳にきこえた、不気味な男の声は、楓の腹から発した春盛の、嫉妬のうめきであったのだ。

なんという妖異譚……。

玉吉は、全身にびっしょりと冷汗をかいてこの恐怖に満ちた話をきき終えた。

「——それで、どうしてその春盛さんが、いま死んだのだ？……」

カラカラに乾いた声で、玉吉はきいた。

「それは……いま、あなたが、わたくしの身体を、はげしく抱いたために、春盛さまのお顔がつぶれ、お鼻がふさがれ、お口がふさがれ、息がつまってしまったからなのでございます……」

「と——あたしが、殺したのか……」

玉吉は、茫然となった。

「そうです……でも、わたくしは、悔いてはおりません。わたくしは、しあわせでございます……」

すると、楓の顔から、みるみるうちに、血の気がひいていった。

紫色に変じた唇が、わなわなとふるえはじめた。

春盛が死んだために、早くもその死毒が、楓の全身にまわりはじめたのだ。

「ああ……く、くるしい！　わたくしはもう駄目です。でも、このことは予期しておりました。玉吉さん、この部落の西はずれに、憂

草におおわれた洞窟の入口があります。その洞窟のなかへはいってしばらくいくと、突き当り近く、岩壁の天井に裂け目があり、水がしたたり落ちています、そこからうまく這いあがれば、この部落から脱けでることができるのです。——どうか、あなた一人だけで、このおそろしい地獄谷から逃げのびてください……」

いったかと思うと、楓の頭が、がくりと前に倒れた。

死んだのだ。春盛の死毒が、急激に全身を犯したのだ。

「楓さん！　楓！　楓！……楓！……」

玉吉は、あわてて楓の身体をゆすった。

女の顔には、すでに死斑がうかんでいた。

なにか、とり返しのつかないことをしたような気がして、玉吉の頭は混乱した。

しかし、いつまで、こうしてはいられなかった。この場を山吹に見られては一大事だった。

恐怖の部落を脱出するこの機会を、むざむざと捨てることはできなかった。

（楓さん、すまない。ゆるしてくれよ……）

玉吉は茫然とした足どりで、外へでた。

冷えた夜気にあたると、ハッとわれにかえ

り、教えられた脱出口をめざして、背をまるめて馳けだすのであった。

女ぎらい

その年の秋に、玉吉はようやく江戸へもどった。

教えられたとおりの洞窟から、無事にもとの飛騨の山中に這いあがることができたのである。

玉吉は、江戸に帰ると、友達、仲間、隣り近所の誰彼をとわず、この奇怪な体験談を語ってきかせた。

しかし、誰一人として、まじめにきく者はいなかった。

「くそッ、馬鹿野郎！　嘘じゃねえんだ！　まったく、嘘いつわりのねえ、本当の話なんだ！」

玉吉は地団太踏んでくやしがった。

みんなは彼のことを、ホラ吹き玉さんと呼びはじめた。なかには、狂人扱いにする者もいた。

「じょうだんや作り話と思うんなら、おれと一緒にこい。おれがそこへ案内していってやらア……」

と、威勢よくタンカをきったが、いつもう玉吉はゾォッとした。

もう、二度とあんなおそろしいところへ、いきたくないと思った。

玉吉は、ひどく女ぎらいになった。

女とむかいあって話していても、相手の帯のあたりに、ひょいと眼がいくと、どの女の腹にも、男の顔がくっついているような気がするのだ。

帯や着物をとおして、春盛のあのうす気味悪い死顔が見えるのだ。

どんなにきれいな娘と一緒にしゃべっていても、いったんそれを思うと、もう駄目だった。

玉吉は無口になり、他人からは変り者扱いされるようになった。

彼は一生嫁をもらわずに、一人で暮すことを決心した。

それがあの、楓という娘や、非業の死を遂げた、薬売り三造の、回向になるような気がしたのだ。

こんな本があることを御存じですか？

ハガキをください！　目録をお送りします！

☆あまとりあ社では、皆様にじゅうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。

☆出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたのご住所とお名前をハッキリご記入の上〝裏窓七月号で見た、目録送れ〟とだけお書きになって、スグお申し込み下さい！　無料で目録をお送りします。

東京都中野区江古田一の二三〇二

あまとりあ社

★十二時になると老人の枯れはてたような手が、ナイフをひらめかしてそーっと私の目玉をさぐりに来る！★



長谷川勇

1

一八五〇年冬——私はある金持の婦人と結婚した。私より五つも年上だったが、私は大変彼女を愛していたし、彼女はそれ以上に愛してくれるのだった。

彼女の家へ初めて着いた。これから二人が一生を送る家である。朝、ロンドンを馬車で出発したきり、昼にほんの三十分ばかり馬に食料と休憩を与える為に小さな町で止まったほかは、ほとんど一日中ゆられ続けた。

馬車の影も長くなった頃、道は昇り降りが続くようになって丘陵に入り、道も大分ひどくなって馬車の速度は朝の頃の四分の一にも劣るほどに落ちてきた。

片方が崖の下り坂を降りきって左へ曲ると急に暗くなった。鳥の鳴き声が遠くで時折きこえる深い森を、十分ほど走ると、また明るくなって、馬車が止まった。

「着いたわ」妻がいったので窓から首を出してみた。右手遠方に古風な構えの邸がたそがれの背景を従えるように、急勾配の屋根の破風が天を摩しているように、急勾配の屋根の破い大きな建物で、後にはすぐびょうぶのような等高木の森が続いていた。またやたらに破風の多

馬車が今停ったのはこの邸の正門で、それもこの十年ばかりは開けた事も人が出入りした事もないような雰囲気を漂よわせている木造の透かし扉で、それを馭者が降りて行って、押したりひいたりしているが、なかなか思うように行かないらしく立ったりしゃがみこんだりして、扉をゆさぶっていた。

やがて馬車が通れるほどに扉をあけることができたので、馬車は右へ曲ってから、玄関まで真っすぐの道を進んで行った。私は窓から少し首を出したままあたりをみまわした。

馬車がそばへ寄って行くと、全く大造りの家だった。あたりの重い空気の中にそびえ立つさまは馬車が呑み込まれるというに充分だ。馬車の音をききつけて一人の男——老人だった——が駈けて玄関へ出て来た。建物のちょうど真中にある玄関の方の車止めに着くと、馬車は再び停った。

彼女は自分でドアを開けるとにっこり笑って出迎えの老人に向って声をかけた。

「爺、よう達者で。嬉しい」

すると、今までいぶかしげな、幾分役者じみた威厳をつくろっていたこの老人は、むせぶような声をあげて車に走り寄り、彼女に抱きついておろおろ声をさらにどもらせながらいった。

「まあ、嬢様。……ようこそ。ようこそ、……本当に、爺は嬉しいです……」

それから泣き出してしまった。泣きながら何かしきりに訴えるようだった。

彼女に続いて私が降りた。するとその老人

呪われた老人



は黒瞳の片目をキョロっと僕の方へ向けるとまるで無頼漢が来たような顔つきをした。頭から足元まで目を配り、よほど僕の風采が気に喰わぬとみえて、口をモグモグ動かして何かいいかけたが、彼女が急いで説明してくれたので、私は飛びかかられずに済んだ。

「ふえーっ、本当ですか。嬢様ったらあきれけえった。よくもまあ、こんなひ弱な若僧と。おめえ様ったら旧家をとりつぶす気でいなさるだか。この爺にも黙って……本当に、旦那様がいらっしゃったら、ええもう、旦那様だったらあの時計の部屋へ十日もぶち込まれて、水ももって来てくださらねえところだ」

私はもう少しでこの爺を地にめり込むほど叩くところだったが、ようやくこらえて、二人の後について、馭者と一緒に邸へ入っていった。

2

それから晩食が始まり、馭者にも御馳走をしてから彼女は金貨を一枚馭者に握らせた。馭者はありあまる金と御馳走に感激し、バッタのようにペコペコおじぎをすると、老人には全くあの下男の老人にはうんざりした。言葉使いもさることながら、目は片方がほとんど開かず、髪はもうすっかり白かった。それに長身の上にいやっというほど細く、黒のズボンと服をつけて少しびっこをひいて歩く、それが歩くというよりも空中を泳いでいるといった方が適切なさまは、どうしてもあめんぼだった。

彼女の話しによると、彼女の父が子供のときからこの家に養われている忠僕で、彼女にとっては両親も兄弟もいない現在、唯一人の身内同然の間柄として過して来たということ

だった。

やがて老人は食堂へ帰ってくると女主人にきいた。

「この小僧っ子はどこへ寝かしとけばいいんで、嬢様」

「いけません。乱暴な口は。今日からあたしとお前の主人ですよ、『御主人様』って呼ばないとゆるしませんよ」

「いやでがす。嬢様はたらし込まれているっす、こんなふわついた、しゃれっぽい、わしの保護者だなどまっぴらです、わしの御主人様たあ立派なひげさと固い手で私をどやす人です」

そこで一段と声をひそめて、多分、自分では私にきこえないつもりなのだろう、時折目を細めて僕の方を盗み見ながら妻に言った。

「嬢様っ！　ありゃとんだことになりますぞう。あの馬の骨さは、年上の嬢様に心底ほれて結婚したじゃねえ、あの身の振りはこんな田舎なんかにしみ込む型じゃねえです。あの小僧は嬢様の金にほれて一緒になっているだ今に嬢様とこの儂を殺してこの邸をぶん捕る気さ、あの煙草のけむのはき方さみたって誰にもわかりますだに。嬢様さすっかり化かされちまっているちゅうはほんとに情けねえです」

がす。ほんに嬢様ったら笑っている場合じゃねえですぞ。よしんば殺されなくたって、今にあの小僧こんな田舎はあいやになって金をみんなひっさらい、おまけに内証でこの邸さ他人に売り飛ばして、パリーの踊り子のところさ飛んでけえるに決りきってまさあ。あの目とズボンのはき方はアングロ・サクソンじゃねえっせえ」とまた流し目を私にもって来た。私は田舎の老人は知っていたがこんなに疑い深くてたちの悪いのは初めてだった。けれど聞えぬふりをして本の頁を指で動かし、老人の顔も見ぬようにつとめた。

それから立って、彼女に接吻を息が苦しくなるまで、続けた。

「ふんこの河原乞食めが、悪魔がきっと今に二人の脳みそをしゃぶりにくるから、そうやっていなさるがええだ」老人はすっかりふてくされて食器を片づけ始めた。

どうしてこんなありさまにしておくのかと問うたら、妻が悲しげに答えた。

「僕は今夜は君の室で一緒に寝るよ」僕は不安だったから、わざとそういって妻の胸に横顔を押しつけて甘えた。妻は私の頭を胸に抱きしめると髪をいじりながらうなずいてくれた。

「ふん。今に……」老人は口をモグモグして去っていった。

翌朝小鳥のさえずりに眼を覚し、窓から庭をみると、陽が正面の森から昇ったところで急に部屋の中も明るくなった。下をみると、老人が鶏を出して遊ばせ、餌をまいていた。朝食が一とおり済んだのは八時半だった。それから私は妻とともに附近を散歩した。

妻は私にこの邸の歴史や自分の記憶を話してくれた。一七六〇年地方小貴族のバートランド侯が建てた城で、作るとすぐにアメリカ植民地の独立戦争のおかげをこうむり没落してしまった。その頃東インド会社の職員で日の出の勢いで成り上った彼女の祖父が買い占めて以来、今日に続いているというのであって邸の中の案内に移った。二階と一階をみてまわったが屋敷が広いのに召使いが一人きりなので、荒れ放題でどの室の扉を押してもかびのにおいが鼻をついた。

問うたら、妻が悲しげに答えた。

「爺やがいくらいい召使を雇っても悪党呼ばわりするのでいつかないの。それにあの爺やときたら蜘蛛の巣やくもが大嫌いだから、なんとしたって自分の部屋と私の寝室と食堂のほかは入るのをこわがってるから、この通りよ」

「あんな無礼なじじい追い出したら？」

「そう願えたらね、だめよ、私覚えているわ。私のお父さんがいったのを。『もうお前も四十五だ、身を固めたらどうかね』と。そうしたら『とんでもない、旦那、あっしはこの家は離れられねえ、神様もそうおっしゃいます。もし出て行けといわれるんでしたら私はここで首を吊るつもりで働いておりますんでどうか旦那様置いてやってください』って泣き出しちゃったの、それっきり誰も口に出さないままこの家の主みたいになっているんだわ」

3

春になった。僕は、この雪どけが待ちどおしくて、ならなかったのだ。鉄砲とポインターを連れて一日中森の中や崖の方を駈けまわった。それで毎晩このところ老人は鳥や兎の料理にこき使われるといって、妻の顔さえみれば不平たらたらだったから私にはますます愉快な日が続いた。今日は稀有な大漁で僕はふうふういいながらえものを邸から調理場へ運ぶと料理ができるまで、いつものように居間へ戻って本を読むことにした。しかし老人が大こぼしで料理しているところを想像すると愉快でたまらず、そうっとのぞきにゆくことにした。ドアのそばへ行くと老人の独り言がきこえて来た。「この、旨そうな甘い色、赤い色にはいちごの味」私はガラス越しに中を盗み見、あまりのことに目がクラクラとしてもう少しで声をあげるところだった。老人は今兎の耳をつかんでつるし上げると、ナイフで兎の目玉をくり抜いてそれをしばらくかざしていたがまるでアメ玉を、しゃぶるように自分の口へ入れたのだ。右の方にはコップがあって酒が入っており、その中にも鳥やけものの目玉がまるでブドウの大粒のように沢山入れてあった。「赤いの青いのある中に草色さんも仲間入り」尚も盗みみていると老人はまた一つ目玉を指で挟んでコップの中へ落とした。「茶色の目の玉ホレ薬……」私は、のぞいていて膝がふるえて困った。そうっとそのまま帰って妻にも喋らずにおいた。こんな事を喋ったら大変な事になると思ったからである。このき明かして、老人と一緒に葬式を出した。老人も彼女が先祖の墓の下に納まってしまった後も泣きじゃくって、僧侶にこんなことをいい悪い夢に悩ませられた。老人が墓地へ行って死人の目玉をしゃぶっている夢だ。もう夜はいつも妻と一緒に寝るようになった。

冷えびえとした秋の夜だった。妻は町に用があって留守だった。で、私は今は早目に寝てしまうことに決めて、自分の部屋へ入ってねてしまった。

どのくらいたったか、ギャアツという声に目をさまされて、私は耳を澄ますと、もうすっかりふるえ上って毛布を頭から引被った。かすかに階下から老人の声がきこえるのだ。

「猫の生き眼にコニャック一ぱい。スペイン金貨を想い出す」

なおも耳を澄ましていたが、それきり老人はねむってしまったらしくて、何もきこえなかった。

4

彼女と結婚して三年目の秋、ちょっとした病気にかかって妻は嘘のようにあっけなくこの世に別れを告げてしまった。私は一晩中泣

ったりした。

「おお坊様、こんなことってあるでしょうか。嬢様はたった一週間前まではいつもと変らず元気ではしゃいでいたのです。たった四日間で土の中なんて、嬢様は殺されたのです。こいつです、人殺しは、この若僧です、初めっからわしがくさいとにらんだのでわしが嬢様にいったのに……。坊様、お役人を、呼んでください。私は見たのです。この若僧が金に目がくらんで嬢様に毒を口移しで含ませたのを。坊様、こやつは人殺しなんです。この若僧を裁判にかけなきゃいけません。そうでないと次は、次はこの爺が、締め殺されます。毎日儂をにらんでおるんです」殺されます。毎日儂をにらんでおるんです」

今日からこの古い邸で気味の悪い老人と二人きりで暮すことになった。まるで妻を待つようにいつも妻の座る席の前に食事を並べ、椅子も人を待つような形にしつらえて、私は老人と食事をした。老人はよくかんでいる。目玉は丸いから、かみ難いのかもしれない。

5

また冬がやって来た。昨日からの吹雪がまだ続いて、

……今日も又一日が暮れて夕食をとると、(もう近頃は食堂までゆくのは面倒になっていたから、居間で食事をとっていた)マントルピースに向い、老人がめずらしく私に声をかけた。

「おめえ様、ずいぶんきれいな眼をもっていなさるが、わしにひとつゆずってもらえないかね。お礼は何でもええ、わしはこんなきれいな眼は初めてみた。おめえ様の青く澄んだ眼をみつめていると儂は故郷の湖を思い出すだ。夏はよく遊んだところさ、きれいな湖だったがね。それをおめえ様の目をみると思い出して、それから家の親や兄弟のことまで思い出されてしかたがねえだ、おらほしいなあ。いくら出せばくれるね?」一ポンド金貨一つで?」

私はびっくり仰天した。たった一ポンドばかりで片目をとられちゃたまったもんじゃない。あわてて断った。

「けどよ。おめえは二つもあるでねえかあ。私を助けると思って一つもらえねえものかな儂の全財産投げ出してもええ」老人はやたらに欲しくなったとみえて、片手を私の方まで伸ばして来た。

「冗談はよせ!」私は一喝してみせた。

「あれ冗談でねえよ、おら本当に欲しいんだ。おら墓場にかくしてある宝物やるてば」

老人はものほしそうな顔つきで、私の眼をのぞき込んだ。急に私はあの日、彼が料理室で動物の目をコップに入れて喜んでいたことや、あの気味の悪い歌を、それから真夜中に老人が、生きている猫の片目をえぐりとったのを思い出した。

片目をギラギラさせた老人は舌なめずりをして話しに熱を入れて来た。

「今までいろんな動物や鳥の目玉、生で食ったが、小さくてだめだ。けんど儂この間この森ん中で行き倒れになった、若え女の目玉えぐってくっただ。嘘じゃねえ。まだ一つとってあるからもってくべえ」そういうと老人は

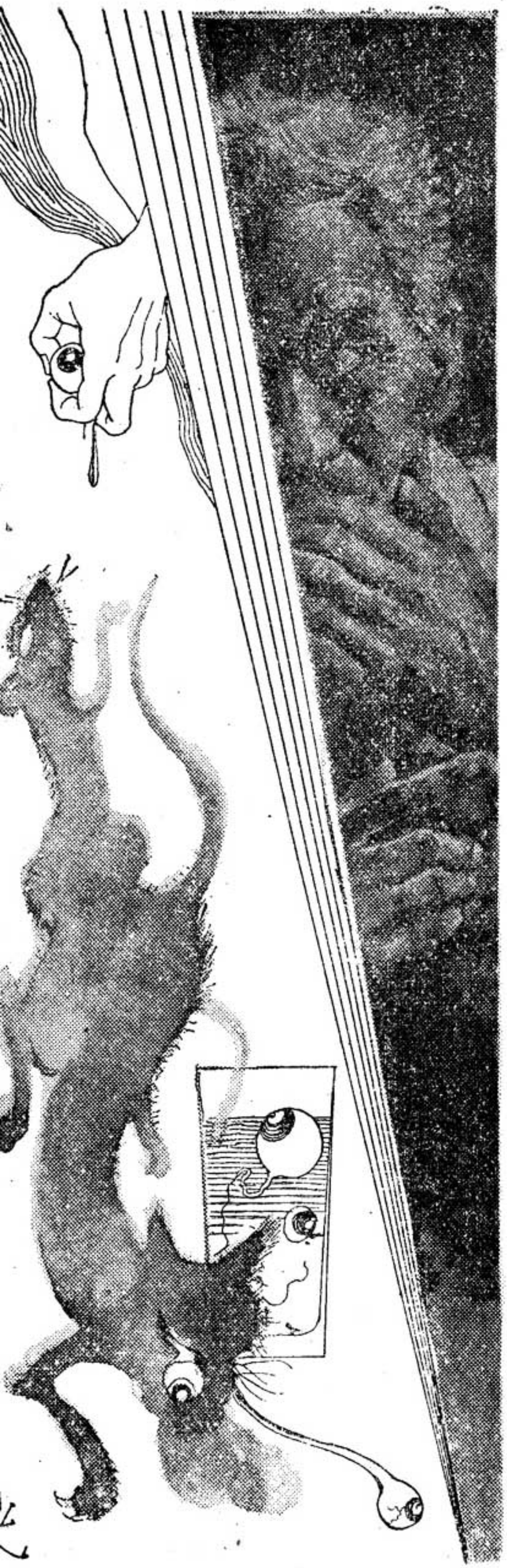
すぐコップの中の酒の底に沈んでいる草色の目玉をもって来た。私はそれをみて血がすっかり凍りついてしまった。

「嬢様に一度喰わしてやりたかったくれえな味だった。喰い方を教えてやろう。こうだ」

「いいよ、いいよ」私はあわてて断ると、もう休んでいいからといって老人を無理やり帰した。

彼女がいなくなっても、引き続き私は彼女の部屋で寝ることにしていた。その夜、私は老人のものほしそうな顔が浮んで来てなかなかねむれなかった。そうこうしている内に古時計が十二時をのんびり打った。それから、階段の方で殺すように押えた足音が階段を上って来たようだ。びっこの足音だ。——ああもうそこまでくる——僕はすっかり舌がもつれ、体が硬直してしまい、ベッドから出るどころか指一本も自由に動かなくなってしまった。やがて足音ははっきり聞えてくるようになり、それが私の寝室の前まで来るとピタリと止った。僕は体をすっかり硬くしたまま頭から毛布を引っかぶり、目だけドアを凝視した。それというのは時計の針のように目にみえぬ早さでドアがだんだんすき間を大きくしてきたのだ。二十分ほどで人のこぶしが入るぐらい開かれると、扉がキキッと音を立てたので、そのまま三十分ばかりがたった。私が目醒めた様子がないとわかるとまた扉はゆっくりゆっくり開き出した。

人の頭がやっと入るぐらい開くと、酒を入れたコップがまずそろそろとはい出て来た。私は大声で助けをよぼうにも舌が上あごにひっついたままで、どうにもならなかった。続いて全くゆっくり老人の顔が、あの黒い目から先に疑い深く部屋の中へ入ってきた。すっかり頭を入れてしまうと、左右をみまわし、何事もないとわかると右手のナイフを口にくわえ、そろそろと右足を入れ始めた。それからは少しずつずり足でじりじりと部屋の中へ入ってくるのだ。十分ぐらいかかってやっと全身が入ると、ナイフをくわえた口と黒光りのする片目をゆがめて、悪魔さえすくみ上っ



てしまいそうな笑いをみせた。そして足下に置かれたコップを右手に持つと、そうっと、そうっと、私の枕元へ近寄って来るのだ！

すっかり私の頭のそばへ近づいたのでコップを下へ置くと、上体を私の顔の上へかがめて寝息をうかがっているようだった。やがてすっかり安心したらしくコップを拾うと私の耳元へ無遠慮に置いた。飛び出さんばかりに私の心臓は夢中だ！　私はもう気がなかば遠くなりかけて無神経の状態になっていたが、両手でしっかり握っている毛布をそっと下へ引っぱられたときは、ピクッとして、われにかえった。私は今やこの毛布だけが頼りだった。爪が喰い込むほどしっかり握りしめ、息を殺した。だが脈と心臓は進軍ラッパの勢いだ！

老人は二三度引いてみたが、うまくゆかないので少し休み、鼻からあつい息を吐いた。それからしばらくたってまた、今度は不意に強く引いたので危うく毛布をとられるところだった。それから小刻みに続けて引っぱったりしたが、私はサザエのようにに自分のふたをぴったりしめて動かないでいた。

老人もすっかりてこずったらしく、しばらく私の頭の上で当惑していたが、チャリンとナイフをコップの中へ入れると、毛布の上から私の目のあたりを指先で撫でまわし、負け惜しみを、呟いた。

「明日の晩もあるわ」そろそろと扉のところへ帰ると、扉に当らないように注意して室外へ出た。そっと扉をしめて、大儀そうに階段を下りて行った。

翌朝になると老人はいつもの通り朝食をこしらえ、別に変ったふうもみうけられなかった。

朝食を終ってコーヒーをすりながらくつろいでいると、老人はいぶかしげな顔をして私に質問した。「ゆうべは恐ろしい夢をみなさったかな？」

「ああみた。追いはぎに逢った夢さ、ちょうどお前のようにやせた奴が一人さ」

「で？」老人は私の顔を注意しながら不機嫌そうにいった。

「今日はなんとおどかしても無駄だと断固として断ったら、『じゃ明日来る』といって消えたよ」

「ふむ……じゃ今夜も出たらどうなさるね」

「靴だけやるね」僕は上目づかいをしていった。老人は今夜こそ私の目をとるつもりらしい。

その夜私は十一時半頃起きた。そして隣りの室のピアノを開き、一番低い音の鍵盤を長く間隔を置いて十二叩いた。そしてすぐ寝室へ戻ると、耳を澄ました。

するとゆうべの如く階段に血を凍らせるような足音が聞え出した。そして扉の前で止り扉がそろそろ動き始めた。ゆうべよりももっと慎重さが現れていた。私は指が五本入るぐらいに開かれたころ、いきなりドアーを全部開いて、そこに立ちすくんでいる老人目がけて靴もくだけよとばかり叩きつけた。

ドタリと朽木が倒れるような音を立てて老人は倒れてしまった。僕はすぐ扉をしめて様子をみていると、しばらくたつと立ち上って階段を降りて行った。僕はすぐあとにつづいて降り、老人について彼の寝室へ行って鍵穴から中をのぞき見た。老人は打たれたひたいをさすりながら不平をこぼし、床の中へもぐり込んだ。

五分ぐらいして時計が十二時を打ち始めた。老人もすっかりてこずったらしく、しばら



6

その夜、私はやはり十一時半ごろ老人の室へ棒をもって行って、絶体に開かないように工作をしてから、ピアノを時計のように十二叩いた。老人の部屋へ再び忍び寄ると、コップとナイフの用意が終り、まさに上衣を着て私の部屋へ出掛けてくるところだった。

ドアを開けようと思って把手に手をかけてピクッと肩をふるわせて後へ飛びのいた。それからすぐまた把手に飛びつくと、めちゃくちゃに把手を両手でつかんでゆさぶった。それから扉をどんどん叩いたり引っかいたり、まるでわなにかかった狼のように狂い出した。

「おお……」老人はすっかり落胆して頭を両手で押えると、ベッドにへなへなとしゃがみ込んでしまった。私は鍵穴からすっかりそれを見届けて急いで扉に工作した棒をはずして急いで扉に鍵穴から中をみていると、た。それからまた鍵穴から中をみていると、時計が十二時を知らせた。

老人は弾かれるように立ち上ると「ズーン」「ズーン」と音がするたびに、あの黒い



ときが弾かれたように老人は飛び上った。そして時計が最後の音を打ち鳴らすと、ふーっと大きく息を吐いて横になってしまった。

翌朝老人はこぶを気にしながら、私の前で朝の仕度を整えた。私はさも不審そうに問うた。

「おや、どうしたね？　そのこぶは」

「ゆんべベッドから落ちたらしい、どうも」

老人はまだ腑に落ちないといったあんばいで答えた。

一つ目を右に左に動かして、神妙そのものだった。鳴り終ると気が抜けたように床に入ろうとした——が、急にはね起きるとドアのそばへ走り寄り、把手に手をかけたので、私はすぐわきへ体をかくして様子をうかがった。

「ああ……」突拍子もない声でそう呟くと、顔をいっそう渋くしてベッドへ帰った。

朝になると、老人は私にたずねた。

「おめえ様、夕べは時計が十二時を二回打ったのを覚えてらっしゃるかね？」

「そんな馬鹿な事があってたまるかね。はあ、ゆうんべ悪い夢をみたね」

「夢だって？」

「時計が二回も十二時を打つわけがないじゃないか、それとも十二時ごろ何か仕事をしているのかね？」私の質問に老人はすっかり体面を失い、しょんぼり引っ込んでしまった。

それ以来老人はすっかり神経質になり十二時になるときまってベッドの上で半身を起し音に首を合わせて振ってすぐと老人はびくびく打った後にピアノで一つ余分に音を入れて知らぬ振りをしていた。老人は朝になると持ち切れず私の寝室をドンドン叩いて、目をぐりぐりさせて、十三たしかに聞いたと強情を張った。

「何を馬鹿をいってるかせいで空耳をきくんだ。たらどうかね？」

「とんでもねえ、とんでもねえ。そんな、年令のせいだなんて！」

「じゃ、なぜ十三も音がこえるんだね？」

「きっと悪魔が儂の目を狙っているだよ」

「悪魔に目を喰われないうちにどこかへ行ったらどうかね？」私はこことばかり気を引いてみた。

返事はやっぱり儂はこだった。私は遂にこの老人を殺す計画を実行に移した。

7

私は新月の夜を待って、用意を整えると、例の如くピアノで二つ余計に音を加えてから私は老人の寝室の天井へ時計に音を加えてから間作って置いた穴からのぞくと老人はびくびくしながらあたりをながめているところだった。私はいよいよ仕事にとりかかった。

針金で作った蜘蛛を真赤に塗ったものを穴から釣り糸で下へ降ろし、静かに、静かに彼の目の前へ降ろして見せてから、又上へ引いた。再びそろそろと老人の鼻に触れんばかりに降ろしたとき、もう老人は赤い蜘蛛をみつめたまま、層で息をし、額に青筋を浮かせ口をひくひくふるわせて呟いた。

「死……死だ。死の使いがとうとう俺にもやって来た。こ、この赤い蜘蛛、わしの死ぬのを待っている。……わしが死んだら、すぐ、こ、この赤蜘蛛はわしの鼻穴から、生温かい内に儂の体の中に入り込む……そして、心臓まではいり込んで……俺の血を吸おうとして待っているんだ」

首尾は上上。私はもうすっかり有頂天になり、それからすぐ赤蜘蛛を引き上げると、天井板をつき破り、毛蟹のはさみを取り足を一本一本操れるように黒絹糸で用意したのを静かに降ろした。降ろしながら生きているように巧く操って、だんだん彼の頭に近づけた。もう老人は干物の様に体をつっぱり、目は飛び出さんばかりだった。老人の頭よりも大きな毛蟹を操って、私は少しずつ、少しずつ老人の鼻へ近づけた。だんだん足をもしゃもしゃ動かしながら毛蟹が近づくにつれて、老人のゆがんだ口がだんだん開いた。——もうあと一フィートばかりに迫ると、老人の顔はこの世の人間の相ではなくなった。「目をくれえい」低く呟き声をあたりにひびかせてか

ら、私は操り糸をどんどんのばして、つ
大きな毛蟹を老人の顔の上へ乗せてやっ
瞬間、老人の大きな口からつんざく様な悲
鳴が出た。
「ひい――いっ」邸の中から森全体にひび
ような甲高い声をあげると首がだらっと枕か
ら落ちた。操り糸を両手から離すと、私は急
いで天井から降り、すぐに彼の心臓に耳をあ
ててみた。
「勝利！」私は、そう叫ぶと嬉しくてたまら
ず老人の枕元からコップとナイフをとり出し
て、黒い老人の固をえぐりコップの中へ入れ
た。それから私は皮肉なつもりで、そのコッ
プの目玉を酒と共に老人の口の中に入れてや
った。私は後で何が起ったかそんな事は知る
由もなかった。彼の検べものをするのにすっ
かり夢中で――しかし今確かに跛の足音が…
…三歩起った様だ、たしかに。……まさかそ
んな事が。私はふり向く勇気がなかった。
「お――っ。はて？……いやに真暗でねえか
！」私は思わずふり返ってみて髪が逆立った
老人がうつろな目から血を流したまま立ち上
ってこっちをみて話しかける様にまた二三歩
歩き寄ってくるのだ！　私はもうすっかり覚
悟をきめて隅にすくんだまま動けなかった。
老人は自分の右手で目をこすると拍子抜けの
声をあげた。「あんれ？……儂、眼がねえぞ
おっ。まさか……そうだ俺今夢みてるんだな。
そうだ。また悪い夢をみやがった。そだ、そ
だ。おー神よ」
私は老人が、すっかりベッドへもぐり込ん
でしまったのをみ屈けると老人に気づかれな
いように忍び足で出口へ歩いてゆき、扉を音
の出ないように、それこそ木が育つ位の速さ
でそうっと開いた。静かに――息を押し殺し
てああ、もう少しだ。……あと、半インチ…
…もう少しで体が通れる位の間を作って一呼
吸入れたそのとき。カシャンと、さっき老人
の目玉をいれたコップが倒れて砕けた。
本能的な素速やさで私はドアをバタンと開
くと夢中で部屋を飛び出し自分で感心する位
に速く又ドアを閉めてしっかり押えた。
老人はけもののような声と共にベッドも飛
び出すとすぐドアに来てぶっかり、それから
すぐもの凄い力でドアを引きあけた。
私はすぐ寝室を飛び出すと隣りのピアノ室
へそおっと入り込んだ。老人は裾を引きずり
ながら手さぐりで私の寝室に辿り着くとおど
し文句を叫びながら扉をあけて中へ入った。
それから暫く物につき当る音や物が倒れる音
が続いたが十分もすると少しの間静かにな
た。――私はそこで落ちつきをとりもどすと
ピアノを低く十二回ノンビリと弾いて隣室に
耳を傾けた。一分――二分……私の思う壺だ
った。隣りの寝室から老人が放心した様にだ
らりと両手を下げて出て来た。「十四と十二
か、さっきと今とどっちが夢になるのかな。
十四と十二」階段のところまで来ると老人は
立ちどまった。「ここだ。この化物め！」私
は用意の細紐を高く差しあげた、そのとき。
老人は「はてな？」と呟いて振り返った。
互の触感で二人は棒の様にその場に立ちす
くんだ。……やがて老人は右手を私の顔の方
へそろそろと差し出して来た！
私は最早やこれまでと片足を上げると地獄
でねんねしろとばかり力一杯老人を蹴落とし
た。ゴキンと鈍い音が下の方で一度したきり
だった。翌朝、医師と坊さんと警官を呼んだ。
酒臭と首骨折をみて三人共過失死だと言っ
た。「だけど彼の目はどうしたんでしょう」
すぐもの凄い力でドアを引きあけたずねた。
私が白ばくれてたのさ」三人はさもつ
「自分で食ってしまったのさ」三人はさもつ
まらない質問だとばかり私をみて答えてくれ
た。「彼はいつも動物や死人の目を酒と一緒
に喰ってるんだよ貴方……」

江戸暗黒秘録

妖異怪奇譚

★晒し首の美女の口吸う男、人喰い女の怪、乞食のピン
★からキリまで、あやしい刺青女等々、江戸奇談珍談抄！

鈴木東桂史・絵和夫

江戸の三面記事

今回は封建社会の巷間に起った珍談奇談を拾い集めて御紹介してみる。

凄惨な話、不思議な事件、ばかばかしい出来事、それにおのずからお色気も加わって、要するに「エロ・グロ・ナンセンス」という事になるわけだが、「スリル・スピード・セックス」の3S氾濫の当節、あえて時代をさかのぼってみるのも、また無意味ではなかろう。

江戸の裏面史——その時代相というものはなかなかにショッキングな要素の強い話も多いのだが、筆者はいたずらに興味本位でばかりそれらを眺めようとしているのではない。

江戸の話だからといって、必ずしもノンビリしていられるわけのものでもない。現代の世相だって、あまり感心できない面が多いのだ。

そこで、映画「私は死にたくない」に寄せられたアルベール・カミュの言葉を拝借して云うならば「……人類がまことの文明を持つ時代はいまなお遠い将来のことであるが、この一編は少くともそのような時代をもたらすことに貢献する名誉を有するものである」というようなことに相成るわけだが、——何もそこまで力み返っちまおうというのではないのだが、筆者はいたずらに興味本位でばかなものに一歩でも近づき得るならば幸い、と思うのである。

まずはそういう次第で、以下、江戸時代の三面記事ともいうべき記録の数々を、何らかの参考に供したいと志すものである。

獄門の美女に接吻

「新著聞集」という世の中の珍談奇談ばかりを書いた昔の書物がある。

その中に、母娘二代にわたる出家との不義を罪に問われて処刑された二組の夫婦の話がある。若夫婦の方は斬首の上獄門の刑となったが、晒し首の女の美貌に魅せられて「ぜひとも接吻をしたい」といい出した見物人がい



た——というのだから、どう考えてもマトモな感覚とはいいがたい。

「非道淫暴親子夫婦」という章にあるもので事件は大阪、時代は元禄のころと思われる。大阪上町のさくら町に、後家の女ありし。

ある寺の隠居したる僧、いつしか還俗して彼と親しみなれて夫婦となりし。後家がひとり娘に、吉とてありしが、容儀（容貌）たぐひなかりしかば、又も、かの継父、心をうつし、さまざまに云ひわたりしかど、仮にも親と名の付きたる人、店に六十歳にあまる、古入道のその身をかへりみざる程こそ、心憂けれとて、取もあへざりしが、（相手にしなかったが）その家の借家に空月といふ道心者のありしに、久しく心をかよわし、親のかくこそ申すとて、（誘惑されてはいけないよ、と）かづ〳〵の文など見せて、とかく家を立ちのき、いづ地にもあれ果てんと云ひかはし、長堀の上三軒やといふ所に、宿をかりて住みけるを、継父、いきどほりて、公儀へ訴へ、対決におよびしに、（かえつて籤蛇となり）親の不義まぎれなくて、大阪を追放あり、空月は出家の不義、女は出家をおとせし科、のがれがたくて、夫婦とも首を刎ねられ、道頓堀の、千日寺の前に晒されしを、見物の中より、さても美女かな、口を吸ふべしと云ふ。番しける乞食ども、吸はすべきとあらそひしが、やがてその者からめて公儀に出しけれぱ、則ち牢舎せしとかや。（牢へつながれた）

この吉が実父も、出家にて、かくし女に出来たる娘なり。空月も、親は出家にてありしとなり。まことに、互ひの因果のほど、

おそろしき事にあらずやと、人々の忌み侍りし。

——というのである。

口吸い、すなわち接吻、つまりキッスのことであるが、何も、そう新らしい風習ではないとである。大昔から、いろいろな名称で呼ばれ、いろいろな書物にもその描写が現われている。

しかし、公衆の面前で獄門の生首にキッスしようというのは、さすがに奇中の奇であって、警護の非人（乞食）が驚いたのも無理はない。取押えられて入牢したこの見物人は、屍好症（Nekrophilie）でもあったろうか。

それにしても、独身者同志の相思相愛が、「不義の罪」として、獄門とされるなどは驚くべき極刑である。

僧の女犯や親の許さぬ不義密通等の話は本誌旧号にたびたび述べたので、ここでは省略するが、昔の恋愛に対する法的制限というものは、実にお話にならんほどに厳しいものだった。「坊主だまして還俗させて……」という歌があるけれども、だましてもだまさないでも全く命がけの恋だったのである。

首吊り奇談

同じ「新著聞集」にいささかユーモラスな因果応報譚で「貧姥締る事を教へて却つて死す」と題する話がある。

これも不自然な間柄の夫婦が悲喜劇を招いた事仲であり、夫は六十過ぎの医者、妻は十六歳の女、という孫ほどにも年齢差のある組合せだった。その顚末は——。

寛文元年、江戸八丁堀に、六十余歳の医師妻をむかへけるに、媒の虚言にやありけん（仲人が嘘をついたとみえて）、十六歳の女なり。

この女、隣の姥にかたりしは、われ斯様斯様の事なり。さればとて、親の方へもかへりがたし、この上は、首をくくりて死なん。われ死にたらば、手箱に金子二十両あり、これをまいらするぞ（さし上げましょう）。また首のくくりやうを知らず、教へてたべといふ。

姥、初めのほどは、これ皆なむすび神の御引合せなどと、おとなしやかに聞きいしが金の事を聞きて、それほどにおもひ定めたまはば教へ申さんとて、天井より縄をさげ桶をつみかさねて、かう〳〵くくるものなりと、仕方（真似）をしけるが、桶をふみはづし、ぶら〳〵とさがりしまま、かの女おどろき声を立てければ、近所出会ひ、やがて縄をきりけれども、姥は息たへぬ。

と、奉行所へ出でければ、ただ堪忍せよとて（奉行が）仰せられしかど、しきりに訴訟せしゆへ、（奉行も態度を変え）汝が母は大欲不道の者なり。金をとり、首くくる様をしへし罪軽からず、生きておらばすべきやうもあり、死したれば力なし。その子なれば、科のがれがたしとて、百日牢舎せられし。医師は法体と云ひ、年ごろと云ひ、だん〳〵不届の事なり。はや〳〵妻を親もとに帰へせよと、さんざんにしかりたまひしとなり。

というのである。この「新著聞集」という書物は、本誌旧号にも何度か抜き書を紹介したことがあるが、昔の文章に特有の微妙な省略法がしばしば用いられており、ことに会話の前後にそれが多いので、ところどころカッコをして補足したようなわけだが、その他にも、特にこの話などは、余分な推理をしたくなるような要素を持つ事件といえる。

たとえば、昔の女は十六歳といえばもう大

人である。その年で嫁に行くのもそうたいして珍らしいことではない。早い話が江戸時代の刑法では十五歳以下を未成年とし、不完全刑事能力者とみて、これに相当する犯罪者に対しては罪一等を減じる恩典を与えていた。

江戸の法律「御定書百箇条」の第七十九条に、こうある。

拾五歳以下之もの御仕置之事

一、子供心にて弁へ無く人を殺し候もの
　拾五歳迄親類へ預け置き　遠島

一、子供心にて弁へ無く火を附け候もの
　右　同断

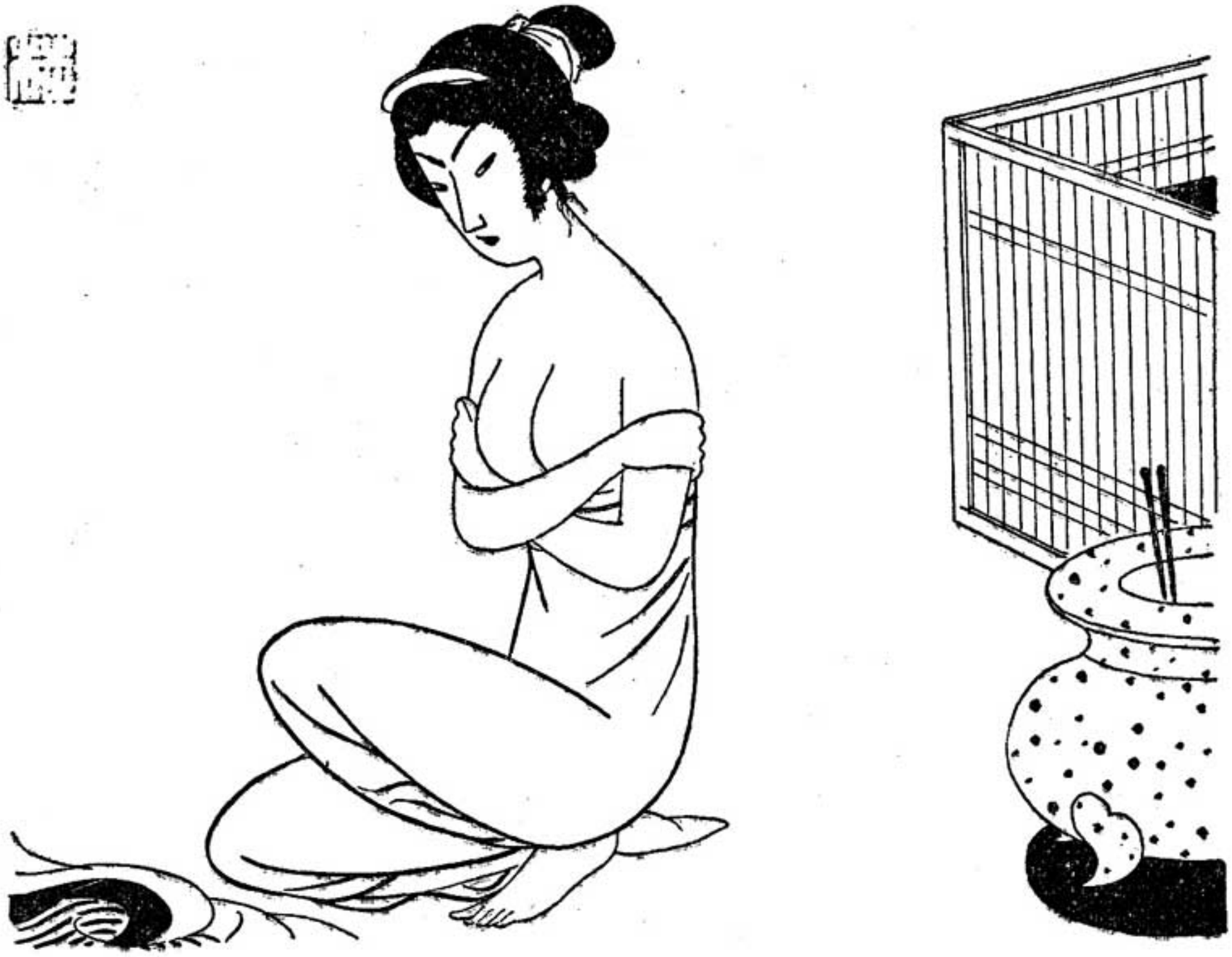
一、子供心にて盗みいたし候もの
　大人之御仕置より一等軽く可申付

等とあって、十五歳を過ぎると大人と同様の刑罰を受けたものなのである。

子供と大人の中間に「少年法」みたいなものを制定しなかったのは、どうも乱暴な話だが、反面、当時の社会通念として十五歳以上の者は、たしかに大人でもあったのだ。

男子が大人となる式の「元服」が十六歳であり、また嫁入りをした女の眉を剃り歯を染め、人妻風に結髪することを「元服」といっていた時代もある。

大久保彦左衛門の初陣が十六歳、八百屋お七の放火が十六歳であったか、十五歳以下ではなかったか等々と、いろいろと話が脱線して行くとわかりやすいのだが、要するに昔の人は早熟短命でもあったし、現代のように寛大にしておいたのではソロバンが合わなくなる点もあったのだ。従って江戸時代にはハイティーン族の無軌道ぶりが社会問題となるようなこともなく、ドシドシ捕縛して、スッタスッタと大根のように首を斬り、ズブリズブリと磔刑に処し、メラメラと火あぶりにしーという具合のもので「カックン！」などと



茶化してはいられない厳しさがあったわけである。

さて、その大人である十六歳の女が、相手を六十過ぎの爺さんであるとも知らずに嫁に来たのは、「女衒なみ」の仲人の口車に乗せられてのことか？　と一応は考えられるとしても首吊り自殺の方法を知らないというのはあまりに無知すぎていぶかしい感じがする。自殺幇助の行き過ぎで自分が死んでしまった隣家の婆さんは「死人に口なし」だ。果たして女の申し立て通りの状況だったかどうか疑がわしい点がないでもない。自分の眼の前で死んで行く者を助けられないはずは、ないとも考えられる。

婆さんの子供が女を訴えたのも無理からぬところだ。二人の女の間には何か隠れた事情でもあったのではないか？　と、シャーロック・ホームズ氏や銭形平次先生あたりなら乗り出してくるだろう。「しきりに訴訟せし」というのはよくよくのことがあったのだろう。

それを奉行は「死したれば力なし」などとともに「血気少年刑事責任能力論みたいなものを、もっともらしく持ち出したりしながら、原告に百日の入牢を課した、というのだから、大岡裁きスタイルに似て非なるオッチョコチョイ判決ともいうべきだ。

狼、少年を喰う

馬鹿をみたのは訴え出た男で、これに比べれば「ベラボーに若い妻をむかえた厚かましい老医師など「きっと叱りおく」で済んだのだから安いようなものである。どうも片手落ちな、あまりスッキリしない話でアルバ――というのが筆者の結論だが、詮索過剰というものだろうか？

「篠舎漫筆」という随筆書がある。著者は西田浩蔵直養という豊前小倉の藩士。京阪の留守居役をつとめ、本居宣長の門人であり平田篤胤とも親交があった。学者にして歌人、また勤王家でもあって、元治二年の三月、七十三歳の高齢だというのに、自己の信念を貫くため絶食自殺を遂げた人である。

その随筆書の内容は、おおむね学術的な文章で占められているが、ところどころに世上の出来事を記録した部分があり、コワイ話もされば（身長が足りないので）しづ〳〵と収められている。同書の巻之九に「血気少年狼にくひ殺さる」と題して、こうある。

千本通りなる酒店の子、血気壮なるがありけり。只ひとり愛宕山に、夜にいりて参りけるが、道にて盗賊にあひ、丸はだかにせられ、道のかたはらなる木にしばりつけられたり。声たててをらばへども（救けを喚んだが）ただ山彦のこたふるばかりなり。夜やゝふけゆくまま、人のかをかぎつけて狼いで来たりて、足の指さきよりばり〳〵とあちしめてくふ。いたさ堪がたければ、声をかぎりにさけべども、おほかみは何ともおもはでよほろよりはぎかけてむざむざとくひあがる。はじめのほどは足にてけてもみしかど（蹴ってもみたが）くらひさがりひしとかみたつれば、後はせむすべなくて、そろ〳〵とふともゝまでものびあがりてくひたりけり。あなや声たてけれどもこたふべき人もなく、つひに目玉を見出していきたえたり。

狼は口のとどくかぎりは、すぢりもぢりのびあがりくらひけれど、おのがたけおよばざれば（身長が足りないので）しづ〳〵と み谷をさしていぬめり。世にあらぬおかしにて、くびをはねられ、はりつけ、火あぶりと、くさ〴〵のけいにおこなはれぬれどつみもなくて、かく生ながら足のつまより

くはるるなど、いひがひなきすぐせ（哀れな運命）なりけり。

つとめて柴かるひとのゆきがかり、ふと見つけて、世の中にも此事ひろまりけり。かく此事見るが如くしるしぬるは、そのさまをおもひやりてなりけり。筆とるも心わろし。

というのである。「筆とるも心わろし」とあるのは「おもしろがって書いているわけではありませんぞ」という意味になるが、これは少々苦しい弁解となったようだ。

なにしろ、目撃者がいない出来事なのに「バリ〳〵と味しめて喰う」だったり「むざ〳〵と喰い上る」だとか「そろ〳〵とふとももまでも——すぢりもぢりのびあがり」などとあって「しず〳〵と」狼が去って行くところまで、妙に刻明な記述だからである。西田直養先生としては、書いてしまった後で「こりゃマズイな……」と気づいて、最後に断わり書をつけ加えたのかも知れない。

「そのさまを思ひやりて——」というのは、「無惨な運命に同情を禁じ得ず」との意味にもとれるが「状況を推理した結果」との意味にも思える。

ともかく、学者先生がこの事件に惹かれるものを感じて書いたことは確かだろう。それは、三面記事的なものに対する興味か、怪事件に覚える好奇心か、残酷への郷愁だったろうか？

ただ、この学者の場合はそれが無意識に出たので、いささか狼狽の気味があったのだろうと思う。

紀州家の女食人鬼

太田南畝、つまり蜀山人が書いた「半日閑話」という書物がある。江戸の奇事珍事怪事の数々を書き綴ったもので、自分の主観をまじえずに事件の内容を伝えるドライな手法をとっており、この点、現代風であり新聞記事を思わせるようなところもある。

その中から、二、三拾ってみよう。以下は「紀州屋敷怪談」と題する、人喰い女の事件である。

文化十三子年七月頃、咄しに承り候へば、喰違ひ紀州御屋舗内御門にて、或る時詰居り候門番、ふと咽をつき候ゆへ（何か咽喉へ物がつかえた、という意味）次の間へ出で湯をのみ候処、いづこよりか女出で肩を喰付き死す。この声に驚ろき両人（二人の者が）右の処へ出づれば、この者も其の女の為に喰ひ殺さるとぞ。其後又御長屋にて子供を枕蚊屋の内へ休ませ置きし処、其行処を知らず失せたり。蚊屋はそのままにて少々も破れも見えず、依つて夫婦驚き早々探しけれども知れず、翌朝隣家の縁の下より、右の子供死骸出づると、隣家の者物語りしよし、秋田源八郎之れを語る。

というスリラーめいた出来事だ。喰違いとあるのは、江戸城三十六見附の中の「喰違い御門」のことで、赤坂にあった。江戸時代の地図を見ると、この城門だけが喰違いの構造になっており、その御門の外側に五十五万五千石の紀州家上屋敷があったのである。小石川御門外の水戸家。市ケ谷御門外の尾張家。それに喰違いの紀州家。これがすなわち御三家（将軍家の親類）の江戸上屋敷の配置であり、ただ街の一隅で起った事件とは性質が違う。

町方役人や江戸の社会部記者たる瓦版屋などが踏み込むことのできない場所だ。

女は食人症（Anthropophagie）だったかも知れないが、多分、狂人だろう。そして、

屋敷内に住む女だったと見てよい。

被害者のことばかり書いてあって、女の始末が記述されていないのだが、再三にわたって出没しているのに取押えられなかったのはなぜだろう？　門番などの小者とはいえ大の男が三人までも喰い殺されたのはどういうわけか？しかも二人一度に殺されているのは？

狂女の超自然な力が男達を圧倒した、ともも考えられ得るが、女の方の身分が高くて抵抗や制止ができなかったのではあるまいか？とも思える。

何にしてもオッソロシイお話であって「お前死んでも墓にはやらぬ。焼いて粉にして灰で飲む」というような粋な食人症的情緒のものとはわけが違うのである。食人症を描いた文芸作品としては、江戸川乱歩氏の小説「闇に蠢めく」に、二人の男が一人の女の死体を奪い合って争い、やがて——という、ゾオッとさせる結末に至る凄い描写があるが、ダンセニイの「二本の調味料」という短篇も傑作として知られている。こういう筋だ。

あるバンガローを借りている一組の男女があった。やがて女が急に姿を消した。男が殺害したのだろう、という推定が立ったが、証拠がない。第一、女の死体が発見されないしだから蜀山人の文章の方を御紹介してみる。

文政元寅年五月中旬頃、赤坂油揚やの女房男は庭から一歩も外へ出ないのだ。二週間のあいだに男のしたことは、バンガローの裏堀之内（杉並区の堀之内。妙法寺という日林の木を全部切り倒して、薪にすることだっ蓮宗の名刹があり古くから江戸人の信仰を集めていた）へ願かけに日参致す処、或日た。しかし、彼はこの薪を一本も使用しなかった。遅まきながらある日、家宅捜索が行なわれたが、犯罪の跡はどこにもない。ただ、二本の調味料の空瓶が出て来たのみ——。男処、淀橋の先江戸屋の横町にて、非人共には菜食主義者なのだが、その調味料は肉にし山へかつがれ行き、三十人許り（ばかり）か使えない物だったのだ。そこで、恐ろしい推理にて手代を木に捕へ置き（木に縛り付けた）が成立する。女の死体は全部、男の嚢袋へ入その前にてかの女房を犯し候よし。夜明けってしまったのではないか？　というのだ。人見付け候は悪計り出で、こもの上に其の「それじゃあ、なぜ、彼はたくさんの薪を造ったんでしょう？」

「……食欲をつけるためさ」

という戦慄すべき会話で、この小説は終っている。

乞食が人妻を輪姦

同じ「半日閑話」に「赤坂油揚屋女房」と題して、三十人ものの乞食に人妻が輪姦された事件が書かれているのだが、事件そのものとは関係のないことではなくて「油屋」の女房だと伝えられていくと、日頃情けなくあしらひ候ゆえ、それを乞食鬱憤におもひ仇をなし候由。それより兎角油揚屋の見世先へ参り、此うちの女房よいきみである、己が女房だなぞと申し

色々悪口に及び候由。

とあって、乞食の群れに復讐をされたのだが、事件の現場は中野の辺りであるから、この乞食達は江戸の郊外に根拠地があって、昼間は御府内（江戸市中）へ稼ぎに出掛けて行ったものらしい。あいにくと妙法寺への道筋にあたっていたために、女はこの災難に遇ったわけである。蜀山人は、この後日譚を「乞食仕置」という章に書いている。

五月中、赤坂の油揚屋の女房一条、其の後非人召捕られ団左衛門の仕置に申付かる。総身を埋めて首計り出し、食を絶ち候由、骨塚原（千住の小塚っ原）に十六人之れ有る由、弟子相咄す。

という結末だ。団左衛門というのは非人頭のことだ。当時の乞食は一種の自治制団体であって、手下の中から犯罪者が出ると、非人頭が処刑を行う掟になっていたのである。

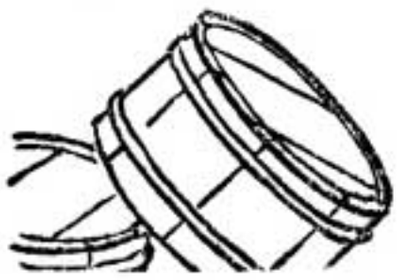
奉行所の断罪が下った後、身柄の引渡しがあって、厳しい処刑が行なわれる。一般市民の処刑もずいぶんと厳しいものだったが、乞食の場合は、その上さらに峻烈をきわめたものであった。

この話の場合は、すぐに殺すことをせず、土中に埋めて見せしめの晒し者とし、スローテムポの飢渇刑を兼ねる方法だったわけである。









高級な乞食

乞食の話は、いろいろな書物に珍談奇談が数多く書かれているが、もとより犯罪者型の乞食ばかりがいたわけではなく、聡明な乞食、ゲイジュツ的な乞食、善良な乞食等もいたのである。そういう一例として「奇説著聞集」という書物に、こんな話がある。

浪華（大阪）堂島といへる片辺りの裏店に住める八十に近き老人夫婦あり。其の子並に嫁

一人の娘を残して二人共死したり。老人夫婦に十一、二の娘ばかりくらしけるが誰あつて業を勤めて養育するものなければ家財を売食にして居たりしが、今はや売るべきものもなくなりし折から、或日、表の町にて乞食共芝居狂言の真似して四五人組にてあるきけるが、軒下に弁当を置けるを其の娘一つ取つて家に持帰り、已は食せずして祖父祖母に進らせぬ。三日も食せざりければ餓鬼の水に臨める如くなりけり。時に此の乞食共の内一人我が弁当見へざるよしへば、側に居たる子供口々に此の裏に住める娘の子持行きたると云ふを聞き、かけ行きて見れば、その弁当をちいればば食ひ居ける故、それは我が弁当なりといへば、娘涙を流し手を合せて其の乞食を拝みて云ふやう、我々共今日まで三日何もたべざれば祖父さま祖母さまさぞひもじからんと存じ、盗み帰りて進ぜし也、堪忍してたべ、我は存分になし盗みし者なれば、いかやうとも云へるを聞き、此の乞食大ひに感涙して云ふやう、決してくるしからず食ひ玉はれと云へるを聞き、此の乞食大ひに感玉へ、又外に我進じ度きものの有とて表に至り仲間に云ふやう、今日もらひためし我が分の分け前の米をわけ呉れよと云ふ。外の乞食ども其の訳を尋ぬるに、しか〳〵の訳ゆえ、われ今日のわけ前の米は此の裏店の娘にやりたしといへば、各々口を揃へ我々のもらひ前もやるべし、我々もと云ふにまかせ、凡そ弐斗程の米を残らず持ち行きあたへ帰しとなん。

まあ、米の量に関する部分はあまり信用できないとしても、こんな計算をしてみるのもまた、トボケたおもしろさのあるものだ。

乞食の義侠と気骨

次に、もう一つ乞食の話を書いてみる。武士よりも乞食の方がエラかったというお話で、荻戸太華という人の書いた随筆集「寡婦の利」にある逸話である。

或る軽き侍（軽輩の武士）一人江戸高田馬場を通りける折ふし、雪駄の緒の切れたれば、あたりに居たる雪駄直しに繕ろはせ、出来上りて代金を払はんとて懐中の紙入を探るに少しの銭もなし、素より軽き侍の事とて、往来の所用に宛て常に少しばかりの用意はあることなるも、此の日はいかがしたりけん、びた一文の持合せもなし。初め

百円から五百円——これはオドロキではないか。読者のうち、日収千五百円以上の人は試しに手を挙げてごらんなさいというような失礼なことはいわないけれども、「乞食を三日やったらやめられない」というのは、この辺りをいったのではないか。

懐中になきと知らば、繕ろはせまじきを、有りとおもひしより繕ろはせて、今更いかにとも致し方なし。近所に知人にても有りなば借りても遣はすべきに生憎其の人もなし。僅かの価ひの為に遥々遠き屋敷へ同道もなりがたく、我のみ帰り持ち来たりて渡さんとすれば、いんごうなる雪駄直し、中々承引し呉れず、去りとて致し方もなければ、色々と言訳して一寸待ち呉れ、すぐ持ち来たりて渡すべしと、折入りて、頼みけれども、此の雪駄直し非不尽の不届者にて少しの聞き分けもなく、果ては無銭にて繕はさんと企らんだ泥坊であるなどと罵り、有らん限りの悪口を云ひつのれども、元々自分にも銭の有無を調べずして、頼みし過ちあれば、只くり返へしく言訳しける中に、高田のはてとは云ふものの、何しろ往き来の人々立ちふさがりて誰一人立替へてやらうと云ふ者もなく、皆面白半分に見物し居たる折柄、その傍に菰をかぶつて臥し居たる一人の乞食むづと起き上りて見物人の中に分け入り、双方に向つて云けるは、前刻より事の始終を聞き居たるが、御侍様にはさぞ〳〵御難儀御察し申すなり。二刀を帯する御身分にて、さぞ口惜くおぼすべし、事の分らぬ彼を御相手にくれ〴〵の御言訳聞くも痛み入る次第なり。此の者は拙者がよきに計らひ申さん、何卒御かまひなくこのまま御通りあるべしと述べ、さて又雪駄直しに向つて云ひけるは、その方無礼千万の不届きもののかな、かの御侍は御自分を救はんが為なり、見れば供廻りも相応にの過失を謝して、あれほど懇ろに御申訳あるに、聊か聞入れず、悪口雑言して侮辱す軽きも重きも侍は侍なかま、侍の義理を知らば難儀を見てお救ひあるべきに夫れ（それ）を救ふ心のなき人は主にたのむ人にてはなし、御赦し下されたしとて、銭を押し返し、菰をまとひて臥しければ、後の旗本も本意なく恥かしげにて去りぬ。

というのである。少し話ができすぎているようでもあるが、（多少の扮飾はあるにしても）痛快な乞食がいたものである。

いくら先祖が槍一筋で一国一城の主になったといっても、その子孫代々までが馬鹿でも、低能でもふんぞり返って「ア、そう。よきにはからえ」などといっていていいものか？すべての人間は平等でアル。こいつは一番、行列に石でも投げて――と、まさかそんなバカなことは考えなかったにしても、当時の庶

民感情の中には特権階級に対する反撥が常にモヤモヤと潜在していたことは確かで、「侍が赤恥をかかされた。相手は乞食だとよ。こいつは大笑いだ」というので、せいぜい脚色に相務めておもしろおかしく文人が書き立てて世人また拍手喝采した——という事情は充分に納得できるのである。

莫連女の珍刺青

江戸末期、肥前平戸の領主で松原静山という名君がいた。この殿様はなかなかに文化人で「甲子夜話」という立派な随筆集を書いたことで知られている。文政四年から約二十年間世上のできごとを書き綴ったもので全二百八十巻の労作である。

ただ三面記事的なものばかりを書き続けたわけではなく、将軍家を痛烈に皮肉った文章なども書いており、なかなかに気骨のあった殿様のようである。たとえばこんな調子だ。

世に雷を畏るる者多き中に、最も甚だしきを聞けり、葵章（あおいじるし）の貴族なりとよ、雷を防ぐ為に別に居室を設く。其の制広さ十席余を鋪く。上に楼を構へ、楼と下室の間の梁下に布幔を張りて天井とし、其の下に板にて天井を造り、其の下に又綿布の幔を張りて又天井とす。これは雷は陽剛のものなれば陰柔の物にて堪へるが為にかく設るとなり。かくあらばはや止るべきを、楼屋の瓦下と天井板との間にも又綿を多く籠めて防ぎとす。最も可笑（笑うべき）は楼下の室の中央に屏風を囲繞し（めぐらし）其中に主人在りて屏中は被衾（布団）の類を以て主人の身をすっぽりと（うづめて）屏外には近習の諸士ども周囲して並び居ることなりとぞ。これ妄説にあらず、或人目撃の話を記す。物を懼るるも限りあるべきことなり。かかる挙動にて不虞の時、矢石の中へ出でらるべきにや、武門の人には余りなることとぞ思はる。

とあって、時の将軍は十一代徳川家斉であった。名代の暗君だったくせに歴代将軍の中では最も在職期間が長く、五十年も将軍をやっていたという厄介な馬鹿殿様だ。もっともさて、その「甲子夜話」に、途方もなく珍奇な女の話が書かれている。昨今の週刊誌などもトップに持って来て書き立てるかも知れない「女やくざ行状記」である。

或る宴席にて聞く、世には嗚呼の者もあり。加久と云ひし市井の婦は、俠気つよくして突場などにて所謂グワエン長髪の輩も、この婦の前にて一言も発する者なく皆な閉口せしとぞ。又或る者目の当り見しとての話は、この婦臀に蟹を入墨にして、両手陰声（ほと。大切なる部分でアル）を開かんとせるさまの形なりしとぞ。角力も懼るること此の如し。

又聞く、この婦銭湯にゆきて還るときは、いつも裸身に緋縮緬の褌湯もちばかりにて大道を行けり。又或る時は道路にて行く行く尿をなしながら豁歩して路人に慙ることなしと。又婦ある質屋にゆき赤裸となりて衣を典せり（着衣を脱いで質草とした）。時に店の者ども股の露れたるを笑ふ。加久曰く如可にして笑ふべきや、世の女に総て



これなきや、又吾がものと異なりたるやなど、大いに罵つて止まざりければ店の者畏れて銭を与へし上に、質に取りし衣服までを還せしとぞ実は婦のたくみたる仕わざなりしと。という物凄い女だ。

江戸の愚連隊

「守貞漫稿」という書物には（文政の頃、江戸にお角という脅喝を専門とする莫連女がいて、全身に種々の彫ものをし、また、河童が陰部を指さす形の刺青をしていた。このお角が大丸屋で着物をあつらえた時、店頭で裸となって着換えたので、居合わせた者達が笑ったところ、にわかに居直つて金をゆすり取つた——）という記事が見えるが、おそらく同一人の話が誤伝されて「お角」となったのだろう。松浦静山は一々調査してから書いた人だから、甲子夜話にある話の方が正確だと見てよい。

このお加久という女、攻撃型の露出症だったらしい。露出症は普通、マゾヒズムに通じるものだが、お加久の場合は例外である。

しかし、考えてみると、このお加久などは脅喝業者としてはサービス精神の旺盛な方だった、といえないこともない。

後世の愚連隊という種族が、むやみやたらと無法ないいがかりをつけ「やらずぶったくり」式に金品を脅し取るのに比べれば、ストリップや珍刺青を見せたり、歩きながら排尿をするという放れ業を被露に及んだお加久などはむしろ良心的といえるほどのもので木戸銭を徴集する資格ぐらいはあったのである。

江戸の法律「御定書百箇条」には、脅喝罪に関する明らかな規定がない。ただ、第六十七条に「あばれもの御仕置之事」というのがあって、これを適用させたものらしい。

一、あばれ候て町内をさわがし候もの

敲之上　所払

但、所々にてあばれ候においては

敲之上　中追放

とあり、口で脅すだけだと「あばれ」たことにはならないのかも知れぬ。河内山や弁天小僧や切られ与三郎などのスターどころの脅喝業者が横行したのも、所詮は法律が不備だからでアル——というと話はムズカシクなるが、これらの連中は「軽き悪事致し候もの」と呼ばれて、牢から出たり入ったりをくり返し、なかなか根絶やしとはならなかったのである。この辺の事情は、現代の愚連隊問題とも通じるものがあって、同法の第九十九条には、こんな規定が見える。

軽き悪事有之もの出牢之上不及咎事

一、手鎖過料戸〆等可申付軽き悪事有之もの吟味之内六十日以内入牢申付置候者之分は、出牢之上右咎可申付候得共数日致入牢に付令寄免候旨申渡、別に咎に不及、同例之内不致入牢科人は相当之咎可申付事

但　所払役儀取上候類は何ケ月入牢候得共寄免之沙汰有之間敷事

一、敲御仕置可成もの吟味之内拷問於申付候には追て不及咎事

というもので、これを現代語でいうと、

「手鎖、罰金、謹慎刑などの刑に相当する軽犯罪者は、取調べの間の入牢が六十日以上にわたった場合、出牢の上はそれ以上咎めることをせず、特別に刑を勘弁してやるぞよ。ただし、入牢期間が少なかった場合はだめでアル。所払いや役儀取上の刑を言い渡された者は何ケ月入牢していても、これまただめである。百敲五十敲等の笞刑と決った者でも取調べ中に拷問された者は、すでに敲かれているのであるから、二重に敲くことはしないのでアルゾ」

という意味だ。「所払い」というのは従前の町、乃至は村にいられなくなることで、隣の町へ住んでもよかったのだから、愚連隊にとってはたいしたことではなかったのだ。

男装の女強盗

「篠舎漫筆」に「女強盗」と題する章があって、これは大阪に起った男装の知能犯の事件だが、駈けつけた役人の慧眼により正体を見破られ、ついに捕縛されて磔刑となったという話である。以下は同書の巻之九より——

難波玉造なる人の許（もと）につかひける女、その家の母刀自、むすこをころし、娘に手をおはせしことあり。そのゆえ如何にとたづぬるに、此女にかよひける男ありけるが、その男、女をいとふこころいできてこがねをかしくれよとわりなくいひければ、さだめてうるさくおもひうとみもやせむと、わざとあながちにいひけるを、うとみはせで、いかでその用を便じて、男をたすけばやと、朝夕おもひわたりける。をりふしよそより十五六両のかね、此家に入来り、こは天の助け也と独えみして（ほくそえんで）うばひとり男にものせんとおもへど、あるじのいまそかりては、たやすくとるべくもあらず。番に出てとまりけるよをうかがひ、おのれかねて眉をばはらひたりけるを、墨もてまゆをつくり、口もとにひげなどほのめかし、わざと顔をばつき出して、手拭にてほふかぶりし、男のきものをき、しりからげ、いかにも強盗おひはぎのさまになりて、母と子のねたる枕かみなるともし火をもけさず、ををしきこわいろしておどろかせけり。母とじはおどろきあわてたるを、かみそりもて咽（咽喉）つきき り、そこなるむすこをもさし殺したり。娘

はうろたへ外にいづるを、おひかけて薄手をおはせぬ。此さわぎにちかき隣の人々はせ来れば、其時はともし火をうちけしてあり。火ともしてよくみれば、母も子もあけになりたり。女はとたづぬれば、かはやの内よりあかはだかにて、たふさぎ(湯もぢ)もなく、かくし処もうち出して、がたゝ〳〵とわななき出たり。いかにととへば、おそろしげなるぬす人のいり来て、しか〴〵とふるまふを、その前より、かくまるはだかにて、はごしにいたるなりといふ。さてそのぬす人は、にげたりけむ。所をもとむれども、かきをやぶりたるあともなく、ただ〳〵いぶかしき也。むすめにとへば、いかにもいかめしき大ぬす人のおそろしげなる男なりといふ。打より(大勢で)よく〳〵とへど、をとこなることたしかなり。さてそのよも明けて、うからやからもつどひ来て、外にとふべき事もなく、この女をとへども、よべ(ゆうべ)よりのごとくしてせんすべなし。さるを罪人をことゝふ人(役人)来りて、いかにも此女のけはひいぶかしとおもひ、さま〴〵にとへども、おのがなせしといふさまもなし。されどただあやしくせめとふ内に、其人のいふやう、おのれがひたひなる疵は、何してつけたるとぞとせりかけてとふ。こはかはやにて打たりといふや、忽ちなはうち引しばりにけり。

しかも男は女と別れようとして、わざと小金(黄金の意か?)をせびったのだ、というから救われない。

男の方も無責任なタチの悪い奴で、その辺の事情を酌量されたものか、刑が少し軽くなっている。といっても極刑には違いないのだが「御定書百箇条」には、主殺しを最高の極刑として、次のように、規定していたのである。

(第七十一条)

人殺並に疵付等御仕置之事

一　主殺　二日晒一日引廻し
　　鋸挽之上　磔

(第百三条)

御仕置仕形之事

一　鋸挽

一日引廻し、両肩之眉に刀目を入れ、竹鋸に血を付け側に立て置き、二日晒し、挽き申すべしと申すもの有之時は挽かせ候事。

飼われる男の手記

貴婦人と犬

とやま・かづひこ

身売り

「あれだけよくいっといたのに、どうしておまえはやっておかないのよ」

カン高い声と一緒に、おれのほっぺたがパチンと鳴る。

クツを磨いておけといういいつけをつい怠ったばかりに、そのハイヒールで、おれは横ツラをイヤというほど叩かれたのだ。

つづいて、お嬢さまのよくしなう手が二度三度、小気味よく音をたてる。

(ふン!)

心のなかで、おれはふてくされる。

どうせ売った身体だ。したいようにするがいいさ。

「テツ! またお前は、私をバカにしているね。ナニサ、その眼は!」

お嬢さまは、ますます荒れ狂って、立上りざま犬の調教ムチをビュウ! と振った。

これが、おれのアルバイト。

世の中には、いろいろな女がいるものだ。男をイジめて満足する女。満足させて金をもらうおれのような男。

それは半年ほど前のことだった。

校内の学生食堂で、味気なくコッペパンをかじりながら、明日に迫った授業料の金をどう工面しようかと思案にくれているおれの肩をポンと叩く奴がある。

「よう、何考えてんだ?」

クラスの桂の野郎だ。

「マネーか?」

当てやがった。

桂は得体の知れない男、学生服を着て、ノートは持っているが三日か四日に一ぺんしか学校へ出てこない。たまに姿を見せれば、妙なアルバイトを持込む。

それが、脂ぎった五十マダムの愛玩動物みたいな仕事だったり、未亡人クラブへ紹介されたり、未亡

れて行ってみたら、デッサンのモデルになれとか云って無理やりハダカにされ、スケッチなどどこへやら、高い台の上に追い上げられケダモノみたいな未亡人どものなぶりものにされたり、ロクなことはない。

でも、カスばかりではなく、たまにはワリのいい仕事も廻されてくる。

時々おれを高く買ってくれる御主人さま。荒川ルミ。都内にキャバレー、バアに六軒をもつ水商売ながら女実業家。三十才とかいうけど、凄くきれいな小柄のせいか二十二三にしか見えない。青白くスキ通った彫りの深いエキゾチックなマスク。渋谷の高台のデラックスアパートの一人住い。おれを買ったその日はきまってお供に二三人、使ってるお気に入りの女の子を呼んでくる——。この女たちがキャバレー、バアづとめの水商売だけあって男を男とも思わない連中なのだ。

おれの仕事というのは、ますらを派出夫みたいなもんで、昼間はルミたちの汚れ物のせんたくと、めしの支度、掃除と留守番。なにしろ昼間は映画や芝居、デパート通いで忙しいで忙しいで身の廻りのことは何ひとつできないので、おれは女中さんみたいにエプロンがけで走り廻ったが、案外楽しいもんだった。

夜がふけると、一人二人と彼女たちが帰ってくる。最後にルミ。とたんに忙しくなる。酔っぱらってクダをまく奴。露出症というのだろう、人前でハダカで平気でアグラをかく奴。

「ネムイ、ネムイ」

と大の字でイビキをかく奴。

女もこうなるとケダモノに近い。

ますらを派出夫たるおれは、こいつらのお世話を一人で引受けるのだから忙しい。

中には、ワザとおれを困らせて内心喜んでいるのがあるのだから始末が悪い。

「テッちゃん、おしっこしたいヨ」

なんてぬかす。さからうとチップに影響するのでわざわざトイレまでお供だ。

「終るまでそこで待っててよ」

といわれれば、阿呆な話だがジーッと待ってやる。

ようやく、サービスを終って室へ戻ると、もう一人が、

「テッちゃん、あたいも……」

という。これがフラフラ酔っぱらってるから面倒だ。

奥いのを我慢して、始末してやることもあるくない。

でも、今しばらくの辛棒で学校は卒業だ。人間性を喪失した阿呆なアルバイトじゃあるけれど、どうやら露命はつなげる。

そうそう、こんなこともあった。

悪酔いでとうとう寝込んだルミが、

「あたしは、今日は休んで一日寝てる」

といい出した。

みんなは、おれとルミが二人きりになることに妙にこだわって、ふくれっつらをする。

でも主人のルミにはさからえず、

「テツ、いいつけ破ったら承知しないよ」

とおどしをかけて、心残りのように店へ出ていく。

いいつけ。

もう一人が、

飼い主は美しかった。彼女のブランデーにむせびながら

屈辱感といいしれぬ快よさにしびれるような日々だった。

それは、みんなの前で、ルミから言い渡されたことだった。

テツは雇われボーイ、ルミが金で買ったドレイなんだから、誰が、何をしようとも、おかしな気持をもってはいけない。このいいつけにそむいたら、スグにクビ、お給金は払わない。どんなこともハイと聞いて、ドレイになれ。

みんなも、テツはハンサムだけど、手を出しちゃいけない、もしもやさしくしたら、スグ店を止めてもらう。

ということだった。

誓約書を書かされ、無理に小指の先を切って血判までさせられた。

「わかってるね、お前はドレイなんだよ」

「ママさん、いくら主人だからって、テツに手を出しちゃだめよ、約束破ったら、あたしたち、ストするわよ」

捨てぜりふで、ドヤドヤと室を出てゆくとあとにはルミとおれの二人きり。室は急に静かになった。

美容体操

「テツ。お前はあたしのドレイだったね」

ルミは、みんなが出てゆくのを待ちかねてベッドから起き上る。

「ハイ、お嬢さま」

ドレイにはドレイの言葉を使うことしか許されてない。

「ドレイらしく、いうこと聞くんだよ」

ルミは、パッと寝巻を脱いだ。

真珠のような白い肌が午後の光線にまぶしく光る。

「酔いさましに美容体操をしよう、テツは助手におなり」

しばらくデタラメに、おれの前で美容体操をつづけたが、やがて床の上にマクラを置き腰をかけて、おれに足首をおさえさせ、ぐーんと思いきり反ってみせた。

石のホトケではない、おれも血の通った人間だ。これでおかしな気にならなかったら、そんな奴の方がどうかしているというものだ。

上体を起す運動が十五六回もつづいたころ

「汗掻いちゃった、拭いて！」

バスタオルで全身くまなく拭いてやると、ルミは目を細めて、おれのなすままに身を任せていたが、やがて、

「テッはずい分気が利いて、だんだんドレイらしくなるよ」

赤ン坊のように、おれに身体をあずけて、うっとりとしている。

正直のところおれもムラムラした。

目の前に、こうまでつきつけられて指をくわえて引き下がるほどおとなしいおれではない。思わず顔に血がのぼり、息が忙しくなる自分で自分が制しきれなくなった。

こうなりゃ、ドレイの誓いなんてクソくらえだ。胸が早鐘を打つ。ここで強く出て、金を巻上げて、と内心手はずをととのえる。

その時だ。

「テツ、お前は、あたしのドレイだよ」

リンとした声がした。

制裁

今までの妖しいまでに美しい美容体操の姿体は消え、神々しいまでに輝く雪の肌を惜しげもなくさらし、腰に手を当て、グッとおれを見下す。

「いいかい、お前はあたしが買ったドレイだよ、生意気な！　ドレイはドレイらしくすることだよ」

いつのまにか、細い皮ベルトを右手に巻きつけて冷然ときめつける。

「ドレイが、御主人さまに無礼を働いたらどらしくなるよ」



んな罰を受けるか、お前は知ってるだろうね」

「ハイ」

「ハイじゃないわ、お前はあたしの道具なんだよ、道具が、無礼をしようなんて許せないよ」

「申訳ありません。お許しください」

「わかるもんか、お前は、あたしのからだにイタズラをしようとした。もうそれだけで、誓約を破ったんだよ、お給金は上げないからね」

「お許しください、御主人さま。今日学校へ授業料を納めないと、退学になるのです」

「私の知ったことじゃないよ、でも無理もないわ、私のこのからだを拝んだら、どんな男も妙な気持を持つのは……」

「そうですとも、御主人さま」

「でも、このままじゃ許せない。罪は罪よ。どうやって私にお詫びする？」

「それはもう、御主人さまの思い通りにしていただきとうございます」

「ヨシ、いい度胸ね。じゃ気の済む通りにして上げよう。でも途中でネを上げたら承知しないよ！」

ルミは、心地よさそうに残忍な笑いを浮べて立上ると、ビュウとベルトを振った。

×

……からだに巻きつく灼熱の痛み、

ビュウ！

ビュウ！

ビュウ！

ベルトが、おれの背中で小気味よく爆発する。

せなかも、胸も、胴も、いや手も足も。着ていたものをハギ取られ、剝き出しの、五尺七寸、二十貫のおれのからだに見る見る赤く筋を曳いてベルトの跡がふえてゆく。

「うーむ！」

おれも、妙な倒錯した気分におそわれて、

今は意地になってベルトに立ち向う。

——あたりが、くらくなり、ボーッと目に星がチラつく。壁に掛けた聖母マリアの絵がクルクルと回転してフラフラと床に倒れたまではおぼえていた。頭にくらったベルトの痛みでとうとう伸びたらしい。

気がついたら、おれの目の前に、形のいい紅いくちびるがある。

ルミの美しい唇だ。

さすがのルミも、悶絶したおれには驚いたらしい。

あわてて、口移しにブランデーを、おれの口の中に流し込んだのだ。

のどがやけつくようだ。キュッ！　と強いブランデーのアルコール分がからだ中かけめぐり、やっとおれは正気に戻った。

「フフフ。気がついたかい、あたしは死んだかと思ったよ」

イスにかけてジッとおれを見つめたルミは、これで安心というように、ツと足を伸ばし、スリッパのままの右足でおれの頭を軽くけとばした。

「そう、そう。ドレイの気つけにブランデーじゃもったいないわ、テツ。あたしのブランデーをお呑み。特別おいしいからね」

とうとう人間として最低の悔辱に放り込まれてしまった。金のためとはいえ、タカが非力な女のために——。

おれはルミのブランデーに溺れ、すえたようなアンモニアの刺戟臭に、身を灼くような屈辱感にさいなまれ、でも、しびれるような不思議な快感に戦慄した。

美しい女から、徹底的にいじめられ、口にすべからざる不浄のものまで呑まされた。そのくせ、この快感はどうしたことだろうか！

じりじりとマゾヒストになってゆく自分の情感がわかるようだ。

×

宅間夫人

ルミが結婚する。

まさに晴天のヘキレキ、その言葉の通りにおれはアッサリ放り出された。

「退職金よ」

あとくされを恐れたルミは、あっさり金の入った封筒をおれに投げ与えた。

十万円。

おれには大金だ。

死ぬほどの痛い目に合わされ、汚い物まで食べさせられた残虐な主人だったけれど、別れは哀しい。

ルミは、未練気もなくデラックスアパートを引きはらい、店を手離して、二世のバイヤーだという婚約者とアメリカへ飛び立ってしまった。

十万円の金など使えばスグなくなる。

借金を返して、服とクツを買ったら、パッと消えてしまった。

そのころだった。

コッペをかじりながら、思案にくれているおれの肩を桂の奴が叩いたのは——。

「いい口があるんだ。おまえならゼッタイ高く売れる。いくか？」

おれの気が動くのを見て取った桂は、さっそく相談にはいった。

「ルミから聞いたよ。お前はドレイとしちゃ特級品だってな。ルミのやつ、できたらテツを嫁入り道具代りにつれていきたい。なんていってたぜ」

見込まれたものだ。売るも売らないもない一文なしのおれは一刻も早く自分を売らなけりゃ、今晩寝るところもない。

足代にと三千円の金をもらい、タクシーをおごって、田園調布の奥の宅間家にかけつけたのは夜もおそくであった。

宅間家はすぐわかった。

ベルを押すと、小ぎれいな女が、スピッツを抱いて出て来た。

「あ、そう、さっき桂さんから電話があったわ、奥さまお待ちかねよ」

女はおれを案内して奥へ入る。

「おくさま、参りました」

ドアをあけて女が中へ入る。おれも室へ足を入れる。足もとでスピッツが吠えたてる。

続いて、おそるおそるおれは二の足を踏んだ。

「ホホホホ。ピス、お前のお仲間よ、吠えちゃだめ」

のっけから犬扱いだ。

こいつは手ごわいぞ、でも金にはなりそうだ。——おれは、カンをはたらかせて、このいかにも金持ちらしい女を観察する。

年のころは三十五六、デップリした品のよい顔だち。いかにもブルジョアの奥さまタイプだ。

「じゃ、テストよ」

彼女は、楽しそうにニコニコしながら、おれに近づく。

「おまえ、あまり力なさそうだね。そこへ四ツン這いになってごらん」

床のジュウタンに、両手両足をつけたおれのせなかにドシリと腰を下して、からだをユサユサ前後にゆさぶった。

ズシリとした重みと体温がおれの身体に伝わる。むせるような体臭。

「あたしは由紀。桂に聞いたけど、そのルミというひとより、もう少し辛いからね」

おれの頭上から美しい声がする。

「あるいてごらん、お前は馬よ」

由紀は、おくめんもなく、体位を変えて完全におれのせなかにまたがり、かかとで軽くおれのももをけった。



洋室から廊下、廊下から日本間へと歩く。
息が切れて倒れそうだ。でもこれがテストなら仕方がない。
おれはありたけの力を振りしぼって由紀を乗せ、大口あいて息を吐き、力の限り歩き廻った、あさましい——とはいってられない。
「よし、よし、第一問はパス！」
由紀は楽しそうに笑いころげながら、ようやくおれの背から下りた。
「汗かいちゃった」
女主人はそう云って妖しく笑った由紀を、おれの頭上に、高く由紀の声。
「さ、テストをつづけよう、お前は服をおとり」
由紀は、サイドテーブルから細い、犬の調教用のムチを取上げた。
ピューッと一とふり。
「いいかい、はじめはちょっと痛いかもしれないけど、ガマンおしよ」
いうが早いか、おれのからだにムチの雨。
（ウッ！）
おれは息を停めた。
ムチには慣れているおれだ。ルミもよくムチを使った。打たれる時に、上半身に力をこめ、息を休めて、ちょっと身体を引けば、ムチの痛みは去る。
ピシリ！
ピシリ！
痛くない。
「案外強いね。よし、それじゃそこに寝てごらん、ううん腹這いにだよ」
女主人はそうおれにいいつけておいて、自分も着衣を肩からすべらした。
素裸の脚に黒光りする乗馬靴をはいて、まるでジュウタンを踏むように、遠慮えしゃくもなくおれの背中にのぼった由紀は、肩から背、背から腹、腹からモモへと、容赦なく踏みつける。
女のからだの重みが、おれの頭上に、高く由紀の声。
「よし。お前を買った！」

ドレイの一日

おんな主人と、犬と、ドレイと、奇妙な生活がはじまった。そうそうあと一人。おれがはじめて宅間由紀の家を訪れた時、玄関に出てきたおとき。おとき、主人の快楽の為に飼われている女ドレイだったのだ。
朝めし。
食卓では、由紀と、愛犬のピスが、まるで夫婦のように仲よく牛乳を舐め、ハムエグスをつつつき、チーズをかじる。
そして食卓の下には、男女一対のドレイが身をかがめてうずくまり、時々気が向くと投

げ与えられるトーストの切れはしや、歯型のついたチーズを取りっこしてはむさぼり、くらう。

朝食がすめば、トイレの奉仕。

この仕事は、おれとおときが交代でするこ ともあれば、時には二人一緒にお供する日もある。

トイレのお供も慣れないとむずかしい。

それが終ると入浴。

まぶしく差し込む朝の太陽の光りに、豪華な浴室は輝く。ご主人さまは気持よさそうに全身を流させ、ドレイの口と、ピスの舌を使って、全身のマッサージをさせる。

パーティ

ドレイの舌は良質のスポンジ。

そのスポンジのおかげで、ご主人さまのお肌はいつも処女のように輝いて血色がよい。

ご主人さまは、室内を歩くのに、ほとんど自分の足を使うことはない。いつも男ドレイが馬となり、大切に命ぜられた通りにお乗せする。

美容体操も馬の仕事。

由紀のムチ一本の命令で、廊下、サンルーム、応接室、そしてバスルームへ。またトイレへ、忠実に、まめまめしくご主人さまをお運びする。

九州の炭礦主だった夫を、坑内事故で失い一生かかっても使いきれない遺産をもって、ただ気ままにその日その日を遊びくらしている由紀。人を招くことが好きで毎夜のようにパーテイが開かれる。

そんなことでもしていなければ、エネルギーのはけ口がない彼女なのだ。

×

来客があれば、ドレイたちはまた忙しくなる。

好奇心のつよい貴婦人たちのパーティのときは、おれと、相棒のときが組になって、いろいろの演技をさせられる。

そんなときも、ときがSで、おれはMとき められている。ムチを受けたり、馬にされたり、踏み台になるおれを相手に、ときは多彩な演技をくりひろげる——。

いちばん大切な女客のときに限ってご主人さまは、接待用におれを出す。

おれを指さし、その機知と、おれのサービスの至れりつくせりぶりで、お客のカッサイを受けて得意顔の由紀だった。

×

お客は若く美しい女性が多かったが、ときには五十過ぎのばあさんが、恥かしげもなくおれのサービスに惚れ込み、由紀にせがんでちょっと貸してほしいということもあった。

気に染まない相手でも、絶対、こちらからイヤだと逃げることは許されない。

「テツ、お客さまが、ご用よ」

と命ぜられれば、どんな不潔な、恥知らずの命令にも顔色も変えず、ただハイハイと笑って従わねばならないのだ。

まったくの受け身のくらし——。

由紀は由紀で、おれをお客の寝室に提供しておきながら、おかしなシットに悩まされ、一晩中マンジリともせず、翌日、その客が帰るのを待ちかねて、たんまりとおれをいじめ抜く、どちらに廻ってもひどい目に会うのはおれであり、ドレイ女中のときだ。

由紀はあきっぽい。

あれほど全情熱をふりしぼって、おれを責め抜く日があったかと思えば、そんなことはケロリと忘れて、三日も、五日も何の御用もない日がある。

思い立てば、夜中でも、食事中でも、おれを馬にしたり、犬の代りをさせて、喜んでい

るのだった。
自分でムチを取るのが面倒の日は、そりをときにさせることもある。
犬といえば、スピッツのピスも、ユキ気に入りのドレイのひとりだった。
よく由紀は、
「ピスもよいけど、言葉のわからないのお便よ、あたしがテツを使うのは、お前がのわかる犬だからだわ」
という。
犬。
ある意味では、おれは由紀の犬でありスであり、馬であり、足台であり、そしッドの下におかれた屑籠でもあった。

高く売れる

運命というものは、気ままで、さからいものだ。
由紀と別れる日は案外早くやって来たおれの舌にも厭きた由紀は、パーティ客の秋子夫人にこのおれを高く売り渡しだ。
秋子夫人。
小柄な、肌もピッシリしまった一見おとなしそうで、そのくせプライベートなベッドの中では恐ろしい力を発揮するのだった。
じめて宅間家のパーティでこの夫人が、はみて、その異様な味にスッカリ魅せられ、冗談に由紀が出した交換条件を二つ返事で呑み込んで、ひきさらうようにこのおれを、小さなアパートに囲ったのだ。
宝石商。
彼女らしい、商売だ。外人相手に高価な宝石を売買する景気のよい夫人にとって、まるで世の常の男性が、女を囲うように、アパートの室を買い、おれをここに囲って、気のむくままにここへやって来て、おれのサービスを楽しむのは一種のリクリエーションなのだろう。
おれを求めるために、由紀が出した交換条件は、無垢の処女を買入れて、由紀に贈るのだというが、それも即座にOKしたというから、こうしてみると、おれの「価値」もまんざらではないのだろう。
秋子夫人は、ありきたりの男女のことにはまるで興味を抱いてないらしい。
はじめから、おれを人間としては見ていないのだ。自分の欲望をみたすための道具。つまりダイヤの指輪でも買うつもりでおれを買ったのだ。
しかも、これに厭きたら、ほかへまた高く転売して儲けるつもりで——。

囲い者

また、おれの新しい生活がはじまる。
秋子は、用足しにでも行くような軽い気持で、おれを飼ってあるアパートへ来る。
秋子の前では、おれはおれでなく、一つの物体とされる。
放埒、奔放、淫靡な仕事におれを使う。
自分の快楽のために、ただその目的だけでおれのからだや口をコキ使う。
秋子がよくやる遊びにこんなのがあった。
おれの全身に、マジックインキで楽書きをする。
顔いちめんに赤青紫の異様なイタズラ書きをし、片方のほっぺたに男の絵、片方に女を描いて、これを写真に撮らせて喜ぶ。室に小さなシャワーがあるので、銭湯へ行く必要のないことはなによりの救いだった。
ペーパーナイフで、おれの肌を、二センチ三センチと切り、プッと吹き出す血を見て楽しむ。はてはおれの顔をひざにはさんで、ドレイの接吻を強要する。
人間馬、人間椅子、人間テーブル。

愛玩動物。

言葉のわかるペット。

バカになって、命ぜられた通りにうごいてさえいれば、三度のめしと、雨露しのぐ屋根だけはついて廻る。多少の汚穢さえガマンすれば——。

宅間家にいたころのドレイの相棒だったときが、このアパートをたずね当てて忍び込んできたのはおれのご主人が代って、一ト月半ほどあとのことであった。

秋子夫人の商売も順調で忙しくこのごろやや足が遠のいているので、この思いがけない訪問者はありがたい。

ときは、来ればサデイストであった。

無言で、おれの上に君臨するとき。ご主人のようにこれを迎えるおれ、それが互いの愛情の示しあいだった。

犬のように、猫のように、もつれ合っていれば幸福だった。

今日も、ときは、おれをいじめるためにやって来た。

おれの手足をしばり上げ、ガンジガラメにしておいて、愛用のムチをふるう。

これが、愛の最大の表限だった。

突然、風のようにドアがあいた——。

まっさおな、秋子夫人の顔がのぞく。

「やっぱり、お前たちは——」

秋子は、ジリジリとときの傍へ寄ってゆきいきなり躍りかかる。

右手に握りしめた拳銃がつめたく光る。

「おすわり！」

カン高い秋子の一鳴をくらってときはヘタヘタとその場へすわり込んだ。

物もいわずに、秋子はときの両手足をおれと同じようにしばり上げ、

「お前たち、私が知らなかったとでも思ってるのかい？」

の人殺鬼

ユナイテッド・アーチスツ配給
ショウ・ブレイクストン・プロ作品

ラリイ・スタンフォード……ピーター・タインリイ
リンダ・スタンフォード……ジェーン・ヒルトン
鈴木博士……中村哲
タラ……テリ・ジマーン
えみ子……武智豊子
会田警視……ジェリイ・伊藤



ここは人里離れたある火山の麓、山腹を深くえぐって造った岩窟の研究室では、鈴木博士が若い美貌の助手タラを相手に、世にも奇怪な実験を、試みていた。博士の研究は、宇宙線がある種の生物に与える極めて緩慢な変質作用を人工的に急速に可能ならしめようというのであった。この実験は或る程度の成功を見たものの、人体実験にまで野心をのばすに及んで大きな悲劇を生んでいた。最愛の妻えみ子は得体の知れない怪物と化して、研究室の奥深く檻の中に閉じ込められていたし、弟の健次はまた兇暴な獣人となって博士の手で生命を断たれたのだった。

ある日、ワールド・プレス社の敏腕記者ラリイ・スタンフォードがこの研究室を訪れた。彼は久しぶりにニューヨークの愛妻リンダの許に帰ることを許され、置き土産の特ダネを拾おうとしたのだった。一目で彼を絶好のモルモットと見て取った博士は、研究欲の赴くままに彼を眠らせて謎の魔薬を右肩に注入してしまった。

それからはラリイは、彼の上司と勝ち誇るようにいった。

「まあいいわ、どうせドレイをもう一ぴき買おうと思っていたところよ、とき、お前今日から私のドレイだよ」

ときは、深く頭をたれた。

苦しいけれど、楽しい二人のドレイの生活が、この日から幕を開く。

秋子の命令は絶対だった。

お寝！　といわれれば、その場に寝そべってマットレスの代りになる。

口をお開け！　と声がかけられれば、かしこまって思いきり口を開き、どんなものを口の中に詰め込まれても、それをおいしそうに食べる。

秋子が強要した、あらゆる恥しらずな、はずかしめ、ドレイを使っての享楽を、ここにこれ以上話すことはとうてい許されない。

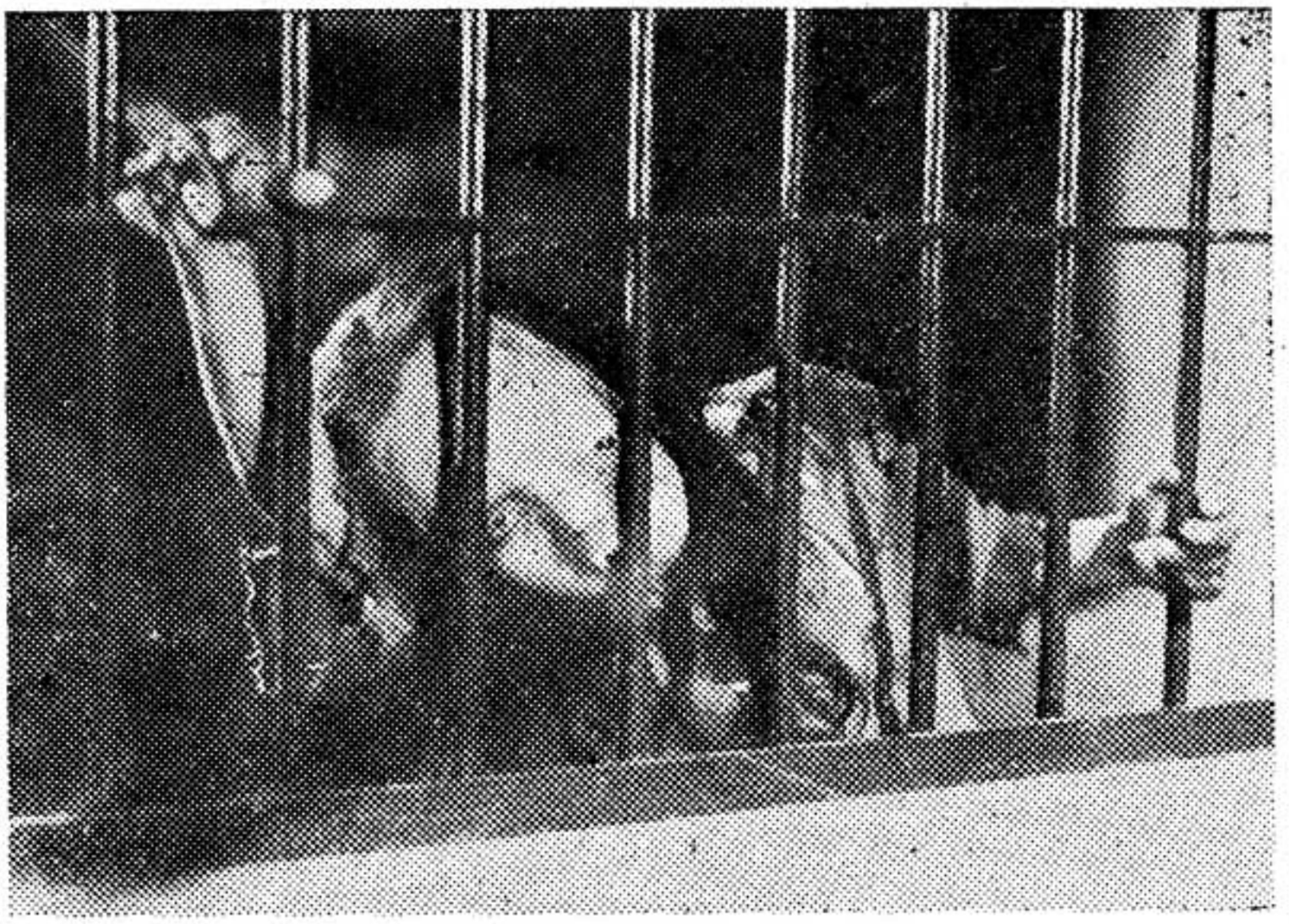
絶対の強制、無慈悲な服従。

これでもか、これでもかと、秋子の圧力がおれたちにかけられる日々だった。

（画・苦屋　純）

双頭

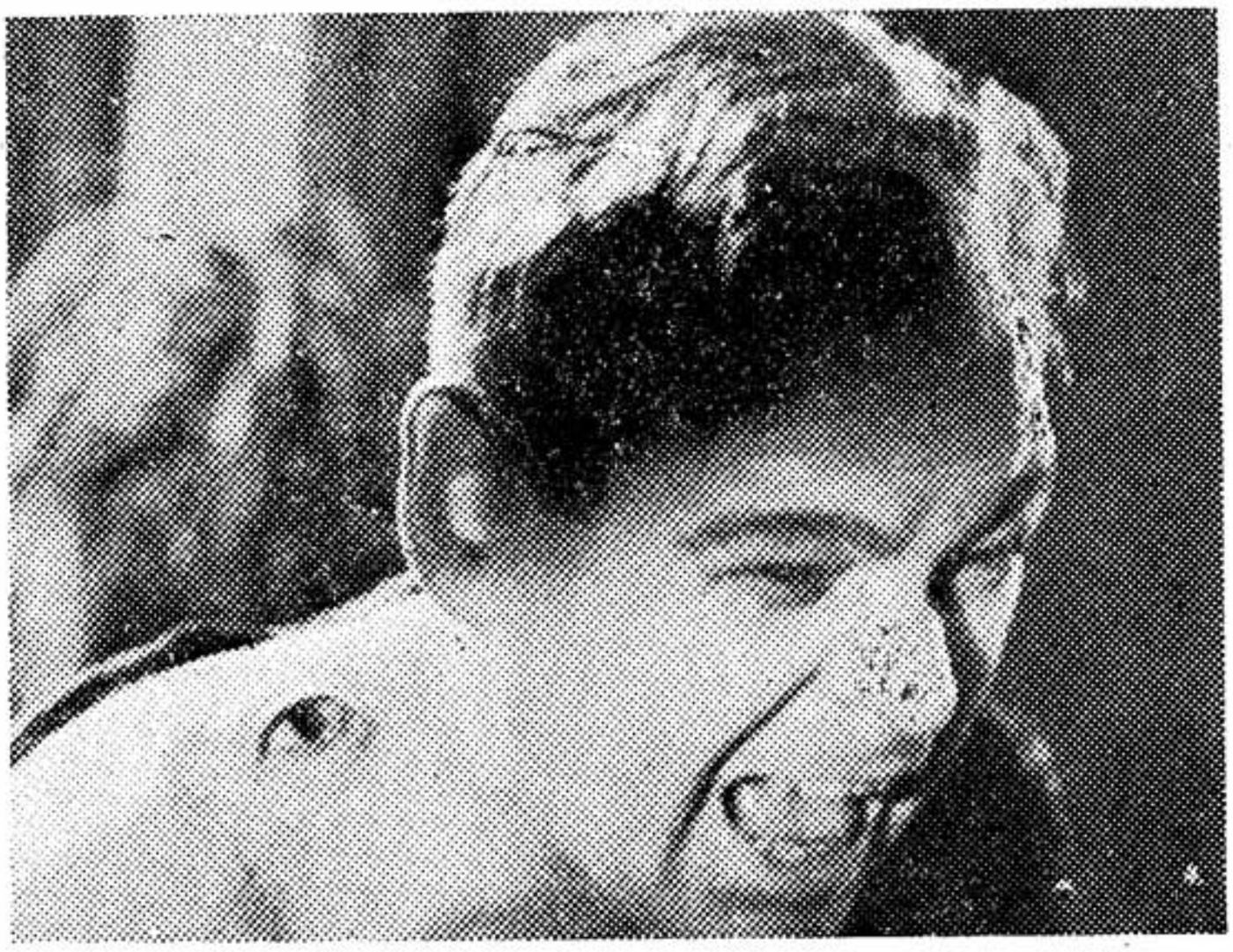
恐怖異色感覚映画



のマシューズが眉をひそめる程がらりと人が変り、あれほど会いたがっていた妻リンダの事も忘れ果てたかのように、博士の指し金で彼の身辺につきまとうタラを相手に夜も昼も情痴にふけっていた。だが、その中にタラはいつか彼に愛情を抱きはじめるのだった。

マシューズからの注進にたまりかねたリンダは、飛行機で東京へ駈けつけたが、彼女の言葉に耳もかさぬ夫の有様に、ただ思案に暮れるばかりだった。

この頃ラリイは自分の体の変化に気がつき始めた。右手が醜くゆがみ野獣のような毛が生えはじめ、遂に右の肩に無気味な眼が生じて来た。そして夜になると、彼はなぜか血に飢えた獣のやうに女を殺したい衝動にかられるのだった。

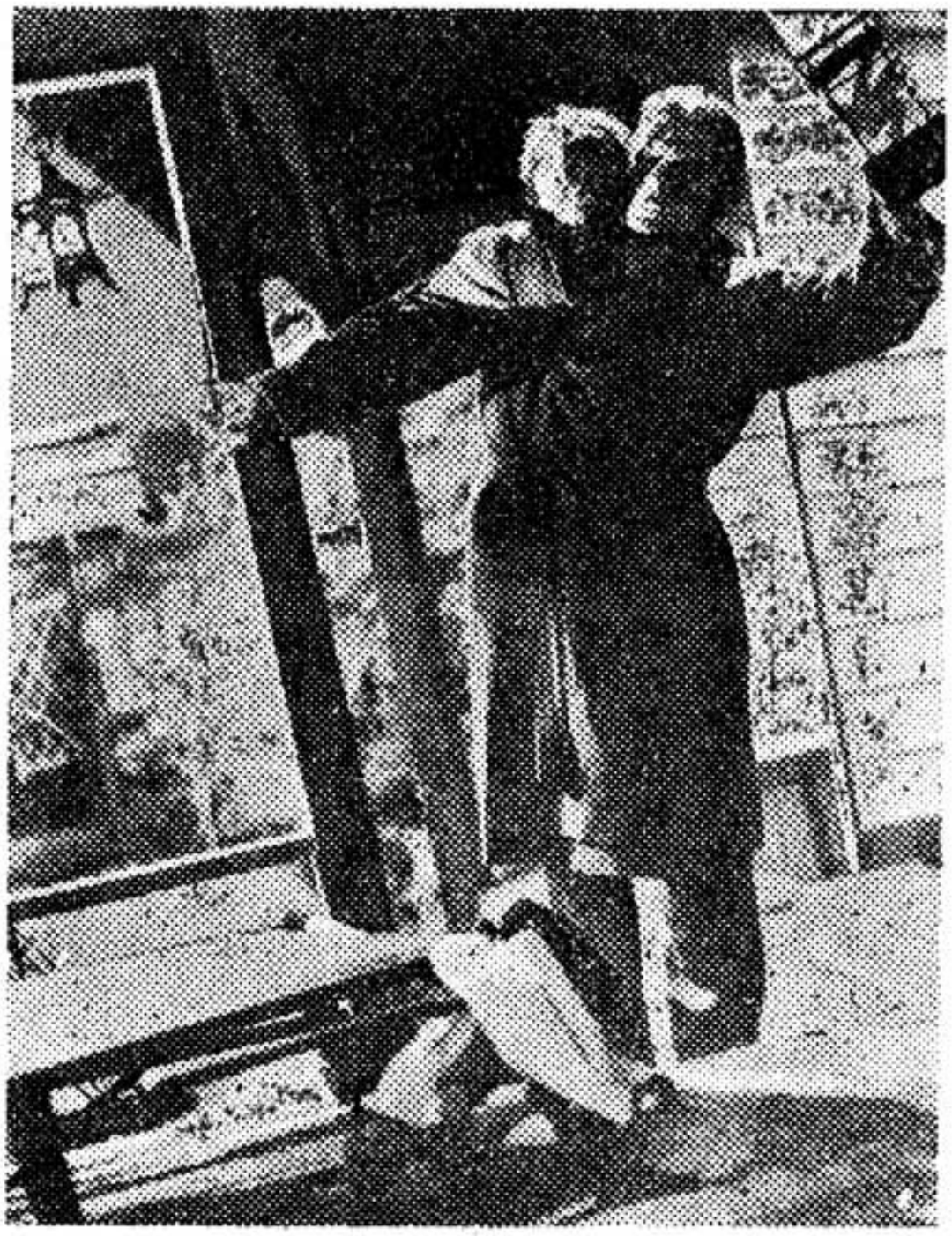


この名状しがたい苦悩を訴え癒しを彼に引き合わせた。そして博士は夜間その門を叩いたラリイの異様な様子に身の危険を感じて博士を殺人鬼の容疑者として警察に通報した。

ひそかに警察へ電話をかけると共に、早速応急処置を施そうとしたが既に遅く、ラリイの右肩から更に野獣の様相をした一個の頭が生じ彼自身の顔も殺人鬼の形相を露呈した。兇暴化したラリイのために博士は惨殺された。

警察は殺人鬼捜査に躍起となり、マシューズも担当の会田警視に協力した。だが殺人鬼の跳梁はいよいよはげしく遂にパトロール中の警官までが殺された。

ラリイの変身を知らず、今も尚夫を愛しているリンダは、夜彼のアパートを訪れ、扉の錠がかかっていないままに室内に入って彼を探した。すると突然物蔭から双頭の怪物が摑みかかり、彼女はその



を喰らって逃亡してしまった。

マシューズには怪物の行方が想像出来た。彼の案内で警官隊はタラのアパートへ急行したが、怪物は又もや彼等の手をかいくぐって脱出していた。だが警官隊は遂に怪物を夜の造船所に追い込み、万全の逮捕網を張った。リンダとマシューズは怪物の生け捕りを望んだが、会田警視は射殺も辞せない覚悟を決めていた。

かくて暗夜の造船所に時ならぬ大捕物が展開された。だがここでもまた怪物を見失ってしまった。

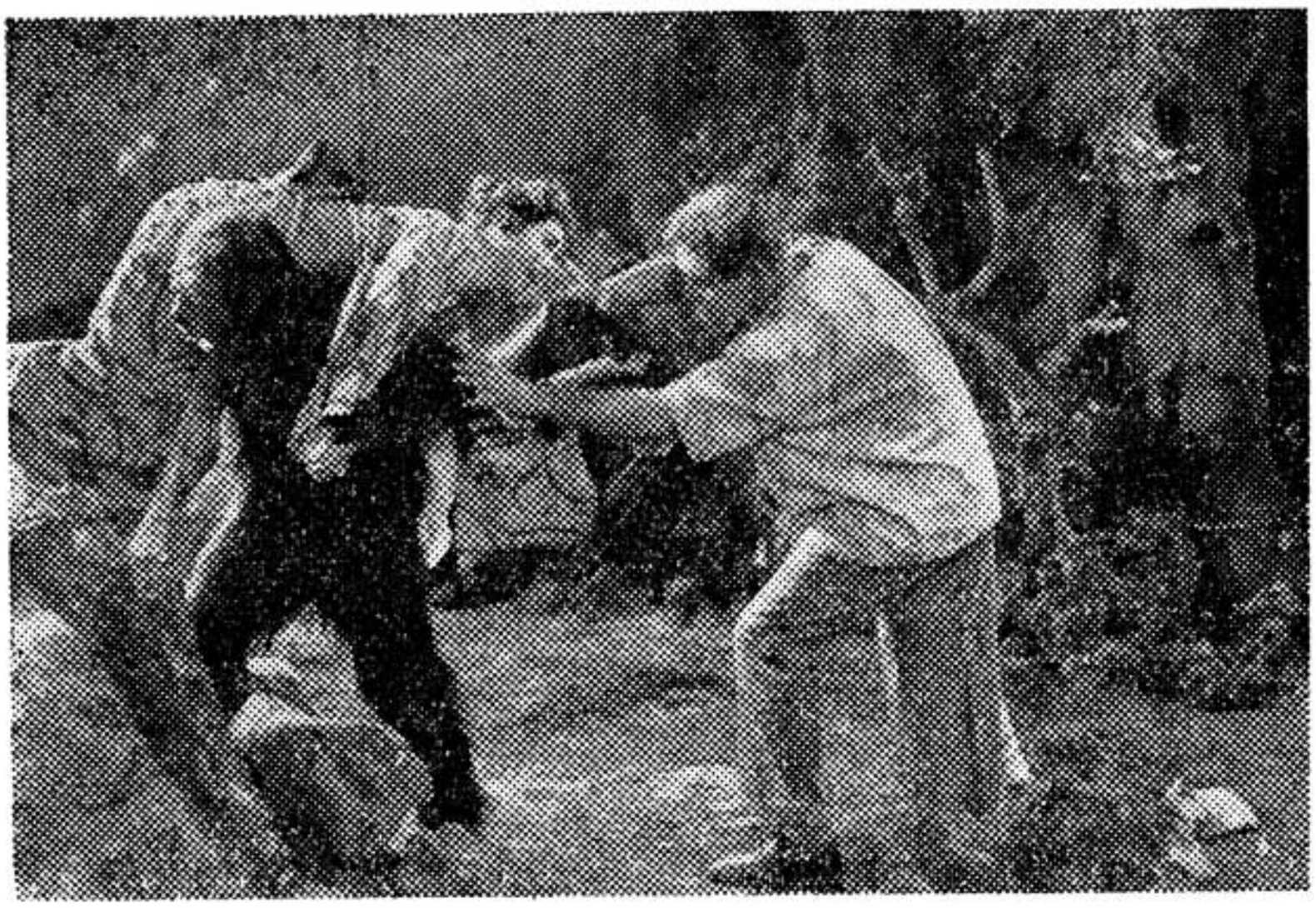
さて鈴木博士の研究室では、事件が意外に大きくなったので、博士は自分の実験を後悔していた。

博士としても怪物が自由にとび廻っていることにはどうしようもなかったが、必ずここに帰って来ると考えていた。

今はラリイを深く愛するようになっていたタラは、もとの彼に返してくれと博士に頼んだが、博士にもその自信はなかった。妻のえみ子、弟の健次に何回も試みたのが絶望だった。ただラリイには彼等と違った実験方法をとったので一縷の望みはあった。ある薬液の注入と非常な高熱だけが或いは成功させるかもしれなかった。

博士は研究中止を決意し、タラには希望なら結婚してもよいから引続き自分の許にとどまるように頼むが、彼女はそれを拒否し、短刀を与えて博士の自決を促すのだった。今は心中深く決意した博士





はポケットにピストルを忍ばせて研究室の奥深く入って行った。それを見送ってタラはマシューズに電話して、警官の派遣方を依頼させた。

その頃研究室の奥では、博士が檻の中のえみ子に別れの言葉をかけていた。そしてかっての恋人であり、結婚してからも手を携えて同じ研究にはげみ、自から進んで実験台に上った彼女を涙ながらに射殺した。博士自身もその後を追う覚悟だった。

突然扉を排して怪物がその場に侵入した。博士は素早く用意の薬液を怪物の右腕に注入し、更に高熱の蒸気を怪物に吹きかけたが想にたがわず双頭の怪物が現われ、いきなりタラに一撃を加えて失神した。

しかし、そのとき、博士の予



かくてリンダは正気に復したラリイの胸にいだかれることを得たが、事件の真相は誰にも謎であった。

マシューズには、ラリイの心に巣喰っていた悪魔が、突然、神の啓示のようなものにより分離した為と思われた。

夜は既に明けて、清々しい朝風が山麓を洗っていた。

アメリカ映画

双頭の殺人鬼

まぼろし侍 破魔暦 凝脂地獄

乱れ狂女

黒木忍 絵・中嶋長美

大道破魔之介は、ふと足をとめた。

そのわきを、男が二人ばかり、ぶつかるように駈け抜けて行った。

「あれかもしれねえ！……」

「そうだとしたら、目の保養になるらあ！……」

駈けながら、そうどなり合っていた……

大道破魔之介は、その二人が駈け出して行く方角を見つめた。

人だかりがしていた。

その間にも、あちこちから駈けつけて来る者達で、人だかりの輪が大きく拡がっているのである。

大部分が男達である。

それに、女共は、むだばなしの愉しみも切り上げて、言葉ではけなし、体では惚れている可愛い亭主のために、晩飯の支度に取りかかっている時刻だった。

だから、そこへ駈けつけていたむように人だかりの輪をひろげるのは男達が多いというのだろうが、破魔之介の耳は、最前、自分を押し飛ばすようにわきを駈け抜けて行った男達のどなり合いを、はっきり聞き取っていた。

――目の保養になるといった……

破魔之介は、ゆっくりと、人だかりの輪へ近づいて行った。

「いけねえよ、押しちゃあ！」

人の輪で、何が中で行われているのかわからないので、破魔之介は思わず前の男をわきへ押しのけようとして、どなられた。

破魔之介は苦笑した。

これから黒門町へ行こうかと、ぶらりと三味線堀の千加の家を出て来たのであった。

千加は、なれぬ手つきで晩飯の支度をしているはずだ。

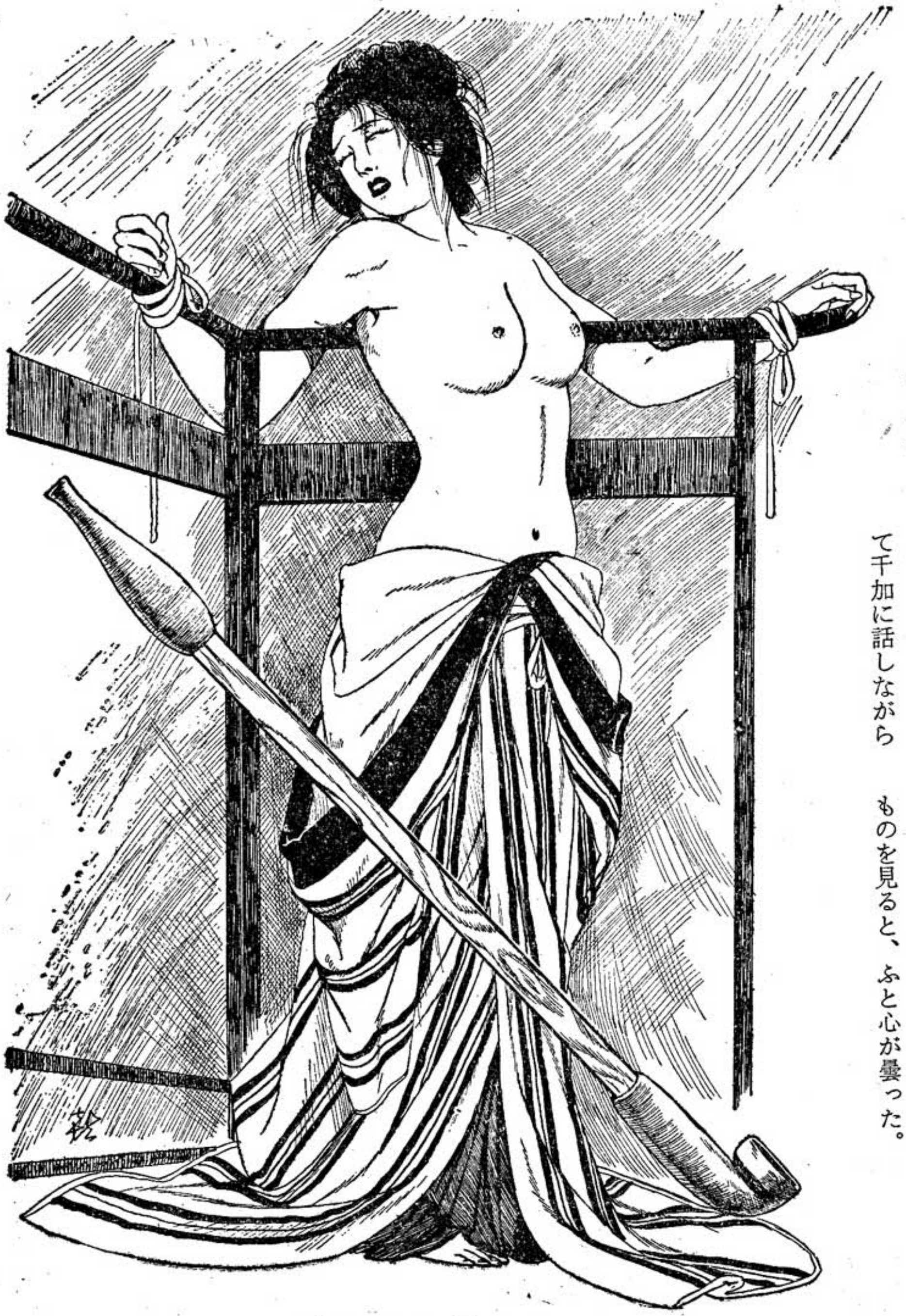
千加は、外出しようとした破魔之介に、

「どこへ行くんだい、お前さん……」

と、台所から顔だけ出していったのである。

「ちょっと、外の空気を吸ってくる」

そう答えて、出て来た破魔之介だった。



その千加に、チクリと良心が痛んだ破魔之介は、この何だかわからないものを見て、このまま戻って千加に話しながら飯を喰おうと思って、人垣の中へ割って入った。

その破魔之介は、人の肩越しに、大勢の男達の目を保養させているものを見ると、ふと心が曇った。

——なんだ、気違い女か……

しかし、これはたしかに男達の目の保養になるものであった。

女は、いまにも帯を体からはなしそうであったし、まとった着物も肩からずり落ちそうだった。はだかった胸は両の乳房がそれぞれ大部分、あらわに露出していた。いやそれより、女が美しかったのである。

目の保養、それも男達の目の保養となれば、こんな場合、女は醜くあってはならないのだ。醜い女

が、そのような恰好で日暮れに近い町をさすらっていようが、男達は一瞥しておしまいである。そしてかすかな不快感を覚えるはずであった。

それが、その女は若くて美しかった。

無言で、じいっと周りに立った男達を見つめている。右手が左の乳房をかるくおさえている。帯の下は、だらしなく左右にひろがっていた。

女は、ただぼんやり男達を見つめているのではなく、一人一人、順順に男達の顔を見廻しているのだ。

目の保養といっても、じっと無言で顔を見つめられた男は、いい気持はしない。

「いくら見たって、この中にはお前の亭主は居ないぜ！」

女は、そう言った男へ視線を戻してじっと見つめる。

そしてかすかに顔を振る。

「畜生ッ、薄っ気味悪い女だ——お前の亭主はいねえよ。わからねえのかなあ、お前の亭主は三宅島だよ。どっちを向いても同じような男ばかりで、そのまた向うは海がどこまでもつづいている……」

「そこでお前の亭主は、お前を夢見て早く江戸へ帰りてえと泣いてるんだ」

「気が残らあ、お前の亭主は、江戸に残した女房が気違いになったとはしらねえものなあ、綺麗な女房だから他の男に寝取られやあしねえかって、今頃は亭主のほうで気違いになってるかもしれねえ——」

相手が気が触れているとはいえ、残酷な言葉であった。

その時、破魔之介の見る男達の輪がゆらいで、男が二人ばかり前にせせり出て来た。

「——やあ、今日はまだ拝まねえのかい——」

一人が、いきなり喚いた。前からその狂女を知っている口ぶりであった。

破魔之介は、それで、狂女の後方に、小さな稲荷が祇ってあるのに気がついた。そのように、注意しなくては見過してしまう小さな稲荷は、江戸の町には数え切れぬほど、それこそ野良犬の糞ほどあるのであった。

狂女は、そう声をかけた男のほうを振り向いた。

「——まだだよ……」

「そうかい、じゃあ早速拝んだらどうなんだ——」

狂女はうなずいた。

そして稲荷に向ってぺたりと大地にひざをついた。

——気の毒に、亭主は罪を犯して島流しになってると見える……

破魔之介には、狂女が、何を言われてもわからぬほど狂っていないことが、一層の憐れみを覚える。

「——亭主が一日も早く許されて島から江戸へ送り返されるようにー——」

両手を稲荷に合せた狂女に、だれかが半畳を入れた。

狂女は、その野次を耳にしないように、じっと頭を下げていた。

狂っているとしても、その姿はあわれであった。

「もういい、こっちを向いてくれ！」

その野次も、無駄であった。

狂女は、身動きをしない。

その姿に、いくらかの人達が無言で見物の輪から抜けて行った。目の保養とするには、良心を持ち過ぎている男達であった。

破魔之介は、じっとその狂女を見つめていた。見捨てて行き過ぎるには、この男は胸を痛め過ぎていたのである。

——しかし、俺はあの狂女に何をしてやれるのだ……

破魔之介は、現在の己れが一介の素浪人であるのに気づいていた。

——あの狂女の亭主を呼び戻してやることはできぬ。法は曲げられぬからな……

息づく肩

狂女は、やっと合せていた両手をはなしてふらりと立ち上った。

見物人達に向き直る。

「——亭主を戻してもらいたいだろう——」

「戻しておくれ……」

狂女は、声のしたほうへ頭を下げた。

「お前の惚れてる亭主は、伝馬町でさんざんひどい目に合って、そういってお役人に頼んだんだ。女房のところへ俺を戻してくれ。それでなければ女房をここへ呼んでくれって……」

「そうだとも。お役人は返事のかわりにお前の可愛い亭主を責めつけてヒイヒイ泣かしたんだ。責め役人は亭主じゃあなく、女房の方にヒイヒイ悲鳴を上げさせたかったとさ」

ドッと哄笑が起った。

「そうだとも。俺だって野郎をヒイヒイ喚かせるのはご免だが、お前ならやって見てえや。裸に剝いてさ、青竹で背中をぶちのめしの、この手でうめかせて見てえやなあ」

狂女は、くるりと、その男を、焦点のずれた目で見つめた。

破魔之介は、狂女がそれで凄い美女なのを改めて知った。それとも男の目が美しい女と思うのは多少の呆気をおびる顔なのかもしれぬ。

「——亭主がかわいそうだと思ったら、お前さんも亭主が受けた痛い目を味わって見ちゃあどうだい——そうすりゃあいくらかでも島にいる亭主に気持が届くかもしれねえぜ」

破魔之介は、そういった男を見た。冗談だけではないものを、その声はふくんでいたのである。

——そうかもしれぬ……惚れ合っている夫婦なら、夫の味わった苦痛を妻はわが身にも味わって、亭主の苦痛を知ってそこに救いを感じるかもしれぬ。しかし、それを狂女は気づくであろうか……？

そう胸の中でつぶやいた破魔之介は、あっと思った。

狂女は、じっと、そう言った男に顔を向けて、一歩二歩近づいたのである。

「——お前が、あたしを苛めておくれ。忠三郎がお役人にされたように、お前があたしを苛めておくれ……」

忠三郎というのは、狂女の亭主なのであろう。そう言った狂女は、着物の裾をひきずって、走り出し、どうと何かにつまづいて倒れた。

だが、女はすぐに起き上った。草履が、片っぽ、遠くへ飛んでいた。女はそれに気づかぬのか、片足をはだしのまま、男に近づくと膝を大

夫恋しい一念で狂った若女房に迫る狼二匹！

狂った悲しさ、むざむざと罠に近づく女！

地につけた。

「ねえ、あたしに、忠三郎がされたようなひどい目を見せておくれよ……」

無論、男は断るべきであった。

が、驚いたことに、その男はニヤリと笑うと、一歩、前に出たのだ。

「よしッ、じゃあ両手を後ろに廻すんだ！」

狂女は、大きくうなずくと、背中へ両手を廻した。

男は、片手で、狂女の両手首をつかんだ。右手が、女の腰から赤い紐を解き抜いていた。こんなことに馴れているのだろうか、見物人がハッと息を呑む間に、狂女の両手首は固く縛り合わされていたのである。

「痛いッ、痛いよう……」

「我慢するんだ。お前の亭主は麻縄でこうされたんだぜ」

白い、息を呑むような背中の肌が、落ちかかる光りの中に息づいた。

「打つぜ！　お前の亭主は、こうされて青竹で叩かれたんだ！」

「叩いておくれ……」

狂女は、男に体をねじ向けて哀願した。

「よしッ」

その時であった。

「よさねえか！　気が触れてるのをいいことに、女を玩具にするんじゃあねえぞ！」

見物の中から、そうどなると、一人の男がいまにも拾った棒切れで狂女の背中を叩こうとした男に走り寄ると、棒切れを取り上げ、そのあとに小気味よい音をさせて頬げたを一つ殴りつけていた。

破魔之介は、ほっと、それを見てため息をついた。

――いかん……あの男のほうが俺より立派な人間だ……

そうつぶやくと、破魔之介は、見物の輪からはなれた。

――俺は、もしかすると、あの狂女が美しい肌を打たれてのたうつのを見たい気持を持ったのかもしれぬ……

破魔之介は、おのれを恥じた。

だが、若くて美しい女であった。

破魔之介は歩きながら、目の前に、狂女が、はげしい責め折檻をされてのたうつ姿態を妄想した。それは否定しても、ふと、どの男にもそのような姿態を美しいと感じるものかもしれなかった。が、女が狂女であることに、破魔之介は一層その妄想を美しいと思うおのれの気持を恥じたいと思った。

破魔之介は、まっすぐには千加の家に戻らなかった。といって、もう黒門町へ井上玄丹を訪ねる気も失くしていた。

――俺は千加を抱いたのだぞ。黒門町へ行く気持の中に、玄丹どの娘のお蔦さんの顔を見たい気持がかくれていたとしたら、俺は余り褒められる男ではない……

一度己れを恥じると、次にはひどく潔癖になる破魔之介であった。

だが――

破魔之介が立派と感じた男は、すこし違うようであった。

その男は、狂女の乱れた着物を直してやると、狂女の家へ女を送って行ったのだが、そのあとを、あの狂女を棒切れで打とうとした男がついて行ったし、その男と、狂女の連れの男は、時折、意味あるような視線を交わしていたのだ……



白い指

狂女は、おりんという名であった。

夫の忠三郎は職人だが、近所が羨やむような仲の好い夫婦であった。その忠三郎が仕事先から血相変えて駈け戻って来たのは、まだ昼下りの日がかんかん照って露地のドブ板をそっくり返している時刻であった。

「――おりん、俺は人を殺してしまった……！」

冗談を言ってる顔ではなかった。

おりんは、忠三郎に抱きついた。二人はただ泣くだけである。

が、それも長い時間ではなかった。

役人が、抱き合っている夫婦の体を邪慳に引き放し、忠三郎を縛って連れて行ってしまったのである……

おりんの家は、一番長屋の奥であった。路地は行き止りで、忠三郎が曳かれて行ってから、家の前を歩く足音は、おりん以外にはない日がつづいていたのだ。

それが、今日は三人だった……

おりんは、先の男をわが家に案内し、そのあとからほかの男が入って来たのにも、別に関心は払わなかった。狂人のかなしさである。

「――おい、あんな所でこれにあんな目を見せちゃあ危ねえ。俺がとめなかったら浪人者がお前の腕をへし折っていたぜ」

そう言った男は、破魔之介が、狂女を後手にくくったとき、何をしようかと考えたかを知っていたのだ。

「気がつかなかったんだ。そんなこわい野郎があの中にいたとはな。俺はそんなことより何より、この女の亭主が人殺しで島送りになるときいて、しめたっと思うと、ものになるかどうかって……」

「なるぜ。気が触れていたって、全くの気違いじゃあなさそうだ。ほれ、俺達の話をまじめな顔をして耳をおっ立ててるぜ」

「いい女を手に入れたもんだ……すげえいい年増だぜ。でも、頭がすこしこれだが……」

「いいってことよ。そのぐらいでなくっちゃ、こちとらの自由にならねえ。第一、ましな顔だったら、亭主を次々とこしらえて、俺達の段取りにはちっとも乗っちゃあこねえからな……」

そう言いながら、その男はおりんの顔から胸へ、腰へ、ねばっこい視線を這わしていた。

もう一人の男も同じである。

「――兄哥……！」

「……？」

「このまま、船に積んじまうのか……」

言われた男は、ニヤリと笑った。

「そうせくこともあるめえよ。しばらくさっきの目の保養をつづけて船に積んでもおそくはあるめえ……」

そう言って、おりんを見た。

「なあ、お前が亭主に惚れ込んでるのは承知なんだ。亭主を江戸へ呼び戻してえだろうなあ……」

「ああ……忠三郎を戻しておくれ……」

おりんは、両手をその男のほうに差し出した。

「呼び寄せてやるぜ……」

「ほんと……」

「本当だとも、そのかわり、お前が呼びに行ってやんなくっちゃあいけねえ。いいかい、船に乗って海を渡るんだ。もちろん、亭主がいる島には近づけねえ。別の島だ。世の中には裏があるってことを知ってるだろう。その島に行って、お前は、亭主が味わった以上の苦しさを体で味わうんだ。神仏はあらあな。そいつが亭主の心にも通じるんだ。すると、島の役人がこっそりお前さんのいる島へ渡って来る。いくら役人だって、女房を連れて行ってゃあしねえ。それに女の囚人もいてもまさか気に入った女もそうそうはいめえ、役人は極楽島へ来たかと喜ぶぜ。その役人達をお前みてえな女が愉しませてやるんだ。そうすりゃあこっそり役人は今度はお前の亭主を舟に積んで来てくれる。そうなりゃあしめたものだ。その亭主をこっちの船で運び出しちまうんだ。それからはお前は亭主と仲好く暮せらあな……」

「兄哥、この女はそんなこと言ったって……」

そいつが指で自分の頭をさしてくるくる廻して見せた。が、

「いつその島へあたしを渡してくれるんです……？」

狂女が、むずかしい話を呑み込んだようにいったのに、弟分はびっくりしたし、兄哥と呼ばれてる男はニヤリとした。

「話はわかったんだな？」

女はうなずいた。

「兄哥――」

と、弟分は、真顔になった。

女が正気に返ったら、ここだけの愉しみはできないのをがっかりしている顔であった。

女を船に乗せて、海へ出ればこっちのものだ。極楽島に着けば、このように島送りになった亭主をなんとか取り戻したいと願って口車に乗った女達には、地獄の罠が待っているのだ。

おりんは美しい人妻だった。それに、正気はどのくらいの駄賃をはずむかもしれない。

しかし、男は、そのおりんを目の前にしてしたかったらしい。

それを、兄哥分は、読み取っていた。いやおりんを首領に渡す前に愉しみたかった……

兄哥分は、ニヤリと笑った。

「――さっき、稲荷の前でお前さんは、亭主身にも味わってみてえと言ったが、本気か……」

「本気です。忠三郎が味わった、いや、それです。そうすればあたしは忠三郎の苦しい気られると思うんです……」

おりんは、夫の忠三郎が役人に連れて行かが自分の許に戻らないと知ってもそれに諦め気が触れたのだった。それが、男達の言葉にができる手立てがあると聞かされると、失っ正気に返ったのだった。

おりんは、惚れ抜いていた夫の苦痛をわが苦痛をやわらげられると信じたのだ。それはた。

が、男達はそれを利用していた……

「俺達が、お前の気持をかるくしてやるぜ。ている男なんだ」

「どうすればいいんです……？」

「俺達のするままにされりゃあいい……」

ニヤリと、すがりつくような目でいるおりんに言った。

「そうだとも、なんでも俺達の言うことをきいて、お前は胸に亭主の顔を思い出していればいいんだ」

待てなくなった男達は、おりんに左右から飛びついていた。

乱暴に、着物を脱がしていった。

おりんは、湯文字一枚の裸体をちぢめた。

その両手を背中に捻じ上げると、赤い紐でギリギリと縛りつけた。

おりんは、それに堪えた。苦痛を味わうことで、せめて島送りになって苦労している夫と心が通うことができると思って……

だが、その思いは、次には無残に踏みにじられていた。

「うっ……何を……」

おりんは呻いた。

「面倒だ。口を縛っちまえ」

そこに落ちている下着を裂くと、おりんの口へ無理に押し込んだ。

その上を、ぐるりと猿ぐつわを廻した。

「どうだ、俺達のおかげで正気に戻ったんだ、そんな目をしねえで感謝してもいいはずだぜ」

おりんは、猿ぐつわをされた顔を左右に振った。

正気に戻ったことが、おりんを恐ろしい屈辱の座へ坐らせている。

それがけもののような男達にはたまらぬ喜びであった。

狂女を裸にし、好きに縛って責めたとて、狂女は肉体の苦痛しか訴えない。

それを、正気の若くて美しい女を、逃げ出せないように後手に踏んだ。

縛り、声が出せぬように猿ぐつわをはめたのだ。それも女の家であった。

女は、その男達をにらんでいる。

それに、口惜しさと怒りをふくませている。だが、それ以上に、その女が羞恥にたえられぬ不安さをかくしているのを男達は見つけていた。

「どけ！　おもしろいのを見せてやる」

そう言って、ニヤリと笑った。右手がふところから煙管を出した。

そして、おりんのうつ伏している背中へ廻った。

その男の目が、合せてくくられているおりんの両手を見た。強く縛ったから、指が痛さにひらいていた。

男の右手が、その女の手をつかんだ。

「いいかい、じっくりといい思いをさせてやるぜ……」

男は、煙管を、白い指の間へ入れてぐいとおさえた。

「うっ……！」

と、うつ伏していたおりんの体がのけ反った。

男は、ニンマリ微笑すると、手をゆるめていた。

それから、じわりじわりと、男は煙管をはさんだ女の指をしめつけたり、ゆるめたりした。

おりんは、そのたびに呻き声をあげた。

決して、指の骨は折れはしないだろう。

が、この苦痛は、たまったものではない。

「うう……うっ！……」

おりんは、全身をくねらせて、その苦痛に堪えようとした。

もう、全身に、脂汗をうかしていた。

拾った煙管

「――どこへ行っていたんだい……」

と、千加は、破魔之介の顔を見ると、不貞くされた調子でいった。

「どこへも行きはせぬ。ただ今までぶらぶら歩いていただけだ」

「せっかくのご飯がさめちゃったじゃあないか……」

「すまぬ」

破魔之介は、微笑した。

千加が、膳の上の覆いをはねると、ちゃんと二人分、揃えてあった。というのは、千加は破魔之介を食事もせず待っていたということだった。

千加は、食事中、怒ったように一言も口をきかなかった。せっかくあたたかいご飯をつくったのに、さめてしまったじゃあないかと思っていた。それが口惜しい千加なのである。

破魔之介も、無言であった。

冷えた飯が、千加に申しわけない気がするのである。

「家を出て相生町の方へ歩いて行くとな、気違い女が見世物になっていた……」

「それをあんたは見てたんだ。美しい女だろう……！」

千加のそう言って破魔之介の顔を見つめる目には険がふくまれている。

「そうだ。美しい女だった……」

「チエッ、馬鹿馬鹿しいったらありやあしない……」

「千加は知ってるのか？」

「おりんと言う女だよ。亭主は人殺しで島送りになってるんだ……」

破魔之介はうなずいた。

そのことなら、あの見物人の中にまじっていたとき耳にしてわかっている。

「惚れてるんだねえ……」

千加は、破魔之介の顔を見つめたまま、ため息をつくように言った。

しみじみとした調子がふくまれていた。

千加は、おりんという気違い女が、どのくらい亭主に惚れていたのか、それが女としてわかり過ぎるくらいわかるのである。島送りとなった亭主を思って、気が触れたのが、千加の胸にうずくような共感を覚えさせるのである。

――このひとが、いまふっとあたしの前から永久に消えたとしたら……？

千加は、自分も気が触れるかもわからないと思った。

だが、気違いになってあんなに世間の人達に玩具にされるのなら、気が触れる前に死んじまおう……！

「――気の毒な女だな……」

「誰が？……」

破魔之介のつぶやくのに、千加は喰いつくように聞き返した。

――あの気違い女ほど、このあたしは気の毒に思ってもらえないのかしら……

破魔之介は微笑した。

千加のその気持を承知して、
「はて、だれの噂をしていたんだっけ……」
と、とぼけて見せた。
「憎らしい……」
千加は、破魔之介に膝でにじり寄ると、首に両手を巻きつけた。
「これ、倒れるではないか――」
破魔之介は、あわてて千加の両手をつかむ。
千加は、このまま重なって倒れて、破魔之介の情を受けたかった。
そうすればいくらか落ちつくかもしれない……
千加が憎らしいといったのを、破魔之介は誤解したようだった。
千加は、気違い女のおりんを、憎らしいと言ったのである。
破魔之介の関心が、その気違い女にいっているのが、不満なのだ。
「――あの女なんか、地獄島へ運ばれてしまえばいいんだ……」
「地獄島だって？」
「そうだよ。あの女のように島送りになった男の女房を、なんとか言いくるめて船に乗せ、どこかの島へ運んで異国人に売り渡す男達がいるんだ……」
「千加――！」
破魔之介は、本気になって首に巻きついているもったりした女の腕を解いた。
「行こう、千加はあの女を知っているのだな……」
もう破魔之介は立っていた。
千加は、破魔之介が、あのおりんという気違い女を、まだ無事かどうか見定めないうちはすわらぬのを承知した。
「――でも、まさかいくらその男達だって気が触れてる女に手を出すまいと思うけど……」
「あの女は美しい……それに、気が触れていたとしても、正気に返らぬほどとは思えない……」
破魔之介は、あのおりんという女が、ふっと耳にして、正しく反応を示していたのを思い出していた。
千加は、ふうっとため息をついた。
――あの気違い女は、自分の家にいてくれればいい……
それから四半刻はだってない……
「この奥の家だそうだよ……」
千加は、破魔之介の先に立って、おりんの住む長屋の路地へ入って行った。
「――暗いな――」
「手前の家は空家だそうだ」
「いや、おりんとかいう家もまっ暗だ……」
「どこをほっつき歩いているんだろう……」
千加は、声もかけずに戸口を引きあけた。
「留守か――」
「そうらしい」
上へあがっていった千加は、土間に立って待っている破魔之介に声だけで返事をした。
「出て来るがいい。人の留守に他人の家へ上っていては泥棒と間違われるぞ」
「待って……」
千加は破魔之介を、制するようにいった。
――なんだい、ばかに妙な匂いがするじゃあないか……

千加は、暗闇であちこちを嗅いで見た。
女の汗の匂いと、男の汗の匂いが、重たくあたりによどんでいるのだ。
「どうした？」
と、破魔之介の声が届く。



「留守だけど、ついさっきまで女と男がここにいたようだ……」
千加は、おりんの美貌に、物好きな男が押し入って気の触れた女と、そこで男女の愉しみをくりひろげて行ったと誤解した。
その千加は、自分の黒い影が大きく前にいきなり揺れたのに、ぎょっと振り返った。
破魔之介は、手燭を右手に持って、あたりを見た。
「どうやらお前の推測は当ったらしい……」
破魔之介は、なた豆煙管を拾って、ニヤリと言った。
が、すぐ妙な顔をする。羅宇に、べっとりした脂がつ

いている。

「千加、これは女の脂の匂いだ」

「どれ……」

千加は、破魔之介の手から短い煙管を受け取った。

「どうせ一服二服、あの女も吸ったんだろうが、こうも手脂がつくものかしら……」

千加は気味悪そうな顔をした。

「引きあげよう、おりんはそのうち戻ってくるだろう」

が、一日、二日、と、おりんは長屋には戻って来ない……

「――なんだか、あの女を船に乗せるのが惜しくなったな、兄哥……」

「俺もそれを考えてるんだ。いつも俺達ばかり苦労して亭主を島送りされた女をさがすのに苦労してるんだ。そいつを、ほかの奴等は手をこまねいて、俺達が送り届ける女をいい目に合わせていやがる……」

「兄哥はまさか……？」

「フン、まさかだまったく。まさかその女が気に入ったからって船に乗せねえわけにはいくまいな……」

陰気な部屋である。

そこに、二人の男があぐらをかいて向き合っていた。

二人とも、もういい気持に茶碗酒を呷ったあとである。

「あれ、俺は煙管を落しちまったかな……」

そう言って、ニヤリと笑った。

「俺のを使いねえ。兄哥はあすこへ置いて来ちまったんだ」

「落して来ちまったか……まあいいや、あんな古煙管なんかはな、ちゃあーんと、大事なものはこわしもしねえで運んで来ちまったからな……」

その視線が、横にうごく。

そこの柱に、おりんが立ったまま、後手に縛られている。

「やっぱり船に乗せちまうのかなあ……」

そう、弟分がため息をつくように言う。

「仕方がねえ、それが俺達の役目だからな。だが、今度はいい褒美がもらえるぜ。ほかの奴等はこれほどの女をさがして来ゃあしねえ……」

「いくら褒美をもらったって……」

「おい、欲を出すなよ。が、ただ指をしゃぶって船に乗せることもねえんだ。二三日船が出る間はあらあ……それまでゆっくり二人でこの女を愉しむんだ」

そう言った兄哥分の男の顔がニタリとした。

柱に立たしたままのおりんを見て言ってるのを、おりんがきいて、わずかに身じろぎしたのだ。

「たまらねえなあ……」

「おい、よだれをたらすなあ早えぜ。俺あこの女を抱こうなぞとは考えてねえからな……」

「そ、そりゃあ兄哥……」

「ふっふふふ、忘れたのか、てめえは……女の家で俺がじっくりと女の指を煙管で責めたのをさ……」

「わ、忘れるもんか……」

「そうだろうなあ、てめえは気違いのように鼻をヒクヒクさせていやがった……」

「兄哥……」

「わかったか、女ってえ生きものは、抱くだけがおもしれえんじゃあねえ……」

そう言うと、のっそりと立ち上った。

あわてて、弟分も立ち上った。

男は、薄ら笑いをうかべながら、柱に立たせられているおりんに寄った。

おりんは、顔にくっつきそうに近寄せてくる酒くさい男の顔に、顔を反向けた。

「ふふふ、どうして面を反向けるんだ」

男の手が、おりんのあごをつかんで、無理に自分のほうへ向けた。

おりんは口惜しそうに、しっかり両目を閉じている。

「どうだい、ここだったらすこしぐらいは声を出して呻いたっていいぜ」

「うっ……」

と、喰いしばった歯の間を、呻きが洩れた。

「そうだ……遠慮なく声を出すんだ、それでなくっちゃおもしろくねえ。口をあけるんだ。熱い息をこもらして置いちゃあ口の中が火傷するぜ……」

あごをつかんでいた右手が、ヒョイと、おりんの鼻をつまんだ。

「うっ、うう……」

と、おりんは必死に歯を喰いしばる。

が、やはり、たえられなくって、おりんは口をあけた。

熱い息が、男の顔にかかる。

「目をあけろ！」

と、どなった。

女が、どんな気持でいるのか百も承知で、男は残酷な言葉を浴せる。

おりんは、顔を振った。

「帯をひっ解くぜ！」

「か、かんにんして……」

「ふふ、そうだよ、そうやって目を開けてなくっちゃあいけねえ……」

ニタリと笑った。

「兄哥……」

と、声がかかった。

「待ってろ」

と、答えて、おりんの顔を覗いた。

「どうだい、あの男がもう一度ここでもじっくりお前の体から汗をしぼり出したいといってるが……」

「いや……あんな目だけは……」

「ふふふ、大丈夫だぜ。決して指の骨は折れやあしねえそうだ……」

そして、振り向いた。

「おい、女の手を柱からほどくんだ」

「よしきた」

おりんは、柱にくくりつけられている紐を解かれると、どさりと畳にうつ伏した。だが、後手に縛った手首は、合さったままだ。

「こいつも解くんだ」

ひざで、うごくおりんの体を押さえつけていて、手首の紐をほどく。

「どうするんだ、兄哥……」

「腕を袖から抜くんだ――」

両手を、袖から抜いて、おさえつけた。

「立たせろ！」

「立っんだ！」

無理におりんの体を立たした。

「そこの衣桁をここへ持って来い」

「こうか――」

「こうして女の腕をうしろへ曲げてくるんだ……」

おりんを、衣桁を背にして立たすと、両手を上にあげさせて、衣桁の横の棒に両手首を縛りつけた。

おりんの体は、まっすぐ立ったままで、ちょうど、上へ伸ばした両腕が、肘のところで横の棒が当る。手首をその下の横に渡した棒に紐でくくりつけられると、おりんの体は反り身になって爪先立った。爪先立たなければ、腕のつけねが裂けるように痛さを覚えるのだ。

男達はそう衣桁におりんの手首を縛りつけてしまうと前に廻った。

衣桁の後ろへその男は廻った。

「そうだ、俺の煙管はなかった……」

その言葉が、おりんにまた煙管責めの恐ろしさを思い出させた。

男の目の前で、おりんのくくられた両手の指が握られた。

そして、

「うっ……！」

と、おりんは呻いた。

ただ両手の指を握りしめただけで、腕のつけ根にえぐられるような激痛を覚えたのだ。おりんは、夢中で指をひらく。

「ふっふふふ……」

と、それを見て、男の顔に薄笑いがうかんだ。

「お前の煙管を貸せ」

男は、弟分の男が出す煙管を受け取った。

それを、おりんの目が追う。

つい見えたのか、それとも見せたのか、おりんは、指の間にはさまれぬ前に、それを指の間にはさまれて指をおさえられる恐ろしい苦悶の表情で顔を歪めた。

「ほら、煙管だ……」

そう声をかけて、男は煙管を後手に衣桁の横の棒にかけてその下にくくられてひらいている女の手の平に押しつけた。

ぎゅっと指が、それを握りしめた。

おりんは、腋の下に裂かれるような痛みを覚えて指をひらく。

その指の間に煙管がはさまれる。

だが、指の間に煙管をはさまれたぐらいでは、指の骨はしなうだけである。そのたまらぬ苦しさは、指から腕、体、全身と、たまらぬ苦痛をじんわりとつたえていくのである。

「――まだわからぬか――」

大道破魔之介は、戻って来た千加にそうきく。

おりんの家に落ちていた煙管の羅宇が、最近新らしくすげかえられたと見て、千加に羅宇屋を当らせていた破魔之介である。

「江戸にゃあ煙管を持ってる男は、五万といるんだ」

千加は、吐き捨てるようにいう。

あんな女、破魔之介の気持をひきつけた女なんて、見つからないほうがいいと思った千加も、いまはどうしても見つけ出さないでは自分の気持もおさまらなくなっているのである。が、待っていたように破魔之介にそうきかれると、ついふてくされた返事が出る。

「煙管一本に一人の羅宇屋がついてるわけでもあるまい」

冗談めかして言ったが、むろん、破魔之介とて千加がぼんやりしているとは思わないのだ。

とにかく、その煙管の羅宇をすげかえた者は一人しかいない。

それも、大抵は羅宇屋というのは老人だ。

すると、記憶がおぼろで千加に煙管をつきつけられても、顔を振らぬとは保証できないのである。

だといって、おりんをさがすのを止めるわけにはいかない。そうするには、その男物のなた豆煙管についていた女の匂いが強い脂が気になる破魔之介だった……

「俺が行こう、その煙管をよこすがいい」

「いや、あたしがもう一廻りして来る」

千加は、くるりと背中を見せると家を出て行った。

それから、ほんの半刻後であった。

千加が、あわてたように戻って来たのである。

「お前さん、この気持悪い煙管を直しに出した男がわかったよ……」

「よし、行こう――」

破魔之介は、大小を腰に落すと、もう草履をつっかけていた。

千加と破魔之介が、夜の道を急いでいた頃、おりんは、酔っ払って帰って来た男達に、また怖ろしい責苦をじわじわと味わされ、全身の毛穴から脂汗をふかせていた。

「明日の晩はどうしてもお前を手ばなさなくっちゃならねえんだ……きいてるな……それで今夜は俺達の愉しみも最後の晩だってことだ、じっくり、脂をしぼってやるぜ」

のたうつおりんの耳には、段梯子を上る破魔之介の足音も入るまい。同じように、男達もそれを見逃していた。

「馬鹿ッ！」

と、破魔之介の怒声が、夢中になっておりんを責めている二人の男の頭上にひびいた……

「――ねえ、あの男達を自身番に突き出すなんて、今迄のお前さんにはなかったことだけど、どうしたんだい……」

おりんを長屋に戻し、破魔之介と一緒に路地を出ると、千加は聞いた。

「わからぬか、あの男達を仲間の奴等に戻してはいかない。そうすると、わしがあの男達の仲間に顔がわかってしまう」

「わかった、あんたはあの男達の仲間もやっつけたいんだ、そうだろう……」

「なんとかうまくもぐり込むのだ。それには千加の智慧も借りねばなるまい。奴等が用心棒にでもわしをやとってくれたら、わしは海を渡る……」

「あたしも行きたい……」

破魔之介は、それには返事をしない。

彼等の本拠地の島へ海を渡って出かけたいと思ったのは、島にだまされて送られた女達をひとり残らず救い出し、地獄の鬼のような男達を根こそぎ倒したいと希ったからであった。

まぼろし侍破魔ごよみ・終

死者の贈り物

★夫の後姿に迫る不吉な予感！　きっとなにかが起ると彼女は確信した……

山田彬弘・画

岬洋之助

1



織田と妻の久子がそれまでいた借家をひきはらい、あたらしくアパート住いをはじめることになったについては、それなりの理由があった。たったひとり娘の二ツになる加奈子を、裏の空地にある古池で溺死させてしまってから、夫婦とも、もうその家に住んでいる気がしなくなったのである。

「まだ信じられないわ。加奈子が死んだなんて……おかあちゃん、って言いながらひょっこり外から帰ってくるような気がしで……」

事故のあった当座、久子はそんなことをいっては、もうたまらないといった様子をした。

ちょうど梅雨もあけ本格的な初夏に向うころで、あけはなった縁先から見える庭は、カッと強烈な緑に照り映えていた。夕方など、その縁のところへ、あそびつかれて帰って来た加奈子がいまにも立ちそうな錯覚におそわれることがある。

夕食のとき、座敷に向い合って座っている夫婦の視線は、ひとりでに縁先にとりでに縁先に吸いよせられた。しかし、織田は、そうした想念をふり切るように、コップの中で刃物のようにキラキラ光っているサンラック・ドライを一気にあおった。そして、心もち眼をすえながら、

「考えるなってんだから……」

もどりゃしないんだからというのだったが、うめくようにいうよりも、むしろそれは久子にいきかせる調子になっていた。

そんなこともあって、彼は漠然と、

「ここにもいたたまれなくなったな」

と感じはじめていた。条件がよくて捨てがたい家だが、加奈子の



追憶のなまなましいあいだは、胸がふさがれるようで、とても耐えられなかったのだ。それと、妻の久子の死児に対する執着の異常さが、織田を脅かしたのだった。

椿事があって一週間ぐらいたったある夕方のこと、会社から帰ってきた織田は、家の中に妻の姿が見えないので、

「はてな？」

と思った。もう暗くなっているのに、家の中は電気もついていない。しかし、妻がどこかへ出かけたのでないことは、家の中の様子でわかった。なにかの煮えている匂いがしたし、台所の暗がりではガスの青い火が、貼りついたように動かぬまま、鬼火のようにトロトロと燃えているのだった。

ふと心にひらめくものを感じた織田は、まだ外から帰ってきた仕度のまま庭下駄をつっかけて裏の空地へ出ていった。そこで、こちらに背を向け、凝然と池にむかって立っている久子を見たのである。

「オイ久子。いま帰ったよ」

織田は、三、四米おいて久子の背後から声

をかけた。久子は、そのまま身じろきもしない。

「おいどうした。久子！」

織田は相手をはげますように、やや語気を荒くもう一度よびかける。すると、まるで傀儡がからだを動かすようにギクとぶきっちょな、しかも緩漫な動作で久子はまわれ右をすると、だまって織田を見た。その瞬間、織田は全身に水をブッかけられたようにゾーッと鳥肌たつのをおぼえた。久子の眼は織田の眼に向けられてはいたが、それを透してはるかな空間にうつろな漂いを見せている。薄暮の中にもえさかる、そのあやしいリン光に織田はふと物狂わしい前兆を見たのだ。

「こいつ、狂うな！」

彼はひくく身構えた。しかし、それは彼の思いすごしのようだった。きわどいところで彼女の精神の平衡は保たれていたのである。

しかし、狂うおそれは多分にあったのだ。それほど、死児に対する彼女の執着は強かったのである。死の直後は、葬儀とかいろんな雑事でまぎれていたかなしみが、それらの行事が終るとともに、いまやかなしみ自体のまぎれもない重みで彼女の心を圧しつけてきたにちがいなかった。そして、その対策としての居住還境からの脱出を企てて、織田は現在の居住還境からの脱出を企てたのであった。

もっとも、それにはもうひとつのネライもあった。この家を引きはらうにあたって、家主に預托してある敷金が戻ってくる。七万円ほどあるから、それで安いアパートの一室を借り、いくらかの権利金をはらったとしてもなおなにがしかの現金が手もとに残る。じつは彼の勤めている印刷所は、大口の不良債権を生じたのがもとで最近倒産の一歩てまえにあり、給料もここふた月ほどは欠配だったのである。彼はすでに会社に見切りをつけ新しく職探しをはじめようと思っており、その軍資金が必要だったのである。いまや、あらゆる意味で「ツイていない」環境からの脱出が必要だったのだ。

2

あるアパートの空室を見つけ、織田が久子を連れていって見せたとき、彼女はあまり気のりがしないようだった。気のりがしないというより、むしろ何かに脅えたような表情で部屋の中を見まわしながら、

「なにかよくないことが起きそうな予感がするわ。方角がよくないのよ。やっぱり！」

といった。

織田はやっとの思いでその部屋を見つけだし、久子にも喜んでもらえると思っていたやさきなのでムッとしたらしかった。眉根をよせ急に気むずかしい顔になると、

「五ケ所も六ケ所もあたったあげく、やっときめた部屋なんだよ。なにしろ金の制約があるんだからな。ゼイタクはいえない。かつぐのもいいかげんにしてくれないと……」

それは、じっさいその通りなのだった。家賃、権利金が手ごろなこと、それに部屋の程度や環境もわるくはなかった。織田たちが考えている条件の中で探し得る、おそらく最高にちかい環境といってよかった。それにもかかわらず久子がこだわりを見せたのは、彼女が方位にこっているからだった。以前からその傾向はあったのだが、加奈子を亡くしてからは、病的にひどくなっていた。はじめ、織田がこのアパートを見つけて来て、久子にそのことを報告したとき、彼女はすぐその場所はどこであるかを織田にたずね、東京都内地図を出して方角を測っていたが、

「ああ」

と息をのんだ。

「西だわ。真西だわ。いちばん悪い方向だ

わ。あたしたち、西へ動くとよくないことが起るのよ」

なるほど、いま住んでいる場所を起点に、こんど移ろうとする場所を鉛筆を横たえて結んで見ると、その芯の尖端は、地図の下の余白に出ている東西南北標示の西の方向とぴったり一致するのだった。

そのとき織田は、

「バカな！」

久子の言葉を、一笑に付した。

「おまえ、加奈子のことがあってから、すこし変だよ。ノイローゼだ。わらうべきノイローゼだよ」

それから、久子の肩を一つどんとドヤすと、

「さあ、元気をだして見にゆこう。部屋を見たらきっと気にいるよ。明るくて清潔で住み心地のよさそうな部屋さ。それに俺はもう管理人に話して、借りることに決めてきたんだからな」

織田は手まわしよく。管理人に契約金を渡してきたのだった。だから彼は、久子がまるでとほうもないゼイタクな駄々をこねているように思えたのである。

「あたしがいうのは、そういう意味じゃあないの！」

久子はかなしげに首をふって何かいおうとしたが、うまく説明できる自信がなかったので、あきらめたようにいった。

結局、久子は織田の積極性にひきずられたかたちだった。方角がよくないとはいって見たものの、たって自分の主張を通そうとするのでもなかった。まだ虚脱がつづいているあいだ、久子はひとりでその部屋に残された。その三十分ちかいあいだに久子の心にはたしてどんな変化があったのかがあった。意志を喪失した女の表情だった。それが、いよいよ部屋にもどってきたとき、彼女の顔はういちど抵抗してみせたのである。その執拗なこだわりに、織田は上機嫌の出鼻をくじかれたかっこうだった。バカに顔色がわるいが！」紙のようにまっ青だった。

「どうした。なんでもないの」

「ううん。なんでもないよ。俺は失業者で、このさき二月あそぶかわからないってことを久子は知ってるんだろうな。方角がどうのなどといってる場合ではないんだ」

笑をつくろうとした。しかし、彼女自身の意志をうらぎって、口もとが不自然に歪んだだけだった。

3

そのアパートへ移るとまもなく、織田はある化粧品会社のセールスマンになった。その会社の製品は店頭売りはされず、もっぱら、数百人もいるセールスマンの手を通じ、家庭あるいは職場訪問の方法で消費者に直接売りさばかれていた。外国製品なみの高価なものだったから客層はしぜんに限られ、中流家庭以上の中年婦人や二号さんや、おしゃれのた

めには金おしみをしない接客業の女性たちが多かった。セールスマンたちは、それぞれの地区の営業所に所属しているが、自分で獲得した客は、彼がその職にある限り自分の権益として確保できる。ある客が、たとえば前に買った洗顔クリームをつかいきったとする。

すると、担当の外交員に電話をかけて補充を申しこんでくるのだ。なくなる時期を見はからって、外交員のほうで顔を出すこともある。いずれにしても、ある外交員の権益を、他の外交員が荒すことはゆるされない。だから長くやっていて腕のいい外交員は一人で多くの客をもち日々多額の販売歩合をあげ、なかには派手に自家用をのりまわしたりする。いわばそれらは、この道に志す者の終局の理想像だった。

そのセールスになった当時織田は、

「オレも化粧品の行商になり下ったか」

会社から貸与された商品入れのケースを片手に提げ、アパートの部屋で、訪問先に行ったところをおどけた身ぶりで実演して見せながら、久子をかえりみて自嘲して見せるのだった。しかし、その反面、遠足を明日にひかえた小学生のように、どこか浮かれた調子がないでもなかった。

もともと彼は印刷会社にいたじぶんから営業マンだったし、根が社交的な男なので、外交には向いているという自信のようなものがあった。三十八という年令は、女性相手のこの種のセールスマンとしてはいくらかトウのたった感じだが、若い時バーのマネージャーをしたこともあり、蝶ネクタイのよく似合うくらか軽薄な感じのする二枚目型で、じっさいの年令よりはいくつか若くみえた。その織田が、上体を反らせ尻をつきだすような気取った恰好で、訪問先でのお辞儀の練習をしているのを見ていると、久子は、

——この人、浮かれている。

と思った。

その化粧品会社では、男の外交員のほうが客のうけはいいらしい。女の客が多いという単純で明快で、そうして動物的な組合せかもしれなかった。男の外交員が、おとくいの二号さんのところなぞで、

「淋しいから、もっとあそんでいって……」

と誘われたりすることがあるという話を、久子はどこかで耳にしたことがある。そしてある程度は、そうがままもきいてやらなければ、商売にもさしつかえるらしい。密室の中の男と女がたんなる客と外交員といった立場から、なにかのはずみに踏みはずしかねないことは、容易に想像がつく。あるいは、織田はそんな期待で浮きうきしているのかも知れない。

——夫の浮気か。

久子はふと、こんな仕事以外の面で客のわることが起るかもしれない、と思った自分の予感は、あるいはそのことかもしれない、と思った。

——いいや、そんなことじゃない。

そのとき突然、心の中のどこかで烈しく否定する声があった。狂女が髪をふりみだしてかぶりをふるような、はげしい否定のしかただった。

——浮気とか、そんなものじゃない。もっと悪いことなのだ。

それはなんだろう。それは久子の予感の中では、漠然とはしているが凶と断定できるようなった。だが、具体的にはそれがどういう形をとってあらわれてくるかはわからない。

ある日のことである。織田のいないあいだ

に、ほんのちょっとしたことではあるが、不思議なことが起った。織田と彼女が三年まえに結婚したとき、したしい知人から贈ってもらった鳩時計がある。その鳩時計には、金の鋳鉄の分銅があり、時をきざむにつれてふたつの分銅はならんだまますこしずつ下垂し、しまいには畳につくほどになる。それが畳の上に横倒しになり、分銅である役割をやめた時は、時計の針が止まるときなのだ。一つは針を動かす分銅であり、ひとつは点鐘がわりに時間の数だけ鳩を啼かすための分銅だった。それが畳のところまで下りてくる前に、一日に一回は鎖をまきあげ、分銅をいちばん上の位置になおしておかなければならない。しかし、うっかりして巻きあげるのを忘れていたために分銅は下りきって畳の上に横倒しになり、時計はその機能をとめていることがあった。ながい時間の外出から帰ってきた時など、久子はどうかすると、そうした失敗をすることがあった。啼く鳩時計、そして動く鳩時計は、ふだんいきものの印象だった。それだけに、それが止った部屋の中は、なにか一切の動くものが停止し死滅した不気味な静寂が支配していた。久子はあわてて分銅をまきあげ、振子を動かして、死せる機能をよみがえらせるのだった。しかし、そうした失敗のほかは、分銅鳩時計はほとんど三年のあいだ、休みなく時をきざみつづけてきたのである。



それが、アパートに越して一月ほどたった、ある日のこと、ふと止っていたのである。

はじめ、へんになじめない真空のような静けさを感じ、つづいて久子は、

——ははあ、時計が止ったな。

と気がついた。分銅が下りきって畳につかえたにちがいないのだ。

時計をふりかえった久子はゾーッとした。分銅は二つとも、まだ畳まで一メートル以上を残したまま中段にぴたりと静止しているのだ。ふたつの黒いのだ。時計は死んでいたのようだった。分銅は縊られて死んだ人のように彼の顔いっぱいにひろがりかけているのだ。

久子は反射的に、織田の姿が顔を出す瞬間にそなえてニコやかな笑いの前兆が、さざなみのようにひろがりかけているのだ。

向うむきになっているにもかかわらずドアがひらき、その家の者の不吉な影をみていたのだ。久子には不思議とハッキリ見えるのだった。その向うには厚い一枚のドアがあった。

そのドアは、いましも魔性のものにてひらかれようとしているか、ないしはいくらかひらきかけているところだった。そのドアはその内側からいまにもあらわれようとするる誰かの顔（それはまちがいなく女だという予感が、久子にはあった）に対する想像力をたい場所を占めたまま、時間と共にますます尖鋭の度を加えてゆくのだった。夕方、織田がいつもと変りない様子で帰ってきたとき、やっとその緊張はほぐれたのだったが……

その日から久子の心には額縁にはめられた「セールスマンの訪問」

とでも題したい図柄であり、ある動きがはじめ、玄関の呼鈴を押し、玄関の戸が内側からひらいて誰かが顔を出すのを待っている、その一瞬の間をとらえたものだった。

織田は化粧品のつまったケースを下げ、後姿の全身にちょっと気どった表情をみせながら、心もち小首をかしげるようにして、ちいさなポーチのところに立っている。

向うむきになっているにもかかわらずドアがひらき、その家の者が顔を出す瞬間にそなえてニコやかな笑いの前兆が、さざなみのようにひろがりかけているのだ。ふたつの黒いのだ。時計は死んでいたのようだった。

久子は反射的に、織田の姿が顔を出す瞬間にそなえてニコやかな笑いの前兆が、さざなみのようにひろがりかけているのだ。

向うむきになっているにもかかわらずドアがひらき、その家の者の不吉な影をみていたのだ。久子には不思議とハッキリ見えるのだった。その向うには厚い一枚のドアがあった。

そのドアは、いましも魔性のものにてひらかれようとしているか、ないしはいくらかひらきかけているところだった。そのドアはその内側からいまにもあらわれようとするる誰かの顔（それはまちがいなく女だという予感が、久子にはあった）に対する想像力をたい場所を占めたまま、時間と共にますます尖鋭の度を加えてゆくのだった。夕方、織田がいつもと変りない様子で帰ってきたとき、やっとその緊張はほぐれたのだったが……

その日から久子の心には額縁にはめられた「セールスマンの訪問」

とでも題したい図柄であり、ある動きがはじめ、玄関の呼鈴を押し、玄関の戸が内側からひらいて誰かが顔を出すのを待っている、その一瞬の間をとらえたものだった。

織田は化粧品のつまったケースを下げ、後姿の全身にちょっと気どった表情をみせながら、心もち小首をかしげるようにして、ちいさなポーチのところに立っている。

向うむきになっているにもかかわらずドアがひらき、その家の者が顔を出す瞬間にそなえてニコやかな笑いの前兆が、さざなみのようにひろがりかけているのだ。ふたつの黒いのだ。時計は死んでいたのようだった。

久子は反射的に、織田の姿が顔を出す瞬間にそなえてニコやかな笑いの前兆が、さざなみのようにひろがりかけているのだ。

向うむきになっているにもかかわらずドアがひらき、その家の者の不吉な影をみていたのだ。久子には不思議とハッキリ見えるのだった。その向うには厚い一枚のドアがあった。

そのドアは、いましも魔性のものにてひらかれようとしているか、ないしはいくらかひらきかけているところだった。そのドアはその内側からいまにもあらわれようとするる誰かの顔（それはまちがいなく女だという予感が、久子にはあった）に対する想像力をたい場所を占めたまま、時間と共にますます尖鋭の度を加えてゆくのだった。夕方、織田がいつもと変りない様子で帰ってきたとき、やっとその緊張はほぐれたのだったが……

その日から久子の心には額縁にはめられた「セールスマンの訪問」

とでも題したい図柄であり、ある動きがはじまろうとする一瞬をこれからはじまろうたたかいと緊張をあらわしたものといってもよかった。それにもたいを支配しているであり、画面のすみがたい、胸がムカムカするようにおぞましい不吉な危機感のようなものが、濃厚にみなぎっているのだった。

久子は夫の後姿に魅入られようとするた。その魔性のものたぶんドアの向うかている顔にちがいなのだが（ドアはまだひらかれておらず、しの片リンさえみとめられないにもかかわらず久子は白っぽいフヤにチラと見えたようキリしないもどかしらきかかっている不ぶん鳩時計のハトがとび出して啼く時にひくあの小さなドアがまさにひらこうとしてジジーッ、とゼンマイのほぐれる音を立てている、あの瞬間の連想らしかったのである）

久子の頭の中にあるその絵は、なにかの前

兆であるように久子には思われた。しかしなにごとも起らず、時はすぎていったのである。

なにごとも起らなかったが、織田の仕事のほうも、さっぱりはかばかしくいかないのだった。そして、この三十八になるヤサ形の伊達男が十キロあまりの商品範の重さをようやくなげきはじめるころ、久子は二人目の子供が胎内に宿ったことを知ったのである。

4

ある日。織田は新宿から私鉄にゆられ効外へ向っていた。その私鉄の沿線に一人の見込客がある。今日こそは行ってものにしてやろうと思っていたが、気持はいっこうにはずんでこなかった。こんな、なま煮えのような気分でのりこんでも、売りつけに成功するのはむずかしいと思いながらも、織田はほとんど惰性的な気分で、私鉄にのり、効外へと自分のからだを運びつつあるのだった。

世間はそろそろ花見だというのに、彼の気もちはひどく暗い。会社に納入すべき金もいくらかつかいこんでいた。月末にはそれも清算しなければならないし友人から返済をせまられている借金もあった。それにアパートの室代や、洋服の月賦代や質屋の利息などをひっくるめた金額は、考えてみるのもいやになるほど嵩んでいた。織田の心は、いまそうした負担に重く押しつぶされていた。

「あいつが方角がよくないとかやってゆけそうだそのよくないことが、俺たち夫婦を見舞っているわけだろうか」

弱気になっているので、つい、そんなこともかんがえられた。

もっとも彼も、ツイ二ケ月くらいまえには仕事の調子がよくて、次から次へと新客もつき、

「このぶんなら、なんとかやってゆけそうだな」

気分的にもはずみがついていた。それが、ちかごろになってガックリいってしまったのである。外交員のスランプは半年にいっぺんのわりあいでやってくるといわれている。いま彼はその調子の波の谷底におちこんでいるのかもしれなかった。

私鉄のある駅を発車したとたん、彼は、そうだ。目的を変更して次の駅で下りよう。と思った。彼にとってはいいおとくいである、ある二号さんのことを思い出したのである。

――あてのない見込客を口説くより、あの二号さんに何か売りつけてやろう。そのほうが確率が高い。

そう思うと彼の顔はみるみるあかるくなった。

その二号さんは、ある静かなアパートで、豊かそうに一人でくらしていた。なんでも買ってくれた。

「これはいいですよ。肌に照りが出るしシワを予防する。じっさい目に見えるほどの効果があるんだから一度つかった人はもうびっく

りしてゼッタイにはなさない」

そんなすすめ方をするとコロリと落ちた。

すでに三十をすぎている彼女は皮膚や容貌のおとろえには敏感になっており、それを防げるという言葉には抵抗できないのだ。

「あたしって、まったく化粧品に弱いわね。こんなに買っちゃって、今月はゴハンもたべられないわ」

いいながらも、けっこうニコニコしていた。

もっとも、ときには

「欲しいんだけど、いまちょっと都合がわるいのよ」

ということもある。

「いいですよ、ある時で……会社のほうは立替えておきますから」

「そう。じゃこのつぎまで貸しといてね」

そんな調子で、貸売りになることもちょいちょいあった。ゼッタイにとりはぐれはなかった。借りを返す時は必ずなにか新しいものを別に買ったし、

「あんたお腹すいてるんでしょ。お寿司がいい？」

といった調子で、なにかとってくれたりする。いまも三千円ほどの貸しになっていたが これは織田にとってたのしい債権だった。貸しのあるあいだは縁はつながっているから、るやかな気持で、多少のなれなれしさをこめて二号さんの部屋のドアをノックしていた。

答えがなかった。

——あけてみてやれ。

と思った。ドアにはいくらかガタがあって鍵がかかっていないことは、ちょっとさわっただけでわかる。留守ではないのだ。ひる寝でもしているのかしれない。

彼はドアの把手（ノッブ）をにぎるとそれをひねり、用心深くおした。抵抗はなかった。もしそのとき、妻の久子がその心耳をすまし、彼の上に思いをはせていたとしたら、そこになにかの兆候か胸さわぎを感じていたかしれない。

あの不吉な一枚の絵にあらわされた情景と酷似した状況が、いまひらけようとしていたのである。

織田はそのとき運命の門に立っていたのであり、彼自身そのことに気がつきはしなかった。ドアはひらかれた。





「こんちわァ」

といいながら室内に顔をつんこんだ彼は、そこで二号さんが殺されているのを見たのである。

彼女は二間つづきのその奥の部屋でベッドからズリ落ちたような位置で死んでおり、その首には彼女自身のしめていたらしい赤いしごきが固くまきつけられていた。凌辱と、そして抵抗のあとが歴然としていた。

5

彼が室内に一歩ふみこみ、殺人の現場をそれと確認するまでには、二十秒ほどの時間が必要だったようである。いきなり目の前にくりひろげられた異常な場面に、一瞬、判断力がマヒしたような状態があったのだ。

恐怖や、驚愕がないわけではなかった。じじつ彼は、それとさとった瞬間、十キロ以上もある重い鞄を提げたまま、一尺ばかりもとびあがりそうになったのである。

そのショックの一瞬がすぎると、べんに白と意識のさえかえった、しんとしたような状態が彼をおとずれた。空気が稀薄に感じられた。彼は有毒で危険な圏内に足を踏みこみでもするように、用心ぶかく、一歩、一歩死体へちかづいた。

ほんとを言えば、彼は発見した瞬間にワッとさけんで廊下を駈けだしているべきだったかもしれない。そうすれば、運命はまたちがった展開をしていたのかもしれないのだが……

それをさせず、彼の足を逆に室内へと誘いこんだのは、たんに怖いもの見たさなんかともちがう、なんだか変てこな牽引力のようなものだったのである。

彼は一メートルほどおいて、死体のよく見える位置に接近すると、もう呼吸をしなくなっているスポンサーの顔を眺めた。それから

「おくさん」

と呼んでみた。むろん、死体が返事をする気づかいはない。彼はただ、呼んでみただけなのだ。すると、ひっつきそうにカラカラに乾いたノドから絞りだされる自分の声が、まるで他人の声のようにカスレていることに気がつき、そのことによってあたらしい恐怖をかきたてられた。

――オレはたち去るべきだ。

と彼は思った。警察に事件を知らせるために……。

彼は踵を返して部屋の入口に向ってあるきだしたが、そのとき不意に、彼が死んだこの女に対してもっている三千円の債権が、まったく無効になったことに気がついた。そしてそのことをもう一度たしかめてみるように死体のほうをふりかえってみた。そのとき、彼の視線は、

「オヤ？」

というように、床の一点にクギづけになったのである。

いままでは死体にばかり気をとられて気がつかなかったが、ベッドの枕元に置いてあるちいさなサイド・テーブルの下のところに、二つに折りたたんだ青い四角い紙の束が落ちている。それが千円札であることは、たしかめて見るまでもなかった。厚味からいって、三万くらいだろう。そして、その青い誘惑的な、しっとりとした色彩と形を目にとめた瞬間、織田の胸は烈しく早鐘をつきはじめていたのである。

サイド・テーブルの引出しが半びらきになっているところを見ると、その紙幣の束はそこから落ちたものにちがいない。おそらく賊の仕業にちがいなかった。金はもっとたくさんあって、賊はそれを盗むことに気をとられ、別な紙幣の束がこぼれ落ちたことに気がつかず、そのまま遺留していったにちがいないのだ。

が、そのときの織田には、そうした前後の事情を筋道だてて判断するだけのゆとりがあったわけではない。わなな手でその死者のおき、戸外の足音に耳をすませたりしている。

「どうしたのよ。あなた」

久子がきくと、

「いや、なんでもないんだ。寝苦しいんだよ。ところでいま何時だ」

その目が真ッ赤に充血している。

その晩彼はねむれないまま、しびれたように春の夕方の空が、目の上いっぱいにひろがっているのを見たとき、はじめて彼は自分が大それたことをやってのけたことに気がつきガタガタふるえだしたのだった。

6

その夜彼がアパートに帰ったのは十一時すぎだった。強いアルコールの匂いをプンプンさせていたが、酔っているようではなかった。数時間のあいだにゲッソリ頬の肉が落ちていた。久子はそんな陰惨な夫の様子をみるのは、結婚してはじめてだった。帰ってくるなり、織田は、

「つかれた。ぐあいが悪いんだ」

というなり、久子に夜具を敷かせて寝てしまった。しかし、わてしばらくしたかと思うと、夜具をはねのけるようにしてガバとはねる。

「どうしたのよ。あなた」

久子がきくと、

「いや、なんでもないんだ。寝苦しいんだよ。ところでいま何時だ」

その目が真ッ赤に充血している。

その晩彼はねむれないまま、しびれたよう

な頭でもう何十ぺん何百ぺんくりかえしたかしれない同じような考えのまわりをどうどうめぐりしていた。

ある瞬間には彼は自分が子供だってあえてやらないめちゃくちゃな自殺行為をやってのけたという絶望的な思いにおちこんだかと思うと、次の瞬間には、その絶望の中に、一条の救いの光がさしこんだように思うのだった。

――あんがい、盲点なのかも知れないな。

彼は思った。殺人という大きな事件のかげにかくれて、彼のちっぽけな窃盗行為などうやむやにはうむられてしまうかもしれないのだ。もし犯人が捕われて殺人行為に附随して金品の盗難が追及されることがあるにしろ、犯人が遺留したあの札束のことなど、誰も知っている者はいないのだ。問題は自分のアパートへの出入が、誰かに見られていなかったか、だ。

織田がそのアパートを訪れたのは、白昼のうしみつ時とでもいいたい、ひっそりした無人のひとときだった。入る時も出る時も、彼は誰にも会っていない。ただ、彼の気がつかない眼が、どこかから彼を見ていたということになればべつだが……それにしても、このところ外交員などの集中攻撃を受けているあの種のアパートのことだから、彼のほかに二人や三人は、前後してあのアパートを訪れたものがあったにちがいない。そうなればそれだけ彼自身に向けられる注意も分散されるはずである。

彼が家に帰るまで外で時間を費していたあいだ、ニュースなどで放送された様子もなかったらしいところを見ると、事件はまだ発見されず、それらの事実が発見され、それらの事実を綜合して、当局はおぼろげながら犯人の推定をされていたわけではない。しかし現場検証の結果、織田などの気のつかなかったくつかの事実が発見されたにちがいない。そうなればそれだけ彼自身に向けられる注意も分散されるはずである。

アパートの殺人事件はそのあくる日の午前に発見され、夕刊に報道された。そして、その新聞記事の内容は、織田を安心させるにたるだけのものを持っていた。犯人はハッキリの割り出されていたわけではない。しかし現場検証の結果、織田などの気のつかなかったくつかの事実が発見され、それらの事実を綜合して、当局はおぼろげながら犯人の推定をつけたらしかった。それは殺された女よりは年下の若い男であり、痴情、怨限、そして金銭関係もからんだ凶行であるという推定であり、捜査もその線にそってすすめられるらしい。織田の犯したちいさな悪事は完全に見落されているのだった。

織田は、現場を検証し、若干の背後関係をたぐっただけでそこまで推定をつけた当局の神のような眼光にいまさらのように戦慄したが、そのするどい眼光をさえかわし得たことにたいして、のけぞるようなよろこびを感じた。それはあの犯行いらい、はじめて織田が

「ぎゃっ」

怪鳥のようなさけび声をあげ、すさまじいきおいでハネおきた。彼の寝顔に覆いかぶさるようにちかぢかと顔をよせ、心の奥底ま

生きている人間らしくのびやかに呼吸し得た一瞬だった。

しかし、まだなりゆきはどう進展するかわからないのだ。犯人がとらわれ、すべてが最終的に決定するまで安心はできない。捜査のアミの目からこぼれおちた彼の犯行の事実がそのまま永久に抹殺されてしまう保証はないのだ。

彼は妻の久子にさえ、すべて用心深くふるまった。むろん、いまわしい経路を経て入手したあの金を、すぐ妻のまえに出すようなことはしなかった。怪しまれるにきまっているのだ。それはしかるべき機会に、しかるべき口実の下に出されなければならない。たとえば、大口の団体的な売り込みに成功したとか出張のための旅費である。といった名目の下に……それでなくてさえ、妻は、何かを疑っているのだ。あの晩、彼の寝顔をのぞきこんでいた、あの心も凍るような妻の目の色を、彼はわすれることができないのだった。

やがて花が散り、そしていつか初夏になっていた。久子はすでに臨月だった。織田はあの金を、一部分は小出しにしてつかったり妻に渡したりしていたが、その大部分は妻の出産のためにひそかに貯えていた。彼は、そうすると、地方出張に旅だった。まだ出産の予定日には間があり、彼はそれ以前に帰京するはずだった。あらかじめ金を渡しておいたのは妻を安らかな気持で出産の準備に向わせようとする彼の思いやりだったのだ。

久子は、織田の留守中に産気づいて入院した。予定より二十日早かった。旅先を移動している織田には連絡する方法もない。病院は予約してあったので、その点は不都合なかった。産気づくと同時に久子はアパートの管理人に連絡し、車を呼んでもらって入院した。その間の介添には管理人の妻君があたった。

分娩はかならずしも順調ではなかった。前駆的な陣痛、それから分娩がはじまり児頭がのぞいてからすっかり娩出が終るまで、産婦は体力の極限をしぼり、分娩が終ると同時にほとんど半失神状態だった。

娩出を終った胎児をめぐって、産室の人びとのあいだに異帯なあわただしさがひろがるのを、久子はぼんやり感じていた。

それから

「どうしたのかしら。泣かないようだけど……」

ある日、彼は突然、ながいあいだ彼を心理的に苦しめていた恐怖から解放された。例の殺人事件の犯人とおぼしい男が、彼の郷里にちかい千葉県の勝浦海岸で服毒自殺をとげ、死体となって発見されたのである。当局はその自殺者を例の事件の犯人として断定しており、新聞は事件の落着を報じていたのである。彼はその記事の出ているインクの香もあらしい夕刊を、巨人阪神の試合に湧いている後楽園のスタンドで読んだのだった。文字通り、穴のあくほどむさぼり読んだ。周囲の騒音も、一瞬シンとしてきこえなくなるほど一字一字に神経を集中した。

「救われた！」

と思った時、球場には嵐のような夏空を背景に長き起っていた。ハッとわれにかえった織田が顔をあげると、かがやくようなの大飛球が、大嶋のはなったホームラン性の弧線を描いてどんどん伸びてゆくところだった。目からゴミがとれたようとはこのことだろう。彼は気も心もはれはれとして、その球の行方を追ったのである。それから二三日して、彼は出産の費用として妻に二万円を渡すと……」

と、力のない声でたずねた。産室の人たちは彼女の問いに当惑した。産児は娩出とほとんど同時に心臓の鼓動をとめていたのである。

そのノド首に、まるで索溝のような異様な痕跡があるのを、人たちは凝然として見まもったのである。

久子は何事かが産児の上に起ったのを直感していた。

人びとがつくろえばつくろうほどその直感は冴えた。

そしてほとんど本能的に彼女は事態を了解したのである。

彼女はそこで気を失い、しばらくしておぼろに意識をとりもどした。ひとつのボヤけたりんかくが、彼女の顔を上からのぞきこんでいた。

白い帽子をかぶっているのがわかるだけで、顔はハッキリしない。視点がさだまりそうになってはまたボヤケ、いくたびかそれをくりかえす。

看護婦にはちがいないのだが、久子はその輪廓のハッキリしない人物に、へんに抵抗を感じた。

そして何度目かに、異常な努力のすえにやっと、その顔を見さだめたとき、久子の口から、

「ぎゃっ」

というようなさけび声がもれ、それから、はっきり狂ったことを物語っているゾッとするような調子で、けたたましく笑いはじめた。

彼女が見たのは、あの顔——

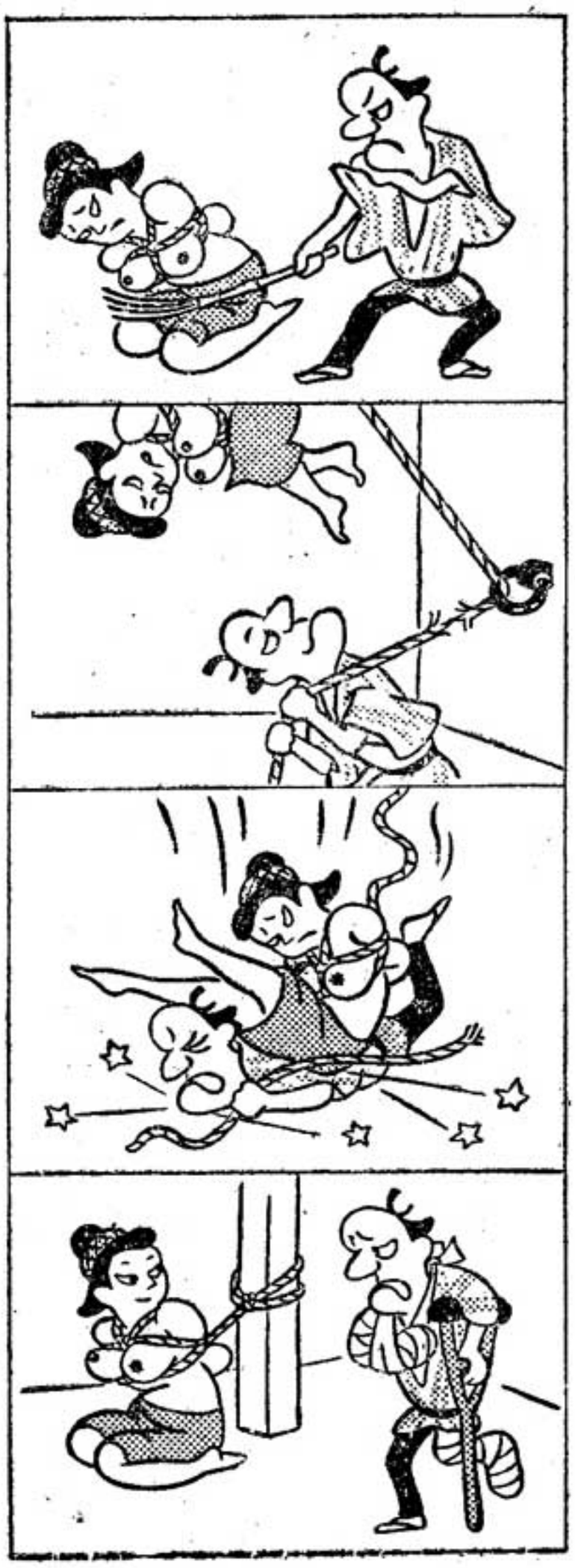
見よう見ようとして見ることのできなかったあの絵の中の、ドアの向うに隠れていた顔だったのである。

そのころ旅から帰り、管理人の口から久子の入院を知った織田は、これから病院に出かけるところだった。

ひょいと見ると、鳩時計の鎖がのび切っている分銅はグタリと畳の上に横倒しになっている。時計の針は八時間くらい前のところで止っていた。

彼はなんとなくギョッとしてその針を見つめ、それから陰気な音を立てて鎖をまきあげはじめた。

—終!!



うら八捕物帖・拷問はしてみたが……

左次朗・画

裏窓

既刊号目次

★お買い洩れのないよう月ぎめで御予約ください。
★三カ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方には送料は，当社で負担いたします。
★三冊以上御注文の際も，送料は本社で負担いたします。
★御送金は振替御利用が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302
株式会社 久保書店
振替口座・東京 10756番

34年（六月号）伝奇秘宝録・特集

○グラビア・黒と白の幻想……藤沢 修
○絵物語・絢爛たる舞踏……画・山田 彬弘
伝奇紅蓮党……矢桐 重八
阿修羅秘帳……中林 節三
夜叉姫絵図……小田桐 爽
妖異女宝島……葉田 光
魔童子秘文……島本 春雄
肌絵双紙……藤見 郁
絵図面地獄……高月 大三
髪一重……志摩 不二
絵物語・女が死んでる……秋吉 巒
〃 ・裸身菩薩……中島 喜美
散華白虎隊……中康 弘通
妄執黄金秘抄……鈴木 和夫
怪異愛霊教（完結篇）……飯田 豊吉
まぼろし侍・黄金女仏……黒木 忍
白き神の穴……南村 蘭
巷説人肌呪縛……玉木 重信（定価百二十円・送料十二円）

34年（五月号）女性解放悲史・特集

○グラビア・女体とロープ……藤沢 修
○絵物語・太腿に眼をつけろ……（文・豊田一狼／画・古正英生）
○絵物語・刺青小町……中島 喜美
砂漠の女囚……南村 蘭
繰り子地獄……矢桐 重八
からゆき悲歌……葉田 光
緋縮緬伝法……島本 春雄
紅怨無限……橋爪 彦七
海の魔王と女たち……小田桐 爽
女体と圧制……鈴木 和夫
美女蒲鉾……明石 汐子
血（けつよう）妖……溝呂木寂子
連載・怪異愛霊教（五）……飯田 豊吉
巷説緋扱帯呪文……高月 大三
まぼろし侍・柔肌灯籠……黒木 忍
髪行灯（二）……志摩 不二
未整理棚の中から……偏 執子
狂（きょうむ）夢……京極 美岐
肉（にくかい）塊……奈良原鉄夫（定価百二十円・送料十二円）

34年（四月号）淫祠邪教特集

○グラビア・ヌード傑作選……藤沢 修
○絵物語・消えた刺青裸女……画・山田 彬弘
○〃 ・裸形弁天……画と文・中島 喜美
撥り観音……円城寺 達
燃える女窟……溝呂木寂子
連載・怪異愛霊教（四）……飯田 豊吉
まぼろし侍・壁虎呪文……黒木 忍
髪行燈……志摩 不二
恩讐地獄ぐるま……中林 節三
女神の壷……南村 蘭
女体苦患教……瀬谷 伴八
腰紐呪法……島本 春雄
馬のり仙女……藤見 郁
女色金猫教……矢桐 重八
八坂の妖巫……橋爪 彦七
愛神の生贄……北羽 奥男
黒髪呪縛……小田桐 爽
彼女のミサ……黒羽 新
邪宗淫寺抄……鈴木 和夫
あの場面この女優……芝 利泰
淫祠邪教秘話……峠 浩介（定価百二十円・送料十二円）

34年（三月号）凄艶毒婦妖婦特集

○グラビア・牛の骨と女……藤沢 修
○絵物語・剝製幻想曲……画・古正 英生
○絵物語・妖艶娘縛絵……中島 喜美
責め絵芸者……矢桐 重八
キスで血を拭け……杉本 駿
獄門首お銀……小田桐 爽
姐妃のお百……橋爪 彦七
閻魔のお秀……中林 節三
毒蛇のお美津……葉田 光
地獄沼の妖女……藤見 郁
罪だぜ警部……橘 新太郎

女体と蠅……黒羽　新
連載・怪異愛霊教(三)……飯田　豊吉
まぼろし侍・人肌将棋……黒木　忍
開化女囚吟味……鈴木　和夫
抱き寝如来……円城寺　達
泣き方を教えて……鳴滝　三郎
銃口は笑った……東　零児
皿を割る女……伊達　徹
つばくろ道中……明石　汐子
女間諜散華……藤山　秀緒
（定価百二十円・送料十二円）
34年（二月特大号）変幻俠盗義賊特集号
○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
○絵物語・誘拐に気をつけろ…画・古正英生
○絵物語・絖肌地獄……画と文・中島喜美
○絵物語・蛇夜庵の女……画と文・歌川大雅
魔女の神酒……南村　蘭
湯文字盗賊……島本　春雄
俺は義賊だ……小田桐　爽
幽霊小判……中林　節三
山荘のヘリオトロープ……黒羽　新
賄賂裸人形……葉田　光
盗っ人傀儡師……橋爪　彦七
女に瓶はいらない……宇治川　龍
変化中条流……杉本　駿
お龍月夜がさ……藤見　郁
讐怨私刑抄(二)……鈴木　和夫
骨に憑かれた女……溝呂木寂子
肌責め稲荷……円城寺　達
信長奇矯録……志摩　不二
連載・怪異愛霊教(二)……飯田　豊吉
まぼろし侍・生首往生……黒木　忍
ガラスの檻……蝦蟇家一美
洞窟の蠟人形……川野　京輔
矢部駿河守端書……明石　汐子
烈しい女……京極　美岐
美胡の足……潮　寛二
泰西俠盗伝……峠　浩介
貞女サートリー……北羽　奥男
（二月特大号、定価百五十円・送料十六円）
34年（新年号）裏窓忠臣蔵特集
○グラビア・手と足の表情……藤沢　修
○絵物語・紅蜘蛛と殺人鬼……山田彬弘・画
○絵物語・悩乱犬小町……中島　喜美
肌絵図悲願……中林　節三
魔俎侍始末記……島本　春雄
引き廻し小町……橋爪　彦七
妄執美女どもえ……小田桐　爽
糊紅地獄……松井　籟子
陰陽元禄侍……夏本圭之助
義央をめぐる人々……小田桐　爽
狂異忠臣蔵……中林　節三
輪廻ごよみ……藤見　郁
お軽と三平……小田桐　爽
遥泉院切腹……夏本圭之助
覗き見平内……中島　喜美
連載・怪異愛霊教(一)……飯田　豊吉
まぼろし侍・蛇神異変……黒木　忍
黒い唇……京極　美岐
海底のハレム……橘　新太郎
肌責め稲荷……円城寺　達
復讐陣……明石　汐子
男装十文字腹……藤山　秀緒
押入れの中のひとりごと……柱　安佳
（定価百二十円・送料十二円）
33年（十二月号）奴隷と圧制特集号
○グラビア・若いヌード……藤沢　修
○絵物語・裸女島崎談……（文・夏本圭之助／画・山田彬弘）
○絵物語・緋縮緬草紙……小田桐　爽
煩悩奴隷宮……画と文・中島　喜美
売春奴隷街……小田桐　爽
贓(じょう)雨……飯田　豊吉
象牙の王座……衿垢　残
虜囚美人伝……橘　新太郎
奴隷船事件……葉田　光
女奴隷の宝石……檀　達二
奈落の檻……藤見　郁
その箱をあけるな……志摩　不二
悲願八丁堀……佐々木　力
伽羅肌ごよみ……橋爪　彦七
白い炎(二)……岩堀　光
外国雑誌に現われた女奴隷……河野　春雄
処女の代償……峠　浩介
隠密覚書・髑髏提灯……蝦蟇家一美
穴倉菩薩……島本　春雄
黄色い毒蛾……円城寺　達
臺地獄……溝呂木寂子
泡(あわ)……川口　直樹
化身歓喜女仏……松井　籟子
梅田　楠雄

奇妙な自殺者達……神戸　裕一

（定価百二十円・送料十二円）

33年（十一月号）陰謀叛乱秘録特集号

○絵物語・廃坑は知っていた……秋吉　巒
○〃　・ドクトル魔美の唇……歌川　大雅
○グラビア・みのりの夜……藤沢　修
無頼征韓党……葉田　光
張孔堂秘策……橋爪　彦七
妄執薬子絵巻……岩堀　光
烏羽玉侍……高木　龍二
泣き叫ぶ人工衛星……海部　陽三
おせいさまと隠亡……加山　和雄
讐怨私刑抄……鈴木　和夫
ナチス秘密諜報部の魔女……樋口　逸馬
淫らな釣師……京極　美岐
紅蓮の女……志摩　不二
白い炎……河野　春雄
隠密覚書・般若狂女……島本　春雄
女漁り旅……野田　淳
ゲヘナの火……麻布　義朗
夜の秘潮……松井　籟子
穴倉菩薩……円城寺　達
臀の下の男の小指……藤見　郁
ザルドの帝王……竹谷　十三
裏窓のぞき（読者評論）……天野　謙

（定価百二十円・送料十二円）

33年（十月号）怪異復讐譚特集

○絵物語・女水芸師……（文・櫛笥重三郎　（画・古正　英生
○絵物語・地獄舟……画と文・中島　喜美
○絵物語・鬼火河岸……画と文・歌川　大雅
○グラビア・光と肌と……撮影・藤沢　修
○絵物語・蝙蝠座の秘密……（文・夏本圭之助　（画・山田　彬弘
連載完結篇・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・死棺小町……島本　春雄
旗本閨房譜……橋爪　彦七
絖肌呪文……高木　龍二
ストック・ホテルの怪……竹谷　十三
お島仇討旅……矢桐　重八
膚塚美女因果……葉田　光
変化若衆……三国沢　隆
妖異死神旗本……小田桐　爽
もうじき命日……宇治川　龍
傲れる女達……股野　元
足にひそむ悪魔……溝呂木寂子
毒蝶の宿……松井　籟子
妖気を誘う家……猿若　屯平
死を売り歩く男……尾島　新
怪異変幻抄……鈴木　和夫

（定価百二十円・送料十二円）

33年（九月号）敗戦落城秘史特集号

○絵物語・夢魔の殺人……画・山田　彬弘
○〃　・雪姫受難……画と文・歌川　大雅
○〃　・女夜叉……画と文・東　桂史
グラビア・夜のえくぼ……撮影・藤沢　修
落城悲愴譜……宇治川　龍
餓鬼供養……伊能　孝
関ケ原悲歌……橋爪　彦七
父恋い娘旅……矢桐　重八
怒りの焔……麻布　義朗
落城洞窟地獄……高木　龍二
疾風馬賊黒鷹団……南村　蘭
琴姫散華……葉田　光
戦国女房……飯田　豊吉
アポロの少年……島本　春雄
切支丹殉教史（下）……鈴木　和夫
変性の破戒尼……梅田　楠雄
髪地獄……志摩　不二
邪宗門小町……小田桐　爽
隠密覚書・妖雲小倉城……島本　春雄
おつや櫛……驚尾　素人
連載妖異・地獄の乳房……飯田　豊吉

（定価百二十円・送料十二円）

33年（八月号）一揆殉難秘史特集号

○口絵・泥人形……画と文・歌川　大雅
グラビア・渇きの夜……カメラ・藤沢　修
天保血笑録……小田桐　爽
美作一揆秘譚……葉田　光
独立黒月党……南村　蘭
一揆に咲く花……曲　二十八
四郎時貞の復活……宇治川　龍
美女門一揆……高木　龍二
黒旋風一揆……小山龍太郎
人魚と短剣……画・沖　渉二
切支丹殉教史……鈴木　和夫
宗吾秘命……橋爪　彦七
お綱草紙……画と文・東　桂史
天正あじさい若衆……大門　正人
黒い陽炎……浜松　武

隠密覚書・幽霊奉行……島本　春雄
佐渡夫人の魅惑……尾嶋　新
蜥(とかげ)蜴……伊能　孝
秘密のよろめき……三国沢　隆
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（七月号）裏窓妖異譚特集号

○口絵・花髑髏……（文・高須信次郎／画・秋吉　巒）
蒼白い手……画・古正　英生
黒猫小町……画と文・歌川　大雅
あおみどろの座……宇治川　龍
七化け死霊……矢桐　重八
怨霊狂い化粧……橋爪　彦七
変化屋敷……高木　龍二
妄(もうきょう)鏡……酒井　皓介
寄生人の恐怖……前田　勇
かっぱ沼の魅惑……伊能　孝
近松門左衛門の血……平林　啓子
天使をいじめるな……佐々木　力
苛責厳刑譚……鈴木　和夫
黒い陽炎……浜松　武
いざりが夜にやってくる……杏笠　一郎
ハラハラ場面オンパレード……高円寺一郎
K君の女装系図……滋賀　雄二
隠密覚書・裸女小判……島本　春雄
お町の罪……小田桐　爽
危険な曲り角……竹谷　十三
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（六月号）女忍者女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄……（文・岩堀　光／画・柴谷宰二郎）
○グラビア・夜の砂時計……構成・喜多　玲子
蛇林洞秘文……南条　慎一
間諜暁に消ゆ……黒羽　新
伝奇怨霊沼……曲　二十八
血染曼陀羅……橋爪　彦七
間諜散華……藤見　郁
雪肌密書……葉田　光
紅紐呪縛……小田桐　爽
傾城忍者……高木　龍二
慶安女忍道……円城寺　達
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・妖異呪文鏡……島本　春雄
極刑秘抄……鈴木　和夫
女館南蛮船……画と文・歌川　大雅
卯の花くだし……大門　正人
蛇使いの王女……藤　琴也
死者は蘇える……矢桐　重八
悪魔は見ていた……神行　京一
（定価百二十円・送料十二円）

33年（五月号）裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記……画・山田　彬弘
○絵物語・血まみれマリー……画・秋吉　巒
グラビア・別離の詩……撮影・藤沢　修
新連載・地獄の乳房……小田桐　爽
情炎千姫絵巻……飯田　豊吉
愛憎血潮傘……松井　籟子
大名屋敷の怪……橋爪　彦七
獄門首供養……宇治川　龍
麝香肌小町……高木　龍二
妖異お告げ狸……矢桐　重八
吸血艶魔伝……青木　憲一
アマゾン流刑奇譚……大町　三郎
女刺青師……歌川　大雅
戦国刑譚……真野　麗
黄色い帯をしめた少女……竹谷　十三
海賊貴族……川野　京輔
拷問と処刑……鈴木　和夫
マダム僕をどうぞ……青葉　繁
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
隠密覚書・美女秘巻……島本　春雄
服地がほしい……岬　洋之助
波に笑う女……柳生　亘
（定価百二十円・送料十二円）

33年（四月号）あぶちっく・さすぺんす特集

○口絵・白獣の市場……画・山田　彬弘
裏窓巷談・島の喜三郎……鳴海　玄吉
東西映画・名場面を探る……高円寺一郎
野鶏復讐奇譚……矢桐　重八
魔の二十分間……横山　正勝
手提金庫の鍵……神行　京一
肌絵を蒐める男……三国沢　隆
桃色の替え玉……大河内常平
冷酷な雌獣……京極　美岐
鼻から上だけを見た……宇治川　龍
情炎千姫絵巻……橋爪　彦七
褥夜草紙……黒木　忍
隠密覚書・闇若衆伝奇……島本　春雄
十寸髪執念……大門　正人

仁侠恋まんじ……槇　剣吾
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
美代吉捕物暦……飯田　豊吉
伝馬町牢屋敷……鈴木　和夫
蛇女郎呪文……滝　一平
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）

33年（三月号）裏窓妖婦伝特集号

○口絵・お百化粧草紙……画・東　啓三郎
十六夜お新……橋爪　彦七
白狐呪伝……青木　憲一
奴の小せん……松井　籟子
刺青百万石……高木　龍二
まぼろしお徳……伊能　孝
松風吟味……宇治川　龍
からす猫お紋……ワトスン・独田
らしゃめん駕籠……岬　津之助
紅筆ざんげ……大宮敬一郎
黒い王座……島本　春雄
地獄部隊……飯田　豊吉
隠密覚書・幽鬼大名……小山龍太郎
仮面の青春……藤川　博
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
白い顔の悪魔……矢桐　重八
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）

33年（二月号）裏窓遊侠伝特集号

○口絵・柔肌偶奇……槇　剣吾作・古正英緒画
英五郎笠松土産……橋爪　彦七
情怨姫買宿……葉田　光
疾風飯岡街道……飯田　豊吉
やわ肌仁義……中村　猟
ちょぼ一お松……宇治川　龍
遊侠剣法……高木　龍二
愛憎メキシコ無宿……大門　正人
人工怪物……ワトスン・独田
仮面の青春……藤川　博
リュカ大王の宝庫……島本　春雄
隠密覚書・どくろ遊女……藤　琴也
白いくちわ……三国沢　隆
狐（きつねび）灯……松井　籟子
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
鏡の中に男がいる……岬　洋之助
死体を遊ぶ男……潮井　拓
地獄の指輪……神行　京一
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）

33年（新年特大号）あぶちっく忠臣蔵特集

○口絵・妖説女忠臣蔵……画・中島　喜美
阿撫的赤穂囃子……法界寺　嘉
美しき奴隷ジェリスナア……海部　陽三
闇に生きる義士……島本　春雄
元禄二筋道……橋爪　彦七
黄泉路の影……宇治川　龍
投燈秘聞……松井　籟子
妖説絵図まんじ……窪村　弘
元禄開妄暦……真野　麗
雪嵐お美代ざんげ……伊能　孝
血まみれ観音像……飯田　豊吉
元禄乱れ小袖……黒木　忍
二人の内蔵助……小山龍太郎
あしのうら源内……岬　洋之助
こんばんわァ……鳴海　玄吉
墓屋敷……神行　京一
狐（きつねび）灯……松井　籟子
白い芋虫……呑笠　一郎
SS秘密クラブ……横山　正克
隠密覚書・逢魔娘……島本　春雄
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
リュカ大王の宝庫……藤　琴也
放浪の記……伏見　和夫
（新年特大号、定価百五十円・送料十二円）

32年（十二月号）あぶちっくすりらあ特集

○色頁・倒錯のよろめき……高月　大三
○口絵・女を探せ……秋吉　懋
○グラビア・罠に陥ちた暴漢……編集部編
隠密覚書・怪異蠟人形……島本　春雄
鱗肌異聞……南屋　彦六
地獄島……美作　賢
雌花のいたずら……京極　美岐
死人駕籠……黒木　忍
盗賊煙丸の最後……藤　琴也
妄（もうしゅう）執……大河内常平
輪（りんね）廻……三谷　春樹
殺（さつい）意……岬　洋之助
夢（むえん）魔……岩堀　光
死体工場……大町　三郎
妖夢呪薬譚……窪村　弘
青い顔の男……飯田　豊吉
歪んだ眼……真野　麗

狐(きつねび)灯……松井　簫子
死を弄ぶ女……花町　右門
紅燈夢……横山　正克
血の蜜月旅行……陶山　密
刺青弁天……中林　節三

（定価百二十円・送料十二円）

32年（十一月号）あぶちっくみすてりい特集

○口絵・廃屋の妖精……秋吉　巒
人差指の妬み……朝山　蜻一
闇(やみ)……大河内常平
悪魔の祈禱師……神行　京一
闖入者……三宅　一郎
地獄から殺しに来る男……真野　麗
金曜日の戦慄……鳥羽　暎子
殺意の黒白……宇治川　龍
窓(まど)……岬　洋之助
傷痕だらけの人魚……松井　簫子
なめくじ幻想曲……坂　みのる
宝石呪縛……黒木　忍
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
隠密覚書・鬼姫変化……島本　春雄
恋人形……鳴海　玄吉
罠にあえぐ女……波戸　容
手裏剣……狭山　温
死体買います……柳生　亘
妖虫……京極　美岐
女炎脂地獄……岩堀　光
コレラの死体……田井　良栄
黒いマニキュアの女……木原　康夫
偶奇談義……川口　映治
放浪の記……伏見　和夫

（十一月号、定価百二十円・送料十二円）

32年（十月特大号）時代伝奇小説特集号

○口絵・妖異羽子板呪法……秋吉　巒
海外グラマア写真集……編集部・編
書き下し長編・猿鍔伝奇……島本　春雄
悲曲梟雄伝……岩堀　光
女犯経秘図……円城寺　達
呪笄文……松井　簫子
隠密覚書・地獄大名……島本　春雄
擂摩灘の裸女……稲垣　史生
紅毛卍秘筐……鳴山　能平
絖肌邪宗門……杉　良平
甲斐の舞面乱……宇治川　龍
耽奇亭秘舌……真野　麗
人肌菩薩……橋爪　彦七
放浪の記……伏見　和夫
悪魔の情婦……杏笠　一郎
女妖の檻……京極　美岐

（十月特大号、定価百二十円・送料十二円）

32年（九月号）耽美小説特集号

○口絵・日光浴……絵口　浩
悪のホザナ……真野　麗
女足の賦……円城寺　達
女犯経秘図……夢野　蓉古
毛……柳生　亘
黄金の処女帯……京極　美岐
チーズ臭い三人の女……岩堀　光
ヒー・イズ・マイ・ギャッグ・マン……花町　右門
虹の雫……鳴山　能平
マヒトの告白……早川小夜子
花吹雪天保女地獄……岬　洋之助
悪魔に呪われた三人の男……須崎　龍平
放浪の記……神行　京一
扉をたたく女……伏見　和夫
隠密覚書・十人小町……広尾麻津夫
ウェストニッパーの枷……島本　春雄
殺された七人の裸女……竹谷　十三
偶奇坊主……北小路一郎
鐘ケ渕因果絵巻……岩堀　光
呪笄文……稲垣　史生

（定価百円・送料八円）

32年（八月号）異色読物特集号

○口絵・裏窓裸天国……松井　簫子
贄の花……村岡　良平
狂恋懲罰監房……竹谷　十三
貞女お道……麻布　義朗
い　ぬ……伏見　和夫
放浪の記……鳴山　能平
夜の緋縮緬……佐々木　力
蝦蟇物語・肉ごたつの群……島本　春雄
隠密覚書・首吊り中蔵……陶山　密
最大の逃亡者……真野　麗
日本ムスメを売買した男……ワトスン・独田
黒髪ざんげ……加藤　晋三
仇情お浜船……夢野　蓉古
道化地獄図絵……大町　三郎
山西の黒い嵐……神行　京一
鼠男と猫女……三宅　一郎
あ(虹)ぶ……稲垣　史生
女形地獄……阿部　佐治
生人形の夢……佐木　勉
吹雪とお花……花町　右門
胡蝶秘文……岩堀　光

（定価百円・送料八円）

○以下売り切れ

殺意の人形

坂田雅治
宮下寿紀・画

死ぬ、死ぬ、わたしは殺される……
でも話せない……このひとつき苦しんだすえ、わたしは殺されるんだわ、わたしの身体のなかに、おそろしい怪物がいる。
部屋がぐるぐるまわっている。白いマスクをした人々がいる。でも誰もたすけてくれない。
わたしの名前、なんだったかしら？
そうだ、アリスよ、デイブの妻だわ。いたい、くるしいの、デイブ、わたし死ぬわ。
みんなが見ている前で殺されるのよ。お医者さまも、看護婦もわからないんだわ……デイブ、わたし、この小さな人殺しに殺されるのよ。
しずかな足音がちかづいてくる。
ずっと遠くで声がする。
「おこさないようにね……」
デイブの匂いがする。パイプとローションの香りがする。アリスには良人が身体をかがめて、のぞきこんでいるのがわかった。
アリスは眼をつぶったまま、
「おきてるのよ」
死にはしなかったわ……
「アリス」
デイブはそっと妻の手をにぎった。
人殺しを見たいんでしょ、デイブ……いまわたしのよこにいる小さな人殺しを……。
アリスは眼をひらき、弱々しく手をうごかしてから殺してごらん……わたし、死んだりするものですか！　死んであげるものか！
アリスは絶叫した。

恐怖異色感覚・特集



わたしは殺される！　でも，だれも犯人を疑おうとはしないのだ！

して、小さな掛けぶとんをひっぱった。
小さな人殺しは、まっかな顔をしてディブを見あげた。その眼はふかく、かがやいていた。
「やあ！　なんてかわいい坊やなんだ！」

ディブが妻と赤ん坊をつれてかえろうと病院にやってくると、事務室に案内した。
かまえていて、ジェファーズ医師がまちの子供は欲しくて作った子供なのかい？」
「奥さんは……赤ちゃんをにくんでいるよ。ディブ」
「なんですって！」
「このあいだ君には言わなかったが、奥さんは産室で妙なことを言ったんだ……ディブ、
「ええ、僕たち二人の計画どおりでした」
「ふーん。そりゃちっと面倒だな。もし、作りたくなかった子供だとすれば、若い女のひとにありがちの、母親になったことをいやがる、という簡単なケースというわけだが。これは奥さんの場合にはあてはまらない……」
ジェファーズ医師は葉巻を口からはなしてあごをなでながら話をつづけた。
「すると、ほかの原因かな。たぶん、なにか奥さんの幼年時代のいやな想い出かなにかが

いま出てきているんだ。それとも出産のとき・の、死の一歩てまえまで行く苦痛を味わわされた母親なら誰でも感じる、一時的な憎悪かもしれないがね。これなら、そのうちになおるだろうが……とにかく奥さんを大事にしてあげてくれたまえ」

春の、あかるい午後の日射しがかがやいていた。自動車は広い並木道をすべって行く。青く澄みきった空。咲きみだれる花。あたたかいそよ風。デイブはたのしくしゃべりつづけた。アリスはやさしく良人にあいづちをうった。だが、赤ん坊をだく手には力がはいっていなかった。まるで陶器の人形でもはこんでいるようだった。

「この子の名前はなんとつけよう?」

アリスは、みどりの樹々をながめていた。

「いい名がみつかるまで待ちましょうよ」

アリスは人ごとのように言った。母親らしさも、なんの関心もなかった。ただ口にだしたというだけだった。

母親にだかれた赤ん坊の顔に、日の光と樹の影が交互にかわっていった。その青い両眼はなにか遠くにあるものを見つめもとめているようだった。

アリスは赤ん坊をちらっとながめた。デイブは妻の身体がこきざみにふるえているのに気がついた。

「寒いのかい、アリス」

「ぞくぞくするの、窓をしめてよ」

デイブは物思いに沈みながら窓をしめた。

デイブは赤ん坊をだいてきて椅子の上においた。

アリスは、自分の生んだ子供にあたえるべき愛情の一かけらもないようにデイブを見た。

「母親というものは、自分の生んだ子供にある程度の興味は持つべきじゃないかな」

アリスはびくっとしてデイブを見た。

「そんなこと言わないで!この子のまえで」

「この子の前でだって? どうかしてるんじゃないかお前……」

彼は急に妻がかわいそうになり、夕食がすむとすぐ赤ん坊を二階の室に連れていった。

アリスは眼をとじて思いに降りてくると、アリスは良人にすがりつくように身体をよせた。

「前は、あなたと私だけだったわ。私たちはお互いを守りあってきたわ。でも赤ちゃんはちがうわ……そのうち私たち赤ちゃんに傷つけられるかもしれないわ」

「傷つけられる? 赤ん坊に?」

デイブは妻をはなしてほほえんだ。だが、アリスの顔はこわばっていた。

「赤ちゃんは良いことも悪いこともわからないのよ」

心の底から笑いだした。赤ん坊がこの部屋からいなくなると、妻はふたたび息を吹きかえし、生を取りもどし、自由の身になったのだ。アリスは小声でとめどもなく話し続けた。

「ねえあなた、いつまでもいつまでもいつものあなたでいてね。頼りにできるのあなただけよ」

「死んだ親爺が言ったよ、子供ができたときのためにしっかりした人間になれよってね」

アリスは疲れたように金髪を良人の肩にもたせかけた。

「ねえ、わたしときどきおもうの……結婚したときのままだったらいいのにって。私たち二人だけで……」

アリスは良人にすがりつくように身体をよせた。

「母親というものは、自分の生んだ子供にあるある程度の興味は持つべきじゃないかな」

アリスはびくっとしてデイブを見た。

「そんなこと言わないで!この子のまえで」

「この子の前でだって? どうかしてるんじゃないかお前……」

彼は急に妻がかわいそうになり、夕食がすむとすぐ赤ん坊を二階の室に連れていった。

アリスは眼をとじて思いに降りてくると、アリスは良人の唇に吸いついてはなれなかった。彼はびっくりし、

「あたりまえじゃないか、そのうちおぼえるよ」

「道徳も良心もないのよ」

アリスは口をとじて、あわててうしろを振りむいた。

「あの音？　何だったんでしょう？」

デイブは部屋を見まわした。

「僕にはなんにも聞こえなかったが……」

アリスは書斎の扉を見つめた。

「あのなかよ」

と彼女はゆっくり言った。

デイブは立ちあがり、部屋を横ぎって歩いて行き、扉をひらいて電気をつけた。

「なんにもいないよ……アリス、お前は疲れているんだ。もう寝ようう」

電気を消して二人は階段をあがって行った。階段のいちばん上でアリスはあやまった。

「ひどいこと言ってごめんなさいね、あなた」

彼女は子供部屋の前に立つと、心をきめかねるようにしばらく立っていた。

そしておずおずと扉をひらいて入っていった。デイブがながめていると、アリスは必要以上に注意ぶかく赤ん坊の寝台にちかづいたが、衝撃をうけたようにぎくんと棒立ちになった。

「あなた！」

デイブが寝台にちかづいてみると、赤ん坊の顔は真赤で湯気をたてていた。小さな桃色の唇は何か言いたそうで、青い眼でデイブを見つめ、小さな両手をふっていた。

「泣いてたんだね、坊や」

「そうかしら？」

あえぐようにアリスはそう言い、寝台の手すりにすがってやっと立っていた。

「泣いたらきこえるはずよ」

「扉がしまっていたから聞えなかったんだ」

「泣いたからあんなにはげしく呼吸しているの？　顔が赤いのもそう？」

「そうだとも。かわいそうに、まっくらなところで、たったひとりでずっと泣いていたんだ。今晩は僕たちの部屋でねかせようよ」

「悪いくせがつくわ……」

デイブが赤ん坊の寝台をのぞきこんでゆくのを、アリスはじっと見つめていた。

彼は、寝台に腰をおろして洋服をぬぎながらふと頭をあげて指をパチンと鳴らした。

「ああ、君に言うのを忘れてた。金曜日にシカゴへ飛ばなくちゃいけないんだ」

「え、そんなにはやく？」

アリスは途方にくれた少女のようだった。

「もう二ヵ月ものばしておいたんだ。もうこれ以上おくらせられないんだよ」

「わたし、ひとりになるのこわいわ」

「金曜までに女中がくるよ。一日じゅう家の中にいてくれるから、君のすることは電話をかけることだけだな。そんなに長い出張じゃないんだから大丈夫だよ」

「でもわたし、おそろしいの。なにがこわいのか自分でもわからないんだけど……わたし気が狂ってるんだわ……」

彼は寝台に横になりアリスは電気を消した。彼は妻が寝台のまわりを歩いてシーツをなおし床に入ってくるのを待った。

「二、三日ならおくらせられるかも……」

「いいえ、いいの。だいじな事だって、わたしにもわかるわ。気をつけるわ、あの子に……」

何を馬鹿なことばかり考えるのだと言おうとする前に、アリスは枕もとの電気をつけた。

「ごらんになって……」
とアリスは指をのばした。
赤ん坊は寝台のなかでぱっちりと眼をひらき、彼のほうをまっすぐ、するどい眼で見つめていた。
電気を消すとアリスは良人にすがりついて身ぶるいした。
「あなたが作ってくれたものをこわがるなんて、良いことじゃないわ……でも、あの子はそこで横になって」アリスの声はしだいに低くなっていった。「私たちが話していることに耳をかたむけているのよ……そして、あなたが行ってしまって、私を殺せるようになるのを待ってるんだわ……それにちがいないわ！」
アリスはむせび泣きはじめた。
「おねがいだからアリス、もう泣きやめてくれ、たのむから」
まっくらな中でアリスは長いあいだ泣き続けた。そのうち彼女はふるえながらもしだいに落ちついてきた。そして鼻息は規則的になってきて眠りについた。
デイブはうとうととした。そして、両のまぶたがものうくくっつき、ふかい眠りの海に引きこまれるそのときに、部屋のなかで何物かがめざめてこちらを意識しているらしい奇妙な小さな音を聞いた。
小さな桃色のやわらかい唇が呼吸する音。
赤ん坊。
そして……眠りに入っていった。
朝の太陽がかがやいた。
デイブは時計を赤ん坊の寝台のうえでぶらぶらと振りうごかしていた。
「わかるかい、坊や、ひかってるだろ、きれいだろ、そうそう、ひかってるだろ」
飛行機はデイブをのせて東に飛んだ。空と雲がどこまでも続いて、シカゴが地平線に姿をあらわした。註文と商談と宴会と電話と会議の洪水がやってきた。だが彼は毎日、アリスと赤ん坊に手紙を出し電報を打った。
六日目が終ろうとする日の夕方、長距離電話がかかってきた。ロスアンジェルスからだった。
「アリスかい？」
「ちがうよデイブ、ジェファーズだよ」
「先生ですって！」
「びっくりしちゃいけないよデイブ。奥さんが病気なんだ。次の飛行機で帰ってきたほうがいいね。肺炎なんだ。できるだけのことはするが、お産してからまだ日がたってないから、力があればいいんだが」
デイブは電話を落した。ホテルの部屋はかすんでくずれて行くようだった。
「アリス」と彼はつぶやいてドアのほうへ歩きだした。
飛行機は西へ飛び、カリフォルニアが現われた。家に帰りついたデイブの眼に、寝台によこたわっているアリスと、窓のそばに立っているジェファーズ医師の姿が、ゆれ動きながら現実の姿になりはじめた。
誰も口をきかなかった。アリスは弱々しくほほえみ、ジェファーズ医師が話しはじめたがデイブの耳にははっきりきこえなかった。
「君の奥さんは、良すぎるぐらいの母親だよ。自分のことより坊やのことのほうを心配するんだよ」
アリスの頬の筋肉がぴくっと動き、たったいま話さなくてはというように話しはじめた。
「坊やは眠ろうとしないのよ。わたし、坊やが病気だと思ったの。あの子はじっと寝台に横になって、わたしをにらみつけてたわ。夜がふけてくると泣き出すの、大きな声なの。

毎晩ずっと泣き続けたのよ。わたし、どうしても黙らすことができなかったわ、わたし眠られなかったの」

ジェファーズ医師はうなずいて、

「つかれきった奥さんは肺炎になった、でも今はサルファ剤のおかげで、もう安心できる状態だよ」

「それで赤ん坊は」

「いつもと同じにほがらかで、ぜんぜん健康そのものだ」

「ありがとうございました先生」

医師は別れを告げて階段をおりて行き、かすかに表の扉があく音がした。

「デイブ……」

アリスはささやきかけた。

「またあの子だったのよ。わたし自分をいつわろうとつとめてみたわ、わたしは馬鹿だって……でもあの子は、わたしが病院から帰ったばかりで身体が弱ってるのを知ってていたのよ。だからあの子は夜じゅうずっと泣いたのよ。そして泣いていないときには静かすぎるのよ。それで、わたしが電気をつけてみると、あの子はじっとわたしをにらみつけているのよ」

デイブはぞっとした。暗やみの中で目をさましている赤ん坊を見たことを思い出した。夜おそく普通の子供なら眠っているときに目をさましているのだ。デイブは頭をふった……気ちがいじみている……

アリスは言葉をつづけた。

「わたし、あの子を殺そうとしたの……あなたが旅行に出て行って、たった一時間たったときに、わたし、あの子の部屋に行って、両手をあの子の頸にかけて、ながいあいだふるえながら立っていたわ……そして、わたし毛布をあの子の顔にかぶせて、顔を下におさえつけて部屋から走って出たの」

デイブは妻の言葉をさえぎろうとした。

「いいえ、終りまで話させて」アリスは壁を見ながら続けた。「わたし、あの子の部屋を出たとき、簡単だわって考えたの……多勢の赤ん坊が毎日窒息して死ぬ、そして誰もわからない……でもあの子は死ななかったわ。わたしが見にゆくと、背中を下にして、生きて笑って、呼吸をしていたわ。それからわたしもうこわくてあの子にさわれなかったの。女中が世話をしたわ。あの子の泣き声がわたしをねかせないで、わたしはとうとう病気になったわ」

デイブは妻の手をにぎった。

「あの子はそこに横になって、わたしを殺す方法を考えているのよ」

アリスは言い終りくずれ伏したようになって眠りこんだ。デイブは長いあいだ妻の上にかがみこんでいた。頭の中が凍りついたようになっていた。

あくる朝しなければいけないことはただ一つだった。デイブはジェファーズ医師をたずねて、あらいざらいしゃべった。

「デイブ、こんなことではゆっくり考えなくちゃあね。母親にとってその子供をにくむということが全く自然なことでありうるんだなんて誰もわからないさ。誰も、愛しあっている者がお互いをにくみあうことはよくあるね。子供たちは母親をきらい……」

「僕は母親をにくんだことはありませんが」

「もちろん、君は認めないさ。誰も、愛している者をにくむのはいやなもんさ。潜在意識の下にかくれているかもしれないよ」

「アリスが坊やをにくむのは自然だといわれるんですか？」

「自然じゃないね。奥さんは脅迫観念にとりつかれているのさ。肺炎にかかったことを赤ん坊のせいにしている……つまり、奥さんは自分のなやんでいることを、いちばん手近にあって癪の種をたたきつけられる物にぶちまけているんだよ。僕らは誰でもやるだろう。椅子につまづくと、自分の馬鹿さ加減を怒らないで椅子を蹴とばす。ゴルフで振りそこなうと、ゴルフのクラブをのろったり芝生に文句を言ったりする。僕が君に教えることのできるのは、前に言ったと同じことだよ。君の愛情を示すんだな。子供は馬鹿みたいなもんでこわがることなんかないってことを教えるきっかけをさがすんだ。そのうちに奥さんは落ちついて子供を愛するようになるよ。もし来月になってもだめなようなら、良い精神病医を教えるよ。さあ、元気を出すんだ」

夏が来た。デイブは妻にやさしくすることを決して忘れなかった。アリスは散歩をするようになり、もうめったに取りみだしたりしなくなった。

ところがある真夜中、急に夏の夜風が吹きはじめ、たくさんのタンバリンを鳴らすように樹々をゆすりはじめると、アリスは目をさまして身体をふるわせながら良人の腕のなかにすがりついた。

「なにか部屋のなかにいるわ、私たちを見つめているのよ……」

デイブは電気をつけた。

「また夢をみたんだね。でも、ながいあいだみなかったものね」

アリスは良人が電気を消すと溜息をつき、デイブは妻をなんとかわいいおかしな生きものだろうと考えながら抱きよせた。

そのとき彼の耳に、寝室の扉がわずかにひらいた音がきこえてきた。

扉のそばには誰もいない……扉がひらく理由はない、風も吹いてはいない。

彼は息を殺して待った、まっくらな部屋のなかで一時間もじっとしていたようだった。

するとずっと遠くのほうで、小さな隕石が暗黒の宇宙の深淵で死んで行くように、赤ん坊が小部屋でかなしそうに泣きはじめた。

真夜中の暗闇のなかで、腕にだいた妻の吐息と、樹の間をまた吹きはじめた風の音にまじって、その泣き声は小さくさびしくひびいていた。

デイブは五十までかぞえたが、泣声はやまなかった。彼はアリスの腕をそっとのけ、寝台からすべり出て、スリッパをはくと、つまさきだって部屋から出た。

彼はうんざりしながら、下におりてあたたかいミルクをこしらえて、と考えた。

とー

暗黒は足元から消えて行った。彼の足はすべって突進した。

無の中にとびこんでいった……

彼は両手を前につきだし、気がくるったようにしがみついた。階段を落ちてゆく身体があやふくとまり、彼はあてもなくのしった。

なにかやわらかい物が足をすべらせたのだ。

それは軽い音をたてて何段か落ちていってとまった。彼の頭は鳴り、心臓は早鐘のように打ち、のどはつまった。

なぜ家のなかのあちこちに物をほりだしておくんだ！　彼はその品物に手をのばした。

彼の両手はこおりつき、ふるえた。

手に持ったのは人形だった。

彼が赤ん坊にと買ってかえった大きな人形だった。

あくる朝、アリスは彼を勤め先まで自動車で送っていった。

彼女は途中で車をとめてデイブに話しかけた。

「わたし、旅行に出たいの。あなたが休暇をとれなかったら、わたしひとりでやらしてね。子供の世話をする人はたのめるわ。わたし、心あたりがあるの……とにかく、わたし逃げ出さないといけないわ。わたし、あんなこと思うの忘れはじめてる、と思ったわ。でもそうじゃなかったの。わたし、どうしてもあの子といっしょに住めないわ。あの子もわたしをにくんでいるような眼つきでわたしを見あげるのよ。わたし、なにかおこる前に逃げだしておきたいのよ」

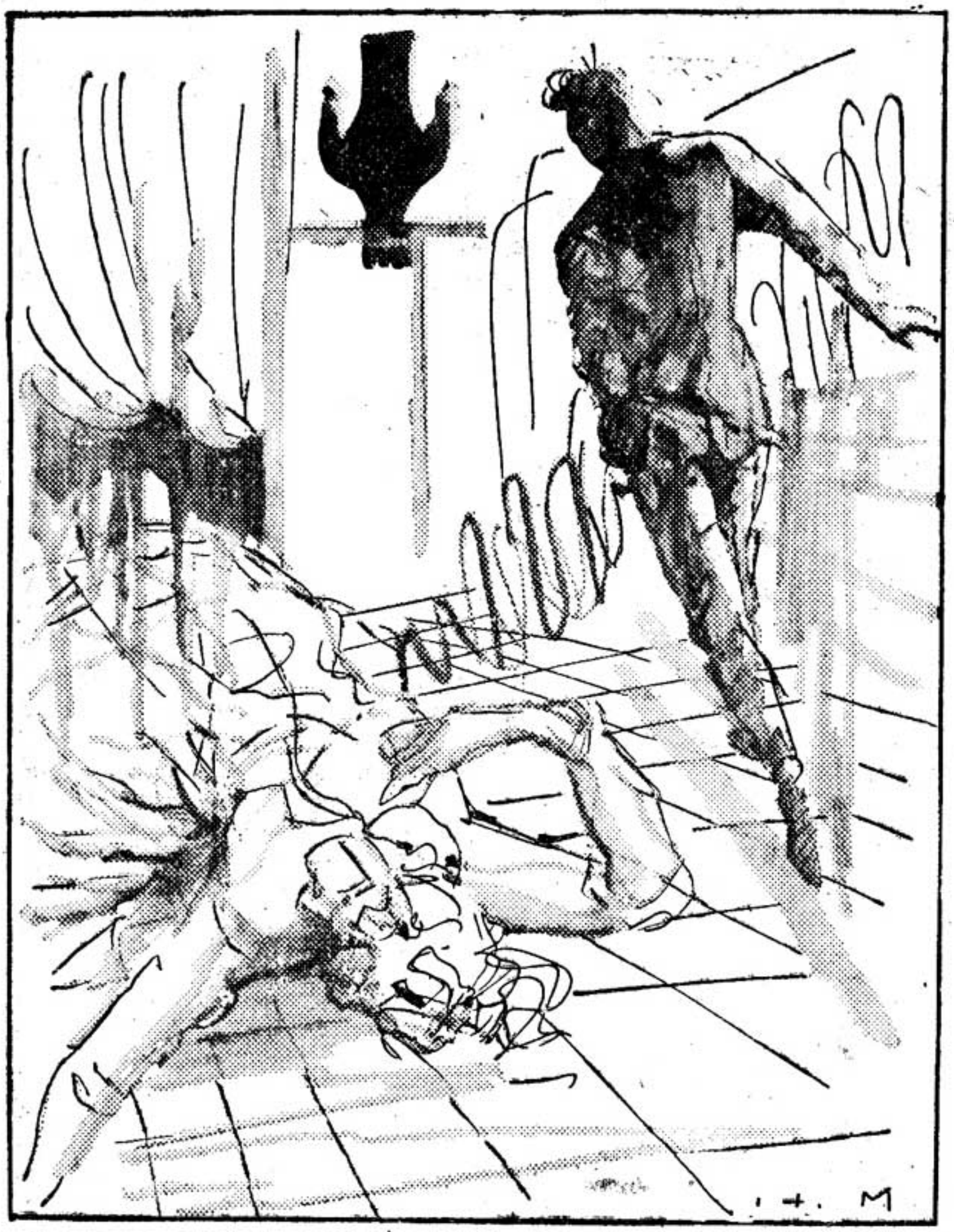
彼は車からおりるとぐるっとまわって、アリスに横へ動くようにと手をふって車にはいってきた。

「良い精神科の医者にかからなくちゃ。そして医者が旅行に出ることをすすめたら行くんだな。運転は僕がするよ」

彼は車をうごかした。

アリスはうなだれていた。涙が出るのをおしころしていた。二人が会社の前へつくとアリスは顔をあげた。

「いいわ、約束するわ。あなたがおっしゃるところなら、誰にでも相談に行くわ」



デイブは曲り角に立って妻が車をはしらせてゆくのを見つめていた。彼女の長い輝く金髪が風になびいていた。その数分後に彼はジェファーズ医師に電話して、信頼できる精神病医に妻を診せる手筈をきめた。

その日いちにち不安だった。彼女の恐怖が彼の心のなかにももぐりこんできたのだ。たしかに赤ん坊はすこし不自然なのだと彼にも信じさせかかったのだ。その日の終りには彼はまったく疲れきっていた。

エレベーターで下へ降りながら彼は考えた。もし僕が階段でつまづいた人形のことをアリスに話したらどうだろう？　アリスはヒステリーになったろう……いや絶対あれには話すまい。ただの偶然だったんだ。

タクシーに乗って家に帰る途中、空には夕焼雲がかがやいていた。家の前で運転手に金をはらうと彼は夕焼の空をながめながらゆっくり家に入っていった。

白い玄関は不自然なほどに静かで、人が住んでいない家のようだった。そうだ今日は土曜で女中がいないのだ、アリスといっしょに外へ何か食べに行かなくては、と思いだしながら彼は扉の鍵をまわした。

大通りで自動車のはしる音がしていた。彼は中にはいると、椅子の上にカバンと帽子をおき、上衣をぬぎかけて頭を上げた。

夕陽が天窓から階段にさしこんでいた。光線が階段にあたったところに、あの人形がひっくりかえっていた。

そしてアリスが階段の下で横になっていた。アリスは青ざめ、変な格好でほそい身体をまげて横たわっていた。

アリスは死んでいた。

彼は両腕に妻の頭をだき、指にさわり、身体をだいた。でも妻は生きかえらなかった。彼は妻の名前を何度もさけんだ、そしてまたなくなったあたたかみが少しでも返ってくるようにと妻をだきしめたが何にもならなかった。

彼は立ちあがった。電話をかけたはずだ。だが何もおぼえていない。彼は二階にいた。子供部屋の扉をあけて中に入りぼんやりと寝台を見つめた。胃の中が苦しかった。

赤ん坊の両眼は閉じていたが、顔は真赤で汗をいっぱいかいており、長いあいだ大きな声で激しく泣いていた様子だった。

「あれは死んだよ」とデイブは赤ん坊に言った。「あれは死んじまったよ」

彼は笑いはじめた。ジェファーズ医師が入ってきて、彼の両頬を何度も何度も叩きつけても彼はまだ笑いつづけた。

「やめろ！　しっかりしろデイブ」

「階段から落ちたんです、人形にひっかかって……この前の夜は僕でした」

医者はデイブをゆすぶった。

「先生、僕は……やっと赤ん坊の名前を考えつきましたよ」

医者は何も言わなかった。

デイブは両手をふるわせながら言った。

「日曜日に洗礼を受けさせますよ。なんて名前だかわかりますか？　ルシファー（悪魔）って名をつけるんです」

夜の十一時になっていた。

デイブは医者と向かいあって坐っていた。

「アリスは狂ってなんかいませんでした」と彼はゆっくり話しはじめた。

「妻にはあの赤ん坊をこわがる理由がちゃんとあったんです」

医者は溜息をついた。

「こんどは君か……奥さんは肺炎を赤ん坊のせいにし、君は奥さんの亡ったことを赤ん坊のせいにするんだね。おぼえておきたまえ、奥さんは人形につまづいたんだよ。赤ん坊を責めてはいけないんだ」

デイブは頭をふった。

「アリスは夜いろんな音を聞いたんです。誰かが私たちの様子をさぐっていたような……赤ん坊が音をたてていたんです。生れて四ヵ月の、僕の息子が、くらい部屋の中をはいまわって、僕らの話していたことを聞いていたんです。どの言葉にもね」デイブは椅子の背により かかった。「電気をつけても、赤ん坊は小さいから、楽々と家具の下や扉のかげへかくれたんです」

「もうそんなことを話すのはやめろよ」
「いいや、言わせてください。でないと気が狂ってしまいそうです。僕がシカゴへ行ったときに、アリスを寝かせないで肺炎にしたのは誰です。アリスがうまく死ななかったもんだから、こんどは僕を殺そうとした。簡単な方法でね。夜中に赤ん坊が泣きやまないもんだから、父親がいらいらしてミルクを取ってこようとする、そしてつまづいて階段を落ちる。お粗末なトリックだが効果はあるんだ。僕にはうまく行かなかったが、アリスにはうまくいったんだ」
デイブは煙草に火をつけた。
「もっと早く気がついていなくちゃいけなかったんだ。僕は夜中に何度もおきて電気をつけた。すると赤ん坊は眼を大きくあけているんだ。起きて、考えていたんだ」
「赤ん坊は考えないよ」
「僕らは赤ん坊の脳のことを知らないんです。あいつにはアリスをにくむ理由があったんです。僕はあいつの正体を見ぬいていたんだ。普通の子供じゃないって！」
デイブは医者のほうに身体をかがめた。
「もしかすると何百万人の中の二、三人は、生まれるとすぐに動いたり見たり聞いたり考えたりできるのかも知れません。生れたときから考えることができるとしたら、赤ん坊はそれに抗議するんやっても誰も気がつかない、という完全なおにあるんだ、母親だ！　赤ん坊はその小さな精力をつかって家の中をはいまわって聞き耳をたてる。階段の上に品物を置く。夜じゅう泣きつづけて母親を参らせてしまう。簡単な赤ん坊、僕もあいつを殺したい」
医者はデイブに一杯の水と丸薬を渡した。
「これから二十四時間ぐっすり眠るんだよ。ねむると考えがかわる、さあ飲みなさい」
デイブは薬を飲み、泣きながら二階の寝室に連れて行かれ、寝台にねかされた。
あくる朝、ジェファーズ医師はデイブの家へ自動車を走らせた。気持のよい朝だった。
彼はデイブに、しばらく田舎で休むようにとすすめにきたのだ。デイブはまだ二階でねているだろう。少くとも十五時間は人事不省に眠らせておくだけの睡眠剤をあたえたんだから。
彼は扉のベルを鳴らした。
答はなかった。
女中はまだ帰って来てない、はやすぎるんだ。ジェファーズ医師は扉を押してみた。開いていた。中へはいった彼は手近の椅子に鞄をおいた。
食事の心配もない。あたたかく、栄養と静けさの中にただよっているんです。それが突然も
とのすみ家を空けはらうように強制される、

なにか小さな白いものが階段の上で動いた
ほんの短かいあいだのことで、眼の迷いのよ
うだった。
家の中にガスの臭いがしていた。
ジェファーズ医師は階段をおどりあがり、
デイブの寝室にとびこんだ。
デイブは寝台の上に横になっていた、そし
て部屋中にガスが充満していた。ガスは扉の
そばの壁の下にある栓から音を立てながら出
ていた。
ジェファーズ医師は栓をひねり、窓を全部
こじあけてデイブのもとへ走って帰った。
身体はつめたかった。死亡してから数時間
もたっていた。
はげしく咳をし涙をためながら医者はいそ
いで部屋を出た。デイブが自分でガスの栓を
ひねったはずはない。彼にはできなかったの
だ。薬が彼を人事不省にして、正午までは目
をさませなかったはずだ。自殺じゃない……
ジェファーズ医師は五分ほどじっと立って
いた。そして子供部屋へ歩いていった。扉は
しまっていた。扉をあけた。彼は中へ入り寝
台をのぞきこんだ。
寝台は空だった。
彼はしばらくのあいだ、寝台にかがみこん
だまま立っていた。彼の身体はゆれていた。
そして彼は誰にともなくつぶやいた。
「子供部屋の扉は風でしまったんだ。お前は
安全な寝台に帰ることはできなかった。お前
は扉がしまることは計画に入れてなかったん
だろう。扉がしまるということがでとでも、最上の計画を台無しにすることができるんだ。俺はお前を、この世の中に出すためにお産の手術をしなくちゃならなかった。だが、ルかくれてそんなことは知らないというようなシファー……こんどは別の手術だぞ！」

さて、頂戴いたしましたお題はこちら何週間か働いておりまして、
というと、年ごろの田舎娘に、缶なにをやってたのかてえと、炭焼
話の空き缶、それに巡回裁判でご
ざいます。とにかく話のすじを通
すというだけで、ご勘弁をねがっ
ておきますが、ちと遠いところの
お話で、遠いといったって十万億
土じゃございません。メキシコの
お話。メキシコ・インディアンの
お百姓に、エリジオ・ガラルドと
いう爺さんがおりまして、これに
三人の娘がある。三人そろって年
ごろで、器量よし。いちばん上が
十六で、鬼も十八ではない、イン
ディアンも十六、コーヒーも出ば
な、というところ。いちばん下が
十三歳でございました。
ある日のこと、このエリジオの
ところへ、ナタリオ・サルヴァト
レスという、ひとり者がたずねて
きた。この若い男、近くの林で、
ふりをしているお前をさがしだすぞ」
彼は青ざめた顔におそろしい微笑をうかべ
た。
「今の俺は、アリスやデイブがしゃべったよ
うなことを言っている。だが俺は、成行にま
かしたりしないぞ。俺はこのまま見捨ててお
いたりしないぞ」
彼は階下に降りて、椅子の上に置いた鞄を
ひらいて何かを取りだして両手に持った。
何かが家の広間をごそごそと動いた。非常
に小さいもので、静かな……
ジェファーズ医師はいそいでふりかえった
彼は、広間へ、しっかりした足どりで六歩ほ
ど歩いた。
「俺はお前を、この世の中に出すためにお産
の手術をしなくちゃならなかった。だが、ル
シファー……こんどは別の手術だぞ！」



テケテンテンここマンハン亭には満員のお客さま，コンコン亭チクショウ師匠の出を待つところ……

人情噺

恨みの空き缶

TIN CAN

B・トラヴン

綿のズボン、麦藁帽子を買いまして、賄いつきの下宿代を払ったんで、もういくらも残っていない。

　このナタリオ・サルヴァトレスが、なんでエリジオ爺さんを訪ねたかってえと、この前の土曜日に村でダンスがあった。村の衆が大勢あつまって、まあ、盆踊りですな。器用なのがギターをズンボロやりまして、みんながダンスをしているところで、ナタリオは、初めてガラルド家の三人娘に会ったんでございます。もっともナタリオは、美しい三人娘のひとりひとりと、一回ずつしか踊れなかった。というのは、ほかの若者たちが、みんな彼よりすばしっこくて、考えを決めるのが早かったからで。

　あくる日曜日は一日中、考えこんで、「いってえおらは、なにさ考えたらいいんだべ？」と、首をひねっているうちに、どうやら考えることがわかってきた。で、もっとよくわかるために、月曜日も考え、火曜日も考え、水曜日も考え、木曜日にようやく自分の気持ちがわかったんで、金曜日いっぱい、どうしたらいいか、とっくり考えまして、ちょうどダンスのあった日から一週間目の今日、三人娘の親父さんのエリジオをたずねたのでございます。

「話ゃあわかっただよ、お若えの。そんで、お前さんが嫁っこにほしいてえ娘は、三人のうち、どれだでや？」と、エルジオ爺さんが訊きました。

「あれだて」ナタリオが頭をふって、さししめしたのは、十四になるまん中の娘で、名はサビナ。名前からして、お前正宗、わしゃさび刀、お前きれてもわしゃ切れぬなんて情操教育専門の歌を連想させて、いかにも情が深そうです。

日本唯一のハードボイルド・ミステリー雑誌マンハント六月号より発売中！価一五〇円 二久保書店

降り続く雨のために先の橋もふもとの橋も濁流に押し流されてしまった峠の宿！女賊と悪党がまんじ巴の争い

月城寺の道

絵　もと松美子

雨の宿



定八はやけになったように、ぷいと立ち上って、裏窓の破れ障子をあけた。

油引きの、すすけたように黒ずんだ障子は、定八のいらいらしている心の中を、なおさらいらだたせるように、ガタピシとひき歪み、今にもはずれかかって、それでも、どうにか半分ほど開いた。

「ちえッ。いつまで、降りやがる。まるで、天の底が抜けちまったようじゃあねえか！」

と唾を一つ吐き、肩をいからして、誰にいうともなくそういった。窓の上の軒から、滝のように滴たり落ちる雨水が、吹きこむ風に散らされて、しぶきのように、開いた窓から部屋の中にとびこんでくる。

「おお、つめたいッ！」

定八は、窓の外にむかって、ペッ！

そういったのは、下郷村の名主の娘、おしのだった。

「お、おしのさん。こ、こっちへ来るがいい」

百姓の玉吉は、吹きこむ雨に身を縮めるおしのに声をかけて、しっかり抱きあうようにしながら、部屋の隅に場所を移した。

「けッ！　馳け落ち野郎めッ、つめたいどころか、二人とも、大あつあつの最中じゃねえかよう。少しあ濡れるのも、いいもんだぜ！」

定八が窓から離れながら、淫らに笑って、おしのと玉吉を冷やかした。

窓の外は、眼の前に迫るような山だった。

しみ入るような緑の樹々が、降り続く雨に洗われて、人間どもの困

時代巷談 いれずみ卍（まんじ）



惑をよそに、いきいきと濡れている。眼の下は渦巻いて流れる、地獄谷の激流だった。もう日暮れも近い時刻だ。

部屋の隅でおびえている、おしのと玉吉の二人には眼もくれず、無宿者の定八は、その太い腕を、にゅっと、鳥追い女の方に突き出した。その手には、旅籠のおやじから取り上げた、貧乏徳利が握られている。

「おい。お紺とかいったな、おめえ。そうだろ……」

「だったら、どうしたというのさ」

膝を横に崩して坐り、細い煙管を斜にかまえて、形のいい唇から紫色の煙りを吐いていた、鳥追い女のお紺は、さもうるさそうに定八の方を見る。他の二人のように、この定八を、こわがっている様子も見えなかった。

「ヘッ。こっちへきて、酌でもしろ、というんだ。な、こんな山の中の宿場に、こうして雨で閉じこめられたのも、つまらねえ何かの縁だぜ。な、こっちにくるンだ」

「勝手にごたくを並べるがいいや！」

お紺はふんと鼻で笑うようにそっぽを向いて、いい放った。

「な、なンだと！」

「ヘン、あたしゃ、飯盛りや、酌女じゃあ、ないんだよ。ちゃんとした、この旅籠のお客さ、ね。お前になンぞ、酒の酌をさせられる訳がないじゃないか！」

「こ、この阿魔！」

定八はいきり立った。

「この阿魔ッ！たいそうな口をきくじゃねえか。いってえ、この俺さまを誰だと思ってるンだ。この山ひとつ向うの村々で、むかでの定八といやあ、

泣く児もだまるという……」

「ホホホホホ。強いんだねえ、そうして、大きな眼玉をギョロつかせているあたりは、むかでどころか、瀬戸物屋の看板に立っている、たぬきだね！」

「な、なんだとッ」

「ほらほら、口がだんだん、とびだしてくるよッ、ホホホホ」

「くそッ！」

いきなり、定八がお紺の肩口につかみかかろうとするのを、ひょいと身をかわしたお紺は、手に持った煙管で定八の片っ方の目を、チョイと突っついた。

「あッ、あちちちッ」

空をつかんでよろけながら、大男の定八は片目を押えて大きな声をあげる。

お紺は何でもなかったように、ちょっと坐り直して、煙管をくわえ、さも旨そうに煙をくゆらした。

「ち、ちくしょう。やりやがったな！」

定八が、真赤になって怒り、またもやつかかろうとするのを、お紺は冷やかな眼つきで見上げ、そして、懐の中に入れた右手を胸の中で動かしながら、落ち着いていった。

「ふふっ。定八さんとやら、そう、大きな顔をしないで、お坐りよ。ほら、これが見えないのかい。南蛮渡りの懐鉄砲だよ。下手にあばれると他の方の迷惑さね、ふくれ上ったその腹に、風穴をあけられないうちに、おとなしくなる方が、そっちの為というもンさ！」

なるほど、お紺の襟元のあわせ目から、手拭に包んだ懐鉄砲の筒先らしいものが、定八の胸板を狙って、今にも引き鉄を引かんばかりの形なのだ。

「お、おッ！　こ、こりゃあ……」

すっかりどぎもを抜かれてしまった定八、今にも女にとびかかりそうな身のこなしが、だんだん崩れて、形ばかりは肩を怒らしたまま、その場に腰を落してしまった。

「ち、ちくしょうめ」

煙管で突っかれた眼の痛みは消えもやらず、かといって、下手にとびかかれば、相手のいう通り、あの懐鉄砲が火を吐いて、命を落さないまでも、軽くない手傷を負うことはわかりきっていた。

「ふふふふ。おとなしくなったじゃないか、その方がお前さんの為さ、この鉄砲はね、これでも、二人ほど、人をあやめているのさ」

そういってお紺は、片手で器用に煙草をつめかえている。

「う、う。とんでもねえ女だ、い、いまにみろ、ひでえ目にあわせてやる！」

こりゃあ、ただの女じゃあねえ、定八はそう思って、心の中が寒くなるような気がしていた。

かけおち者

鳥追女のお紺と、やくざ者の定八の、やり取りを、部屋の隅で小さくなって見ているのは、玉吉とおしのの二人だった。

百姓の玉吉と名主の娘おしのは、今朝の白じら明けに、江戸に向うつもりで、手に手をとって村をでて、雨の中をここまできたのだが、この峠の宿場で、あとにも先にも行けずに、旅籠の客になったのだ。

はたごといっても名ばかりで、山越えの裏街道の、峠の茶屋に毛が生えたような、たった一軒しかない、山の中の旅人宿だ。一間しかな

い屋根裏のような二階の部屋には、ときたま、こうして、雨に降りこめられた時には客があったが、その他の日には、きこりか猟師が、どぶろくでも呑んで寝にくるぐらいが関の山なのである。

周囲にある人家は、山働きの住家か、それとも、山役人の番所ぐらいのものだった。

おしのは玉吉の児を宿していた。

去年の秋祭りの夜に、ふとしたことから離れられない仲になって、親の目をかすめて逢う瀬を重ねているうちに、おしのが月のものを見なくなって、もう四ケ月だ。おしのの父親に、それを知られたのが、三日前のこと。どうせさかれる仲なら、手に手をとって江戸に出て、一生懸命に働いて世帯を持とうと、着のみ着のままで、村をとび出して来たのである。

雨に降りこめられた馳け落ちの第一日が、この峠の貧乏旅籠だった。おまけに、同じように降りこめられた鳥追い女と大男のやくざ者の相部屋で、懐鉄砲まで持ち出されたのでは、もう、身も縮む思いがしている。

「お二人さん」

こう呼びかけたのは、鳥追い女のお紺だった。

「へ、へえ……」

玉吉は、軀をビクッとさせて返事をした。

「こっちにおいでよ、そこは、ほら、雨洩りがしてるじゃないか」

「へ、へい」

美しいお紺の顔が、にんまりと笑って、つい先刻、やくざ者の定八を懐、玉吉とおしのには気味が悪いのだ。

のものでおどかした、あの凄いようなこわさはどこにも見られないの

「馳け落ちだといったね。どのみち、いろいろ深い訳もあるンだろうが、世間に負けちゃあいけないよ、世の中にゃあ、こわい人間もいるけれど、渡りようによっては、何とかなるものさね」

話のなかばは、自分にいい聞かせるようにそういって、切れ長の眼は、じろりと定八の方を見る。

定八、お紺の方に尻を向けたまま、小さくなって、どぶろくをなめているのだ。先刻はどうやら貫禄負けがして、定八の方が虫を殺してしまったから、今のところは事もなくおさまっているようなものの、また、いつなんどき、何が起るか知れたものではなかった。

「こっちへおいでな」とお紺。

「は、はい……」気味が悪くても、やはり女は女同志で、やさしく声をかけられてみれば、家を出て頼る身もない心細さに泣いていたおしのは、さすがに人恋しさに、お紺の声にさそわれて立ち上った。

「行っちゃ、いけねえ」

そういったのは、定八だった。

「え？」

「そんな、人殺しの、兇状持ちのような女のところに行くんじゃねえや。な、それより、こっちへ来て、酌をしてくれ」

「あの、そ、それは……」

「いけねえ、とでもいうのか」

ぺろり、定八は舌なめずりをして、おしのの顔をのぞき込むようにする。もう、かなり酔っていて、眼が血走ったようになっていた。

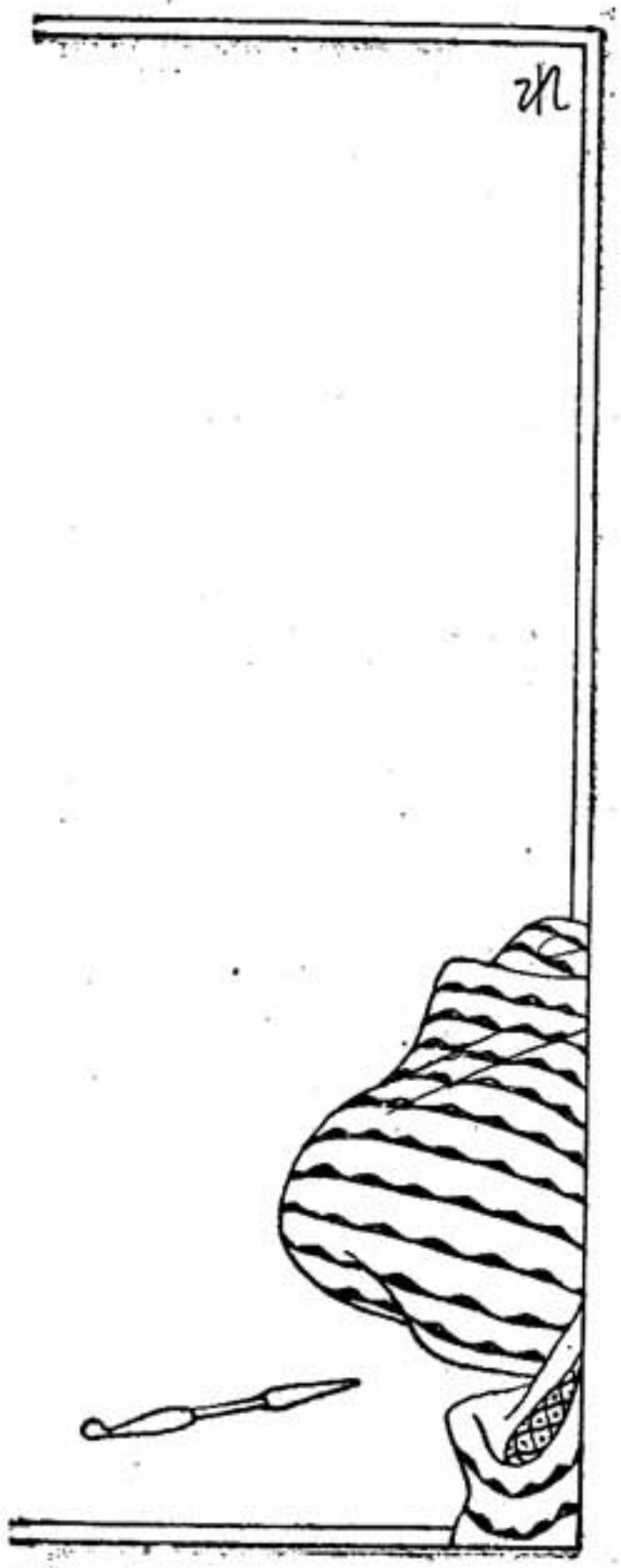
「そ、そりゃあ、お前さん」

百姓の玉吉が、おしのをかばいながら、おずおずと間に入った。

「馬鹿野郎！　てめえは、引っこんでろッ！」
いきなり、定八の手が動いたと思うと、玉吉の頬が、音をたててアッと叫んだこの若い百姓は、その場に引っくりかえってしまった。
「あ、玉吉ッあん！」
おしのが玉吉の傍にすがりつき、お紺が思わず腰を上げようとしたとき、歪んだような部屋の入口の戸が、がらりと開いた。

くすり売り

「あンだね、こう、騒々しいようだが」
こういって顔を出したのは、この峠の宿のおやじだった。
「晩めしは、もうすぐ雑炊でも出すべえが、もうちっと待ってくだせえ。それよりもお前さんがた、また二人、旅の人がござったのでな、窮屈だろうが、まあ、相部屋で願いますぞな」
おやじの後から上って来たのは、小男の、旅の薬り売りだった。そして、そのあとからもう一人、同じような旅ごしらえの、これは五十を過ぎたと思われる女だった。
「ええ、どうも皆さん、申し訳ございません。どうぞひとつ、よろしくお願い申します」
旅の男は、商人らしく、人をそらさぬ口の聞きようだった。
「わたくしは、旅の薬売りで、島蔵と申すもの、これにおりますのは、母親のお杉でございます。へえ、よろしくどうぞ……」
島蔵の挨拶する傍で、お杉もぺこぺこと頭を下げた。定八もお紺も、駈け落ち者の二人も、気を抜かれたような顔をして、二人の新顔を迎え入れる態度になっている。
宿のおやじが、入口に立ったままで、また声をかけた。
「それからな、皆の衆。いまさっき、山役人さまからお達しがあったがな、この先の落合橋が流れてしまったってえこんだ。この雨じゃあ、無理もねえこんだがよう」
おやじの言葉の終らないうち、薬売りの島蔵が低い声でいった。
「それじゃあ、わたし達は、先へもあとへも行けませんよ。下郷村へ下る道は、地獄川の丸木橋が流されてしまっている。」
「あたし達二人が、どうにか渡ったあとで、あの曲り道のところまできたとき、丸木橋が流されてしまったので……」
お杉も、そう、島蔵の言葉のあとを引きついだ。
宿のおやじが下に降りていったと思うまもなく、大きな声で何かいっているのが聞えた。
「おーい。二階の客人がた。男の衆だけでいいから、ちょっと手をかしてくんろよう」
その声が聞えたので、島蔵が一番先に気軽に立ち上った。
「おやじさんが、ああいっておりますが、私も参りますからそちらの方も……」
「なんだろう？」



なぐられた頬をおさえながら玉吉も立ち上った。
島蔵と玉吉が、ぎしぎしぎしぎしむ段梯子を降りて行くと、それを見て、おやじがもう一度声を出した。
「おーい。もうひとりの親方ア……」

女賊のふれ書き

「な、わかったか、そんな訳だで、はあ、よく気をつけてくんろ」
宿のおやじが、何か紙きれのようなものを手の上にひろげて、島蔵と玉吉と、それから仏頂面で降りてきた定八の前で、小さな声でヒソヒソと喋っているのだ。
「訴人した者には五両。捕えてつき出した者には十両か。ふうむ……」と島蔵。
「そ、その女賊てなあ、あ、あいつだ」と、これは定八だ。
玉吉は、定八のそばに行かないようにしながらただ黙って、おやじの手に持っているふれ書きの文字を見ているだけだった。
「何でも、上方で、えらく大仕事をした女賊だちゅうことで、それが本街道を避けて、この山越しの裏街道にまぎれ込んだちゅうだ。おらあ、山役人からこのふれ書きを渡された時に、はあ、どきりとしただよ」
「そ、そんなら、……」と玉吉が叫んだ。
「ど、どうして、そんとき、山役人に……」
「馬鹿をこけ！」とおやじがいう。
「山役人ちうものは、代官所のお手先と違うて、山の樹の番人だわさ、十手も捕縄も持っている訳がねえ。そんな者に訴人するより、ここに書いてある通り、みんなで、引っ捕らまえて、ふもとの宿場のお役人



に引き渡すこんだ。そしたら、……」
「ふふ、ふふふ。十両を四つにわけて、ひとり前が二両と二分ずつか」
定八がそうひとりごとのようにつぶやいて、もぞりもぞりと頭をなぜた。いまさっき、酒の酔いにまかせて、玉吉をなぐり倒したことなぞ、けろりと忘れたような顔つきである。
「それから……」とおやじが続ける。
「その兇状持の女賊というのは、背中から腰にかけて、女郎蜘蛛の刺青をしているちゅうことだ。それが、ただ一つのめじるしだ」
「あいつに違えねえ、そうだ、きっとあのお紺という女だ」と定八。
「しかし、このふれ書きには、女郎蜘蛛のお滝、と書いてございますが……」と、これは薬売りの小男。
「名前ぐらい、何とでもつけられるぜ、ってやがる」
定八はそういって、さっきのことを思い出した。もう少しで風穴をあけられるところだったと、さすがに総毛立つ思いである。
「えッ！　そ、そんな物を、持っているのけえ？」
おやじは、とび上るようにして、眼をむいた。たかが女賊と思っていたふうだったが、鉄砲を持っているのを大男の定八が見たという話を聞いて、急におじけをふるったのだ。
「し、しかし、ふもとの宿場の番所に知らせるにも、丸木橋が落ちているのではなあ……」
「いえ、わたしが女の方を押えますから、親方がそのう……」
それに、この先の落合橋も流されるような大水では、この峠の宿は離れ島も同然だった。
「なるほど」と定八がいった。
雨はまだ滝のように降り続いている。地獄谷の谷川の水かさが、刻一刻と増してきて、ごうごうと渦巻いて流れる水の音が、この山の旅籠をとりまいているのだった。

悪党同志

「おい、ものは相談だがなア、薬屋」
定八は薬売りの島蔵を、段梯子の下に呼んで話しかけた。二階では、おやじの作った雑炊を、みんなが食べ終ったところだ。ふれ書きの話は、男達の相談もまとまらず、一応、機会のあるときまで、知らぬ顔で過すことになったまま、お紺の動作を気にかけつつ、気まずい食事が済まされたのだが、定八が眼顔で島蔵を下に呼んだのであった。
「へえ、何か御用で……」
「おめえ、おいらに手をかして、十両の金を五両ずつ分けることにしねえかよう」
「と、申しますと……」
「ちえ、勘の悪いやろうだ。あんな女の一人ぐらい、おめえと俺とで、ふん縛れらあな。そしたらよ、あのの百姓や、ここのおやじに金をくれてやるこたあねえ、二人で捕えましたと、つき出しゃあいいんだ。ほうびの金は、半分ずつてえことにならあ」
「じゃあ、親方が、役人にとどけてくださるンで……」
「そ、そいつあ、いけねえ。そりゃあ、お前の役だぜ、そのかわり、この俺が、女を捕えてやる。この宿にいる男の中じゃあ、俺が一番力がありそうだからな」
「いえ、わたしが女の方を押えますから、親方がそのう……」
「なるほど」と定八がいった。
「おい島蔵とかいったな。てめえ、何かうしろ暗いところがあるンだな。そうだろう」

「い、いえ。べつに……」
「かくすこたあねえ、もう、こうなったら、俺も話すが、実あ、この定八さまも、役人の前に出られねえんだ。土地を売って峠越しに江戸に出る道すがら、この雨に崇られたってえ訳だが、困ったことに、わらじ銭さえもねえんだ……」
こそこそと盗みを働いたり、女を売りとばしたり、百姓を脅かしたりで、土地の役人に追われる身になった、むかでの定八だ。お定まりの江戸に飛ぶ気になったのだが、路用の金に困っていた。
それでふれ書きの十両という大金が、妙に頭にこびりついている。女賊を捕えても、自分がのこのこ役人の前に出られないから、島蔵を相棒にしようと相談を持ちかけたのだ。
「なるほど……」と今度は島蔵が唸った。
「五両ずつの分け前も、結構にはございますが……上方で、それほどの悪事を働いたという女なら、持っている金も、五両や十両じゃあ、ないはずでございますね……」
「う！お、おめえ、妙なところに眼をつけやがったな？」
「へ、へへッ」
「それで？」
「あの鳥追い女をふン縛って、身ぐるみ脱がせた上、悪事で稼いだ金を、こっちへ、……というのは、いかがでございます？」
「おい、おめえ、ただの薬売りたあ見えねえぜ、どうして、てえした悪党だア」
「へッへ。そうすりゃあ親方、お互に、具合の悪い役人の前に、のこのこ、姿を現わすこともないという訳でございンしょう？」

刺青しらべ

窓の外は、相変らずの、篠つくような大降りだった。もう、日は暮れ果てて、山の宿の周囲は、水かさを増して流れる川の凄い音と、雨風の音の他は、まっ暗闇だ。
「さあ、寝るとしようか」
そういったのは、島蔵だ。
馳け落ち者の二人は、もう、部屋の隅で抱き合ったまま、じっとしているのだが、それは息を殺して、これからのなりゆきを見ている、といったほうがいいのかも知れなかった。
すすけた行灯がひとつ、人々の思いおもいの姿を、おぼろに照して、その中で島蔵は旅の帳面をつけるようなふりをしながら、さっきから、お紺の動きを見張っていたのだ。
鳥追女のお紺は、三味線とすげがさと荷物とを片隅によせて、寝る前の一服をつけているところである。こうしてみると、ちょっと切れ長の眼に険はあるが、年増盛りの美しい女だ。定八が、欲気とはまた別な気を起しているのも、無理でもなかった。
「姐さん、すみませんが、煙草の火を……」
そういって、島蔵がお紺の傍に寄る。
「あいよ……」とお紺。
定八が、思わず、どきっとして身を起したときには、島蔵の小柄な軀が、お紺にぶつかっていた。
「あッ、やりやがったな！」
定八は叫んで立ち上っている。
「あ、あッ。な、なにをするのさッ！」

煙管がお紺の手からとんで、島蔵のつかみかかる手を必死にふりはなそうとあがらっているのだが、島蔵の動きは、旅の商人とは思われないほど敏捷だった。

「くそッ！お、おとなしくく、しやがれッ！」

「ちくしょう！」

右手を捻じ上げられて、それをふりほどこうとしながら、必死に身をねじる、お紺の髪から、櫛がとんだ。

「く、くそッ！　た、たれか、阿魔の懐から、と、飛道具をッ！」

島蔵がそういったとき、とび出そうとした定八より先に、お杉が馳けよって、お紺のふところを素速く探っていた。

手拭いにくるまったものを、お杉がとり出したのを見とどけてから島蔵は、お紺をねじ伏せ、定八が用意していた細引きで、二人がかりで、やっとのことで縛り上げてしまった。

「な、なにをするのさッ！　お前たちは、やっぱり、山賊かえッ！」

お紺は身をもだえて、口惜しそうに叫ぶ。

「へへッ。男殺しの、きれいな顔をしているくせに、これがとんだ喰わせものたあ、おどろいたぜ。昼間のうちは、よくも俺さまの目のくり玉を、きせるの先でつつきやがったな、あとからたっぷり仕返しをしてやるから、ヘッ！　まってろよッ」

定八、相手に飛道具がなくなったので、急に強くなりやがった。お紺は、まけに、もう、逃げることもならず、縛られてしまっているお紺だ。

「へへ、へへッ。姐御よう、そうして、ぴんしゃんするところが、たまらねえぜ。今期はじめて逢ったときから、ただの女じゃないと思っていたんだが、ふふふ、これが女泥棒とはなア……」

定八が、勝ち誇ったようにごたくを並べて、もがいて着崩れた、お紺の裾のあたりに、チョロチョロと眼を遊ばせている暇に、島蔵はお紺の荷物を手早く調べていた。

おしのと玉吉は、おどおどと、手をとりあったままで、この有様を見ていたが、島蔵の母親お杉は、いま、お紺からとりあげた手拭い包みを、自分の懐につつ込んで、島蔵の手許を明るくするように、行灯の位置を変えたりしている。

「親方……」と島蔵。

「うむ、荷物の中から、何か出てきたかい？」

定八は、自分一人で女賊を捕えたような気持になってしまっていた。

「それより、その女を、下の部屋へ降しておくンなさい」

「え？。いってえ、どうするんだ？」

「知れたこと、念のために、着物を剝いで、いれずみを……」

「そ、そうか、そうだな、女郎蜘蛛の刺青をとっくりと、見てやろうじゃねえか！」

定八がならした、ゴクリ、という唾を呑み込む咽喉の音は、はげしい雨音に消されて、みんなの耳には聞えようもなかったが、酒の酔いのさめきらぬ、あの血走った濁り眼が、異様な光りを帯びて、淫らに輝いたのを、島蔵は見逃がさなかった。

仲間われ

階下の土間の、うすよごれたいろりの前に、お紺は縛られたまま、



引きすえられていた。

宿のおやじは、定八におどかされて、二階に追い上げられていたし、お紺を中にはさんで、島蔵と定八の二人だけが、ここにいるのだ。

「ふふふふ。おい島蔵、こう、小股の切れ上った、年増の色気ってもなア、たまらねえぜ。みろ、しっとりと、濡れたような、いい肌をしてやがる……」

乱れた胸元のあたりに、ふっくらと盛り上った隆起の影を見ながら、定八、口元がだらしなく開いたままになってしまっている。

「……それ、まず、帯を……」

島蔵、あまりおしゃべりでもないようだ。

お紺が、そうさせまいともがくのを、器用に押えつけておいて、するすると帯をとく。

「あッ、あれッ。なンてことをッ、ひ、ひとを、裸にするつもりかいッ！」

「そうだ、どうせ見せなけりゃあならねえ、見てやろうじゃねえか！」と定八。

女郎蜘蛛の刺青だ。俺たち二人が、すっかり

此奴は、どのみち押えるなら、足を持った方が役廻りがいいとばかりに、ばたつくお紺の両足を、のしかかるようにして、動かぬようにおさえつけているのだ。

「うッうッ。そんな、そんな、刺青なンぞ、あ、あたしゃ、影っていないったらッ！、あ、あッ、いやだ！。た、たすけてえ！」

「えへへ、いまさら、何をいやがる。おとなしく、剝がれてしまえッ！」

柔らかな、そのくせムチムチと弾力に富んだ、豊満なお紺の軀の感触に、半ばくらくらッとするほどの妙な気分になっている定八、

口の中が、カラカラに乾いて、異様に息苦しくなってくるのは、あながち、どぶろくを呑んだせいばかりではない。

「ち、ちくしょう、山賊ッ！い、いっそ、殺せえ！」

「殺してしまっちゃあ、元も子もあるものかい。生かしておいて、てへへへ、十両の山わけだア、てへへ」

定八が強い力で押えつけながら、勝手な熱を上げている間に、島蔵、なれた手つきで、女の着物を脱がしてゆく。

「もう、よかろう、親方」と島蔵。

「うへッ。こ、こりゃあ……」

すべすべした、艶やかな、お紺の裸身が、行灯のあかりの中に、輝やくばかりに横たわっている。思わず声をあげた定八の眼には、破れ行灯の光りは、あまりにも弱かったかも知れないし、裸にされたお紺の身になってみれば、そのうす暗い行灯の灯さえも、消えてしまってほしかったろう。

着物を剝がして、いつまた細引をかけ直したものか、裸のままの後手に、ひしひしと喰い込むように巻きついている、さながら、蛇のような、意地の悪い縄目の凄艶さ！　自由を奪われた軀を、必死になって縮めているのは、男勝りのようでも、さすがに女だった。

「おッ！」島蔵。

「あれれッ！」定八。

うつ伏せになって、二人の男に背をみせているお紺の、柔らかな陰影を作った。すべすべした白い肌には、女郎蜘蛛の刺青はおろか、蚤に喰われた痕さえも見えないのだ。

「ちいっ！、お、おんなを、こ、こんな姿にしてッ、そ、それでも、お前たちは、男なのかえッ！」

はげしい怒りをこめて、羞恥の身をくねらすお紺。

「ねえぜ」と定八は島蔵の顔を、狐が落ちたような面で見下した。

「ふふふふ、白粉彫り、という奴かも知れませんな親方」

島蔵がお紺に近づきそうにするのを、定八がやにわに止めた。

「まてッ、薬売りッ、白粉彫りか、それとも隠し彫りか、そんなことあ、この定八さまがゆっくり調べてやる。てめえは、二階に上って、馳け落ち者の小娘でも貸して貰いな！」

なるほど、こいつはそんな気でいやがったかと、島蔵、にやりとして定八の間抜けな面をみた。

「わかったか、薬売り。お紺のからだを、ゆでたこのようになるほど、責め上げりゃあ、隠し彫りだって、すぐに現われてくるんだ。それをするにやあ、てめえがいると邪魔になるンだ！」

定八、もう、お紺の姿を見て、自分の方がゆでたこのように真赤に上気していやがる。どうしても、この邪魔っけな薬売りを追い上げて、お紺を一人じめにしてしまいたい衝動に、どこやらの火が燃えているのだった。

「ふン。そうは問屋がおろさねえ」

島蔵の口調が、急にがらりと変った。

「な、なにッ！」

「やい、とん馬野郎。俺をただの薬売りと思っているのか！」

別に大きな声を出す訳でもなかったが、妙にこう、腹のあたりにひびくせりふだ。そういえば、はじめっから、不思議な郎野だと、定八、ふと今頃になって感じた。

外では雨戸に叩きつける雨の音が、また急にひどくなりだしている。

島やぶり

二階では、段梯子のあたりまで顔をつき並べた、宿のおやじと玉吉が、下の様子にじっと聞き耳を立てているのだか、それが、雨の音と川の音に消されて、はっきりと聞きとれないもどかしさ。おしのは部屋の中にいるのか、見当らなかったが、お杉ばばあは段梯子の下まで降りて、そこにじっとうずくまったまま、暗がりの中で音もたてない。

「俺ァなあ……」

島蔵の、低い声が続いている。

「おめえにだけ聞かせてやるが、島破りをしてきた明石の島蔵てえ、暗闇渡世の人間さ。仮の姿を旅の薬売りに変えてはいるが、一と月前に伊豆に上って、これから、この裏街道を江戸を目当てに、役向きの目をくらましながら行くところだ。わかったか」

「う、うーッ」

定八、奇妙な声を咽喉の奥から出して、眼を白黒させている。こうなるともう、毒気を抜かれた形で、定八親方声も出なくなっている。

島蔵の手の中に、いつ抜いたものか、ギラリと光る匕首の不気味さ。

「この雨が上って、川の水かさが減ったら、いずれ、ゆっくり仕末してやるが、それまで、俺のいう通りにしろ、いいか」

「へ、へえッ！」

貫録の違いだった。定八、総身がぞーっとなって、眼の中にあったお紺の素っぱだかもどこへやら、ガタガタふるえがきている。

「この女は俺にまかせて、てめえは二階に上ってろ、娘っ子に妙なそぶりを見せやがると、ただじゃあおかねえぞ！」

「へ、へえッ！」

「まて、まちやがれッ。そう急ぐんじゃねえ」

島蔵にまくし立てられて、定八、大きなからだがうろうろする。

「二階に上っても、俺のいま話したことを、人にしゃべるな、いいか。もし、しゃべったことがわかったなら、あとたあいわねえ、その場で地獄谷の流れの中に叩っこんでやるぜ！」

肝っ玉を消しとばした定八が、ほうばうの態で二階に上っていったが、段梯子の下で、島蔵の母親お杉がうずくまっているのに気がつかった。

（ああ、凄え野郎だ。はじめっから、あんな奴とわかっていれば、なるべく小さくなっていたものを。おまけに、あの、お杉とかいった婆ァまでが、暗闇の中で眼を光らしていやがるンだ。どっちにしても、あぶなく、から奪った懐鉄砲を持っていやがるンだ。どっちにしても、あぶなく、消されてしまうところだったぜ。あぶねえ、あぶねえ……）

定八は、二階に上ってから、ぶるぶると身ぶるいしたが、そのうちにどうやら気持が落ち着いてくると、どうにも口惜しくて仕方がない。

（まてよ……。島蔵の奴は、あとで、ゆっくり俺を仕末する、といったが、そ、それじゃあ、俺を殺す気だな？　そうだ、そうにちげえねえ、あいつの素状を知ってしまった俺を、あとあとまで生かしておくはずがねえ……）

これは、大変なことになったと、定八は身が凍る思いがする。

ふと、そのとき考えついたのが、お杉の持っている懐鉄砲のことだ。あれを、どうにかしてこちらの手に入れれば、島蔵に負ける訳がない。その上、旨く行けば、あのお杉をこちらの人質にとるのだ。

第一、とんまな島蔵じゃあねえか、薬売りに身をかえたまではいいが、足手まといの母親を連れて、江戸まで逃げきれるものかい、どう

おまち
かね
近日中に出来ますが、定価その他は来月号に発表致します。御期待下さい！

◎人肌秘戯図の巻　嚊子地蔵
◎地下蔵地獄の巻　岡っ引に女掏摸
◎人買い唐人船の巻　鬼念流魔剣
主従再会　異地獄党

異地獄肌

せ、島ぬけをして、伊豆に上った道すがら、どこか知らねえが自分の生れ故郷に立ち寄って、おふくろを連れて来たにちげえねえが、そんなことが、殺されかかった俺様の、たったひとつの助けになろうたア、おしゃかさまでも御存じあるめえ……。

定八。めぐりの悪い頭の血を、いろいろと考えしぼって、いまや必死になっていた。

はだか菩薩

「お紺とかいったな……」

島蔵は、灯りの下に美しい起伏を見せて転がされている女に声をかけた。

「……し、しるもんか！」

「おめえ、刺青がないところをみる、女郎蜘蛛のお滝とかいう、女泥棒じゃあねえようだな？」

「か、かってないいがかりだよう。そ、そんなことより、は、早く縄をといとくれッ！」

「いや、そうはいかねえ」

「そ、それじゃあ、お願いッ。こうしている間でも、そ、その着物を……」

脱がされた着物を、軀の上からかけてほしいと、お紺は哀願した。

「白粉彫りという手があるぜ、なア、そうだろう！」

そういいながら島蔵、はだかの菩薩を前にだんだん妙な気になっている。島ぬけをしてから一と月、女の軀に逢ってないのだ。島へ送られてから今日までのことを考えると、女の味を忘れてしまっているほどの年月だった。

◎もだえ緋牡丹の巻
海老責め侍女絵展示
肌嗜虐の念物語
魔死の執船
深恐絶緋隠の抵抗
夜の脱出
怖の責め台
対絶命
牡丹くずれ
網小屋

◎阿修羅月の巻
月血裏あ姫
肌吟味
やつり責め
切り千両箱
風地獄船
下の歓声
（これが内容の目次です）

「なあ、お紺。おめえさえ、うんといやあ、この縄はぷっつりだ。この宿場から江戸へ出るまで、俺の女房になってくれねえか？」

「……」

男の眼が、いま、どこを見つめているのか、裸のお紺にはもう、身も世もない恥かしさだった。この地獄から、ときは放されるなら、どんなことでも受け入れる気持になっている。

島蔵には、このままのお紺を、無理やりに自分のものにすることもできたのだが、この場だけのなぐさみでなく、江戸に着くまでの旅の相手が必要だったのである。

島破りの詮議は、裏街道にまで行きとどいているかも知れないのだ。そんな網の目を逃れるには、夫婦連れか、親子連れと見せかけられる相手の女が必要だった。

「俺は、どんなことをしてでも、江戸まで行って、たった一目逢いてえ奴がいるンだ」

島蔵が御用になったとき、泣きの涙で別れた、たった一人の恋しい女が、みごもっていたとは、島に送られてから風の便りに聞いた話だった。

産後の養生がよくなくて、女があとに心を残して死んだ後、他人の手に育てられたその子が、今年でちょうど四つになる。

島の苦役の間に、新入りの島送りからそのことを聞いた島蔵は、もういても立ってもいられないほど、自分の子供に逢いたくなったのである。仲間の四人はすでにそして、彼は必死の思いで島脱けをしたのに捕われて、もう、首と胴とが別々になっていた。

裏街道に入った島蔵が、ふとしたことから道連れになったお杉という女を、その年頃を考えあわせて、親子連れの旅の薬売りに化けたの

も、きびしい詮議を逃れた一つの原因かも知れなかった。

「おい、お紺、どうだ。おめえがたとえ、白粉彫りで女郎蜘蛛のいれずみをしていようと、そんなこたあ構わねえ。かえって、お互にその方が、気が楽でいいや……夫婦きどりで街道を歩けるぜ……」

「……もう、どうにでも、お前さんの好きなようにしておくれ……」

「ふふふふ。やっと承知したンだな。もし、いやだといったら、裸のままで、念仏講にして、あの定八野郎と一緒に、地獄谷に投げこむところだったぜ……」

島蔵、お紺の縄をとくまえに、そのすべすべした肌ざわりを、掌の中にそろりと楽しむのを忘れなかった。

「あれッ！」

身をもむお紺の悲鳴。

しかし、女の声の中には、もう、恐怖のひびきはなく、それは、媚を含んだ嬌声に近かった。

女郎蜘蛛

ちくしょう、いまにみやがれ！　そう定八は思っている。あの懐鉄砲さえこちらに取り上げれば、あとはもう、俺様の思いのままだ。

横取りされたまっぱだかのお紺も、取り返えせるし、第一、あの島蔵に殺されなくても済む。

あの島蔵を、懐鉄砲でおどかして、ふン縛った上、ふもとの宿場の役人に突き出すんだ。あいつは島破りの大罪人だから、お役人に莫大なほうびの金が貰えるぞ。この俺のケチな罪なぞ、この手柄に比べれば、糞喰らえだ！

こんな、どしゃ降りの峙の宿場で、妙なめぐりあわせで、棚からぼた餅が転がり落ちてきたことになる。それで、定八、思わず口の先で含み笑いをしたものだ。

「誰だい！」お杉の声。

「しまった！」定八は、二、三段を一気にとび降ると、矢俄に、お杉の懐に手を入れて、手拭で包んだ目さす懐鉄砲をつかんだ。

「な、なにをするンだい」

お杉はそういったが、定八の手には案外やすやすと、南蛮渡りの懐鉄砲が……

「おや？」

定八、奪い取った手拭い包みを手に持って頭をかしげる。短筒の重量ではなかった。

「ふッふッふ。いまごろ、そんなものを見て、眼を白黒しているようじゃあ、おまえさん、たいしたこたあないよ、ふッふ」

お杉が、さも馬鹿にしたように笑った。

定八が懐鉄砲だと思いこんでいた手拭包は、お紺の三味線の撥だったのだ。

「あッ！　こ、こりゃあ、三味線の撥じゃねえか！」

「あたしも……」とお杉がいった。「はじめのうちは、短筒が手に入ればいいと思ったのさ。ところが、大笑いだよう、あんまり馬鹿馬鹿しいから、だまって温ためていたけれどね」

「す、するてえと……？」

「あの鳥追女は、お前たちが思っている、女賊でなンぞ、ありゃしないよ。ふふッ」

懐鉄砲さわぎが、女一人の道中で、狼どもの牙を避けるための、こけおどかしだったとは、いまごろになって定八、気がついたが、こう

なると、鳥蔵を捕えてつき出すだころか、自分の生命が危険になってくる。

「ええい、くそッ。殺される前に、こっちで逃げてやれッ。橋がなくても、どうにかどこかに行きつけるだろうぜ！」

定八、そう思いつくと、行きがけの駄ちんとばかりに二階にとってかえした。薬売りの荷物や、お紺の持ち物を、洗いざらいに引っさらって逃げるつもりだった。それが、せめてもの最後の意趣がえしのつもりである。

「あッ！、無いっ、みんな、なくなってやがるッ！」定八の素っとんきような声。

二階には、宿のおやじがなぐり倒されていて、目ぼしい荷物はほとんど、影を消していた。

おしのと玉吉の二人の姿が、荷物と一緒に見えなくなっているのだ。

ほんの、ちょっとした騒ぎの間に、馳け落ち者の二人に、すっかり持って行かれてしまっていたのだ。あの二人は、このあたりの山にはなれている。手に手をとって間道づたいに江戸に出て、きっと嬉しい世帯を持つことだろうが、引っさらった荷物の中の金はそれにはちょうど手頃のはなむけかも知れなかった。

「ち、ちくしょう！　あ、あの百姓めッ、どこにうせやがったッ！」

自分の持物を盗まれたかのように、定八がいきり立って、段梯子の下のお杉に喰ってかかったが、お杉は相手にならず、にやりと笑ってすたが、あわてて開け放していった破れ雨戸の方に眼をそそいでいる。

「いいわさ、若い二人にやあ、為になった一夜だよ……」

雨はまだ降り続いているが、どらさし込んできている。

「婆ア、いってえ、どうするつもなってお杉につかみかかるのを、イとかわして、定八の急所をけり「ウッ！」と定八、からだを丸くした。「静かにおしよ！」とお杉。

そして、ひとりごとのようにこういった。

「旅の薬売りと一緒にいれば、詮議の目もごまかせると思って、島蔵と親子のような顔をして、ここまで来たが、どうもただの鼠じゃないと思ったのも道理、島脱けをしてきた男だとは、ヘッ、あたしも肝をつぶしたねえ……島蔵にも、今夜日からあたしやあ一人旅。この年はいい道づれができたらしいが、今ものの、このあたりが、やっと、になるまで、悪事をしとおして来たか、淋しい雨だよ……」

どんづまりになるのかねえ、なんだ

定八につかみかかられた時に、の襟元から肩口にかけて、青丹を乱れたものか、あらわになったお杉みが、朝の光りの中にのぞいている。彩った。毒々しい女郎蜘蛛のいれずその足元に、ぶき込む雨にビッショリ濡れた、昨夜のふれ書きが散ってまま……。

いろりの傍の暗闇では、島蔵とお紺の、もぞもぞする気配がまだ続いていた。

原稿募集

◉小説・読物＝三十枚～四十枚程度
他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。
（小説は現代・時代、どちらでも結構です）

◉アブチック・スリラア＝三十枚～四十枚程度

◉あぶちっく・みすてりい＝三十枚～四十枚程度
他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。原則として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。
掲載の分には掲載誌発行後、相応の原稿料と掲載誌一部をお送りします。

―原稿送り先―
東京都中野区江古田1の2302
久保書店内　**裏窓編集部**

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えします。

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者の為に小部数取り揃えてあります。（二六四頁―二六九頁を御覧下さい）既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録をおのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって〝裏窓で見た、目録送れ〟とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛御申込になれば無料ですぐ送ります。

◇直接購読を御希望の方は、三ケ月分・三百六十円、又は六ケ月分・七百二十円を本社営業部宛にお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。（送料小社負担）

◇その場合は、御送金と同時に何月号より何月号までとハッキリ御指定下さい。

◇直接の御来社は勝手ながらお断り申し上げます。

裏窓　七月号
第四巻　第七号
（毎月一回一日発行）

定価　金十二円　送料十二円
（地方売[redacted]）

印刷　昭和三四年　六　月二五日
発行　昭和三四年　七　月　一　日
編集人　須磨利之
発行人　山田忠雄
印刷所　向上印刷・株式会社
発行所　株式会社　**久保書店**
東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野・(38)六九八〇・一三八八
振替口座・東京　一〇七五六番

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。